公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第60集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（32）

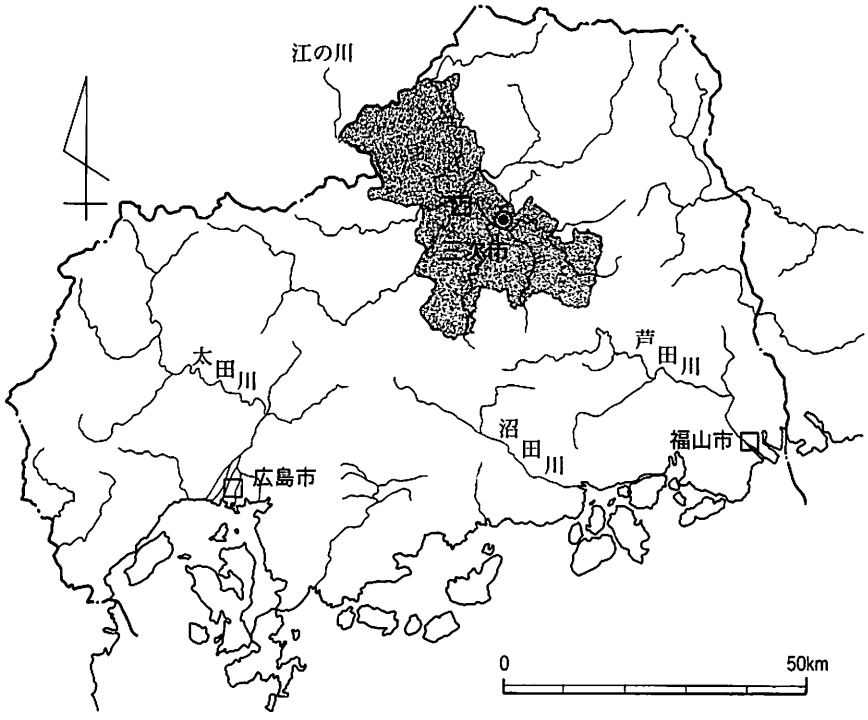
宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳

2014

公益財団法人　広島県教育事業団

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（32）

宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳



三次市位置図（◉は遺跡・古墳群を示す。）

2014

公益財団法人　広島県教育事業団

例　　言

1　本書は，平成20（2008）年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る宮の本遺跡・宮の本第11・33～35号古墳（三次市向江田町字宮本2375，2376，2379所在）の発掘調査報告である。

2　発掘調査及び整理作業・報告書作成は，国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団(現・公益財団法人広島県教育事業団)が実施した。

3　発掘調査は,梅本健治・島田朋之(現・廿日市市立廿日市中学校)・山澤直樹・渡邊昭人(現・広島県教育委員会文化財課)・岩本芳幸（現・広島県立海田高等学校)・辻満久が担当した。

4　出土遺物の整理・復元は梅本・島田と賃金職員の西山梨香・木村和美・村田智子が，実測・図面の整理・写真撮影は梅本が中心となって行った。

5　本書は，梅本が執筆・編集した。

6　図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。

7　本書に使用した北方位はすべて旧日本測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北である。

8　第２図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000の地形図（三良坂）を使用した。

9　第33～35号古墳の３基の古墳は当初はその存在は知られておらず，調査の進展に伴い検出したもので，新規に古墳番号を付した。

10　遺構の略号はＳＫ；墓坑，ＳＢ；竪穴住居跡・住居跡状遺構，ＳＸ；性格不明の遺構，Ｐ；柱穴を示す。

11　埋葬施設の副葬品の位置の説明における左右は被葬者から見て，である。また，埋葬施設の小口・側壁は横穴式石室の奥壁以外は原則方位で呼ぶ（東小口・北側壁など)。

12　記録類及び出土品は，すべて広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目８番49号）において保管している。

目　次

Ⅰ　はじめに …… (1)

Ⅱ　位置と環境 …… (7)

Ⅲ　調査の概要 …… (14)

Ⅳ　遺構と遺物 …… (18)

1．宮の本遺跡

①竪穴住居跡・住居跡状遺構 …… (18)

②墓坑 …… (60)

③性格不明の遺構 …… (68)

2．宮の本第11号古墳 …… (76)

3．宮の本第33号古墳 …… (92)

4．宮の本第34号古墳 …… (95)

5．宮の本第35号古墳 …… (96)

6．調査区内出土の石器 …… (98)

Ⅴ　ま　と　め …… (105)

挿図目次

第１図　中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図 …… (1)

第２図　宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳周辺遺跡分布図（1：25,000） …… (9)

第３図　宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳周辺地形図（1：2,000） ……折込み

第４図　宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳遺構配置図（1：400） ……折込み

第５図　ＳＢ１実測図（1：60） ……折込み

第６図　ＳＢ２実測図（1：60） …… (20)

第７図　ＳＢ３実測図（1：60） …… (22)

第８図　ＳＢ４実測図（1：60） …… (23)

第９図　ＳＢ５実測図（1：60） …… (25)

第10図　ＳＢ５カマド跡実測図（1：30） …… (26)

第11図　ＳＢ６実測図（１：60）…… (28)
第12図　ＳＢ７実測図（１：60）…… (29)
第13図　ＳＢ８・ＳＸ５実測図（１：60）…… (31)
第14図　ＳＢ９実測図（１：60）…… (32)
第15図　ＳＢ10実測図（１：60）…… (33)
第16図　宮の本遺跡出土遺物実測図（１）（２：３，１：２，１：３）ＳＢ１・２・５・９・10 … (34)
第17図　ＳＢ11・ＳＸ６実測図（１：60）…… (37)
第18図　ＳＢ12実測図（１：60）…… (39)
第19図　宮の本遺跡出土遺物実測図（２）（１：２，１：３，１：４）ＳＢ11・12 …… (41)
第20図　ＳＢ13・ＳＢ14実測図（１：60）…… (43)
第21図　ＳＢ14カマド跡実測図（１：30）…… (44)
第22図　ＳＢ15実測図（１：60）…… (44)
第23図　ＳＢ16実測図（１：60）…… (46)
第24図　ＳＢ17実測図（１：60）…… (48)
第25図　ＳＢ18実測図（１：60）……折込み
第26図　宮の本遺跡出土遺物実測図（３）（１：２，１：３）ＳＢ13・14・15・17・18 …… (51)
第27図　ＳＢ19実測図（１：60）……折込み
第28図　宮の本遺跡出土遺物実測図（４）（１：３）ＳＢ19① …… (55)
第29図　ＳＢ20実測図（１：60）…… (57)
第30図　ＳＢ21実測図（１：60）…… (58)
第31図　ＳＢ22実測図（１：60）…… (59)
第32図　ＳＫ１実測図（１：20）…… (61)
第33図　ＳＫ２・４・９実測図（１：30）…… (63)
第34図　ＳＫ３実測図（１：30）…… (64)
第35図　ＳＫ５・６実測図（１：30）…… (67)
第36図　ＳＫ７・８実測図（１：30）…… (69)
第37図　ＳＸ１～４・８・９実測図（１：40）…… (71)
第38図　ＳＸ７実測図（１：30）…… (73)
第39図　宮の本遺跡出土遺物実測図（５）(1：2，1：3)ＳＢ19②・22，ＳＫ２・８，ＳＸ５・７… (75)
第40図　宮の本第11・33～35号古墳地形測量図（１：200）……折込み
第41図　宮の本第11・33～35号古墳墳丘測量図（１：200）……折込み
第42図　宮の本第11号古墳墳丘土層断面実測図（１：60）……折込み
第43図　宮の本第11号古墳石室実測図（１）（１：60）…… (79)
第44図　宮の本第11号古墳石室実測図（２）（１：60）…… (81)
第45図　宮の本第11号古墳石室閉塞石実測図（１：30）…… (83)

第46図　宮の本第11号古墳出土遺物実測図（1）（1：3）須恵器①　……（87）
第47図　宮の本第11号古墳出土遺物実測図（2）（1：3）須恵器②　……（88）
第48図　宮の本第11号古墳出土遺物実測図（3）（1：3，1：6）須恵器③　……（89）
第49図　宮の本第11号古墳出土遺物実測図（4）（1：3，1：6）須恵器④・土師器　……（91）
第50図　宮の本第11・33号古墳出土遺物実測図（1：2）石器・鉄製品・銅製品　……（92）
第51図　宮の本第33号古墳墳丘土層断面実測図（1：60）　……（93）
第52図　宮の本第33号古墳石室実測図（1：60）　……折込み
第53図　宮の本第34・35号古墳石室実測図（1：30）　……（97）
第54図　宮の本遺跡出土石器実測図（2：3，1：2）　……（99）
第55図　埋葬施設の長軸方向と頭位　……（113）

表目次

第1表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧　……（3）
第2表　竪穴住居跡・住居跡状遺構一覧表　……（15）
第3表　墓坑一覧表　……（17）
第4表　性格不明の遺構一覧表　……（17）
第5表　宮の本第11号古墳出土遺物の内訳　……（17）
第6表　宮の本遺跡，宮の本第11・33号古墳出土遺物一覧表　……（100）
第7表　竪穴住居跡・住居跡状遺構の柱穴　……（107）
第8表　横穴式石室の規模と石材の積み方　……（112）
第9表　横穴式石室の敷石・礫床・棺台石　……（117）

図版目次

図版1　a　宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳遠景（空中写真，南から）
　　b　同上（空中写真，南西から）
　　c　同上（空中写真，南から）

宮の本遺跡

図版2　a　SB1（南東から）
　　b　同上（東から）
　　c　SB1・SB2（西から）

図版３　a　ＳＢ2（南から）
　　b　同上（南から）
　　c　同上（西から）
図版４　a　ＳＢ2土層（南北方向東壁，東から）
　　b　ＳＢ3（南から）
　　c　ＳＢ4（東から）
図版５　a　ＳＢ5（南から）
　　b　同上（東から）
　　c　ＳＢ5土層（南北方向東壁，東から）
図版６　a　ＳＢ5カマド跡（南東から）
　　b　同上土層（東から）
　　c　ＳＢ６（南から）
図版７　a　ＳＢ６（東から）
　　b　ＳＢ７（南から）
　　c　ＳＢ８（南から）
図版８　a　ＳＢ８（東から）
　　b　ＳＢ８柱穴土層（P6，東から）
　　c　ＳＢ９（南から）
図版９　a　ＳＢ９（東から）
　　b　ＳＢ10（南から）
　　c　同上（東から）
図版10　a　ＳＢ11（南から）
　　b　同上（東から）
　　c　ＳＢ11柱穴土層（Ｐ１，東から）
図版11　a　ＳＢ11柱穴土層（Ｐ４，東から）
　　b　ＳＢ11鉄鏃23出土状況（東から）
　　c　ＳＢ12（南から）
図版12　a　ＳＢ12（東から）
　　b　ＳＢ12柱穴土層（Ｐ１，東から）
　　c　同上（Ｐ２，東から）
図版13　a　ＳＢ12平瓦34出土状況（東から）
　　b　ＳＢ13（南から）
　　c　同上（東から）
図版14　a　ＳＢ14・ＳＢ15（南から）
　　b　同上（東から）

c　ＳＢ14カマド跡（南から）
図版15　a　ＳＢ14カマド跡（西から）
b　ＳＢ15（東から）
c　集落跡中心部（ＳＢ5～ＳＢ16付近，南東から）
図版16　a　ＳＢ16（南から）
b　同上（東から）
c　ＳＢ17（南から）
図版17　a　ＳＢ17（東から）
b　ＳＢ18（南から）
c　同上（東から）
図版18　a　ＳＢ19（南から）
b　同上（東から）
c　同上遺物出土状況（南から）
図版19　a　ＳＢ19遺物出土状況（東から）
b　ＳＢ20（西から）
c　ＳＢ21（東から）
図版20　a　ＳＢ22（南から）
b　ＳＫ１（棺内，南西から）
c　同上（棺内，南東から）
図版21　a　ＳＫ１作業風景（南東から）
b　ＳＫ２（東から）
c　ＳＫ３（蓋石，南から）
図版22　a　ＳＫ３（蓋石，西から）
b　同上（墓坑，南から）
c　ＳＫ４（南から）
図版23　a　ＳＫ５（棺内，北から）
b　同上（棺内，西から）
c　ＳＫ６検出状況（南から）
図版24　a　ＳＫ６検出状況（東から）
b　ＳＫ７（蓋石，南から）
c　同上（蓋石，西から）
図版25　a　ＳＫ７（墓坑，南から）
b　同上（墓坑，東から）
c　ＳＫ８（南から）
図版26　a　ＳＫ８（西から）

b　ＳＫ９（東から）
c　同上（南から）
図版27　a　ＳＸ１（東から）
b　ＳＸ３（南から）
c　ＳＸ４（南から）
図版28　a　ＳＸ５（南から）
b　ＳＸ５・杯74出土状況（南から）
c　ＳＸ６（東から）
図版29　a　ＳＸ７（南から）
b　ＳＸ７・杯身77出土状況（東から）
c　ＳＸ８（南から）

宮の本第11号古墳

図版30　a　遠景（空中写真，南から）
b　全景（空中写真，南から）
c　全景（空中写真，西から）
図版31　a　近景（調査前，北東から）
b　近景（調査前，東から）
c　墳丘全景（南から）
図版32　a　墳丘土層（東西方向西半南壁，南から）
b　同上（東西方向東半南壁，南から）
c　同上（東西方向西半南壁・石室裏込め，南から）
図版33　a　墳丘土層（東西方向東半南壁・石室裏込め，南から）
b　同上（南北方向北半西壁・石室裏込め，西から）
c　石室全景（天井石，南から）
図版34　a　石室床面（敷石・棺台石，南から）
b　同上（敷石・棺台石，南から）
c　石室床面・耳環144・145出土状況（東から）
図版35　a　石室東側壁①（奥壁側，西から）
b　同上②（中央，西から）
c　同上③（入口側，西から）
図版36　a　石室西側壁①（奥壁側，東から）
b　同上②（中央，東から）
c　石室床面・東側壁①（敷石，奥壁側，西から）
図版37　a　石室床面・東側壁②（敷石・棺台石，中央奥壁側，西から）

b　同上③（棺台石，中央入口側，西から）
c　同上④（入口側，西から）
図版38　a　石室床面・西側壁①（敷石，奥壁側，東から）
b　同上②（敷石・棺台石，中央奥壁側，東から）
c　同上③（棺台石，中央，東から）
図版39　a　石室床面・西側壁④（中央入口側，東から）
b　同上⑤（入口側，東から）
c　石室入口・平瓶122出土状況（東から）
図版40　a　石室入口・平瓶122出土状況（南から）
b　石室閉塞石（北から）
c　同上（東から）
図版41　a　石室基底石（南から）
b　墳丘作業風景（南から）
c　石室作業風景（北から）

宮の本第33号古墳
図版42　a　全景（南から）
b　石室全景（南から）
c　石室東側壁（西から）
図版43　a　石室西側壁（東から）
b　石室基底石・集石・ＳＫ６（南から）
c　同上（西から）
図版44　a　集石（西から）
b　石室・集石（南西から）

宮の本第34号古墳
図版44　c　石室全景（南から）
図版45　a　石室床面敷石・東側壁（西から）

宮の本第35号古墳
図版45　b　石室全景（南から）
c　同上（東から）

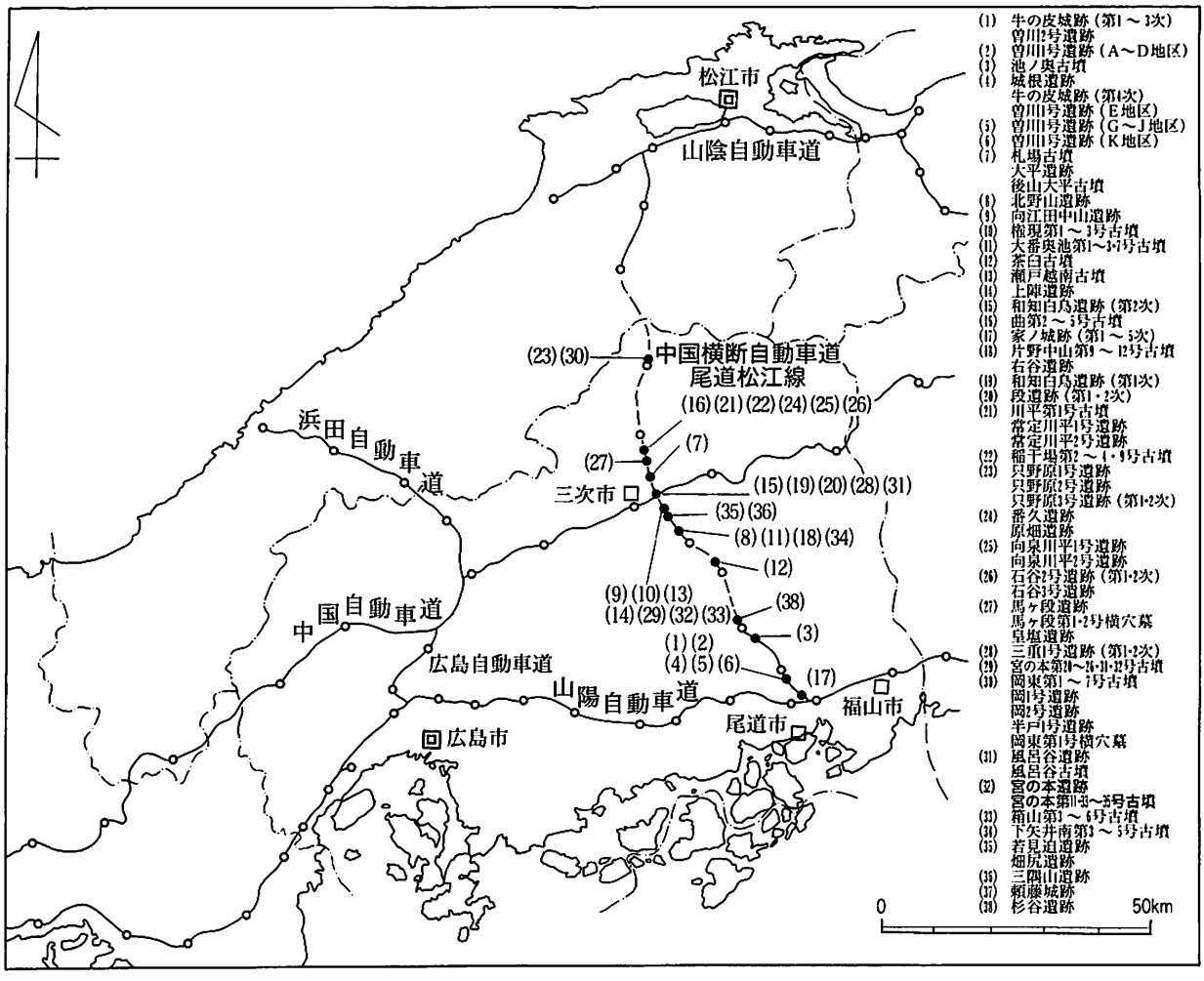
出土遺物
図版46　出土遺物（１）宮の本遺跡①―土器・玉類・鉄器―

図版47　出土遺物（２）宮の本遺跡②―土器・瓦・鉄器―
図版48　出土遺物（３）宮の本遺跡③―土器・鉄器―
図版49　出土遺物（４）宮の本遺跡④，宮の本第11号古墳①―土器―
図版50　出土遺物（５）宮の本第11号古墳②―土器―
図版51　出土遺物（６）宮の本第11号古墳③―土器―
図版52　出土遺物（７）宮の本第11号古墳④，調査区―鉄器・石器―

Ⅰ　はじめに

宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳の発掘調査は中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係るものである。本事業は，本州四国連絡道路尾道今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって，山陰，山陽及び四国地方を南北に結ぶ地域連帯構想を推進し，本圏域の産業，経済及び文化の発展と沿線地域の生活向上に寄与しようとするものである。

日本道路公団中国支社広島工事事務所（以下，「道路公団」という。）は，平成12（2000）年3月，当該事業地のうち，双三郡三良坂町（現・三次市三良坂町）長田～三次市四拾貫町の区間内の文化財等の有無及び取扱いについて，広島県教育委員会（以下，「県教委」という。）に協議した。県教委はこれを受けて現地踏査及び試掘調査を行い，平成14年12月事業地内に宮の本遺跡及び宮の本第11号古墳の存在を確認した旨を道路公団に回答した。その後，中国横断自動車道尾道松江線建設事業は，平成17年10月1日の日本道路公団の解散に伴って西日本高速道路株式会社に



第1図　中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図

引き継がれ，さらに平成18年度からは国土交通省に承継された。この間，これらの遺跡の取扱いについて県教委と道路公団は協議を重ねたが，設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下，「国交省」という。）は，平成20 年２月１日付けで三次市教育委員会（以下，「市教委」という。）あてに文化財保護法第94条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し，市教委は同年２月27日付けで国交省あてに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。国交省はこれを受けて，同年３月３日付けで財団法人広島県教育事業団（現・公益財団法人広島県教育事業団。以下，「教育事業団」という。）に宮の本遺跡及び宮の本第11号古墳の調査依頼を行なった。教育事業団は平成20年３月13日付けで文化財保護法第92条第１項に基づく発掘調査届を市教委あてに提出し，同年３月28日付けで法の趣旨を尊重し，慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。国交省と教育事業団は同年４月１日付けで委託契約を結び，教育事業団は同年４月21日から10月31日までの６か月間発掘調査を行った。調査面積は宮の本遺跡（調査面積2,170㎡）と宮の本第11号古墳（調査面積600㎡，第33 ～ 35号古墳を含む）を合わせて計2,770㎡である。なお，発掘調査終了後の11月22日に，三次市教育委員会と共催で宮の本遺跡・宮の本第11号古墳の遺跡報告会を近在の和田コミュニティセンターで開催し，約50名の参加があった。

本報告書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては，国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所，西日本高速道路株式会社中国支社広島工事事務所，三次市教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
（1）	牛の皮城跡（北郭群）	第１次	畝状竪堀群	平成15年１月20日～３月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城　跡
		第２次	１～４郭	平成15年７月７日～10月31日			
		第３次	西竪堀	平成15年11月10日～11月28日			
	曽川２号遺跡			平成15年１月20日～３月７日	尾道市御調町大町字西川	古代末～中世	集落跡
（2）	曽川１号遺跡	Ａ地区	旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～平成15年１月17日	尾道市御調町大町字曽川	弥生時代～中世	集落跡
		Ｂ地区	旧・Ｐ２第一調査区	平成15年４月７日～５月23日			
		Ｃ地区	旧・Ｐ２第二調査区				
		Ｄ地区	旧・Ｐ１	平成16年１月６日～２月５日			
（3）	池ノ奥古墳			平成16年８月23日～10月28日	世羅郡世羅町宇津戸字天神	古墳時代後期	古墳
（4）	城根遺跡			平成15年１月27日～３月７日	尾道市御調町大町字城根	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡（北郭群）	第４次	５郭	平成18年１月30日～２月24日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城　跡
	曽川１号遺跡	Ｅ地区	旧・Ｐ４	平成15年12月１日～12月19日	尾道市御調町大町字米田	縄文時代後期～中世	遺物包含層
（5）	曽川１号遺跡	Ｇ地区	旧・Ｐ３	平成16年６月７日～８月６日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
		Ｈ地区	旧・Ｐ３側道				
		Ｉ地区	旧・Ｐ４側道				
		Ｊ地区	旧・Ｐ２	平成17年１月11日～３月４日			
（6）	曽川１号遺跡	Ｋ地区		平成17年４月11日～７月１日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
（7）	札場古墳			平成17年11月21日～平成18年１月27日	三次市後山町字札場	古墳時代後期	古　墳
	大平遺跡			平成19年６月25日～10月５日	三次市後山町字大平	弥生時代後期～古代	集落跡
	後山大平古墳			平成19年６月25日～10月５日	三次市後山町字大平	古墳時代後期	古　墳
（8）	北野山遺跡			平成18年７月３日～８月４日	三次市吉舎町敷地	平安時代	仏教関連の施設跡
（9）	向江田中山遺跡			平成18年４月17日～６月23日	三次市向江田町字中山	古墳時代末～古代	集落跡
（10）	権現第１～３号古墳			平成17年７月11日～11月11日	三次市向江田町権現	古墳時代中期	古　墳
（11）	大番奥池第１～３・７号古墳			平成18年４月17日～８月４日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代後期	古　墳
（12）	茶臼古墳			平成20年７月７日～９月５日	三次市甲奴町大字宇賀	古墳時代中期	古　墳
（13）	瀬戸越南古墳			平成19年６月25日～８月10日	三次市向江田町字瀬戸越	古墳時代中期	古　墳
（14）	上陣遺跡			平成19年７月９日～８月31日	三次市向江田町字上陣	古墳時代中期	集落跡
（15）	和知白鳥遺跡（第２次）			平成19年９月25日～12月21日	三次市和知町字白鳥	後期旧石器時代	集落跡
（16）	曲第２～５号古墳			平成19年７月２日～９月21日	庄原市口和町金田字本谷	古墳時代中期	古墳
				平成19年12月３日～12月７日		縄文時代前期・晩期	石器製作跡包含地

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(17)	家ノ城跡	第１次	南東郭群	平成15年９月16日～10月31日	尾道市木之庄町木梨字家城東平	中世	城　跡
		第２次	南東郭群	平成16年５月17日～６月11日			
		第３次	１郭周辺	平成17年10月17日～11月11日			
		第４次	１郭・北尾根	平成18年４月17日～７月21日			
		第５次	１郭･北西尾根	平成19年４月16日～６月15日			
(18)	片野中山第９～12号古墳			平成19年４月16日～８月８日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代中期	古　墳
	右谷遺跡			平成19年４月16日～８月８日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代後期～古代	集落跡
(19)	和知白鳥遺跡（第1次）			平成18年４月17日～12月22日	三次市和知町字白鳥・四拾貫町字三重	古墳時代中期～古代	集落跡・古墳
(20)	段遺跡	第１次		平成18年９月19日～12月15日	三次市四拾貫町字段	古墳時代中期～後期	集落跡
		第２次		平成19年９月25日～12月21日		後期旧石器時代	集落跡
(21)	川平第1号古墳			平成20年４月21日～６月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古　墳
	常定川平１号遺跡					古墳時代中期	集落跡
	常定川平２号遺跡					縄文時代	陥　穴
(22)	稲干場第２～４・９号古墳			平成19年10月９日～12月21日	庄原市口和町大月字稲干場	古墳時代後期	古　墳
(23)	只野原1号遺跡			平成20年９月８日～９月26日	庄原市高野町下門田字只野原	古墳時代	箱式石棺
	只野原２号遺跡			平成22年４月19日～11月19日	庄原市高野町下門田字只野原	不明	自然流路
	只野原３号遺跡	第１次		平成21年５月18日～８月28日	庄原市高野町下門田字登立	旧石器時代～古墳時代	包含層 集落跡
		第２次		平成22年４月19日～11月19日			
(24)	番久遺跡			平成20年７月28日～12月25日	庄原市口和町大月字番久	縄文時代～古墳時代	集落跡 陥穴
	原畑遺跡				庄原市口和町大月字原畑	弥生時代～古墳時代	集落跡
(25)	向泉川平１号遺跡			平成20年４月21日～７月11日	庄原市口和町向泉字川平	旧石器時代～縄文時代	包含層
	向泉川平２号遺跡					弥生時代～古墳時代	集落跡
(26)	石谷２号遺跡	第１次		平成21年４月13日～６月12日	庄原市口和町金田字塩谷	縄文時代	陥　穴
		第２次		平成22年４月12日～６月23日			
	石谷３号遺跡			平成21年４月13日～６月12日	庄原市口和町金田字塩谷	古墳時代後期	集落跡
(27)	馬ヶ段遺跡 馬ヶ段第１号横穴墓 馬ヶ段第２号横穴墓			平成20年４月14日～７月11日	庄原市水越町字馬ヶ段	古墳時代～平安時代	集落跡 横穴墓
	皇塩遺跡				庄原市水越町字皇塩	平安時代	炭窯跡
(28)	三重1号遺跡	第１次		平成20年11月４日～12月26日	三次市四拾貫町字三重	古墳時代～古代	集落跡
		第２次		平成21年４月13日～９月18日		古墳時代中期	集落跡
(29)	宮の本第20～26・31・32号古墳			平成19年４月16日～12月21日	三次市向江田町字宮本・天神	古墳時代前期～後期	古墳

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(30)	岡東第１～７号古墳		平成20年５月７日～９月26日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代中期	古墳
	岡１号遺跡				縄文時代	陥し穴
	岡２号遺跡		平成21年４月13日～５月15日		古墳時代後期	集落跡
	半戸１号遺跡		平成22年４月12日～５月14日	庄原市高野町岡大内字半戸	縄文時代	陥し穴
	岡東第１号横穴墓		平成24年９月３日～９月21日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代後期	横穴墓
(31)	風呂谷遺跡		平成21年５月18日～８月28日	三次市四拾貫町	旧石器～縄文 時代・古墳時代～古代	包含地集落跡
	風呂谷古墳				古墳時代後期	古墳
(32)本書	宮の本遺跡		平成20年４月21日～10月31日	三次市向江田町字宮本	古代	集落跡
	宮の本第11・33～35号古墳				古墳時代後期～古代	古墳
(33)	箱山第３～６号古墳		平成18年８月21日～12月８日	三次市向江田町字箱山	古墳時代前～後期	古墳
(34)	下矢井南第３～５号古墳		平成19年10月９日～12月21日	三次市吉舎町矢井字西見山，敷地字北野山	古墳時代前・中期	古墳
(35)	若見迫遺跡		平成19年４月16日～５月25日	三次市三良坂町岡田字若見迫	古代	集落跡
	畑尻遺跡		平成21年４月13日～６月５日	三次市三良坂町岡田字畑尻	旧石器～縄文時代・近世	陥し穴・集落跡
(36)	三隅山遺跡		平成24年４月９日～８月10日	三次市三良坂町長田字三隅山，字堂面	中世～近世	墓地
(37)	頼藤城跡		平成20年４月21日～７月31日	三次市甲奴町小童字塚ヶ迫，字小豆山	中世	城跡
(38)	杉谷遺跡		平成21年９月７日～10月16日	世羅郡世羅町東上原字杉谷	古墳時代後期・中近世	墓・集落跡

(報告書)

(１) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（１）』 2005年

(２) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』 2006年

(３) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（３）池ノ奥古墳』 2007年

(４) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（４）城根遺跡　曽川1号遺跡（Ｅ地区）　牛の皮城跡（第４次）』 2008年

(５) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（５）曽川1号遺跡（Ｇ～Ｊ地区）』 2008年

(６) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（６）曽川1号遺跡（Ｋ地区）』 2008年

(７) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（７）札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年

(８) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（８）北野山遺跡』 2009年

(９) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（９）向江田中山遺跡』 2010年

(10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）権現第１～３号古墳』 2010年

(11) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（11）大番奥池第１～３・７号古墳』 2010年
(12) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（12）茶臼古墳』 2011年
(13) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（13）瀬戸越南古墳』 2011年
(14) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（14）上陣遺跡』 2011年
(15) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（15）和知白鳥遺跡１（旧石器時代の調査）』 2011年
(16) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（16）曲第２～５号古墳』 2011年
(17) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（17）家ノ城跡（第１～５次）』 2012年
(18) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（18）片野中山第９～12号古墳・右谷遺跡』 2012年
(19) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（19）和知白鳥遺跡２（古墳時代の調査）』 2012年
(20) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（20）段遺跡』 2012年
(21) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（21）川平第１号古墳・常定川平１号遺跡・常定川平２号遺跡』 2012年
(22) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（22）稲干場第２～４・９号古墳』 2012年
(23) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（23）只野原１号遺跡・只野原２号遺跡・只野原３号遺跡』 2013年
(24) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（24）番久遺跡・原畑遺跡』 2013年
(25) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（25）向泉川平１号遺跡・向泉川平２号遺跡』 2013年
(26) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（26）石谷２号遺跡・石谷３号遺跡』 2013年
(27) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（27）馬ヶ段遺跡・皇塩遺跡』 2013年
(28) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（28）三重１号遺跡』 2013年
(29) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）宮の本第20～26・31・32号古墳』 2013年
(30) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（30） 岡東第１～７号古墳・岡１号遺跡・岡２号遺跡・半戸１号遺跡・岡東第１号横穴』 2014年
(31) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（31） 風呂谷遺跡・風呂谷古墳』 2014年
(32) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（32） 宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳』 2014年
(33) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（33） 箱山第３～６号古墳』 2014年
(34) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（34） 下矢井南第３～５号古墳』 2014年
(35) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（35） 若見迫遺跡・畑尻遺跡』 2014年
(36) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（36） 三隅山遺跡』 2014年
(37) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（37） 頼藤城跡』 2014年
(38) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（38） 杉谷遺跡』 2014年

Ⅱ　位置と環境

宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳は広島県北部の三次市向江田町に所在する。三次市は平成16（2004）年４月に旧三次市・旧双三郡・旧甲奴郡の１市４町３村が合併してできた778㎢余りの広大な面積をもつ北西－南東方向に長い市である。この三次市域は，周囲を中国脊梁山地の一部である備北山地や作木高原などの諸高原・台地に囲まれ，中央に東西約40km，南北約25kmと県内最大規模の三次盆地（標高150～450m）が存在する。この盆地の中央に四方から馬洗（せん）川・西城川・神野瀬川・可愛川などの諸河川が流れ込んで江の川となり，西流してやがて日本海に流れ下る。

三次市は山陰と山陽両地域を結ぶ拠点で，約4,000基の古墳や古代寺院など数多くの文化財が残されている。ここでは，宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳が存在する向江田町周辺を中心に三次市域の歴史的環境についてみていきたい。

旧石器時代　馬洗川南岸の下本谷（しもほんたに）遺跡[1]（西酒屋町），同北岸の段遺跡[2]（四拾貫町）・和知白鳥（わちしらとり）遺跡[3]（和知町）などで姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）降灰に先行する時期の旧石器包含層の調査が行われている。古代三次郡衙跡として著名な下本谷遺跡では，郡衙跡北西側の丘陵頂部などでナイフ形石器や鋸歯縁状石器・掻器など流紋岩製を主体とする石器群が出土した。また，段遺跡ではナイフ形石器・スクレイパー・部分磨製斧形石器・敲石など，和知白鳥遺跡ではナイフ形石器・台形様石器などが出土している。後２者では水晶・石英・玉髄や流紋岩を主な石器の材料に用いており，下本谷遺跡を含めて石材に安山岩をあまり使用しないという特徴がみられる。

縄文時代　松ヶ迫（まつがさこ）Ｂ地点遺跡[4]（東酒屋町）では，縄文時代早期の平面楕円形の小型竪穴住居跡を検出し，楕円押型文土器（深鉢）やスクレイパーが出土している。丘陵尾根上に立地する松ヶ迫Ａ地点遺跡[5]（東酒屋町）や緑岩（みどりいわ）遺跡[6]（南畑敷町）では底面に円形ピットを伴う長方形土坑を複数検出しており，動物狩猟用の落とし穴と考えられている。

弥生時代　前期の遺跡では，集落跡の高蜂（たかばち）遺跡[7]（南畑敷町）で小型の円形の竪穴住居跡から多くの石鏃・石錐と未成品・剥片・チップが出土した。墳墓の高平（こうびら）Ａ号墓[8]（十日市南町）では積石下に木棺墓２基と土坑墓１基が並んで築かれている。松ヶ迫Ｄ地点遺跡[9]（東酒屋町）では10基の木棺墓・土坑墓を検出しているが，そのなかの１基から碧玉製管玉18点が出土した。

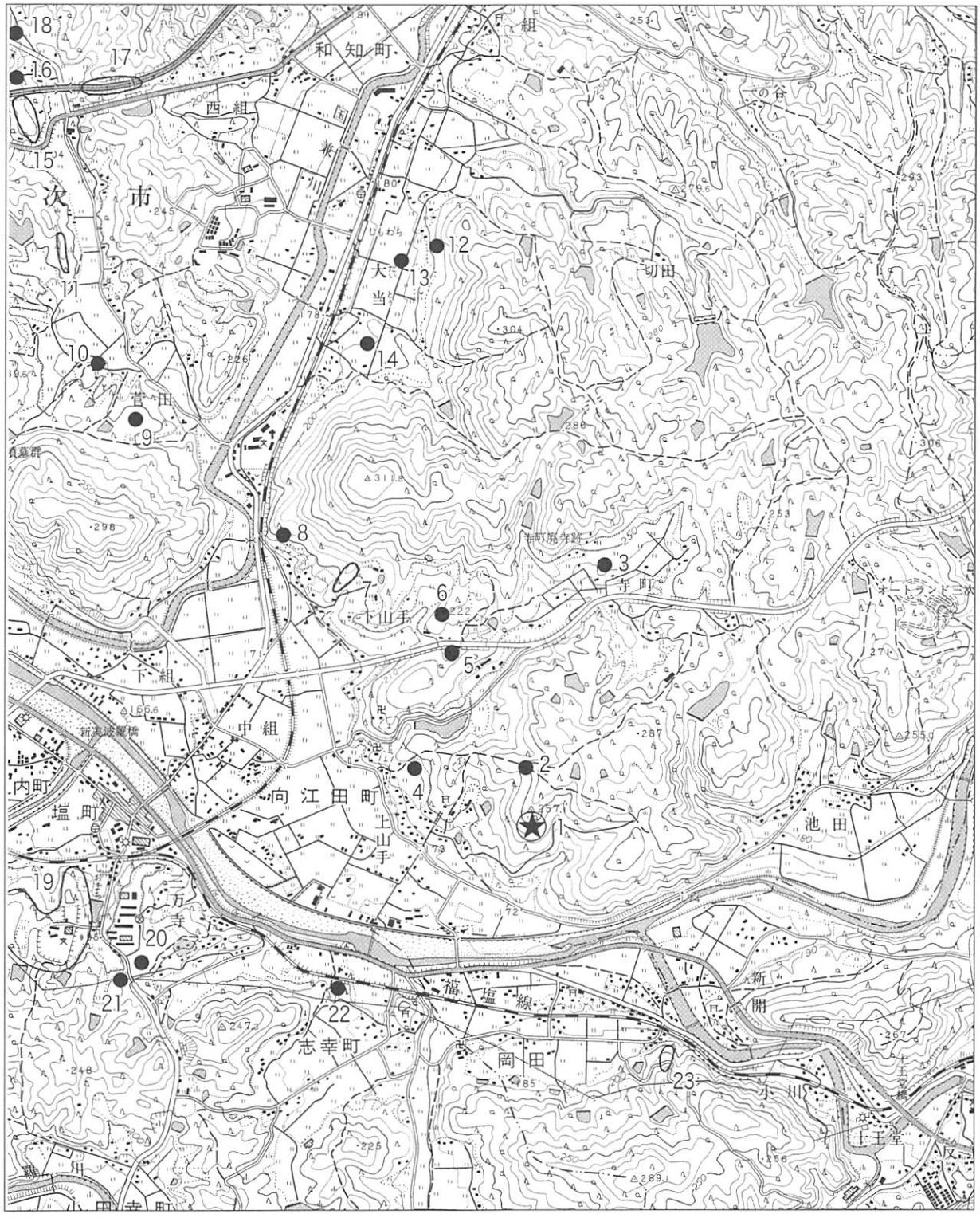
中期の遺跡では，集落跡の塩町遺跡から10軒以上の竪穴住居跡などで塩町式土器（壺・甕・鉢など）が出土している。陣山遺跡[10]（向江田町）・宗祐池西（むねすけいけにし）遺跡[11]（南畑敷町）・殿山（とのやま）墳墓群[12]（大田幸町）はいずれも土坑墓などを埋葬施設とする中期後半頃の四隅突出型墳丘墓で，四隅の突出がそれほど強くない。

後期の竪穴住居跡は，平面形円形で主柱は２本・４本柱のものと５本以上の多柱穴のものとが

ある。集落跡の調査例では，住田遺跡[13]（三若町）・帰海寺谷遺跡[14]（海渡町）・井上佐渡守土居屋敷遺跡[15]（畠敷町）などがある。墳墓では大仙大平山第21号古墳下層遺跡[16]（向江田町）・同第22号古墳下層遺跡[17]（同）があり，いずれも古墳築造に先行する箱式石棺・石蓋土坑を主体とする墓坑群で，ガラス製小玉・鉄器が出土した。後期の花園墳墓群[18]（十日市南町）は墳丘墓２基と溝で区画された６つの墓域から成る墳墓群で，箱式石棺・石蓋土坑・木棺・土坑など総数400～500基の墓坑を検出している。矢谷墳丘墓[19]（東酒屋町）は弥生時代終末期の前方後方形の四隅突出型墳丘墓で，木棺墓８基など計11基の埋葬施設が築かれている。周溝から墓葬祭祀に用いたと考えられる多くの土器群が出土しており，そのなかには山陰や吉備地域の特徴をもつものがみられる。

古墳時代　前・中期の竪穴系の埋葬施設（竪穴式石室・箱式石棺・粘土槨など）をもつ古墳としては，宮の本第24号古墳[20]（向江田町），下山手第４・５号古墳[21]（同），箱山第５号古墳[22]（同），瀬戸越南古墳[23]（同），権現第２号古墳[24]（同）などがある。宮の本第24号古墳は径30m，高さ４mほどの二段築成の円墳で，円筒埴輪列と葺石を伴い４世紀末頃の築成が考えられる。墳頂に竪穴式石室と大小２基の箱式石棺を並列して築いており，大型箱式石棺から小型青銅鏡が出土した。周囲には４世紀末～５世紀半ば頃に築造された径10～14mの箱式石棺を埋葬施設とする小円墳４基が近接して築かれている。宮の本古墳群の北に位置する丘陵尾根線に築かれた箱山第５号古墳は一辺14m，高さ２mほどの二段築成の方墳で葺石を伴う。墳頂には箱式石棺２基・石蓋土坑１基が，墳丘裾には３基の小型埋葬施設が築かれている。墳頂の埋葬施設などから鉇・竪櫛・ガラス小玉などが出土し，５世紀代の築造が考えられている。箱山第５号古墳の北西側の丘陵上に位置する瀬戸越南古墳は径12～13mの葺石を伴う円墳で，埋葬施設の箱式石棺から砂鉄素材の製錬滓が出土しており，鉄生産と関わりのある被葬者が想定される。下山手第４・５号古墳は丘陵上に並んで築かれた円墳（第４号古墳）と長方形墳（第５号古墳）で，４世紀末～５世紀初頭に築かれた第５号古墳は墳頂部に箱式石棺３基を構築している。墳丘に２段の葺石を廻らせる第４号古墳は５世紀前半～中葉頃の古墳で，墳頂に木棺墓と小型箱式石棺を築いている。権現第２号古墳は丘陵頂部に築かれた径20m，高さ３mの大型の円墳で，墳頂部には箱式石棺５基が構築されている。礫床をもつ中心的な石棺などから小型の農工具（直刃鎌・刀子）や玉類（勾玉・管玉・臼玉など）が出土しており，５世紀前半頃に築造されたと考えられる。

横穴式石室をもつ後期古墳としては，宮の本第20・31・32号古墳[25]（向江田町）がある。近接して築かれた古墳で，６世紀末～７世紀代に相次いで築造・埋葬された。いずれも石室内奥壁寄りに敷石（＋礫床）による屍床区画を設けており，ほかに陣床山第５[26]・６号古墳[27]（三若町），寺側古墳[28]（同），札場古墳[29]（後山町）が石室内に敷石を設ける。特に，寺側古墳は敷石と立石により石室内に箱式石棺状の埋葬区画を７つ設けている。また，須恵器の杯蓋や杯身を石室内に敷き並べる須恵器床は，大仙大平山第22号古墳[30]（向江田町），久々原第10号古墳[31]（西酒屋町）などで検出しており，棺台石と鉄釘の出土から石室内での木棺の存在が窺えるものとしては，久々原第10号古墳，高平第１・２号古墳[32]（十日市南町），宗祐池西第21号古墳[33]（南畑敷町），岩脇大久保第１号古墳[34]（粟屋町），和知白鳥第１～３号古墳[35]（和知町）などがある。斜面に３基の小型横穴式石



第２図　宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳周辺遺跡分布図（１：25,000）

１　宮の本遺跡，宮の本第 11･33～35 号古墳　２　宮の本第 20～26・31・32 号古墳　３　寺町廃寺跡
４　上山手廃寺跡　５　下山手第４・５号古墳　６　野稲南第８～11 号古墳　７　箱山第３～６号古墳
８　瀬戸越南古墳　９　向江田中山遺跡　10　深茅遺跡　11　権現第１～３号古墳　12　大当瓦窯跡
13　上大縄古墳　14　河原田２号遺跡　15　和知白鳥遺跡　16　三重１号遺跡　17　上四拾貫古墳群
18　段遺跡　19　勇免古墳群　20　塩町遺跡　21　重岡山遺跡　22　新宮山城跡　23　岡田山古墳群

室（長さ1.55～2.5m，幅0.48～0.85m）を築く和知白鳥第１～３号古墳は，７世紀代に比定されている。

集落跡の三段畑遺跡[36]（糸井町）では，古墳時代初頭の６本柱の円形住居跡を検出している。美波羅川東岸の低丘陵上に立地する帰海寺谷遺跡（海渡町）は５世紀初頭～６世紀初頭頃の集落跡で，一辺４m程度の方形住居跡５軒を検出した。２本柱のＳＢ４は６世紀初頭の竪穴住居跡で，当地域では最古の部類に入る造り付けのカマドをもつ。和知白鳥遺跡[37]（和知町）は５世紀中頃～６世紀中頃の集落跡で，２本柱・４本柱の竪穴住居跡35軒，掘立柱建物跡４棟などを検出した。半数を占める２本柱の小型住居は鉄器生産に関わる作業場的性格が想定され，多くの住居から製塩土器やスサが混入した粘土塊が出土している。馬洗川南岸の丘陵に立地する高蜂遺跡では，５世紀後半には丘陵の頂部に平面方形の２本柱の竪穴住居跡３軒が，６世紀後半には丘陵南斜面に平面長方形の４本柱の竪穴住居跡３軒が築かれている。後者にはいずれも造り付けのカマドが備わる。国兼川右岸の河岸段丘上に形成された５世紀後半の集落跡である深茅遺跡[38]（向江田町）では一辺４～５mほどの規模をもつ平面方形状の住居跡５軒を検出した。４本柱のものが主体で，２本柱のものも１軒ある。松ヶ迫遺跡群（東酒屋町）は丘陵斜面に築かれた６世紀～７世紀代の長期間に亘って営まれた大規模集落である。特に，丘陵斜面を階段状に削平した平坦面に竪穴住居や建物を築くＢ・Ｆ地点[39]はいずれも頻繁な建て替えを行い，総数30～50軒程度の住居・建物跡を検出したが，同時期に存在した住居は６～８軒程度とみられる。向江田中山遺跡[40]（向江田町）は馬洗川北岸の丘陵上に位置する６世紀末～７世紀中頃の集落跡で，谷を挟んで南北に整然と並ぶ官衙関連の建物群と４本柱の竪穴住居跡群が近接して存在し，竪穴住居がやや先行する。両者の関連性や性格，その変遷の状況など注目される。なお，松ケ迫Ｄ地点遺跡では丘陵南斜面で６世紀後半の須恵器窯跡２基を，丘陵頂部で工房的性格の遺構群を検出している。

古代　三次の地名が史料に現れる最古の例は，天平５（733）年に成立した『出雲国風土記』飯石郡条である。「和名類聚抄」によれば，旧三次市域には三次郡上次・下次・播次郷，三谷郡三谷・江田郷，高田郡粟屋郷などが含まれる。

県史跡下本谷遺跡[41]（西酒屋町）は丘陵上に立地する古代三次郡衙跡に比定される遺跡で，７世紀後半～９世紀代に４時期に亘る建物群の配置の変遷がみられる。寺院跡では史跡寺町廃寺跡[42]（向江田町）と上山手廃寺跡[43]（同）があり，いずれも馬洗川北岸の丘陵地帯に位置する。７世紀後半創建の寺町廃寺跡は丘陵の小支谷奥に立地する法起寺式の伽藍配置の寺院跡で，多量の瓦塼類や三彩が出土している。この南西1.2kmの段丘上に立地する上山手廃寺はやや遅れて７世紀末頃に創建され，塔を欠くが法起寺式に似た伽藍配置で，多量の瓦塼類や二彩（盤）などが出土した。両寺院は，同笵の軒丸瓦の存在や伽藍配置の類似など多くの共通点があり，同一の設計のもとに造営された可能性が高いとされている。

古墳時代中期の集落跡である深茅遺跡のＳＢ２は一辺3.6mの方形住居跡で，造り付けのカマドに平瓦が使用されており，奈良時代頃の住居と考えられている。

中世　当地域の中世の歴史は，三次郡の三吉氏，三谷郡の広沢氏（のち和智・江田氏）の両氏の

動向にほぼ現されるが，それも南北朝期以降に限られ，鎌倉時代の当地域の様子は殆ど分っていない。鎌倉幕府の御家人である武蔵国広沢氏が三谷郡に移住するのは13世紀後半頃とみられており，鎌倉時代末期の14世紀初頭には三谷郡和知(わち)郷・江田郷周辺に居住して和智・江田両氏を分出していた。三吉氏は南北朝期以降歴史の表舞台に現れ，やがて幕府奉公衆に名を連ねるようになる。その後，三吉氏・和智氏は，15世紀末の応仁・文明の乱やその後しばらくは備後北部（内郡）の国人衆として江田氏や山内(やまのうち)・宮(みや)氏らとともに備後国守護山名氏に属して行動するが，その後大内・尼子両氏の勢力が芸備地域に及ぶようになると，これら二大勢力の間で離合集散を繰り返すようになる。そして，1527（大永７）年に当地域を主戦場にした尼子氏と大内・毛利氏の激突（和智細沢山合戦）を境に，和智氏・江田氏は大内方，三吉氏は尼子方に与するようになる。しかしその後，大内氏・尼子氏の衰退・滅亡を経て，勢力を伸ばした毛利氏によって江田氏や祝(ほうり)氏は滅ぼされ，和智・三吉両氏は中国一円の領主となった毛利氏の家臣団に組み込まれることになる。

中世の遺跡としては，山城跡・祭祀跡や墓地がある。三吉氏は主郭から南に長く階段状に郭を連ねる比叡尾山城跡（畠敷町）を長く居城としていたが，戦国末期に西方の比熊山(ひぐまやま)城跡（三次町）に居城を移す。この比熊山城跡は，山塊の頂部に長く巨大な主郭を築き，この主郭を中心にその他の郭を配置する。主郭には天主台的な小郭や祭祀的な遺構が存在する。北流する美波羅川西岸の三方が急峻な斜面をなす要害の山塊の頂部に築かれた旗返山(はたがえしやま)城跡（三若町）は江田氏の居城で，山頂の二方に土塁を設けた主郭を築き，南～南東方向にＬ字状に郭を連ねている。祝（武田）氏の居城である高杉城跡（高杉町）は馬洗川南岸の水田地帯に築かれており，三重の空堀で囲まれた広大な平城である。北流する可愛川の合流点南岸の急峻な丘陵の端部に築かれた加井妻城跡(44)（粟屋町）は，三吉氏が領地の西端に築いた「界詰(かいづめ)」の城と考えられている。南から北に階段状に郭を連ね，最高所の郭の土塁の背後に直線的な堀切を設け，最下段にある最大規模の７郭には４～５軒分の建物や柵列の存在が想定されている。

美波羅川西岸の低丘陵上に位置する山崎遺跡(45)（大田幸町）では，埋納土坑の内部から土師質土器・皿や古銭とともに，円札２枚に挟まれた和鏡（蓬莱鏡）が出土した。円札の墨書銘から呪術行為に関わるものと考えられている。長田(ながた)川西岸の三隅山(みすみやま)遺跡(46)（三良坂町）では丘陵東斜面を階段状に削平した平坦面に石積みの墓20基を築いている。墓は一辺0.6～1.7mの方形状のもので，半数近くの墓には石積みの下部に埋葬のための土坑がある。墓に伴って鉄釘や須恵質の擂鉢などが出土している。池や溝，ピット群なども検出しており，近接して埋葬や供養などに関わる建物を伴う中近世墓地と考えられている。

註

(1) 広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』 1980年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第２次発掘調査概報』 1981年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第４次発掘調査概報』 1983年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第５次発掘調査概報』 1984年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第６次発掘調査概報』 1985年

三次旧石器文化研究会『下本谷遺跡の基礎的研究』 2007年
(2) 財団法人　広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（20）段遺跡』 2012年
(3) 財団法人　広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（15）和知白鳥遺跡１（旧石器時代の調査）』 2011年
(4) 広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「Ｂ地点遺跡」『松ケ迫遺跡群発掘調査報告』 1981年
(5) 広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「Ａ地点遺跡」『松ケ迫遺跡群発掘調査報告』 1981年
(6) 広島県教育委員会「緑岩遺跡」『緑岩古墳』 1983年
(7) 広島県教育委員会「高蜂遺跡」『緑岩古墳』 1983年
(8) 広島県教育委員会「広島県三次市高平遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第９集 1971年
(9) 広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「Ｃ・Ｄ地点遺跡」『松ケ迫遺跡群発掘調査報告』 1981年
(10) 三次市教育委員会『陣山遺跡』 1996年
(11) 三次市教育委員会「宗祐池西遺跡」『宗祐池西遺跡』 2000年
(12) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター「殿山墳墓群の調査」『大判・上定・殿山』 1987年
(13) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター「住田遺跡」『県営ほ場整備事業（川西東部・南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1997年
(14) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター「帰海寺谷遺跡」『県営ほ場整備事業（川西東部・南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1997年
(15) 三次市教育委員会『井上佐渡守土居屋敷跡』 1998年
(16) 三次市教育委員会「大仙大平山第21号古墳」『大仙大平山第21・22号古墳』 2000年
(17) 三次市教育委員会「大仙大平山第22号古墳」『大仙大平山第21・22号古墳』 2000年
(18) 三次市教育委員会『史跡花園遺跡―調査と整備―』 1979年
三次市教育委員会『史跡花園遺跡―第二次調査と整備―』 1980年
(19) 註(9)に同じ。
(20) 財団法人　広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）宮の本第20～26・31・32号古墳』 2013年
(21) 三次市教育委員会『下山手第４・５号古墳』 1994年
(22) 公益財団法人　広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（33） 箱山第３～６号古墳』 2014年
(23) 財団法人　広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（13）瀬戸越南古墳』 2011年
(24) 財団法人　広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）権現第１～３号古墳』 2010年
(25) 註(20)に同じ。
(26) 陣床山遺跡群発掘調査団「陣床山第５号古墳」『陣床山遺跡群の発掘調査』 1973年
(27) 陣床山遺跡群発掘調査団「陣床山第６号古墳」『陣床山遺跡群の発掘調査』 1973年
(28) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター『寺側古墳』 1995年
(29) 財団法人　広島県教育事業団「札場古墳」『中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（７） 札場古墳　大平遺跡　後山大平古墳』 2009年
(30) 註(17)に同じ。
(31) 広島県教育委員会「久々原第10号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（２） 1979年
(32) 註(8)に同じ。

(33) 三次市教育委員会「宗祐池西第21号古墳」『宗祐池西遺跡』 2000年
(34) 三次市教育委員会「岩脇大久保第１号古墳」『岩脇大久保第１号古墳・岩脇大久保遺跡』 1991年
(35) 財団法人　広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（19）和知白鳥遺跡２（古墳時代の調査）』 2012年
(36) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター『三段畑遺跡』 1990年
(37) 註(35)に同じ。
(38) 広島県三次市教育委員会「深茅遺跡」『深茅遺跡・岩脇墳墓群』 2013年
(39) 広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「Ｆ地点遺跡」『松ケ迫遺跡群発掘調査報告』1981年
(40) 財団法人　広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（９）向江田中山遺跡』 2010年
(41) 下本谷遺跡発掘調査団『下本谷遺跡－推定三次郡衙跡の発掘調査報告－』 1975年
広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』 1980年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第２次発掘調査概報』 1981年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第３次発掘調査概報』 1982年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第４次発掘調査概報』 1983年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第５次発掘調査概報』 1984年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第６次発掘調査概報』 1985年
(42) 三次市教育委員会『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第１次発掘調査概報－』 1980年
三次市教育委員会『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第２次発掘調査概報－』 1981年
三次市教育委員会『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第３次発掘調査概報－』 1982年
(43) 広島県教育委員会『上山手廃寺発掘調査概報』（１） 1979年
広島県教育委員会『上山手廃寺発掘調査概報』（２） 1980年
広島県教育委員会『上山手廃寺発掘調査概報』（３） 1981年
(44) 広島県教育委員会「加井妻城跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（２） 1979年
(45) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター『山崎遺跡』 1994年
(46) 公益財団法人　広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（36） 三隅山遺跡』 2014年

参考文献

・広島県双三郡　三次市史料総覧編集委員会『広島県双三郡　三次市史料総覧』第五篇　広島県双三郡　三次市史料総覧刊行会　1974年
・広島県『広島県史』地誌編　1977年
・広島県『広島県史』中世　通史Ⅱ　1984年
・三次市『三次市史』Ⅰ　2004年
・三次市『三次市史』Ⅱ　2004年

Ⅲ　調査の概要

宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳は,三次市の北東部に位置する古代の集落跡と横穴式石室を埋葬施設とする４基の古墳である（標高236～249m）。江の川水系馬洗川北岸の標高200～300mの低丘陵地帯の一角に立地し，西に向江田町の平野部を望む（平野部からの比高70～80m）。北220mには平成19（2007）年度に発掘調査を実施した宮の本第20～26・31・32号古墳が位置し，径30m，高さ4.5mの墳丘に残りの良い埴輪列・葺石をもつ大型円墳第24号古墳など多大な成果を上げた。今回の調査区はこれらの古墳が立地する丘陵尾根の基部から南方向に分かれた別の尾根先端の南東側斜面に位置する。宮の本古墳群は現在計35基を数えるが，大きく４群に分けることができ，今回調査を行った４基の古墳は古墳群の南東部に位置する。宮の本遺跡は宮の本第11・33～35号古墳と同じ斜面の南西側に隣接する。

発掘調査は，集落跡の宮の本遺跡は重機により表土の除去を行った後，人力によって遺構検出作業や遺構の掘り下げを行った。一方，調査区北東側に位置する第11号古墳は調査前の状況写真の撮影及び地形測量ののち，僅かに露出していた先端の天井石を目印に石室の中軸線を設定し，その中軸線を基準に幅80cmの土層観察用の畦を十字に設定して調査を行った。

宮の本遺跡の遺構の内訳は，平面形方形・長方形の竪穴住居跡８軒，斜面を削平して設けた不整形な平坦面上に壁溝や柱穴が存在する住居跡状遺構14軒，墓坑９基，性格不明の遺構９基である。出土遺物は大半が住居跡からのもので，須恵器（杯蓋・杯身・椀・高杯・甕・平瓶ほか），土師器（椀・甕・甑ほか）のほかに，直刃鎌や平瓦などがある。墓坑は調査区の中央，住居跡群と古墳４基に挟まれた丘陵斜面に築かれ，大半が墓坑の長軸を等高線に沿わせている。その内訳は石蓋土坑墓・土坑墓各３基，木棺墓２基，小型箱式石棺１基である。石蓋土坑墓は小口に板石(板材)が立てられていた。ＳＸ７では石積みの周囲から銅鋺の蓋を模した須恵器が出土しており，平瓦が出土した総柱建物などとともに奈良時代の仏教関連遺構の可能性がある。

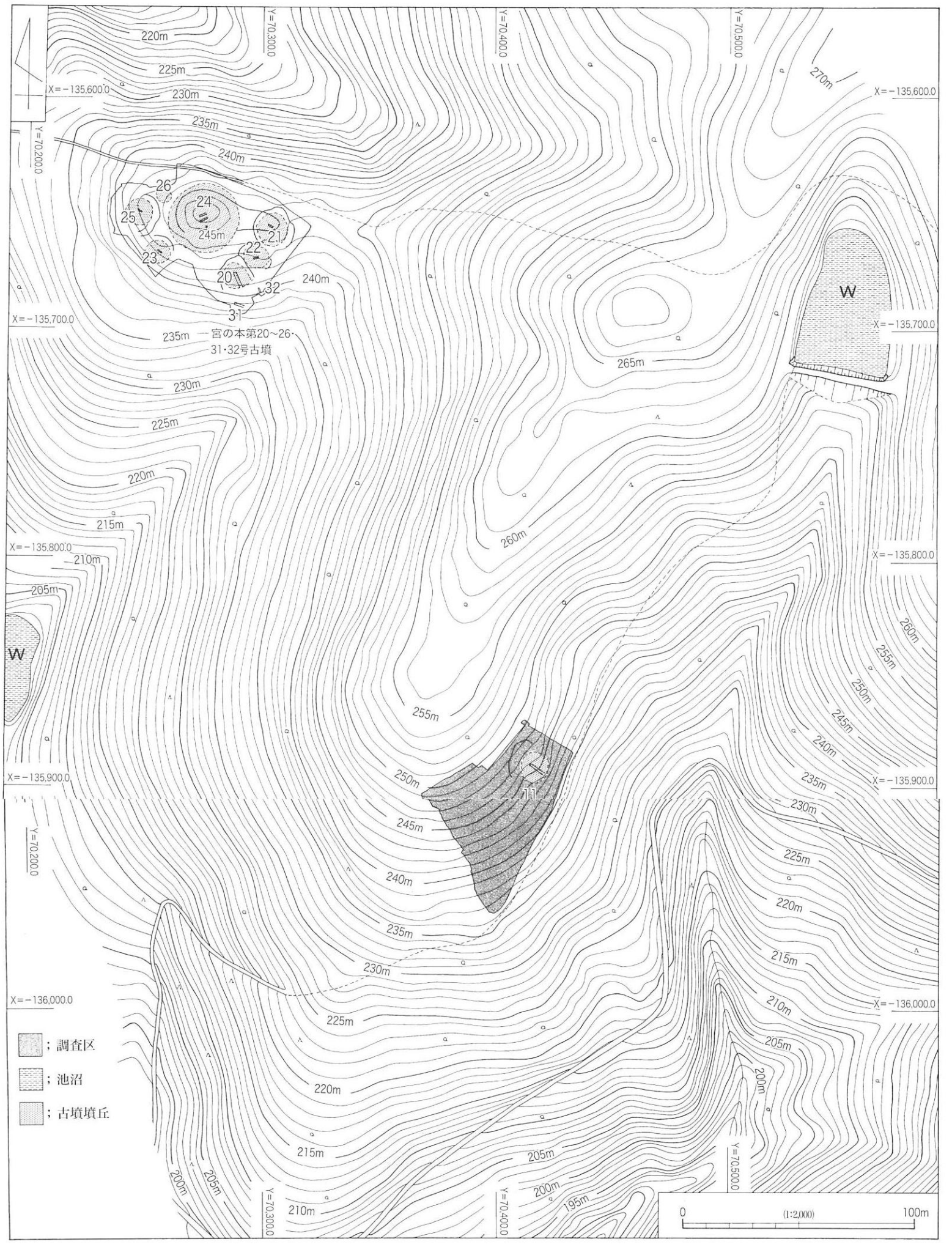
第11・33～35号古墳は横穴式石室を埋葬施設とする古墳で，いずれも石室の長軸は等高線に直交し,南東方向に開口する。第11号古墳は径13～15mの不整円形の墳丘の背後に周溝が半周し，長さ８m，幅１mの狭長な横穴式石室を築いていた。石室入口から墳丘裾両側には外護列石が短く延びており，周囲から多くの須恵器（杯蓋・杯身・高杯・甕・平瓶・甕・大甕ほか）の破片が出土した。石室内には敷石＋礫床と棺台石の屍床区画がみられた。遺物は石室内からは殆ど出土しなかったが，敷石上から耳環１対，棺台石周辺から鉄釘４点などが出土した。第33号古墳は長さ2.3m，幅0.6mの石室の背後に半円形に周溝が廻り，径７m程度の墳丘の存在が考えられる。第34・35号古墳は長さ１m内外の小型の横穴式石室で，第34号古墳の石室の床には敷石がみられた。

第２表　竪穴住居跡・住居跡状遺構一覧表

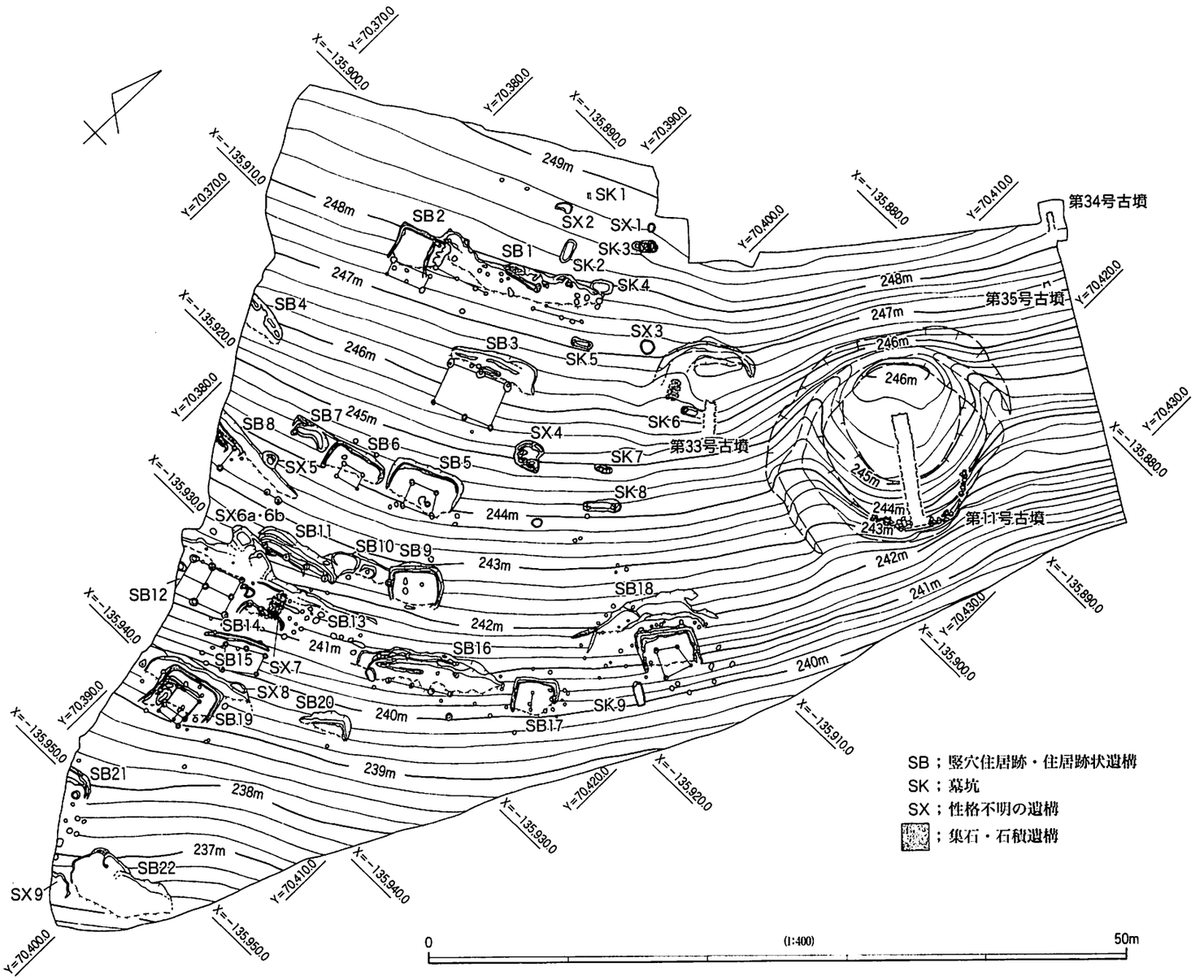
遺構番号	性格*1	平面形	規　模（m）*2	壁溝*3	柱穴*4	カマド	炉跡	焼土	貼床*5	出土遺物*6 須恵器	土師器	鉄器	その他	備考
ＳＢ１	住居跡状遺構＋	横長・不整長方形	東西12.26，南北2.34（全体）							3	1			２軒重複
			ＳＢ１ａ＝東西８	△	○列									
			ＳＢ１ｂ＝東西7.5		○列									
ＳＢ２	竪穴住居跡	横長・不整長方形	東西4.02，南北2.9	○	○２×１・外	○	○鉄滓・鉄釘		○整	1		１釘		
ＳＢ３	住居跡状遺構＋	不整長方形	東西6.42，南北2.22		○２×１・外									
ＳＢ４	住居跡状遺構	不整長楕円形	東西3.6，南北1.96											
ＳＢ５	竪穴住居跡	方形	ＳＢ５ａ＝東西4.6，南北3.46	ほぼ共用	○4・共用	○	○		○整	5	1			２軒重複
			ＳＢ５ｂ＝東西5.4，南北3.46				○鉄滓	○	○		２暗文			
ＳＢ６	竪穴住居跡	方形	ＳＢ６ａ＝東西4.28，南北2.8	共用	○4		○？							２軒重複
			ＳＢ６ｂ＝同上						○					
ＳＢ７	住居跡状遺構	横長・長方形	東西3.56，南北0.98	△										
ＳＢ８	竪穴住居跡	不整方形	ＳＢ８ａ＝1.44四方	○				○？						３軒重複
	竪穴住居跡	不整方形	ＳＢ８ｂ＝東西2.88，南北2.4	○	○・４？				○					
	住居跡状遺構	不整長方形	ＳＢ８ｃ＝東西8.34，南北2.76		△				○					
ＳＢ９	竪穴住居跡	横長・長方形	東西4.06，南北2.86	○	○２or４			○	○整				琥珀製小玉１	
ＳＢ10	住居跡状遺構	不整長方形	東西5.6，南北2.04	△	△						1			
ＳＢ11	住居跡状遺構＋	不整長方形	東西6.42，南北3.12（全体）											４軒重複
			ＳＢ11ａ＝東西4.86，南北1.92	△					○					
			ＳＢ11ｂ＝不明	△										
			ＳＢ11ｃ＝東西6.28，南北3.0	○	○列				△一部	4	2	4 鎌・鏃		
			ＳＢ11ｄ＝不明											
ＳＢ12	住居跡状遺構＋	不整長方形	東西5.1＋，南北６＋（全体）											
			東西3.78，南北1.8（平坦面）							5	2			
			東西3.64＋，南北2.94＋（建物跡）		○２×２＋・総								平瓦１	
ＳＢ13	住居跡状遺構	不整長方形	東西9.24，南北2.4（全体）											２軒重複
			ＳＢ13ａ＝不明	○	△					3	3	１刀子か		
			ＳＢ13ｂ＝不明	△	△									
ＳＢ14	住居跡状遺構	不整長方形	東西3.6，南北1.32	○	△	○						１刀片か		
ＳＢ15	住居跡状遺構＋	方形か	東西５，南北３	○	○４～５					1				
ＳＢ16	住居跡状遺構＋	不整長方形	東西10.8，南北3.6（全体）											２軒重複
			ＳＢ16ａ＝東西9.78，南北2.9	○	○列				○整					
			ＳＢ16ｂ＝東西6.4，南北2.2	○					○					

遺構番号	性格*1	平面形	規　模（m）*2	壁溝*3	柱穴*4	カマド	炉跡	焼土	貼床*5	出土遺物*6				備考
										須恵器	土師器	鉄器	その他	
ＳＢ17	竪穴住居跡	方形	東西3.3，南北2.62	○	○２（縦）	○？					1			
ＳＢ18	竪穴住居跡	横長・長方形	ＳＢ18ａ＝東西3.78，南北2.7	○	○４・共用									５軒重複
	竪穴住居跡	横長・長方形	ＳＢ18ｂ＝東西4.32，南北2.94	○			○？		○	1	1	1釘		
	住居跡状遺構	不整楕円形	ＳＢ18ｃ＝東西６，南北1.3											
	住居跡状遺構	不整楕円形	ＳＢ18ｄ＝東西11，南北3	○										
	竪穴住居跡	長方形状	ＳＢ18ｅ＝東西4.3，南北1.6						○					
ＳＢ19	竪穴住居跡	方形	ＳＢ19ａ＝東西4，南北2.8	○	○２（縦）									５軒重複，住居前面の柵列の存在，覆土上・中層の土器溜・炭層。
	竪穴住居跡	方形	ＳＢ19ｂ＝東西4.6，南北3	○	○４		○		○					
	竪穴住居跡	方形	ＳＢ19ｃ＝東西4.6，南北4.2	○	○４					12	9	1		
	住居跡状遺構	不整楕円形	ＳＢ19ｄ＝東西7.8，南北1.86		△									
	住居跡状遺構	不整楕円形	ＳＢ19ｅ＝東西4.3，南北1											
ＳＢ20	住居跡状遺構	方形	東西3.8，南北2.3	○										
ＳＢ21	住居跡状遺構	方形	東西２，南北2.7（全体）											３軒重複
			ＳＢ21ａ＝東西1.94，南北2	○										
			ＳＢ21ｂ＝東西1.4，南北1.4						○					
			ＳＢ21ｃ＝東西２，南北2.4	○					○					
ＳＢ22	住居跡状遺構	横長不整長方形	東西８，南北４（全体）											６軒重複
			ＳＢ22ａ＝不明						○＋整		1	1		
			ＳＢ22ｂ＝不明						○					
			ＳＢ22ｃ＝不明						○					
			ＳＢ22ｄ＝不明						○					
			ＳＢ22ｅ＝不明		△				○					
			ＳＢ22ｆ＝東西4.8，南北3						○＋整					

＊1「住居跡状遺構＋」；建物跡あるいは明確な柱穴列を伴うもの。
＊2「規模」；原則，住居壁＋床面・平坦面の規模。最大値。
＊3「壁溝」；○＝安定してあるもの，△＝部分的にあるもの。
＊4「柱穴」；○＝安定してあるもの（２；２本柱，４；４本柱，総；総柱，列；柱穴列状，他；その他），△＝存在するが，柱穴の配置状況が不明確なもの。外＝住居外にあるもの。
＊5「貼床」；整＝整地土的貼床。
＊6「出土遺物」；床面直上・覆土出土などその遺構内部から出土した遺物で，必ずしもその遺構の時期を示すものではない。



第３図　宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳周辺地形図（１：2,000）



第４図　宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳遺構配置図（１：400）

第３表　墓坑一覧表

遺構番号	種　類	長　軸			頭　位	石棺内法・墓坑規模（m・最大値,括弧内現存規模）			埋葬空間・木棺規模（m・最大値）		備　考
		方　位	角　度	等高線との関係		長さ	幅	深さ	長さ	幅	
ＳＫ１	箱式石棺	北北西－南南東	N20°W	斜交～直交	北北西	0.33	0.17	0.24			
ＳＫ２	土坑墓	北北西－南南東	N21°W	直交	北北西	1.77	0.81	0.32			鉄釘１出土。木棺墓か。
ＳＫ３	石蓋土坑墓	北東－南西	N46°E	平行	北東	(1.85)	0.86	0.39	1.37	0.48	南西小口石・北東小口穴あり。
ＳＫ４	土坑墓	東北東－西南西	N63°E	平行	東北東か	1.63	0.95	0.32			
ＳＫ５	木棺墓	北東－南西	N56°E	平行	北東か	1.54	0.69	0.38	1	0.3	
ＳＫ６	石蓋土坑墓	北東－南西	N50°E	平行	南西か	(1.08)	0.58	0.42	不明	不明	南西小口石あり。
ＳＫ７	石蓋土坑墓	北東－南西	N52°E	平行	不明	1.28	(0.56)	0.59	0.57	0.27	両小口穴あり。
ＳＫ８	木棺墓	北東－南西	N45°E	平行	北東	2.68	0.96	0.46	不明	不明	南西小口石あり。
ＳＫ９	土坑墓	西北西－東南東	N59°W	直交	西北西	1.78	0.7	0.24			

第４表　性格不明の遺構一覧表

遺構番号	性格	平面形	規模（m・最大値,括弧内現存規模）		出土遺物	備　考
			平面規模	深さ		
ＳＸ１	焼土坑	楕円形	0.78×0.54	0.08		焼土含む。
ＳＸ２	土坑	不整楕円形	1.22×0.82	0.15		炭化物多含。
ＳＸ３	焼土坑	不整円形	1.1× 1	0.1		炭化物粒・焼土多含。
ＳＸ４	土坑	不整円形	2.06× 2	0.5		貼床か。
ＳＸ５	土坑	不整楕円形	1.4×1.12	0.41	須恵器・杯	
ＳＸ６	土坑	不整楕円形	4.2×1.32	0.71		ＳＢ11に先行する。
ＳＸ７	石積遺構	石積＝長方形	2.4×1.8	高さ0.5	須恵器・杯蓋，杯身，椀，壺	下部遺構はない。
ＳＸ８	土坑	楕円形	(1.36×0.52)	0.25		ＳＢ19ｄと重複。
ＳＸ９	段状	不整形	(2.8×2)	0.17		調査区外に延びる。

第５表　宮の本第11号古墳出土遺物の内訳（括弧内の数字は遺物番号）

出土位置	総点数	須　恵　器					土師器	鉄製品	その他
		杯蓋	杯身	高杯	その他	合計			
石室内・掘方内	9点				平瓶２点（121・122）	2点		刀子（135），鉄釘４点（137～140）	耳環２点（144・145）
南西列石周辺	21点	2点（84・85）	6点（91～95・97）	6点（104・105・108・110・111・116）	坩蓋（119），平瓶（123），甕２点（125・126），大甕２点（127・128）	20点		刀子１点（136）	
北東列石周辺	6点	1点（87）	3点（96・98・103）	2点（107・109）		6点			
石室前面	16点	6点（82・83・86・88～90）	4点（99～102）	3点（106・113・114）	坩蓋（118），甑（120），壺（124）	16点			
周溝内	5点						甕３点（130～132），甑（133）		敲石（134）
墳丘盛土ほか	9点	2点（80・81）		3点（112・115・117）		5点	壺（129）	用途不明品３点（141～143）	
計	66点	11点	13点	14点	11点	49点	5点	9点	3点

Ⅳ　遺構と遺物

1．宮の本遺跡（第３・４図，図版１）

調査区はほぼ南北方向に長辺をもつ不整台形状をなしており，その南側2/3（調査面積としては2,170㎡／2,770㎡で８割弱）が集落跡の宮の本遺跡である。集落（南西側に住居群，北東側に墓坑群）と古墳（宮の本第11・33～35号古墳）は調査区の南西側と北東側とに整然と分かれる。ここでは先ず集落部分（宮の本遺跡）について述べる。

集落を構成する遺構の内訳は竪穴住居跡８軒・住居跡状遺構14軒，墓坑９基（石蓋土坑墓３・土坑墓３・木棺墓２・小型箱式石棺１），性格不明の遺構９基である。調査区は概ね丘陵尾根端部の南東斜面に位置するが，細かくみると調査区南西側の集落部分はほぼ北から南に斜面が傾斜するが（傾斜角度12°），古墳部分は北西から南東方向へ傾斜角度18°とやや急角度で斜面が傾斜している。つまり，集落部分と古墳部分は調査区としてはつながっているが，立地する斜面の傾斜角度と傾斜方向は異なる。なお，調査区では集落の北東側ないしは東半部分を検出しており，西側及び南側調査区外に広がるとみられる。

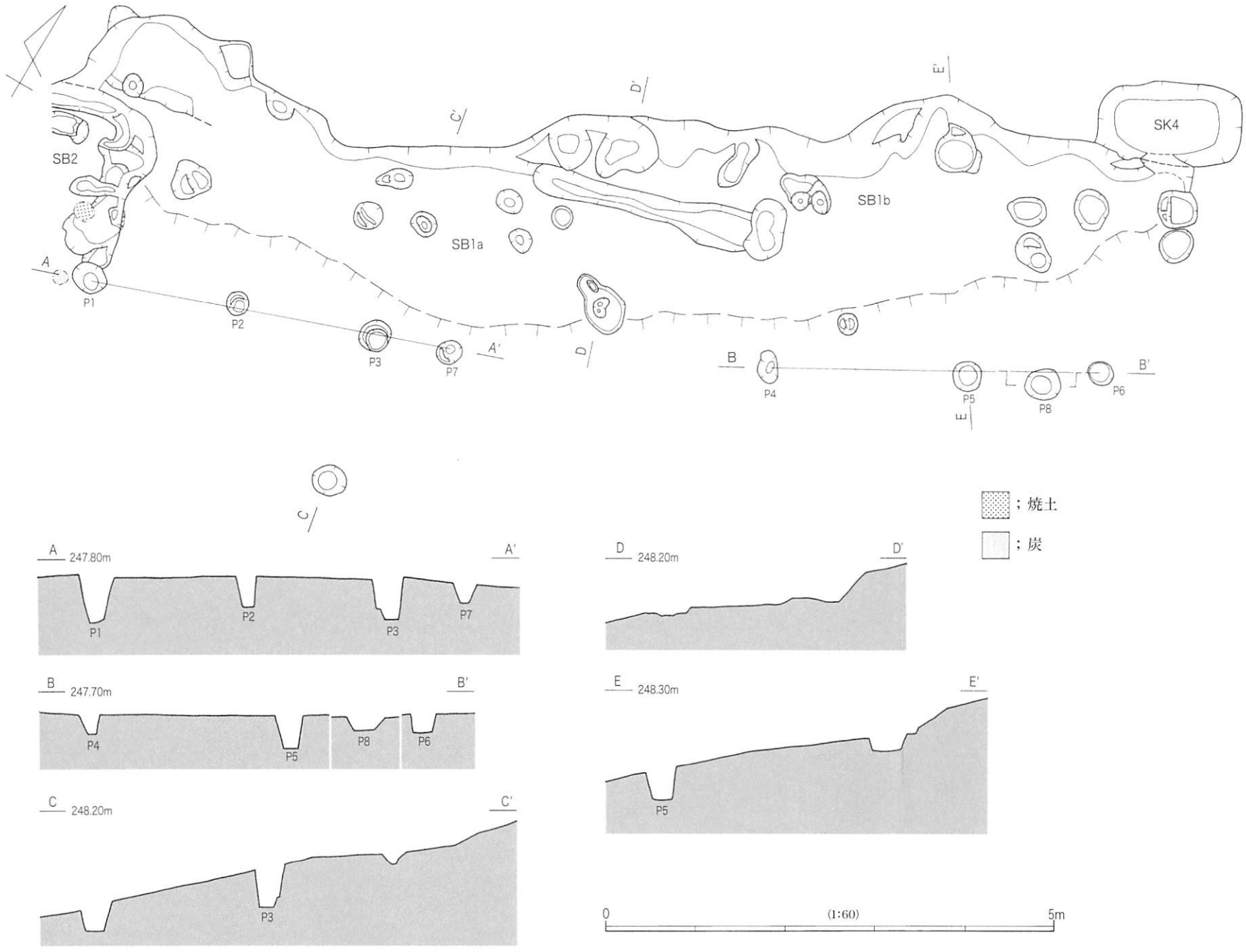
（１）竪穴住居跡・住居跡状遺構

住居は３～４軒前後のまとまりとして把握される。即ち，斜面上方からＳＢ１～３，ＳＢ５～８，ＳＢ９・10，ＳＢ11～14，ＳＢ15・19・20，ＳＢ16～18，ＳＢ21・22の８群であるが，特に調査区中央の標高239～243m付近にＳＢ11～15・19が集中するあたりが集落の中心と考えられる。検出した住居総数は22軒だが，平面プランや柱構造・壁溝などが明確な竪穴住居跡は８軒と少なく，14軒の住居跡状遺構は柱穴の配置や壁溝，平面プランなどが不明確で，住居以外の機能・性格をもつ建物（共同施設・作業小屋・住居の付属施設など）である可能性が強い。８軒の竪穴住居跡は斜面上方から，ＳＢ２・５・６・８・９・17・18・19である。これら竪穴住居跡の平面形は方形・長方形，柱構造は４本柱か２本柱が主体である。竪穴住居跡１～２軒＋住居跡状遺構１～２軒が一つの単位をなすと考えられる。

①ＳＢ１（第５図，図版２）

立地　ＳＢ１は斜面上方に位置する住居跡状遺構で，東西に細長く延びた平坦面と柱穴列からなる。北側に壁をもち，西端で竪穴住居跡ＳＢ２と，東端で土坑墓ＳＫ４とそれぞれ重複する。北東に近接して土坑墓ＳＫ２，南4.8mには住居跡状遺構ＳＢ３が存在する。

規模　等高線に沿ってほぼ東西方向に延びる平坦面は平面形不整長方形で，長さ（東西方向）12.26m，幅（南北方向）2.34m（最大）の規模で，壁高（最大）37㎝である。平坦面中央付近に短い壁溝状のものがみられ，この溝は西半の住居壁に繋がる。一方，東半の住居壁はこの箇所か



第５図　ＳＢ１実測図（１：60）

ら北に膨らむ。このことから，ＳＢ１では西半のＳＢ１ａと東半のＳＢ１ｂの２軒が重複している可能性が高い。ＳＢ１ａは長さ８ｍ程度，ＳＢ１ｂは長さ7.5ｍほどの規模であるが，その先後関係については明確でない。

平坦面　西から東にゆるやかに傾斜し（高低差ほぼ30cm），南北方向では北が高く南が10～20cmほど低い。ＳＢ１ｂの床面がＳＢ１ａのそれより若干高いが，殆ど差はない。

壁溝　北壁沿いに安定した壁溝はみられないが，中央に東西方向に短く延びる溝がある。西半のＳＢ１ａに伴うと考えられる壁溝で，長さ（現存）2.5ｍ，幅24～48cm，深さ（最大）８cmで，溝底は西から東に緩やかに下る（高低差５cm）。

柱穴　平坦面には径20～30cmのピットが30個程度あるが，いずれも深さ10～20cm程度と浅く，柱穴列として並ぶものはない。平坦面南端の傾斜変換点付近には，柱穴３個が直線的に並ぶ２間の柱穴列２条があり，平坦面を床面とする建物に伴う柱穴列である可能性が考えられる。西側の柱穴列はＳＢ１ａに伴うと考えられるもので，西隣のＳＢ２東壁付近のＰ１から東にＰ２，Ｐ３と並ぶ。柱間の距離はＰ１－Ｐ２・Ｐ２－Ｐ３ともに1.62ｍと等しい。Ｐ３の東0.84ｍには小ピットＰ７がある。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径40cm×短径32cm，深さ56cm，Ｐ２は長径26cm×短径24cm，深さ38cm，Ｐ３は長径36cm×短径33cm，深さ48cmで，Ｐ４は長径29cm×短径26cm，深さ26cmである。東側のＳＢ１ｂに伴うと考えられる柱穴列は西からＰ４－Ｐ５－Ｐ６とやはり３個の柱穴が直線状に並ぶ２間で，柱間距離は西側のＰ４－Ｐ５が2.22ｍとやや広く，東側のＰ５－Ｐ６が1.5ｍとやや狭い。Ｐ５とＰ６の中間にはやや浅いピットＰ８がある。ＳＢ１ｂの柱穴列の各柱穴の規模は，Ｐ４が長径36cm×短径22cm，深さ28cm，Ｐ５が長径33cm×短径30cm，深さ39cm，Ｐ６は長径30cm×短径26cm，深さ25cmで，Ｐ８は長径40cm×短径34cm，深さ18cmである。ＳＢ１ａの東端のＰ７とＳＢ１ｂ東半にあるＰ８はいずれも柱穴に比べるとやや浅く，柱間距離も0.8ｍ程度と狭い。この１ｍに満たない部分は建物の入口であった可能性が考えられる。柱穴底面の標高は，ＳＢ１ａの柱穴列が247.08～247.26ｍ，ＳＢ１ｂの柱穴列が247.06～247.26ｍで，その平均値はいずれも247.19ｍと等しい。

出土遺物（第16図，図版46）　須恵器（１～３）・土師器（４）がある。須恵器の１はＳＢ１ｂ中央の壁際付近，２はＳＢ１ｂ東半，３と土師器の４はＳＢ１ａ西端付近で出土した。

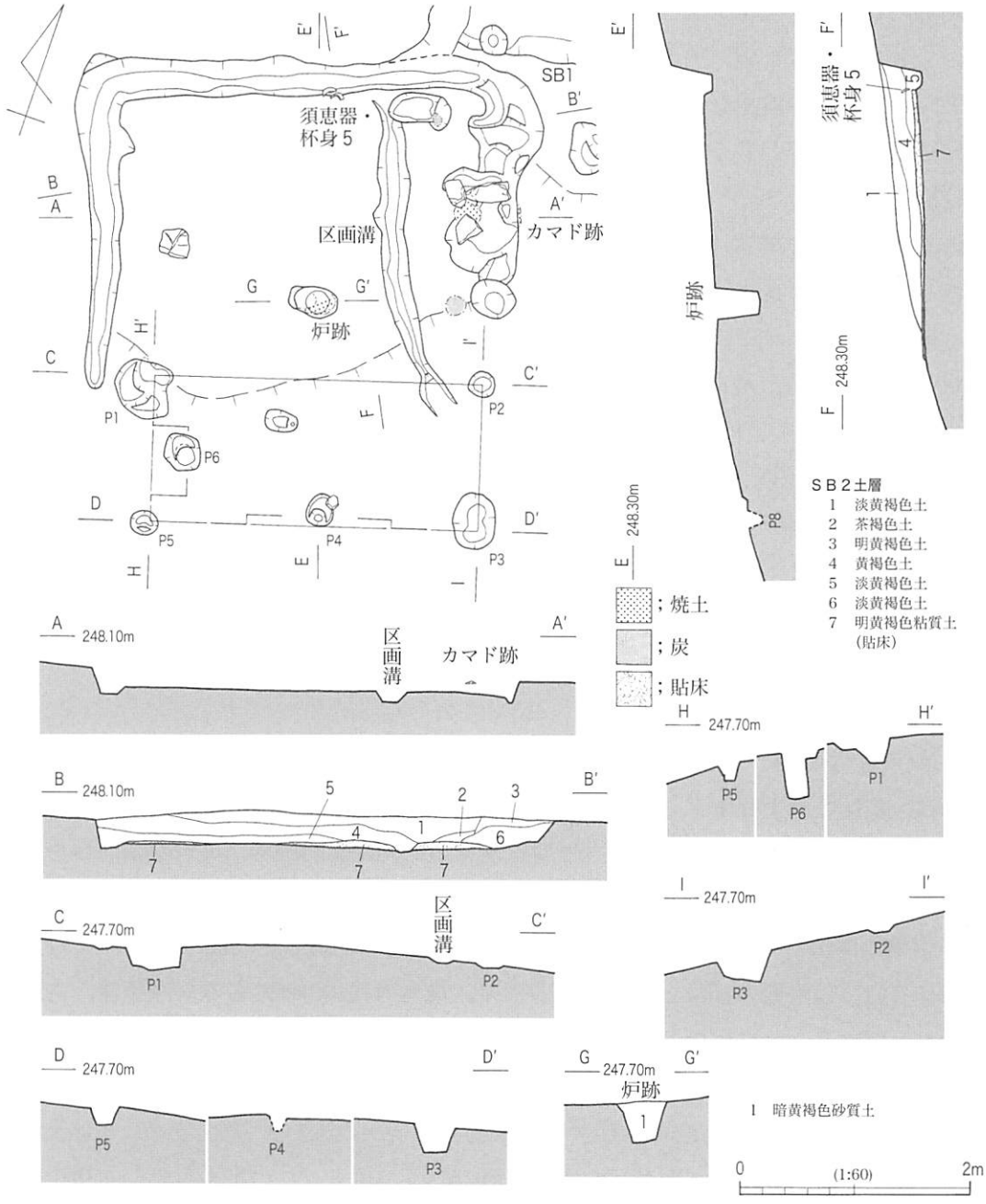
須恵器は杯蓋・杯身・小壺がある。杯蓋１は口径12.2cm，器高4.4cmで，平坦な頂部から内湾しながら開き気味に延びる口縁を僅かに外反させ，端部を丸く納める。調整は，外面は頂部が回転ヘラ切り不調整，体部から口縁，内面全体にかけて回転ナデを施し，内面中央には一定方向のナデがみられる。２は平底の杯身とみられる器形で，復元底径10.6cmである。調整は，内面及び外底面回転ナデである。３は肩の張る小壺で口縁を失っている。復元体部最大径6.0cm。調整は，内面頸部上半・体部が横ナデ，頸部下半が縦方向のシボリ，外面は頸部横ナデ，肩部から体部中央付近まで不調整，体部下半横方向のヘラケズリを施す。底部は小さな平底である。４は土師器・甑で，短く外反する口縁と，体部上半に断面扁円形の把手が付く。この把手付近から緩やかに底部にかけて窄まるとみられるが，底部については明確でない。調整は，口縁部内外面横ナデ，体

部内面斜め方向・縦方向主体のヘラケズリ，外面体部は縦方向の板ナデ，把手部分はナデ調整である。復元口径23.4cm。４ｂは４ａと同一個体かどうか分からないが，狭口部の端部から８㎜ほど上方に径８㎜の円孔が穿たれている。

②ＳＢ２（第６図，図版２ｃ・３・４ａ）

立地　斜面上方に位置する竪穴住居跡で，ＳＢ１の西端と重複する（標高248m）。南8.8mの調査区際に住居跡状遺構ＳＢ４が，東４mに同じく住居跡状遺構ＳＢ３が存在する。

規模　平面形ほぼ方形で，現状では南辺には住居壁及び壁溝がみられないので南北方向の規模が



第６図　ＳＢ２実測図（１：60）

分からないが，現存規模は東西3.64～4.02m，南北（現存）2.9mで，壁高（最大）は北壁中央で39cmである。

床面　平坦だが，北から南に10cm程度下傾している。東半の区画溝周辺には部分的に厚さ数cmの貼床がみられる（７層＝明黄褐色粘質土）。

壁溝　北辺・西辺の住居壁際に壁溝が廻る。東辺についてはカマド跡が存在するが，壁溝は明確でない。現状では，北辺の壁溝が北東隅で短く屈曲して収束するとみられる。壁溝の幅18～24cm，深さ（最大）10cmで，溝底面はほぼ水平である。

柱穴　床面には明確な柱穴は存在しないが，南側の斜面に東西２間×南北１間（2.8m×1.26m）の建物跡が存在する。別遺構である可能性があるが，その位置関係からＳＢ２に伴う可能性もある。北辺のＰ１－Ｐ２の柱間距離は2.82m，南辺はＰ３－Ｐ４が 1.36m，Ｐ４－Ｐ５が1.48mである。東西方向の柱間は南北方向の柱間(Ｐ１－Ｐ５・Ｐ２－Ｐ３＝ 1.26m)に比べてやや広い。各柱穴の規模は，Ｐ１が径50cm，深さ20cm，Ｐ２が長径24cm ×短径22cm，深さ６cm，Ｐ３が長径48cm ×短径38cm，深さ33cm，Ｐ４が長径28cm ×短径24cm，深さ約10cm，Ｐ５が長径23cm ×短径22cm，深さ18cmである。柱穴底面の標高は246.97～247.4m（平均247.25m）と南東隅のＰ３がやや低いがほぼ均一である。なお，Ｐ１とＰ５の間にあるＰ６は長径36cm ×短径32cm，深さ44cmで，底面の標高は247.07mである。

区画溝　床面の東壁から１mほど西側の床面にほぼ南北方向に延びる溝が存在する。その規模は幅10～28cm，深さ（最大）８cmで，溝底面は北から南に緩やかに下傾する（高低差９cm)。ここでは東辺のカマド跡を中心とした厨房的スペースを限る区画溝と考えるが，その形態や溝底面の傾斜状況など北辺の壁溝からの排水溝の可能性もある。

カマド跡　東壁中央に石組みのカマド跡が存在する。20～30cm大の角礫３個と中央に径22cmほどの焼土の広がりがある。東辺住居壁の一部にも焼土がみられることから，袖部に角礫を用いたカマド跡の可能性が高い。このカマド跡のすぐ北側にも住居壁や壁際の床面の状況からカマド跡の存在が考えられるが，明確ではない。

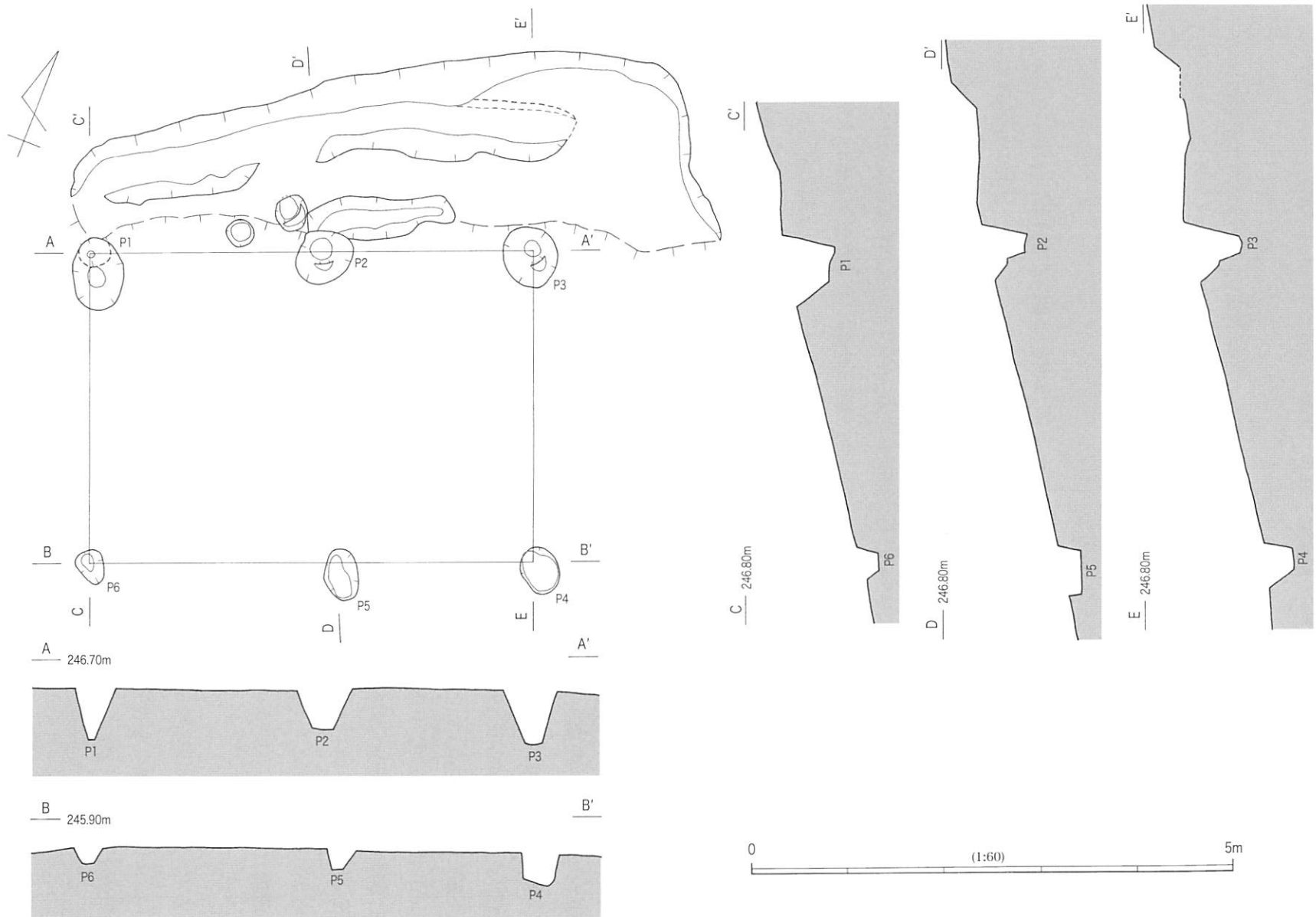
炉跡　床面中央南寄りに長径42cm ×短径26cm，深さ39cmの東西方向に長軸をもつ平面形楕円形のピットが存在する。南側の壁面を中心に焼けており，覆土からは鉄滓や鉄釘が出土している。一般的な炉穴に比べると，平面規模に比べてやや深いことから，炉以外の性格も考えられる。

出土遺物（第16図，図版46）　北壁中央壁際の床面で須恵器・杯身，炉跡覆土から鉄釘片が出土した。

須恵器・杯身５は口径9.8cm ×10.2cm，器高3.7cmの完形品で，底部から外上方にやや開き気味に立ち上がり，口縁の端部を丸く納める。調整は外底面回転ヘラ切り不調整，体部から内面全体に回転ナデを施す。鉄釘片６は頭部を失い，現存長3.2cmの断面正方形である。

③ＳＢ３（第７図，図版４ｂ）

立地　ＳＢ１・２の斜面下方側にある住居跡状遺構で（標高246m)，西４mに竪穴住居跡ＳＢ２，



第７図　ＳＢ３実測図（１：60）

北3.2mには石蓋土坑墓ＳＫ５，北4.8mには住居跡状遺構ＳＢ１，そして南４mには竪穴住居跡ＳＢ５が存在する。

規模　斜面を削平して造られた平面形不整長方形の平坦面の前方斜面に２間×１間の建物跡を伴う。平坦面の規模は，長さ（東西方向）6.42m，幅（南北方向）0.9～2.22mで，北壁の高さ（最大）は北東隅で33cmである。

平坦面　平坦面の北半は幅広で浅い溝状である（深さ２～３cm）。壁溝としては幅60cmほどと広すぎ，その機能については不明である。この溝状部分の南に僅かに広がる平坦面は西から東に緩やかに下傾する（高低差数cm）。

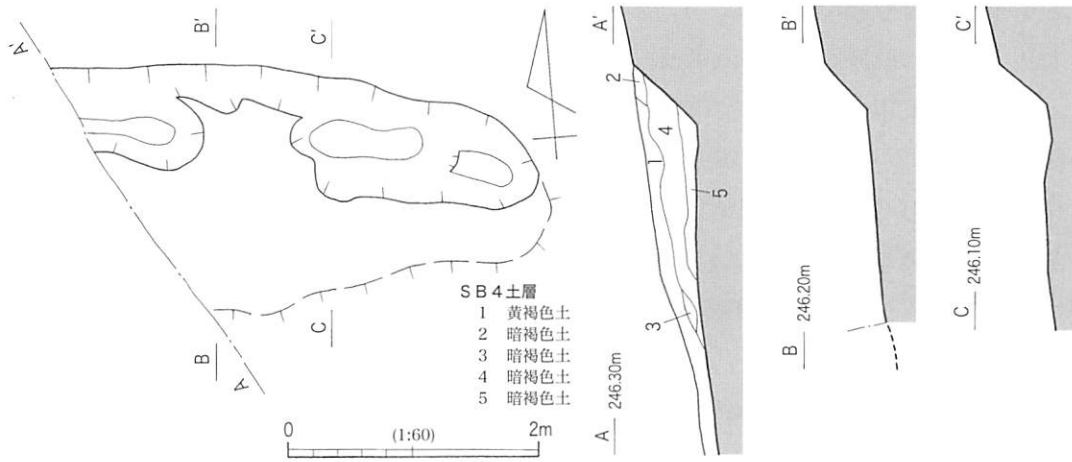
柱穴　平坦面には明確な柱穴はみられない。平坦面南縁の傾斜変換線から斜面にかけて平坦面の長軸にほぼ並行して東西２間×南北１間の建物跡がある。その規模は，長さ(東西方向)4.54～4.57m，幅(南北方向)3.21mである。東西方向の柱間距離は，北辺のＰ１－Ｐ２が2.4m，Ｐ２－Ｐ３が2.14m，南辺のＰ４－Ｐ５が2.03m，Ｐ５－Ｐ６が2.54mで，2.03～2.54m（平均2.28m）である。西半（Ｐ１－Ｐ２・Ｐ５－Ｐ６）の柱間距離が2.4m・2.54mであるのに対して，東半（Ｐ２－Ｐ３・Ｐ４－Ｐ５）のそれは2.03m・2.14mと26～51cmほど短い。また，南北方向（Ｐ１－Ｐ６・Ｐ３－Ｐ４）の柱間距離は3.21mで，東西方向の柱間距離に比べて0.67～1.18mも広い。これらの柱穴の規模は，Ｐ１が長径74cm×短径53cm，深さ55cm，Ｐ２が長径63cm×短径56cm，深さ44cm，Ｐ３が長径66cm×短径56cm，深さ61cm，Ｐ４が長径48cm×短径38cm，深さ32cm，Ｐ５が長径52cm×短径35cm，深さ26cm，Ｐ６が長径36cm×短径28cm，深さ20cmである。各柱穴底面の標高は，北辺のＰ１－Ｐ２－Ｐ３は245.78～245.95m，南辺のＰ４－Ｐ５－Ｐ６は245.24～245.44mと後者が約50cm（平均）低い。

ＳＢ３に伴う遺物は出土していない。

④ＳＢ４（第８図，図版４ｃ）

立地　西辺の調査区際にある住居跡状遺構で，調査区外に延びる（標高246m）。北東12mに住居跡状遺構ＳＢ３，南東６mに竪穴住居跡ＳＢ８が存在する。

規模　東西方向に長い平面形不整長楕円形の遺構で，西半が調査区外に延びる。現存規模は長さ（東西方向）3.6m，幅（南北方向・最大）1.96mである。北辺の壁高（最大）は37cmである。



第８図　ＳＢ４実測図（１：60）

平坦面　北・西が高く，南・東に緩やかに下傾する（高低差数cm）。北壁際には幅30～60cm，深さ２～10cm程度の幅広の浅い溝がみられるが，壁溝としては不定形である。

ＳＢ４に伴う柱穴や出土遺物はない。

⑤ＳＢ５（第９図，図版５）

立地　集落のほぼ中央に位置する竪穴住居跡である（標高244m）。西に隣接して竪穴住居跡ＳＢ６が，南東３mには同じくＳＢ９が，北東8.4mには石蓋土坑墓ＳＫ７が存在する。

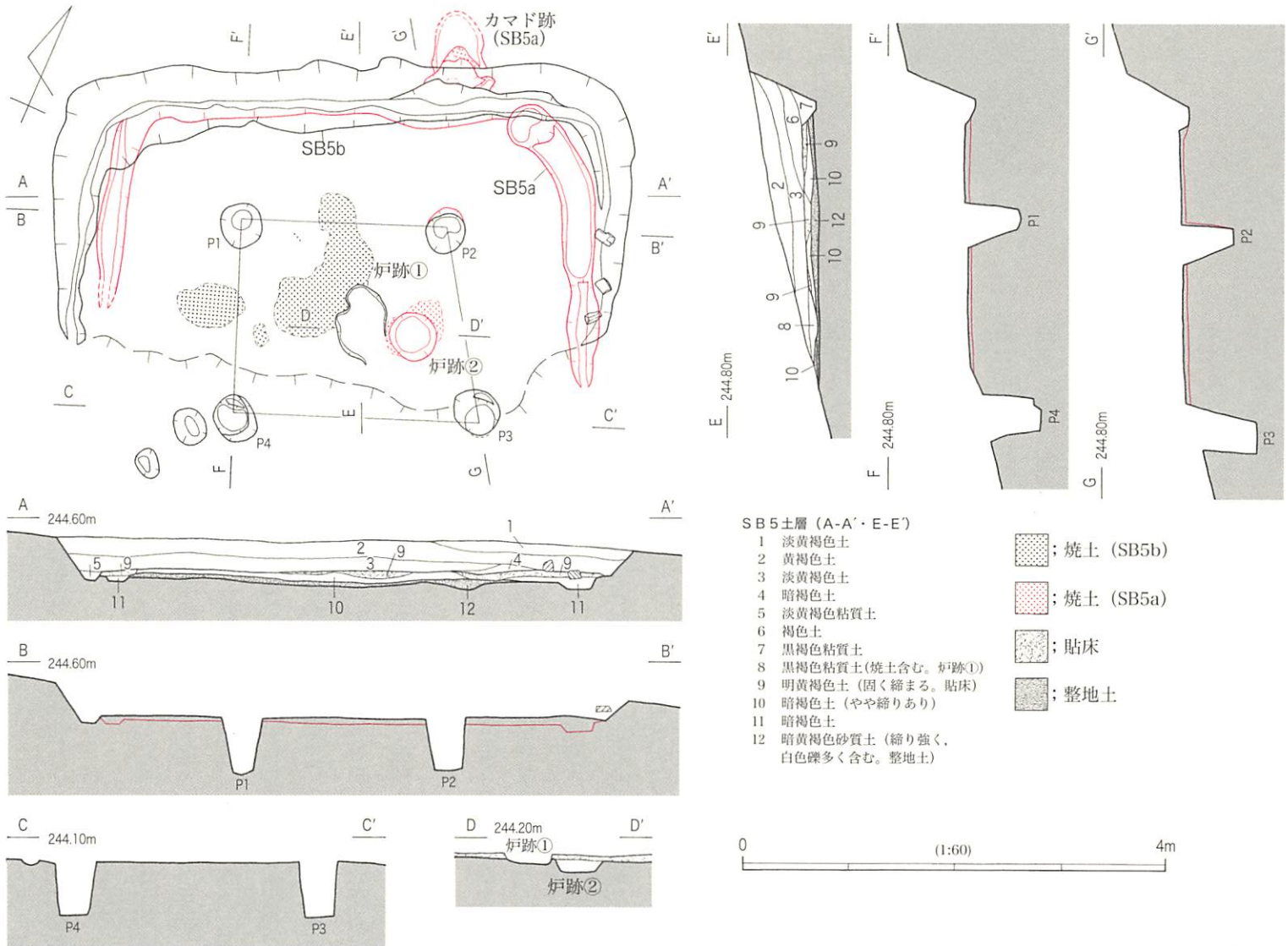
規模　平面形方形の竪穴住居跡であるが，北辺と東辺・西辺を中心に残存し，斜面側の南辺の床面はある程度の流出が考えられる。２軒の住居が上下に重複し，ＳＢ５ａを東西方向に１m近く拡張してＳＢ５ｂが作られている。北辺も先行するＳＢ５ａに伴うカマド跡の焚口部や袖部などが完全に失われていることから，一定程度の拡張が考えられるが，煙道口に近い箇所が残存することから，それほど大きな拡張は行っていないと考えられる。柱穴（４本）すべてを共用するが，北東隅の柱穴Ｐ２のみは北側を少し小さくしている。先行するＳＢ５ａの床面の上方４～８cmに後出するＳＢ５ｂの床面が存在する。各住居跡の規模は，先行するＳＢ５ａが東西4.6m，南北（現存）3.46m，壁高（最大）58cm（北西隅）で，後出するＳＢ５ｂの南北方向はＳＢ５ａとほぼ同規模だが，東西方向は西に最大54cm，東に最大38cm，計１m近く拡張し長さ5.4mを測る。主柱穴の配置から考えて，住居の平面形は正方形に近いと考えられ，住居の南辺側２m近くの床面が流出した可能性がある。

床面　ＳＢ５ａの床面は南北方向は水平だが，東西方向は西から東に緩やかに下傾する（高低差数cm）。後出するＳＢ５ｂの床面は東西方向は西から東に最大約10cmほど下傾し，南北方向は北から南に数～20cm程度傾斜し，やや不安定である。

貼床　ＳＢ５ａ・５ｂともに貼床を行っている。先行するＳＢ５ａの貼床は整地的な性格のもので，地山上面に白色礫を多く含む締りの強い暗黄褐色砂質土（12層）を厚さ数～10cm程度敷いて床面を整えている。このＳＢ５ａの床面の上にはやや締りのある暗褐色土（10層）が安定して堆積し，その上に固く締まる明黄褐色土（９層）を厚さ数cm程度敷いて，ＳＢ５ｂの床面としている。この後出するＳＢ５ｂの貼床は床面全体に安定してみられるのではなく，部分的で厚薄が顕著なやや不安定なものである。

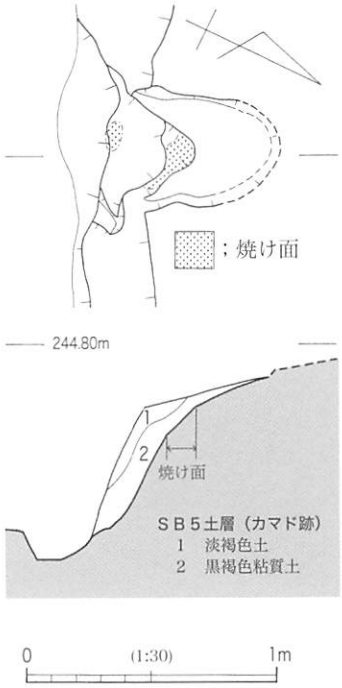
壁溝　北辺の壁溝は南縁が最大16cm拡張（あるいは縮小）されているが，ほぼ同じ壁溝を共用している。西辺及び東辺の南北方向の壁溝は住居壁を外側に拡張しているので，壁溝がほぼ溝の幅ほど外側に移動している。壁溝の規模は，先行するＳＢ５ａの壁溝が幅21～36cm，深さ（最大）８cm，後出するＳＢ５ｂの壁溝は幅15～30cm，深さ（最大）14cmである。溝底面はＳＢ５ａの壁溝は北辺西半が最も高く，西辺はほぼ水平だが，北辺中央～東端から東辺にかけては10cm程度の落差で下傾する。ＳＢ５ｂの壁溝は北辺東端～東辺北半の溝底面が最も高く，北辺中央が最も低い（高低差10cm）。

柱穴　４本柱を共用している。南東隅の柱穴がやや東に突出しており，平面形は台形状を呈す



第９図　ＳＢ５実測図（１：60）

る。柱間距離は東西方向のＰ１－Ｐ２が1.9m，Ｐ４－Ｐ３が2.3m，南北方向のＰ１－Ｐ４が1.8m，Ｐ２－Ｐ３が1.94mで，東西方向の柱間距離は1.9～2.3m，南北方向の柱間距離は1.8～1.94mである。全体的には柱間距離1.8～2.3mと平均1.9mほどである。各柱穴の規模（後出のＳＢ５ｂの数値。括弧内は先行するＳＢ５ａの数値。括弧付の数値がないものは原則ＳＢ５ａ・５ｂの数値が同じことを示す）は，Ｐ１が長径42cm×短径40cm，深さ53cm（47cm），Ｐ２が径38cm（長径42cm×短径38cm），深さ48cm（42cm），Ｐ３が長径47cm×短径40cm，深さ62cm，Ｐ４が長径 44cm×短径38cm，深さ54cmである。柱穴底面の標高は，北側のＰ１・Ｐ２が243.55～243.58m（平均243.57m），南側のＰ３・Ｐ４が243.35～243.37m（平均243.36m）で，28～33cmの高低差がある。



第10図　ＳＢ５カマド跡
実測図（１：30）

カマド跡（第10図，図版６ａ・６ｂ）　先行するＳＢ５ａの北壁東半にはカマド跡が残存する。後出するＳＢ５ｂの拡張により袖部を中心に削平・破壊されているが，住居壁に煙道が部分的に残る。現存する煙道下端はＳＢ５ｂの壁溝底面から10cm上方にあり，これは煙道口の高さとそれほど違わないとみられることから，北辺の住居壁の拡張はあまり大きなものではないことが分かる。ただ，カマド跡の焚口や袖部が完全に失われていることから，カマド跡の意識的な撤去に伴ってＳＢ５ｂの壁溝はある程度の掘り下げや拡幅が行われたと考えられる。煙道は最初27°と緩やかだが，すぐ60°と急角度に立ち上がる。現存の煙道下端付近及び急角度に立ち上がる煙道上端近くの高さ40～50cm付近の煙道下面は広く焼けている。この上方の焼け面の付近から立ち上がりは水平に近くごく緩やかになる。なお，煙道の天井や煙り出しは完全に削平されている。

炉跡　床面南半やや東寄りに炉跡２基が並ぶ。西側の炉跡①は後出するＳＢ５ｂに伴うもので，その北から西にかけての床面には焼土の大きな広がりが２か所存在する（南北1.4m×東西0.8mと東西0.64m×南北0.42m）。この炉跡の東側には貼床下に先行するＳＢ５ａの炉跡②が存在する。この炉跡②は縁辺に若干の焼土がみられる。炉跡①は不整楕円形の平面形で，南北76cm×東西50cm，深さ（最大）10cmである。覆土からは鉄滓が出土している。先行するＳＢ５ａに伴う炉跡②は径46cm，深さ（最大）13cmの平面円形のピット状である。覆土から鉄滓が出土したＳＢ２の炉跡と形態が類似する。これらから，この炉跡①・②はいずれも通常の炉跡ではなく，鍛冶炉である可能性がある。

出土遺物（第16図７～14，図版46）　須恵器（杯蓋・高杯・壺），土師器（皿・椀・甕）がある。土師器・甕の口縁部片12は貼床下から出土しており，先行するＳＢ５ａに伴う可能性が高いが，他はいずれも後出するＳＢ５ｂの覆土上層及び下層から出土した。大半は住居北東側からの出土だが，須恵器・高杯脚部片10は南西側の覆土上層出土である。須恵器・高杯杯部片の９は北辺中

央の壁溝内から出土した。暗文土師器２点のうち，皿13は北東部の壁溝上面で，椀14は北東部の覆土上層からの出土である。

ａ．須恵器（７～11）　７はつまみとかえりをもつ杯蓋で，復元口径10.4cmである。かえりは口縁端より突出する。調整は，外面は頂部の回転ヘラ切り不調整，回転ヘラケズリを介して，体部下半～口縁から内面にかけて回転ナデを施す。８は頂部から外下方に開きながら延びる口縁の端部を丸く納める杯蓋で，口径12.8cm×13.4cm，器高4.2cmである。調整は，外面は頂部が回転ヘラ切り不調整，体部から口縁を経て内面全体にかけて回転ナデを施し，内面中央にはごく部分的に不調整部分がみられる。胎土は砂粒を多く含み，焼成もよくない。９は丸みの強い浅い器形の高杯杯部片である。内底面に不調整部分がみられるが，その他は全面的に回転ナデを行う。外面の口縁と体部の境には緩やかな稜がみられる。復元口径11.6cm。10はラッパ状に開く高杯脚部片で，胎土は瓦質に近い。11は口縁が開き気味に直立する壺口縁部片で，復元口径11.2cmである。調整は，口縁部内外面が横ナデ，外面肩部は斜位平行タタキののち横方向の強いハケ目，内面は同心円タタキを施す。

ｂ．土師器(12～14)　12は甕口縁部片で，外上方に湾曲しながら立ち上がり，端部を丸く納める。調整は内外面ともに横ナデで，復元口径18.8cm。11は内底面に放射状の暗文を配する皿で，平坦な底部から丸み強く屈曲し，外上方に短く延びた口縁の端部を丸く納める。調整は，体部内外面が回転ナデ，外底面は丁寧なナデを施す。14は復元口径16.1cmの椀で，内面には２段の放射状暗文を配する。外面には上半を中心に横方向の細いヘラミガキを施す。

⑥ＳＢ６（第11図，図版６ｃ・７ａ）

立地　ＳＢ５の西側に隣接する竪穴住居跡である（標高244m）。西側の住居跡状遺構ＳＢ７と重複し，これを壊している。南西３ｍに竪穴住居跡ＳＢ８，北５ｍには住居跡状遺構ＳＢ３が存在する。

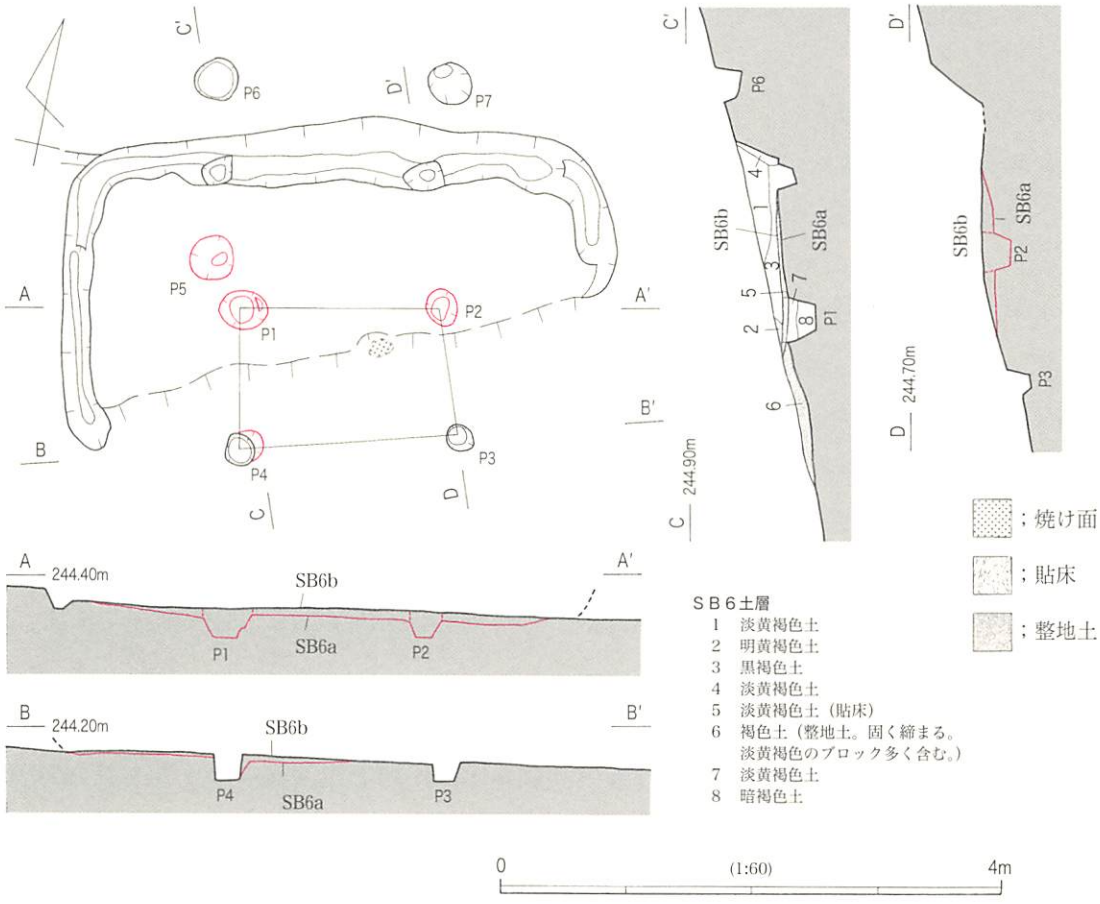
規模　上下に２軒の住居が重複するが（ＳＢ６ａ・６ｂ），住居壁や壁溝の拡張を伴わず，床面の貼り替えのみによる。斜面側（南辺）の床面が最大1/2程度失われた可能性があり，住居の残存規模は北辺が長さ4.28m，西辺が長さ2.8m，東辺が長さ1.8mである。住居の平面形は，柱穴の配置状況から横（東西）方向に長い長方形状と考えられる。

床面　住居北辺側に南北0.8～1.8mほどの床面が残存する。先行するＳＢ６ａの床面は地山を削平して形成され，このＳＢ６ａの床面上にほぼ全面的に厚さ８cm程度に淡黄褐色土（５層）を貼って形成されたのが後出住居のＳＢ６ｂの床面であり，両者は平面的にはほぼ同規模である。なお，南辺側の斜面では，貼床の下に淡黄褐色土のブロックを多く含み固く締まった褐色土がみられるが，床面を斜面側に広げるための整地土（６層）と考えられる。この褐色土は傾斜変換点から１ｍ程度南までみられることから，ＳＢ６ａ・６ｂの床面は南北方向は少なくとも長さ2.7m程度は存在したとみられる。

壁溝　２軒の住居は壁溝を共用している。壁溝際は基本的に貼床が殆どみられず，よって壁溝は

２軒がほぼ同規模である。壁溝は北辺を中心に西辺・東辺の住居壁に沿って廻り，幅18～24cm，深さ（最大）11cmの規模である。溝底面は住居北東隅が最も高く，北辺東端・西辺南端にかけて最大高低差15cmで下傾する。

柱穴　柱を方形に配する４本柱であるが，北側の２つの柱穴（Ｐ１・Ｐ２）はいずれも貼床下で検出した。斜面側のＰ３・Ｐ４の２つの柱穴付近では貼床は存在していないので，これらの柱穴が貼床下のものか貼床上のものかは速断できない。しかし，柱の配置から考えればこれら４個の柱穴が一体のものであることは明らかであり，これらも貼床下のＳＢ６ａに伴う柱穴であるといえる。このことから，現状では後出するＳＢ６ｂに伴う柱穴は存在しないことになる。ただ，あるいは柱穴を共用したのち，何らかの理由により柱穴を埋め戻した可能性もある。４本の柱穴の配置状況は，南東側のＰ３が12cm東に突出し，また南西側のＰ４が南に10cm突出することからやや歪な横長の長方形を呈する。柱穴の柱間距離は，東西方向は北辺のＰ１－Ｐ２が1.6m，南辺のＰ４－Ｐ３が1.72m，南北方向は西辺のＰ１－Ｐ４が1.1m，東辺のＰ２－Ｐ３が１mである。東西方向の柱間距離が南北方向のそれより50～72cm長く，東西方向の柱間距離は南北方向のそれの1.45～1.72倍の長さであるといえる。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径40cm×短径32cm，深さ20cm，Ｐ２が長径29cm×短径24cm，深さ22cm，Ｐ３が長径24cm×短径22cm，深さ17cm，Ｐ４が長径32cm×短径28cm，深さ23cmである。南西側のＰ４については北東側を少し埋めて長径26cm×短径24cm（深さは同じ）の柱穴として再利用している。これらの柱穴の底面の標高は北辺のＰ１・Ｐ２が243.9



第11図　ＳＢ６実測図（１：60）

m，南辺のＰ３・Ｐ４が243.76～243.78mで，斜面側のＰ３・Ｐ４が12～14cm低い。

このほかに３個のピット（Ｐ５～Ｐ７）がある。Ｐ５は北西側のＰ１の北西に接するように存在し，貼床下から掘り込まれている。径36cm，深さ23cmである。Ｐ６・Ｐ７は北壁外に東西に並ぶ柱穴である。両者の柱間距離は1.8mで，主柱穴（Ｐ１－Ｐ２・Ｐ３－Ｐ４）の東西方向の柱間距離に近い。また，位置的にも４本柱の南北方向のＰ１－Ｐ４あるいはＰ２－Ｐ３のほぼ延長線上にある。後出するＳＢ６ｂに伴う可能性が考えられるが，その具体的な柱構造は明確ではない。Ｐ６の径34cm，深さ18cm，Ｐ７の長径34cm×短径32cm，深さ28cmである。

焼け面　ＳＢ６ａの床面南縁の中央付近の14cm×29cmの範囲が熱により赤変している。

ＳＢ６ａ・６ｂに伴う出土遺物はない。

⑦ＳＢ７（第12図，図版７ｂ）

立地　竪穴住居跡ＳＢ６の西辺と重複する住居跡状遺構で，これに壊されている（標高244.5m）。南2.8mに調査区際の竪穴住居跡ＳＢ８が存在する。

規模　北辺と西辺の住居壁を部分的に残すのみで，南側は斜面に臨む。斜面を削平して得られた平面形が横（東西）方向に長い長方形の平坦面が残るだけで，柱穴は残存していない。現存規模は東西3.56m，南北0.98mで，壁高（最大）は北西隅で10cmである。

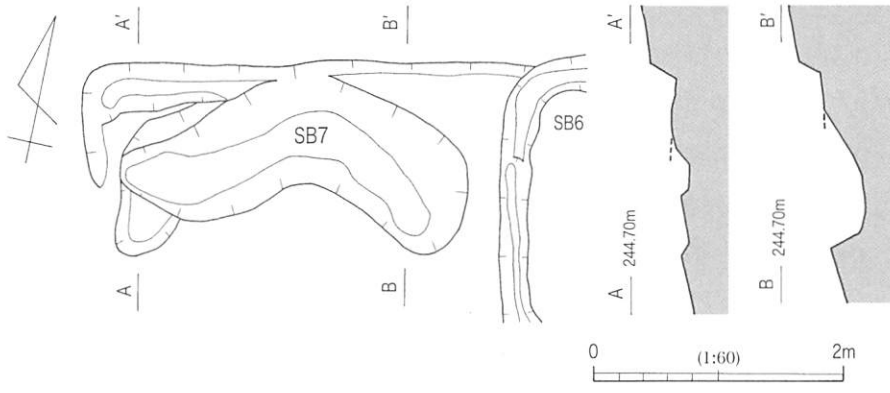
平坦面　中央に大きく整地部分がある。東西2.74m，南北1.1m，深さ７～27cmの規模の，平面形が不整楕円形のもので，淡茶褐色土を入れて整地している。

壁溝　北壁沿いに，西端から僅かに長さ１m程度確認できるだけで，幅30cm，深さ（最大）５cmである。

ＳＢ７からの出土遺物はない。

⑧ＳＢ８（第13図，図版７ｃ・８ａ・８ｂ）

立地　調査区西辺際中央にある竪穴住居跡（＋住居跡状遺構）で（標高243.5m），先行する２軒の竪穴住居跡（ＳＢ８ａ・８ｂ）と後出する住居跡状遺構１軒（ＳＢ８ｃ）からなる。いずれも遺構の西辺あるいは西半が調査区外に延びている。特に，竪穴住居跡は半ばが調査区外にあるため，不明確な部分が多い。南東２mに住居跡状遺構ＳＢ11が，南４mの調査区際には竪穴住居跡



第12図　ＳＢ７実測図（１：60）

ＳＢ12が存在する。

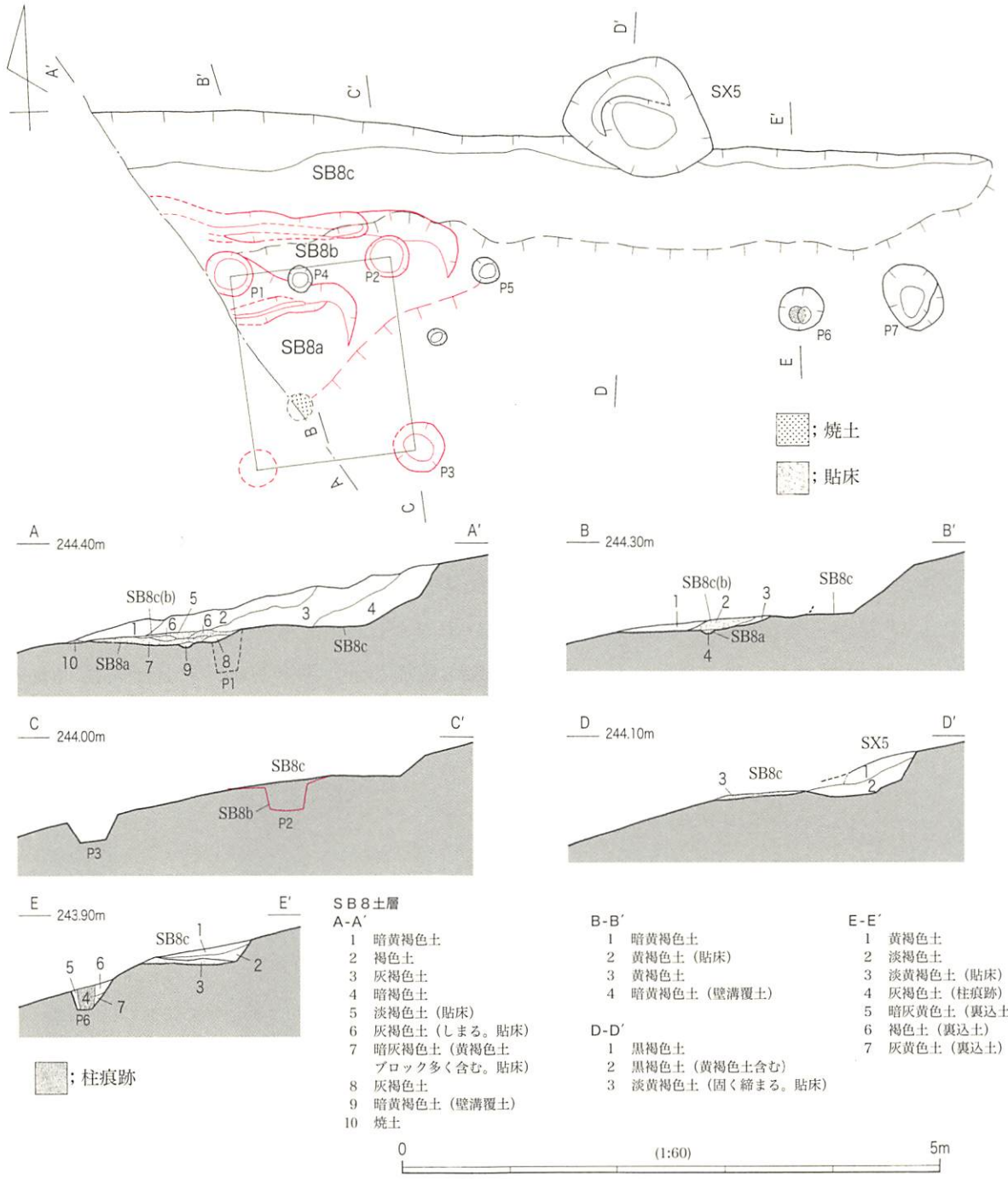
規模　先行する竪穴住居跡２軒の平面形は不整方形である。最も先行する最南端のＳＢ８ａは住居壁の北辺を残す竪穴住居跡であるが，柱穴は明確でない。住居の大半が調査区外にあり，現存規模は1.44m四方程度である。このＳＢ８ａの住居壁・床面を少なくとも北に0.6m，東に１m程度拡張し，貼床をしたのが竪穴住居跡ＳＢ８ｂで，その現存規模は北辺2.88m，南北方向2.4mである。柱穴３個を検出し，４本柱とみられる。これら２軒の竪穴住居跡の背後（北側）にある住居跡状遺構ＳＢ８ｃは，ＳＢ８ｂ北辺の北側0.84～1.02m付近から斜面を削平して東西8.34m以上，南北（最大）1.02mの不整長方形の平坦面を造り出し，前面（南側）の竪穴住居跡ＳＢ８ｂなどの上に貼床を行い平坦面を広げている。その現存規模は東西8.34m，南北(最大)2.76mである。

床面・貼床　最も先行するＳＢ８ａの床面は地山を削平したもので，現状では整地土や貼床土の存在はみられない。ＳＢ８ａの床面はごく一部の検出に留まっており，全容は把握できていないが，ほぼ水平と考えられる。これに後出するＳＢ８ｂはＳＢ８ａの床面直上に暗灰褐色土（A-A′の７層），灰褐色土（同６層），淡褐色土（同５層），黄褐色土（B-B′の２層）などを貼床として施した上面を床面としたとみられる。ただ，現存するこのＳＢ８ｂの床面は最も後出するＳＢ８ｃに伴うものであることから，その造成に伴って一定度の削平が考えられる。ＳＢ８ｃの平坦面はその西半では南北方向に2.34mの広がりがみられるが（ＳＢ８ａ・８ｂ上面），東半では南北方向が最大0.84mと狭く，傾斜変換点を経て斜面に続く。ＳＢ８ｃの西半はＳＢ８ｂの住居壁を北方向に削平して得られた地山面を平坦面とするが，東半では平坦面の上に淡黄褐色土を数cm程度貼っている（D-D′・E-E′の３層）。

壁溝　部分的ではあるが，２軒の竪穴住居跡（ＳＢ８ａ・８ｂ）の北壁沿いには壁溝が認められる。ＳＢ８ａの壁溝は幅15cm，深さ（最大）４cm，ＳＢ８ｂの壁溝は幅30cm，深さ１～２cmである。住居跡状遺構ＳＢ８ｃには壁溝は認められない。

柱穴　ＳＢ８ａに伴う柱穴は検出していない。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３はＳＢ８ｂの柱穴で，少なくとも調査区外に南西側の柱穴の存在が考えられ，４本柱構造とみられる。柱穴の配置は南北に長い長方形である。柱間距離は，北辺のＰ１-Ｐ２が1.5m，東辺のＰ２-Ｐ３が1.8mである。柱穴の規模は，Ｐ１が長径44cm×短径38cm，深さ45cm，Ｐ２が径40cm，深さ27cm，Ｐ３が径46cm，深さ32cmである。Ｐ１～Ｐ３の底面の標高は北側のＰ１・Ｐ２が243.18～243.3mで，南側のＰ３の底面は242.97mと両者の間で21～33cmの高低差がある。ＳＢ８ｃには明確な柱穴の並びはみられず，Ｐ４～Ｐ７といった概ね東西方向に並ぶ柱穴が伴う可能性があるが，明確ではない。これらの柱穴のうち，西側のＰ４・Ｐ５は径22～26cm，深さ13～15cmのごく小さなものであるが，東側のＰ６・Ｐ７は径40～66cm，深さ27～54cmと平面形楕円形気味の規模が大きく深いものである。これらＰ４～Ｐ７の底面の標高は242.78～243.4mと，高低差62cmと大きい。西のＰ４・Ｐ５が高く，東側のＰ６・Ｐ７が低い。なお，Ｐ６では径13cm×16cmの柱痕跡が検出された（E-E′の４層・灰褐色土）。

焼土　西辺調査区際に径20cmほどの焼土層がみられる。ＳＢ８ａ・８ｂのいずれかに伴うとみら



第13図　ＳＢ８・ＳＸ５実測図（１：60）

れるが明確ではない。

ＳＢ８に伴う出土遺物はない。

⑨ＳＢ９（第14図，図版８ｃ・９ａ）

立地　調査区中央に位置する竪穴住居跡で，西辺で住居跡状遺構ＳＢ10と重複し，壊されている

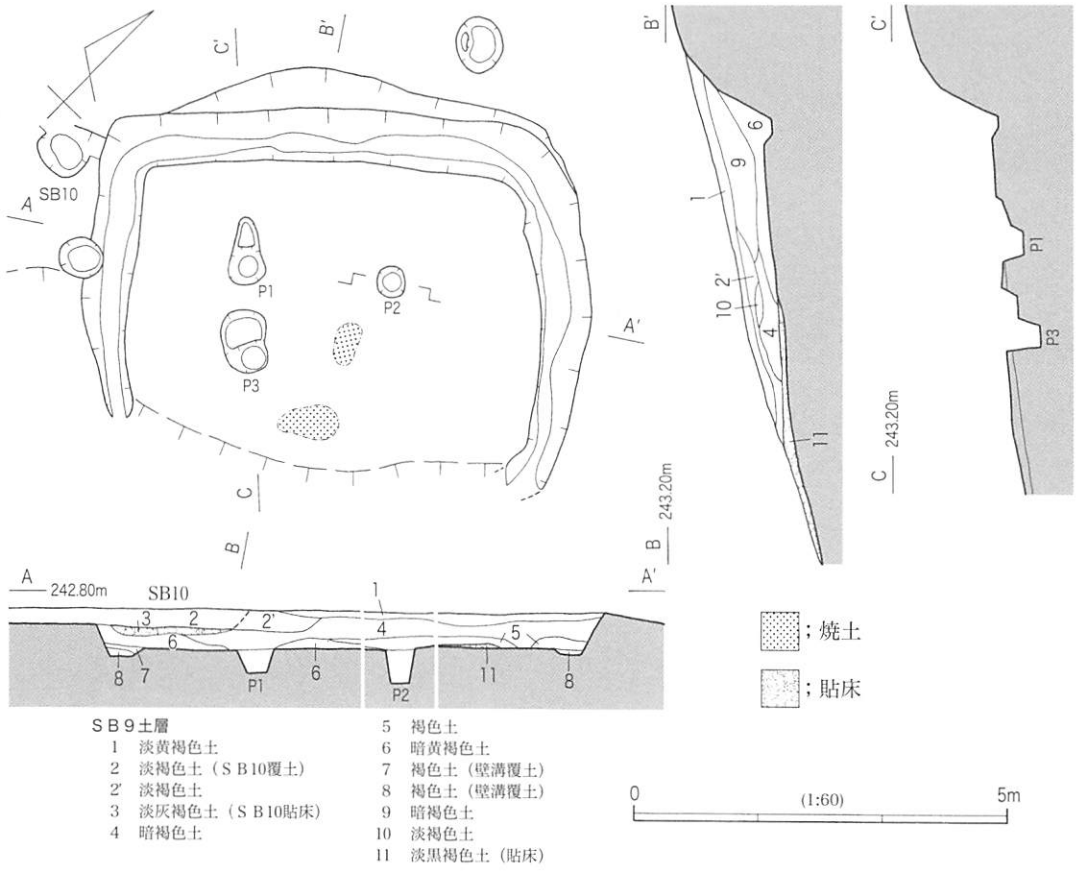
(標高242.5m)。ＳＢ10～12と東西に連なる住居跡群の東端に位置し，東側にはＳＢ18までの12mは遺構がなく，集落の東の端を形成する。北３mに竪穴住居跡ＳＢ５が，南2.8mには住居跡状遺構ＳＢ16が位置する。

規模　北辺と西・東辺を残し，南側は斜面に連なる。住居壁の中央付近がいずれも丸みをもち，住居跡の平面形は丸みのある横長の長方形である。住居跡の規模は，北辺3.4m，西辺（現存）2.36m，東辺（現存）2.86mで，東西方向の長さ（最大）は4.06mである。壁高（最大）は北壁中央で62cmである。

床面・貼床　床面は斜面を削平してつくられているが，南半には厚さ（最大）10cmの整地的な貼床（淡黒褐色土・11層）を施す。床面の東西方向はほぼ水平だが，南北方向は北が高く南に高低差９～19cmで下傾する。

壁溝　北辺・西辺・東辺の三辺の住居壁に沿って壁溝が設けられている。その規模は幅22～31cm，深さ４～７cmである。溝底面は北辺はほぼ水平だが，北辺と西辺・東辺南端の溝底面との高低差は最大19cmあり，最も高い北辺東半から西辺あるいは東辺にかけて下傾する。

柱穴　床面にはＰ１～Ｐ３の柱穴３個があるが，その配置はＰ１とＰ２の２本柱なのか，あるいはＰ３を含め，未検出の南東側の柱穴を想定しての４本柱なのか明確ではない。各柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２が1.16m，Ｐ１－Ｐ３が0.72m，Ｐ３－Ｐ２が1.26mである。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径52cm×短径30cm，深さ22cm，Ｐ２が長径24cm×短径23cm，深さ27cm，Ｐ３が長径50cm×短



第14図　ＳＢ９実測図（１：60）

径38cm，深さ30cmである。柱穴底面の標高は242.02～242.15mとほぼ均一である。

焼土　床面中央南半に焼土の広がりが２か所存在する。その規模は北側のものが34cm×20cm，南側のものが50cm×28cmである。

出土遺物（第16図15，図版46）　南西側の住居覆土から琥珀製の小玉１点が出土した。

15は最大径1.1cm，高さ0.5～0.8cm，孔径0.45cmの小玉である。やや胴張り気味で，下端面はほぼ水平だが，上端面は大きく傾斜している。色調は表面が淡黄褐色，素地は橙褐色である。

⑩ＳＢ10（第15図，図版９ｂ・９ｃ）

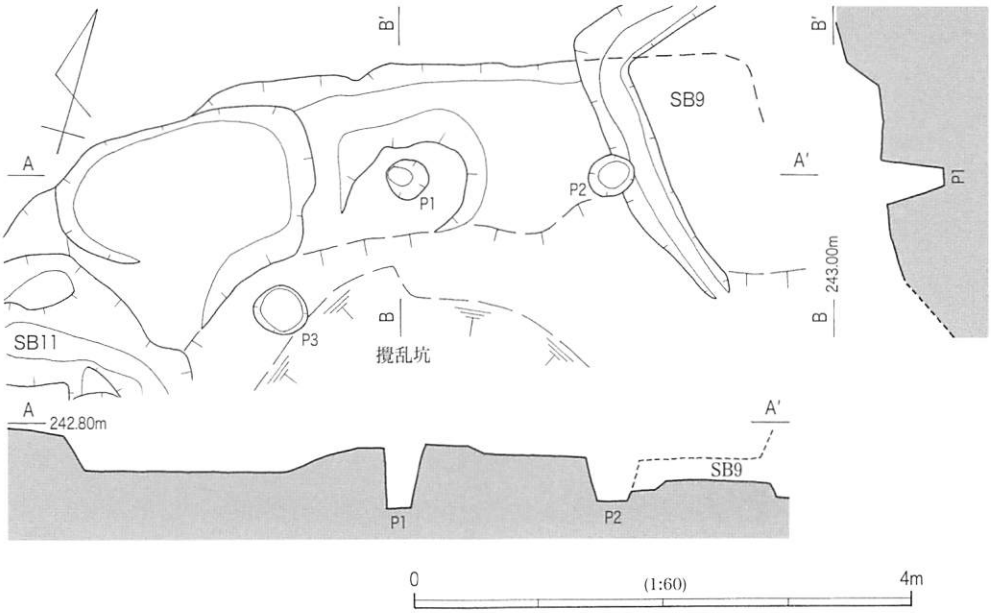
立地　ＳＢ９の西辺と重複する住居跡状遺構で，ＳＢ９の北西部分を一部壊している。南西部分では住居跡状遺構ＳＢ11東端と重複するが先後関係は不明確である（標高243m）。南2.4mには住居跡状遺構ＳＢ13が存在する。

規模　ＳＢ９の土層断面（第14図Ａ−Ａ′）の観察によればＳＢ９の覆土上面の貼床（３層・淡灰褐色土）の西端付近で２層（淡褐色土）が立ち上がってＳＢ10の東辺の住居壁となると考えられる。ＳＢ10の北辺の住居壁は東西方向にほぼ直線的に延びる。ＳＢ10の平面形は東西方向に長い不整長方形で，東西（推定）5.6m，南北1.38～2.04mの規模と考えられる。その壁高（最大）は25cm（北辺中央）である。

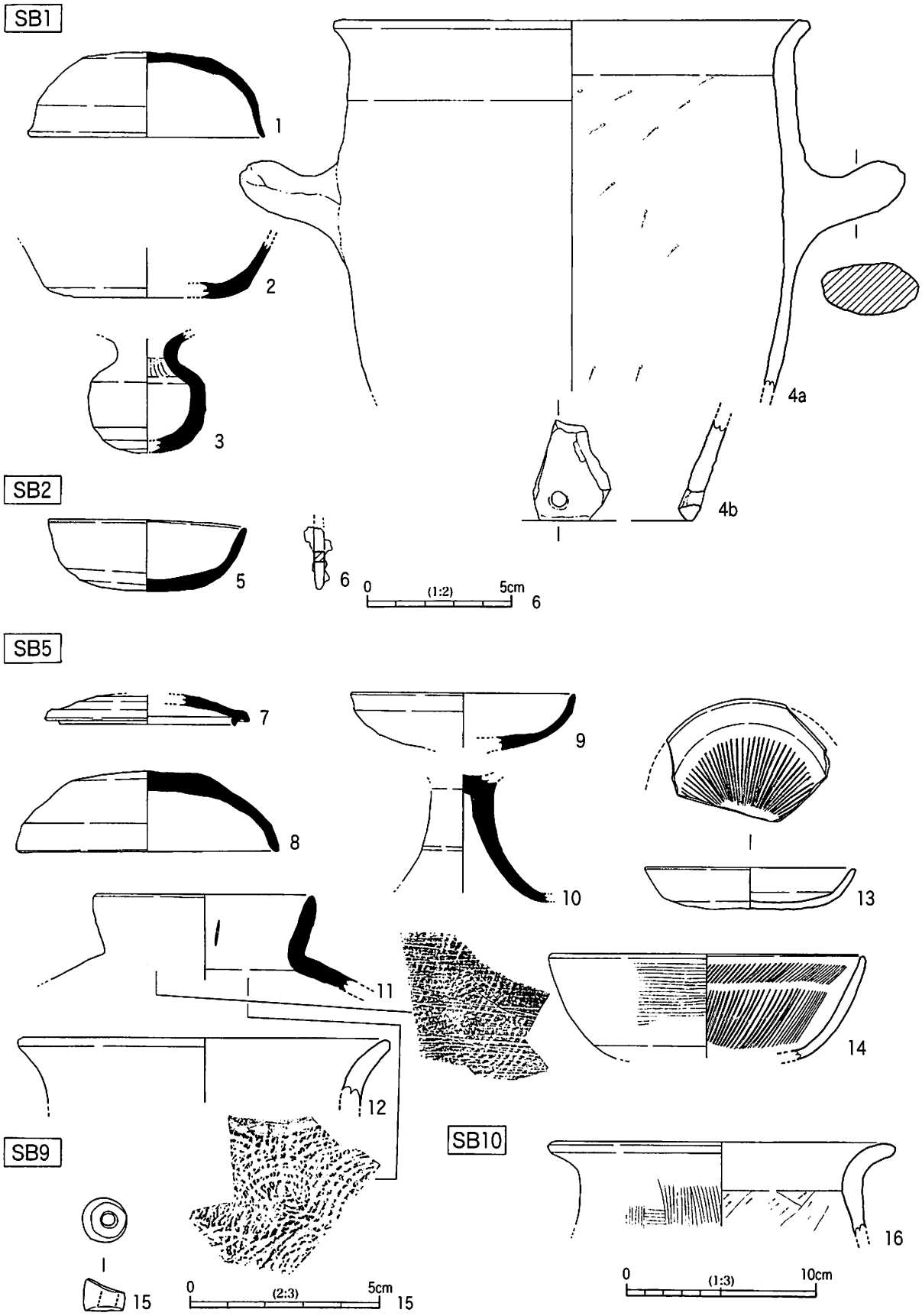
床面　床面は中央（Ｐ１付近）にごく部分的に残るのみで，その他の残存状況は極めて悪い。西半の楕円形部分（１m×２m，深さ10数cm）や東側の床面も数cm程度削平されている。

壁溝　床面が残る中央付近の北壁沿いにごく僅かに認められるにすぎない。その規模は幅48cm，深さ（最大）４cmと幅広でごく浅いものである。

柱穴　Ｐ１～Ｐ３の３個がＳＢ10に伴う柱穴と考えられる。Ｐ１とＰ２は北壁にほぼ沿っており，ＳＢ10の主体的な柱穴とみられるが，これらと並びがずれるＰ３については明確ではない。Ｐ１



第15図　ＳＢ10実測図（１：60）



第16図　宮の本遺跡出土遺物実測図（1）（2：3，1：2，1：3）ＳＢ１・２・５・９・10

－Ｐ２の柱間距離は1.74ｍで，柱穴の規模はＰ１が径32cm，深さ50cm，Ｐ２が長径36cm ×短径32cm，深さ36cm，Ｐ３が長径42cm ×短径38cm，深さ47cmである。柱穴底面の標高は242.09 ～ 242.18ｍとほぼ均一である。

出土遺物（第16図16，図版46）　住居跡中央の床面直上10cm付近で土師器・甕口縁部片16が出土した。強く屈曲する分厚い口縁部の端部を丸く納める。調整は，口縁部内外面が横ナデ，体部内面が縦方向のヘラケズリ，体部外面が横ハケののち縦ハケを施す。体部外面には部分的にススが付着する。復元口径17.0cm。

⑪ＳＢ11（第17図，図版10・11ａ・11ｂ）

立地　ＳＢ10の西辺と重複する住居跡状遺構で，建替えにより４軒（ＳＢ11ａ～11ｄ）の住居が重なっている（標高242.5m）。南西側でＳＸ６と重複し，これを壊している。同じく南西側には住居跡状遺構ＳＢ12が近接し，南側には近接して住居跡状遺構ＳＢ13 ～ 15や石積遺構ＳＸ７が存在する。

規模　長さ（東西方向）6.42m，幅（現存・南北方向）3.12ｍの規模の平坦面で，平面形は不整長方形である。低所側（南）から高所側（北）へと斜面削平と貼床を繰り返し，都合４軒の住居跡状遺構が南北に重複する。壁溝を部分的に残すだけのＳＢ11ｂを除いて，東西方向に直線的に延びる住居壁（いずれも北壁主体）を伴う。いずれも斜面を方形・長方形に削平して平坦面を設け，その平坦面上に住居・建物を築いたと考えられる。最初に築かれたのは最も南に位置するＳＢ11ａである。南西側に性格不明の掘込みＳＸ６ｂがあり，そのＳＸ６ｂの覆土の上に18cmと厚く暗黄褐色土（Ｂ－Ｂ′の７層）を貼り，床面としている。このＳＢ11ａの規模は直線的に東西方向に延びる北壁の長さ（現存）4.86ｍで，幅（南北方向）は1.92ｍである。北壁の西端はＳＸ６ａと重複しており不明確だが，東端は僅かに南に屈曲しており，住居の東辺を表すとみられる。壁高（最大）はＳＸ６ａ近くの後出住居による削平を受けていない住居壁で最大32cmを測る。削平を受けた北壁中央～東端の壁高は最大９cmである。ＳＢ11ｃ・11ｄは一体の住居跡の可能性もあるが，ここではＳＢ11ｃの住居壁を一部（北西隅）拡張して，ＳＢ11ｃの平坦面をＳＢ11ｄの平坦面としてほぼそのまま使用したと考える。ＳＢ11ｃは現状で長さ（東西方向）6.28m，幅（南北方向）3.0ｍの規模で，平面形は北壁がほぼ直線的に東西方向に延びる不整方形・長方形と考えられる。壁高（最大）は42cmである。ＳＢ11ｄは明確には北西部分の住居壁が認められるだけで，全体の様相はよく分からない。北西部分の規模は東西2.6m，南北1.1ｍで，平面形は不整方形あるいは長方形と考えられる。壁高（最大）37cmである。以上から，４軒の住居跡状遺構の先後関係は，ＳＢ11ａ（古）→ＳＢ11ｂ→ＳＢ11ｃ→ＳＢ11ｄ（新）と考えられるが，ＳＢ11ａとＳＢ11ｂの新旧，ＳＢ11ｃとＳＢ11ｄの新旧などについてはやや不明確である。

平坦面　４軒のうち，平坦面が残るのはＳＢ11ａ・11ｃ・11ｄの３軒である。最も先行するＳＢ11ａの平坦面は東西方向が数cmの高低差でほぼ水平であるが，南北方向は20cm程度の高低差で北から南に下傾する。ＳＢ11ｃの平坦面は，東西方向は数cm程度の高低差でほぼ水平であるが，南

北方向は30cm程度の高低差で北から南に下傾する。最も後出するＳＢ11ｄの平坦面は西から東に最大13cm下傾する。

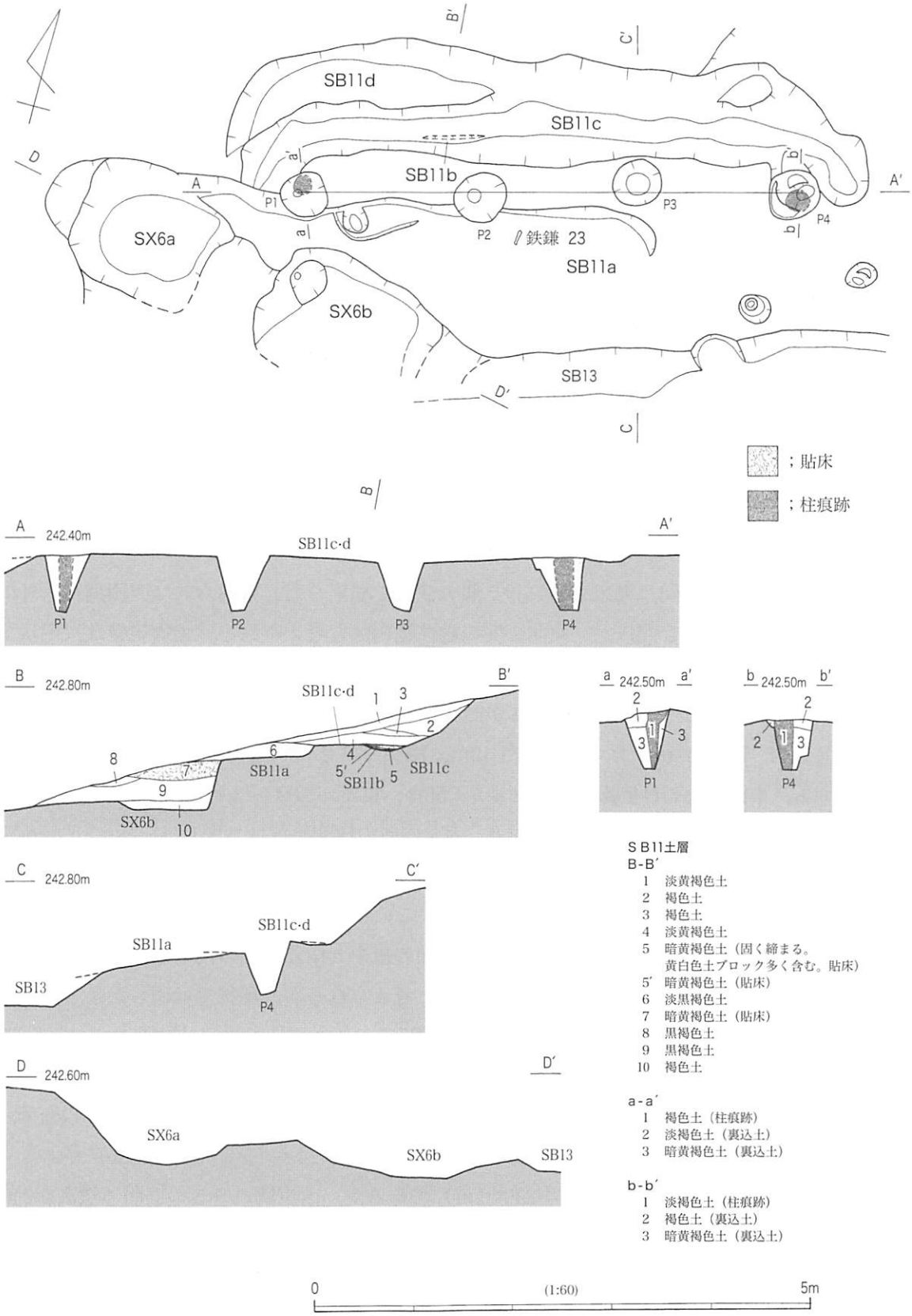
壁溝　ＳＢ11ａ・11ｂ・11ｃの３軒で壁溝が残るが，ＳＢ11ｄの壁溝は存在しない。ＳＢ11ａ・11ｂの壁溝はごく部分的に残るに過ぎず，壁溝の様子が一定度窺われるのはＳＢ11ｃだけである。ＳＢ11ａの壁溝は北壁中央付近にごく部分的に残る。その規模は長さ0.84m，幅0.39m，深さ（最大）３cmである。ＳＢ11ｃの壁溝は直線的に東西方向に延びて，西端と東端で短く屈曲する。幅40～48cm，深さ（最大）８cmである。溝底面は北西隅が最も高く，概ね北東隅にかけて緩やかに下傾する（高低差12cm）。ＳＢ11ｂはＳＢ11ｃ西半の壁溝内（壁溝南側壁面から溝底面にかけて）に長さ0.6m，幅0.21m，深さ３cmごく部分的に残存する。ＳＢ11ｂの壁溝を北側に少し移動させたのがＳＢ11ｃの壁溝であり，それに伴って先行するＳＢ11ｂの壁溝の大半が失われ，断面Ｂ-Ｂ'付近にごく僅かに残存する。この痕跡程度に僅かに残るＳＢ11ｂの壁溝側面に薄く黄色粘土を貼り，ＳＢ11ｃの壁溝の南側壁面としている。

柱穴　ＳＢ11で検出した柱穴Ｐ１-Ｐ２-Ｐ３-Ｐ４はいずれもＳＢ11ｃ及びＳＢ11ｄに伴うと考えられる。最も先行するＳＢ11ａの柱穴は検出できなかった。これらの柱穴の柱間距離はＰ１-Ｐ２が1.76m，Ｐ２-Ｐ３が1.64m，Ｐ３-Ｐ４が1.68mで，1.64～1.76m（平均1.69m）と比較的均一である。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径46cm×短径44cm，深さ63cm，Ｐ２が長径54cm×短径48cm，深さ58cm，Ｐ３が長径50cm×短径46cm，深さ51cm，Ｐ４が長径56cm×短径50cm，深さ54cmである。長径46～56cm×短径44～50cm，深さ51～63cmと比較的規模が揃う。柱穴底面の標高は241.65～241.7mとほぼ同じである。なお，Ｐ１で径20cm，Ｐ４で径28cmの柱痕跡を検出した。

出土遺物（第19図17～26，図版46）　ＳＢ11に伴う遺物としては，須恵器（杯身・椀・高杯），土師器（椀・甑），鉄器（鉄鎌・鉄鏃茎部片・用途不明品）がある。いずれもＳＢ11ｃ（あるいは11ｄ）の覆土からの出土である。須恵器・椀20はＳＢ11ｃ西辺壁溝内で出土し，直刃鎌23はＰ２南東30cmのＳＢ11ｃの平坦面直上で切先を南に向けて出土した。

ａ．須恵器（17～20）　17は杯身の高台片で短く垂下する高台下端面が外傾する。調整は，内面回転ナデ，外底面は回転ヘラ切り不調整である。復元高台径9.4cm。18は斜め下方に踏ん張る高台の椀で，高台端部は角張る。調整は，内外面ともに回転ナデを施す。復元高台径11.4cm。19は高杯の低脚片で，外下方にやや外湾気味に延びた脚部を屈曲させ短く垂下した端部を平坦に納める。復元脚端径6.4cmで，内外面に回転ナデを施し，外面下半には深い凹線を１条施す。灰白色の色調で，胎土は精良である。20は復元口径13.6cm，器高5.3cmの平底の椀である。体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり，端部付近を僅かに外反させて，端部を丸く納める。調整は，外底面回転ヘラ切り不調整，体部は内外面回転ナデで，内面中央に一部一定方向のナデがみられる。

ｂ．土師器（21・22）　21は復元口径15.6cm，器高6.5cmの平底の椀である。調整は不明確で，全体に手づくね状である。外面全体に薄くススが付着する。22は復元口径19.0cm，器高20.3cmと小型の甑で，底部からやや内湾気味に外上方に立ち上がり，端部付近で短く外方に屈曲させ，口縁端部をやや尖り気味に納める。調整は内面の口縁が横ナデ，体部は縦方向のヘラケズリ，外面全



第17図　ＳＢ11・ＳＸ６実測図（１：60）

体にナデ調整を施す。口縁端部内外面に部分的にススが付着する。

c．鉄器（23～26） 23は左側を折り返して着柄部とする直刃鎌で，切先を欠失する。現存規模は，全長13.0cm，幅3.3cm，折り返し角度80°，着柄角度106°である。24・25は断面扁円形の鉄鏃茎部片である。26は現存長4.3cmの用途不明品で，断面は方形である。

⑫ＳＢ12（第18図，図版11ｃ・12・13ａ）

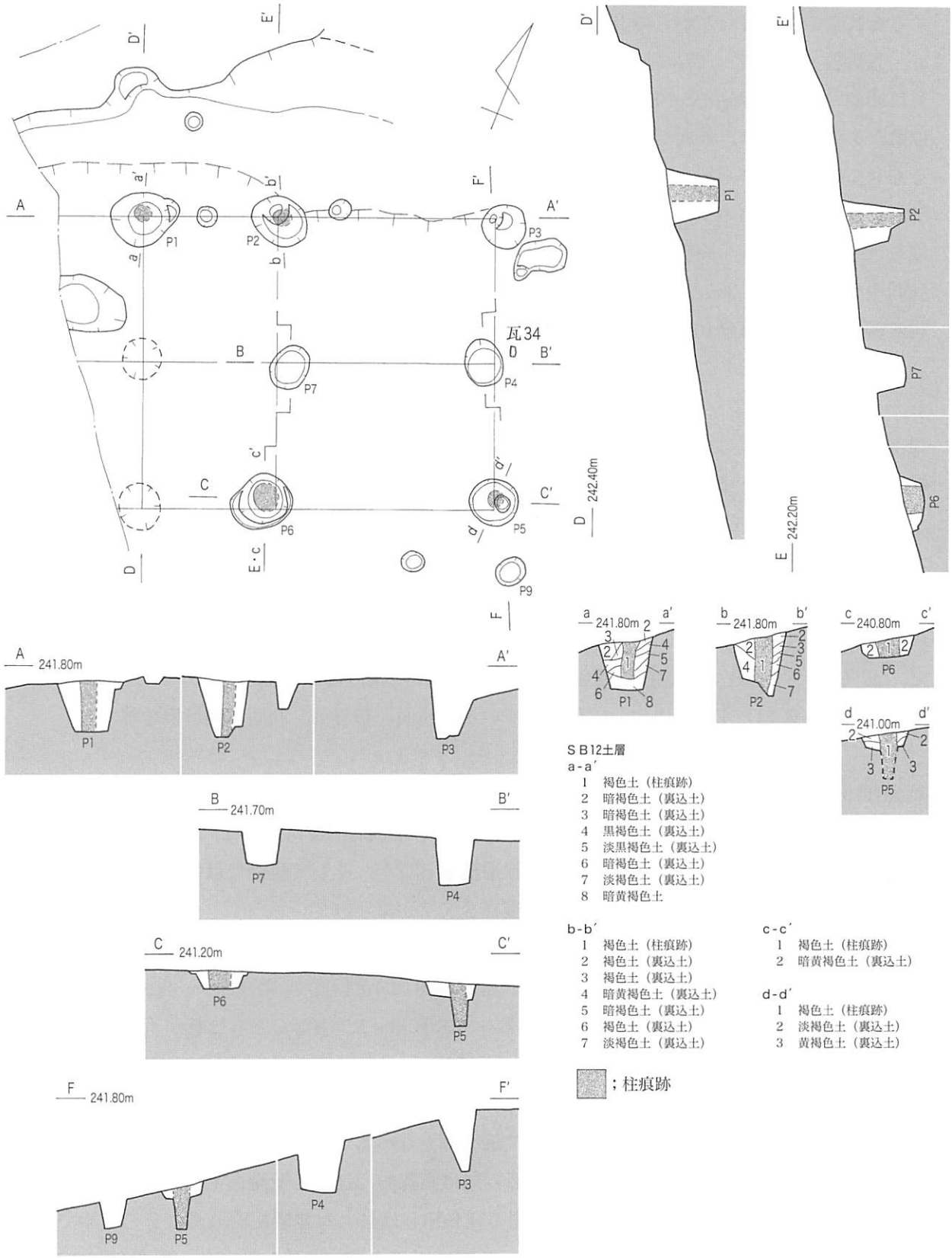
立地 ＳＢ11・ＳＸ６の西側の調査区際に位置する住居跡状遺構で，平坦面の前方緩斜面に２間四方以上の規模の総柱建物が建つ(標高243m)。北東側はＳＸ６や住居跡状遺構ＳＢ11と重複し，西側は調査区外に延びる。東側には住居跡状遺構ＳＢ13～15や石積遺構のＳＸ７が近接する。

規模 北側に現存規模で長さ（東西方向）3.78m，幅（南北方向・最大）0.6～1.8mの平面形不整長方形の平坦面があり，その前面（南側）の緩斜面に東西２間以上，南北２間の平面形方形の総柱建物を設けている。両者は一体のものと考えられ，ＳＢ12は斜面を削平して得られた平坦面に総柱建物を伴う住居跡状遺構であり，その規模は現状で東西5.1m，南北６m以上とみられる。

平坦面 平坦面は幅0.4～0.8m程度とそれほど広いものでなく，高低差数cm程度とほぼ水平である。

柱穴 北辺２間，南辺１間，東辺２間の計７個の柱穴を検出した。東西方向は西側調査区外に延びていることから，東西２間以上，南北２間の総柱建物跡と考えられる。建物規模は，現状で東西方向3.64m，南北方向2.94mである。各柱穴の柱間距離は，東西方向の北辺のＰ１－Ｐ２が1.38m，Ｐ２－Ｐ３が2.27m，中央のＰ７－Ｐ４が2.02m，南辺のＰ６－Ｐ５が2.48mである。南北方向の東辺のＰ３－Ｐ４が1.52m，Ｐ４－Ｐ５が1.42m，中央のＰ２－Ｐ７が1.64m，Ｐ７－Ｐ６が1.34mである。即ち，東西方向の柱間距離は，西半が1.58m，東半が2.02～2.48m（平均2.26m）と0.68mの差があり，西半が狭く東半が広い。一方，南北方向の柱間距離は，北半が1.52m・1.64m（平均1.58m），南半が1.34m・1.42m（平均1.38m）と北半が広く，南半が狭い。その差は東西方向の柱間距離ほどではなく，平均値で0.2mである。このように当建物は柱間距離が一定でなく，東西方向の西半と南北方向の北半が広く，東西方向の東半と南北方向の南半が狭い。このことはこの建物の構造面の特徴の何某かを反映していると考えられるが，現状では明らかにしえない。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径62cm×短径58cm，深さ57cm，Ｐ２が長径62cm×短径58cm，深さ66cm，Ｐ３が径47cm，深さ63cm，Ｐ４が長径50cm×短径39cm，深さ56cm，Ｐ５が長径51cm×短径49cm，深さ54cm，Ｐ６が長径64cm×短径55cm，深さ24cm，Ｐ７が長径48cm×短径38cm，深さ44cmで，長径47～64cm（平均55cm），短径38～58cm（平均49cm），深さ24～66cm（平均52cm）である。柱穴底面の標高は240.44～241.1m（平均240.91m）であるが，南東隅のＰ５の底面の標高が240.44mと特に低く，これを除けば240.83～240.1mとほぼ均一である。なお，北辺のＰ１・Ｐ２と南辺のＰ５・Ｐ６の４個の柱穴では柱痕跡を検出し，Ｐ１・Ｐ２・Ｐ５が径18cm，Ｐ６が径27cmの大きさである。

出土遺物（第19図27～34，図版47） 須恵器（杯蓋・杯身・鉢），土師器（甕），瓦（平瓦）がある。



第18図　ＳＢ12実測図（１：60）

平瓦が建物東辺中央の柱穴Ｐ４のすぐ東側の緩斜面で出土した以外は，覆土からの出土で，近接するＳＸ６やＳＢ11などからの混入の可能性がある。

ａ．須恵器（27～31）　27は平坦な頂部からやや内湾気味に外下方に延びた体部の端部を短く下方に屈曲させ，口縁端部を丸く納めた杯蓋で，復元口径15.4cmである。頂部にはつまみが外れた痕跡がある。調整は，外面がつまみの縁辺にナデ，体部上半回転ヘラケズリ，体部下半から口縁を介して内面全体に回転ナデを施す。28～30は復元高台径9.3～11.4cmの高台の杯身片である。28・30は外下方にハの字に広がる角張った高台だが，29は同じ形態の高台から外傾した端面の下端を下方に拡張する。調整は外底面回転ヘラ切りで，その他は回転ナデを基本とするが，28は内底面中央が不調整，30の内底面は回転ナデののち一定方向のナデを行う。31は平底の鉢かと思われる器形で，復元底径10.6cmである。調整は，外底面が丁寧なナデ，体部内外面は回転ナデ，内底面は回転ナデののちに一定方向のナデを施す。

ｂ．土師器（32・33）　32はくの字に強く外湾する厚手の甕口縁部片である。調整は，内面は口縁部が横ハケののちに横ナデ，体部が横方向のヘラケズリで，外面は口縁上半が横ナデ，下半が横方向の粗いナデ，頸部～体部が横ナデである。復元口径22.0cm。33は復元口径30.4cm，体部最大径28.4cmの甕で，締りの緩い頸部からくの字に外湾し，口縁端部を丸く納める。体部最大径部が体部中位より上方にある器形である。調整は，口縁内外面横ナデ，体部内面縦方向のヘラケズリ，体部外面は２～３本／cmの幅広の縦ハケののち横ナデを行う。体部外面全体に顕著に黒褐色のススが付着する。

ｃ．瓦（34）　平瓦片で，現存規模は長さ16.7cm，幅10.2cm，厚さ2.3cmである。平瓦の前端と右側端を留め，後端と左側端を中心に欠失している。凹面に布目痕，凸面に縄目痕を残す。

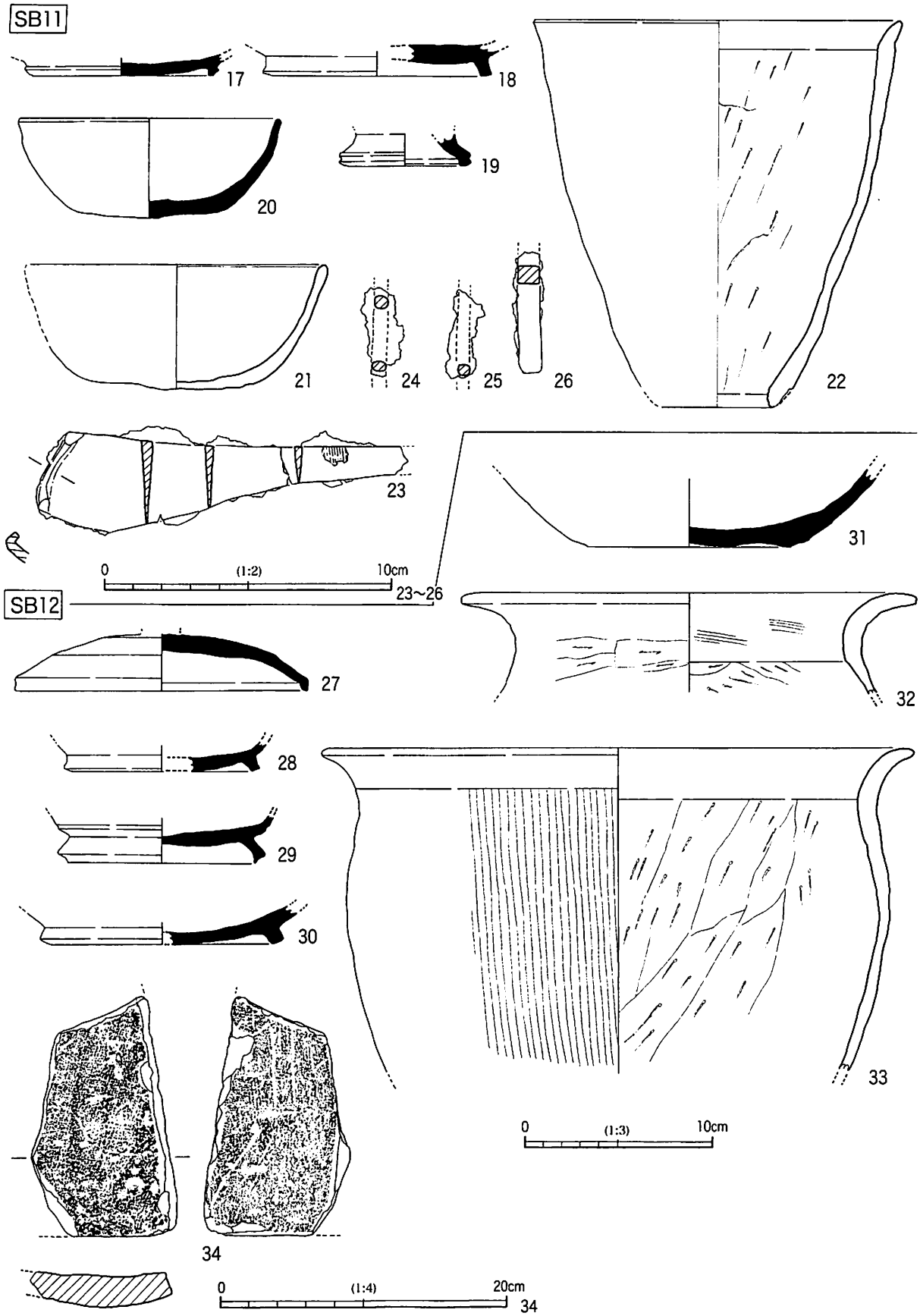
⑬ＳＢ13（第20図，図版13ｂ・13ｃ）

立地　ＳＢ９～11の南に近接する東西方向に長い住居跡状遺構である（標高241.5m）。南側に住居跡状遺構ＳＢ14・15が，西側には住居跡状遺構ＳＢ12が，そして東側には住居跡状遺構ＳＢ16が位置する。また，西端部の上面には石積遺構ＳＸ７が築かれている。

規模　直線的に東西方向に延びる北壁とその前面の緩斜面に並びの不明確なピットが散在する。その規模は現状で長さ（東西方向）9.24m，幅（南北方向）2.4m程度で，壁高20～30cm程度である。南西側のＳＢ14付近に短い直線的な壁溝があり（ＳＢ13ａ），少なくとも２軒が重複すると考えられる。先後関係はやや不明確だが，ＳＢ13ａが古く，北側の主体的なＳＢ13ｂが後出するとみられる。

平坦面　北壁の南側前面の平坦面は流出して緩斜面となっている。

壁溝　先行するＳＢ13ａは長さ2.46mの東西方向に直線的に延びる壁溝を主体とする。壁溝の幅30～42cm，深さ数cmである。後出する北側のＳＢ13ｂは長大な北壁に沿って，その西半では不安定ながらも幅（最大）60cm，深さ２～３cmの幅広でごく浅い壁溝が長さ５m程度存在するが，東半には壁溝はみられない。西半の壁溝の底面は10数cmの高低差で西から東に下傾する。



第19図　宮の本遺跡出土遺物実測図（2）（1：2，1：3，1：4）ＳＢ11・12

柱穴　径30～60cm，深さ10～40cm程度のピットが10数個存在するが，柱構造を示すような柱穴の並びはみられない。

出土遺物（第26図35～41，図版47）　須恵器（杯蓋・杯身・高杯脚），土師器（甕・甑），鉄器（刀子茎部）が出土した。いずれも覆土からの出土である。

a．須恵器（35～37）　35は復元口径18.4cmの杯蓋である。水平に延びて下方に曲がる口縁の端部を丸く納める。かえりは逆三角形でその端部は口縁端部とほぼ同じ位置にある。調整は，外面が体部は回転ヘラケズリ，狭い回転ナデを挟んで，口縁部が不調整で，内面は回転ナデを施す。36は杯身で，底部から外上方に直線的に延びた先細りの口縁の端部を丸く納める。調整は体部内外面が回転ナデである。復元口径14.4cm。37は高杯の脚端部片と考えられるが明確ではない。端部を上方に短く曲げ，尖り気味に納める。調整は，内外面回転ナデである。復元脚端径10.6cm。

b．土師器（38～40）　38は復元口径12.8cmの甕口縁部片で，緩やかに湾曲しながら外上方に延びた口縁の端部を丸く納める。調整は不明である。39･40は甑で，同一個体の可能性が高い。39は口縁～体部片で，ほぼ垂直に立ち上がった端部をごく短く外反させ，端部を丸く納める。調整は，口縁内外面横ナデ，体部内面横方向の板ナデ，体部外面は縦ハケ（６本／cm）を施す。口縁部内面に灰黒色のススが薄く付着している。復元口径26.7cm。40は底部から内湾気味に外上方に立ち上がる甑の体部下半の破片で，底端部はやや尖り気味に丸く納める。調整は，内面は縦方向のヘラケズリ，外面は縦ハケ（６本／cm）である。体部外面に淡灰黒色のススの付着がみられる。

c．鉄器（41）　現存長5.2cmの刀子の茎部片とみられるもので，中央に径４～５mmの円孔が穿たれている。

⑭ＳＢ14（第20図，図版14ａ・14ｂ）

立地　ＳＢ13の南西側緩斜面に位置する住居跡状遺構で，西側には住居跡状遺構ＳＢ12が，南側には住居跡状遺構ＳＢ15が近接する（標高241ｍ）。南東4.8ｍには住居跡状遺構ＳＢ20が存在する。

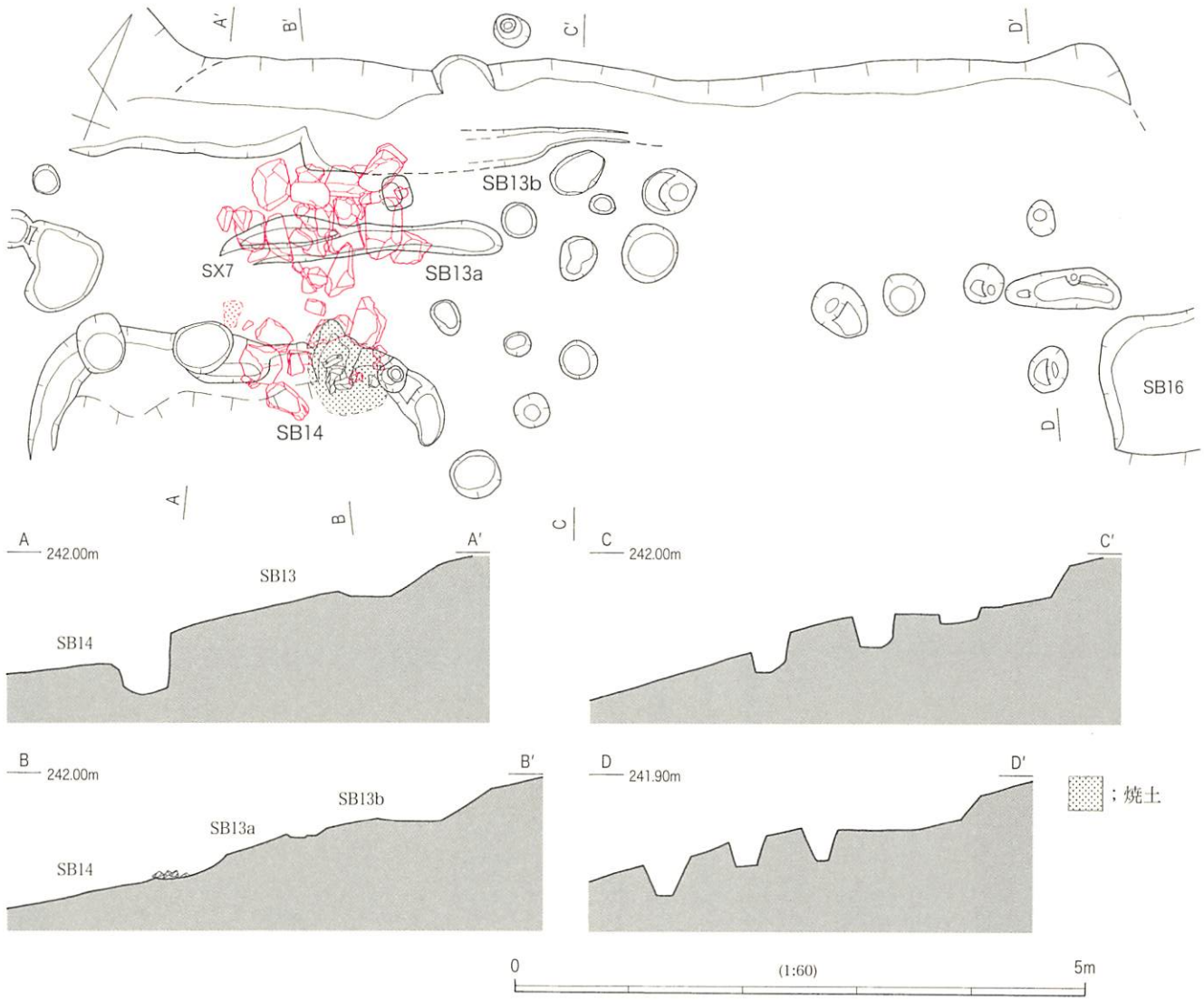
規模　東西方向に直線的に延びる北辺の住居壁を中心に，南に短く屈曲する南北方向の西辺・東辺の住居壁に囲まれた不整長方形のごく狭い平坦面から成る。その規模は，長さ（東西方向）3.6ｍ，幅（南北方向）1.32ｍで，壁高（最大）は北壁中央で20cmである。

平坦面　西半に幅（最大）0.66ｍのほぼ水平な平坦面が残る。

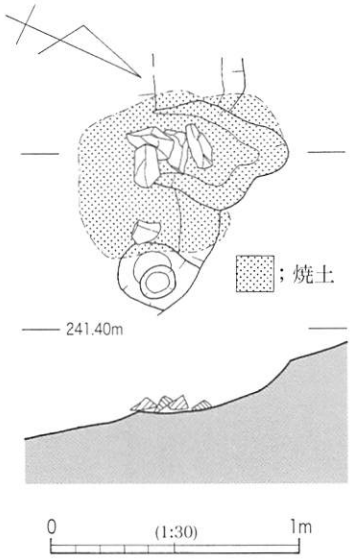
壁溝　北辺中央と西辺・東辺に断続的・部分的に壁溝が存在する。その規模は幅20cm，深さは北辺・西辺では２～３cmと浅いが，東辺では10cmと深い。

柱穴　径30～40cm，深さ20cm程度のピットが２，３みられるが，柱穴の並びは明確ではない。

カマド跡（第21図，図版14ｃ・15ａ）　住居北東隅から0.72ｍ西側の北壁東半に造り付けのカマド跡がある。袖部は明確ではないが，燃焼部に20cm程度の大きさの角礫が４個があり，角礫を芯に用いる石組の袖部であった可能性が高い。住居北壁に残存する煙道部を中心とする掘り込みは長さ57cm，幅45cm，高さ24cmの規模で，平面形は南北方向に長い不整楕円形である。この掘り込みを中心にやや東辺寄りに南北84cm，東西63cmの範囲に焼土＋焼け面が広がる。



第20図　ＳＢ13・ＳＢ14実測図（１：60）



第21図　ＳＢ14カマド跡
実測図（１：30）

出土遺物（第26図42，図版47）　鉄刀の破片かと考えられる鉄器片が覆土から出土している。現存規模は，刃部長5.3cm，刃部幅（最大）3.7cmである。

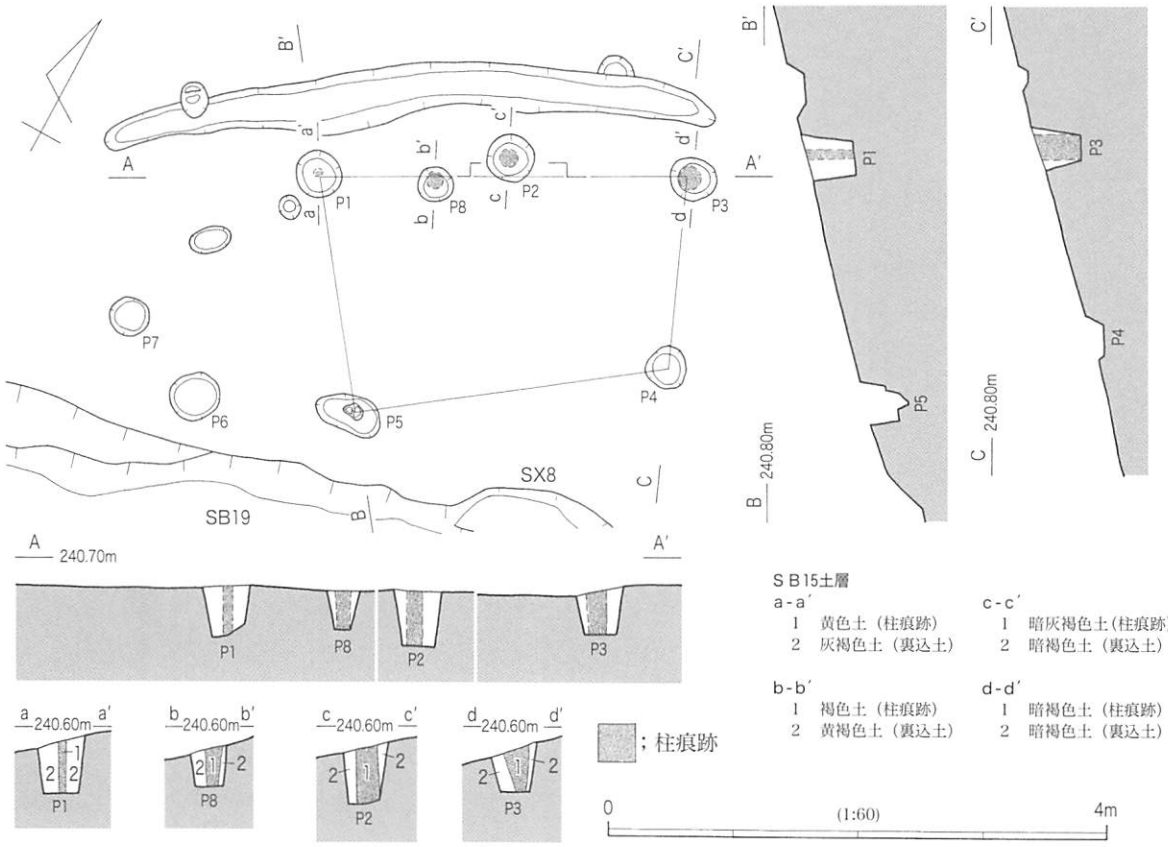
⑮ＳＢ15（第22図，図版14ａ・14ｂ・15ｂ）

立地　ＳＢ14の南側に近接し，竪穴住居跡ＳＢ19の北側に位置する住居跡状遺構である（標高240.5m）。東4.4mに住居跡状遺構ＳＢ20が存在する。

規模　直線的な壁溝と一定度の並びをみせる柱穴群から成る。住居壁と平坦面は削平されており，緩斜面に壁溝の残欠と柱穴が残る。その規模は東西５m，南北３m程度である。平面形は，壁溝がほぼ直線的に延びることや柱穴の配置が東西方向に長い不整方形をなすことなどから方形・長方形状であったと考えられる。

壁溝　南側にやや湾曲気味に東西方向に延びる。現存規模は長さ4.84m，幅（最大）46cm，深さ（最大）14cmで，溝底面はほぼ水平である。

柱穴　壁溝の南側の緩斜面に10個程度のピットがあるが，主柱穴はＰ１～Ｐ５である可能性が高く，これらが東西方向に長い不整長方形に並ぶ。やや並びが歪であるが，東西方向１～２間，南



第22図　ＳＢ15実測図（１：60）

北方向１間程度の柱構造とみられる。各柱間距離は，東西方向北辺のＰ１－Ｐ２が1.5m，Ｐ２－Ｐ３が1.44m，同じく南辺のＰ５－Ｐ４が2.46m，南北方向東辺のＰ３－Ｐ４が1.54m，同じく西辺のＰ１－Ｐ５が1.9mである。長辺（東西方向）の柱間距離が2.94m・2.46m，短辺（南北方向）の柱間距離が1.9m・1.54mである。このほか，並びは明確でないがＰ６～Ｐ８も柱穴の可能性がある。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径38cm×短径36cm，深さ45cm，Ｐ２が径38cm，深さ50cm，Ｐ３が長径38cm×短径34cm，深さ39cm，Ｐ４が長径34cm×短径32cm，深さ13cm，Ｐ５が長径54cm×短径30cm，深さ38cm，Ｐ６が長径40cm×短径36cm，深さ16cm，Ｐ７が長径32cm×短径 30cm，深さ31cm，Ｐ８が径18cm，深さ33cmである。ほぼ径30～40cm，深さ30～40cmと規模が均一的な柱穴群である。柱穴底面の標高は北側のＰ１～Ｐ３・Ｐ８は239.99～240.13m，南側のＰ４～Ｐ７は南西側のＰ５（標高239.67m）が特に深いが，その他は標高239.9～239.93mで，全体的には標高239.9～240.13mとほぼ均一である。なお，北寄りのＰ１～Ｐ３・Ｐ８ではいずれも柱痕跡を検出した。その規模は，径５cmと特に小さいＰ１以外は径13～18cmとほぼ一様である。

出土遺物（第26図43，図版47）　須恵器・平瓶で，Ｐ８付近の壁溝の覆土上層で出土した。口径5.2cm，体部最大径14.8cm，器高12.2cmと小型の器形で，調整は外底面回転ヘラケズリ，その他は内外面回転ナデである。肩部内面に封鎖痕が残る。

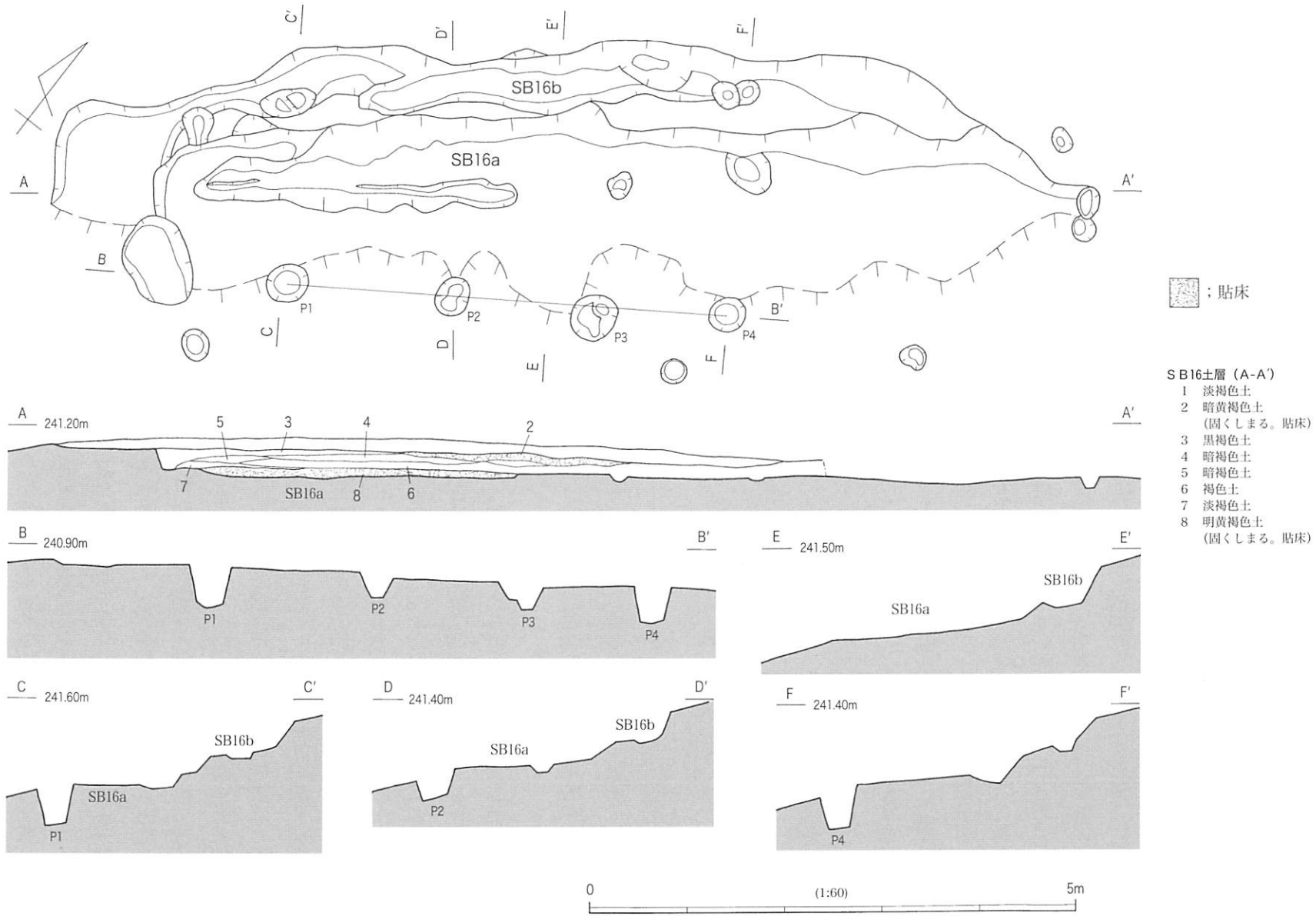
⑯ＳＢ16（第23図，図版16ａ・16ｂ）

立地　ＳＢ13の東側に近接する東西方向に長い平坦面をもつ住居跡状遺構で，２軒が重複する（標高241m）。北東側に近接して小型の竪穴住居跡ＳＢ17が，南３ｍには住居跡状遺構ＳＢ20が存在する。

規模　東西方向に長い不整長方形の平坦面とその南辺に柱穴列がみられる。長さ（東西方向）10.8m，幅（南北方向）3.6mほどの規模で，平坦面は上下に２軒が重なる。下位の平坦面と柱穴列から成るＳＢ16ａが時期的に先行し，このＳＢ16ａの上面に貼床を行い，住居壁を北側と西側に最大１ｍずつ拡げてＳＢ16ｂがつくられている。先行するＳＢ16ａの規模は，長さ9.78m，幅2.9m，壁高（最大）24cmである。後出住居のＳＢ16ｂはＳＢ16ａの平坦面の20cm程度上方に位置する。ＳＢ16ａの覆土上面の貼床土（暗黄褐色土・２層，最大の厚さ９cm）の広がり具合から考えて，ＳＢ16ｂはＳＢ16ａの西半を中心に位置し，長さ（東西方向）6.4m，幅（南北方向）2.2m程度の規模とみられる。壁高（最大）は30cmである。

平坦面・貼床　先行するＳＢ16ａは整地的な貼床（明黄褐色土・８層，厚さ数～10cm程度）を行って幅（最大）1.8mと比較的安定した平坦面を形成している。平坦面は東西方向には高低差10cmとほぼ平坦であるが，南北方向は北から南に緩やかに下傾する（高低差10数～20cm）。後出するＳＢ16ｂの平坦面は幅（最大）40cm程度の残存で，ほぼ平坦である。

壁溝　ＳＢ16ａの平坦面西半に長さ3.3m，幅20～44cm，深さ（最大）９cmの直線的な壁溝が存在する。溝底面はほぼ水平である。ＳＢ16ｂの住居壁沿い全体に幅広の溝がみられる。その規模は幅30～36cm，深さ数cmである。



第23図　ＳＢ16実測図（１：60）

柱穴　ＳＢ16ａの平坦面南縁の傾斜変換点付近に柱穴４個（Ｐ１～Ｐ４）が東西方向に並ぶ。柱穴列の全長は4.58mである。各柱間距離は，Ｐ１－Ｐ２が1.72m，Ｐ２－Ｐ３が1.56m，Ｐ３－Ｐ４が1.3mで，1.3～1.72m（平均1.53m）である。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径45cm×短径40cm，深さ47cm，Ｐ２が長径40cm×短径34cm，深さ34cm，Ｐ３が長径52cm×短径46cm，深さ29cm，Ｐ４が長径40cm×短径36cm，深さ46cmで，長径40～52cm×短径34～46cm，深さ29～46cmである（平均値；長径44cm×短径39cm，深さ39cm）。柱穴底面の標高は240.12～240.35m（平均240.24m）とほぼ均一である。

出土遺物　先行するＳＢ16ａの北壁中央付近の平坦面直上で須恵器・横瓶の体部片1/2程度がまとまって出土したが図示できなかった。

⑰ＳＢ17（第24図，図版16ｃ・17ａ）

立地　集落の南東辺に位置し，住居跡状遺構ＳＢ16の北東側に近接する小型の竪穴住居跡である（標高240.5m）。北東６ｍには竪穴住居跡ＳＢ18が，同じく５ｍには土坑墓ＳＫ９がある。

規模　平面形方形状の竪穴住居跡で，床面全体に整地的な貼床（淡黄褐色粘質土・６層）を厚さ６～12cm施している。住居壁は北西壁を中心に南西辺・北東辺に残る。住居の規模は，南西-北東方向3.3m，北西-南東方向（現存規模）は南西辺で2.54m，中央で2.62m，北東辺で1.8mである。壁高（最大）は西隅で55cmである。

床面　床面は南西-北東方向はほぼ水平だが，北西-南東方向は最大14cmの高低差で北西から南東方向へ下傾する。

壁溝　壁溝の規模は幅15～36cm，深さ（最大）15cmである。溝底面は北西辺中央が最も高く，南西辺南東端及び北東辺南東端方向に10cmの高低差で下傾する。

柱穴　主柱を縦方向に２本配する２本柱構造の竪穴住居で，床面中央に２個の柱穴（Ｐ１・Ｐ２）が北西-南東方向に並ぶ。柱間距離は1.26mで，各柱穴の規模は北西側のＰ１が長径38cm×短径34cm，深さ（貼床下面からの）23cm，南東側のＰ２は長径43cm×短径37cm，深さ（貼床下面からの）35cmである。柱穴底面の標高は高所側のＰ１が240.03m，低所側のＰ２が239.82mと21cmの高低差がある。これらの柱穴に柱を立て，裏込めを施したのちに貼床を施して柱の固定を図っている。Ｐ１・Ｐ２には柱痕跡が残り，径19～23cmの柱が使用されたと考えられる。

カマド跡　北東辺中央の壁溝上面で径10cm大の焼土を検出した。焼土付近の北東壁沿いの壁溝は幅が広く，南西辺の壁溝と比べるとやや歪な形であることから，この付近にカマド跡が存在した可能性がある。

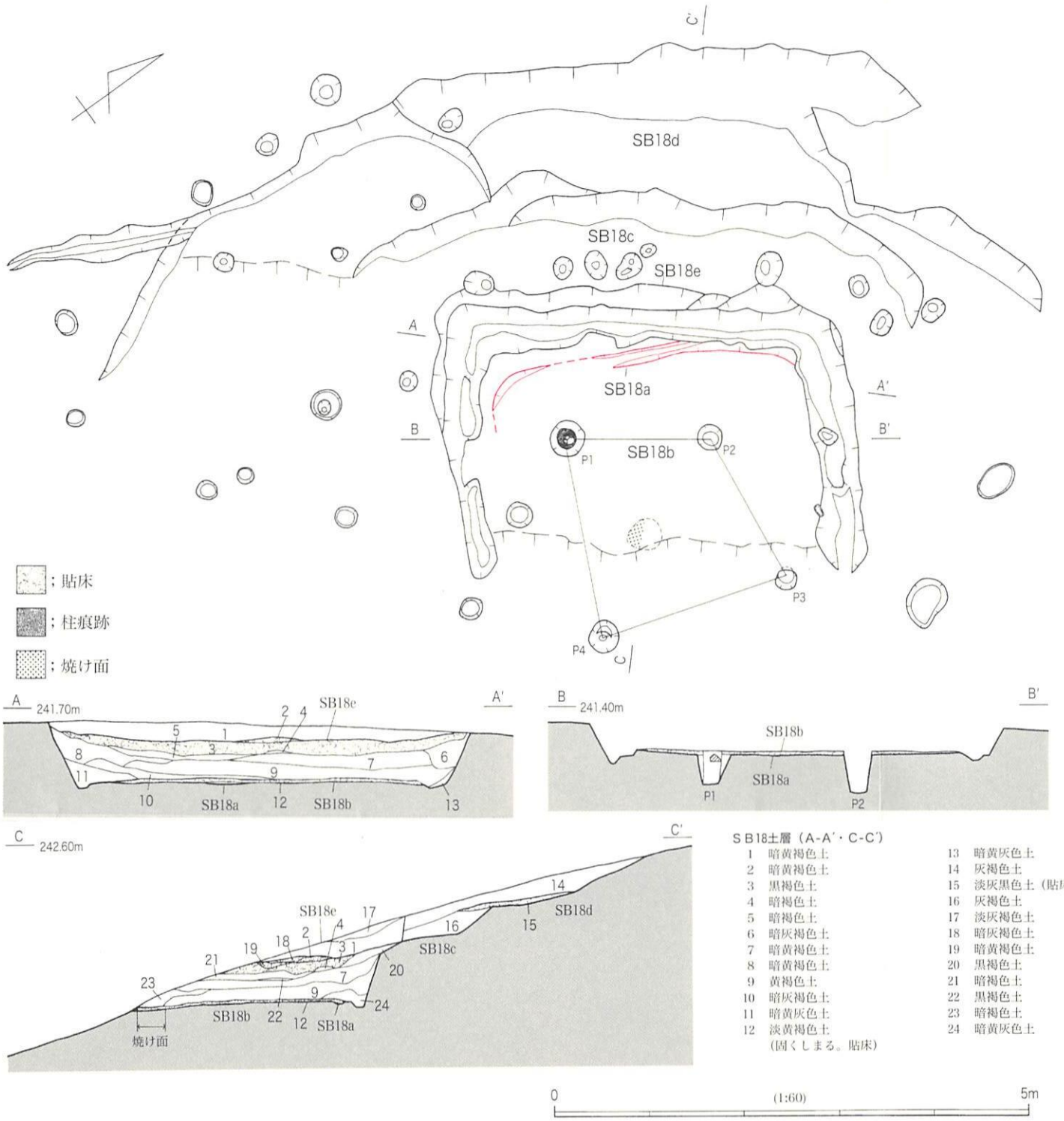
出土遺物（第26図44，図版47）　土師器・甕口縁部～体部片が，焼土の西28cmの床面上10cmで出土した。比較的よく括れた頸部で緩くくの字に曲がり，外上方に短く延びる口縁の端部はやや角張る。調整は，口縁部内外面横ナデ，内面体部縦方向へラケズリ，外面体部はやや斜め気味の縦ハケである。復元口径15.9cm。

⑱ＳＢ18（第25図，図版17ｂ・17ｃ）

立地　斜面下方の集落最東端にある５軒の住居が重複する竪穴住居跡（＋住居跡状遺構）で，竪穴住居跡ＳＢ17の北東６ｍに位置する（標高241.5m）。北８ｍには横穴式石室を埋葬施設とする第11号古墳がある。また，南に土坑墓ＳＫ９が近接して存在する。

規模　５軒のうち，先行するＳＢ18ａ・18ｂと最後出のＳＢ18ｅは平面形方形状の竪穴住居跡である。後出するＳＢ18ｃ・18ｄは斜面を削平した南西−北東方向に長い不整楕円形の平坦面をもつ住居跡状遺構であり，３軒の竪穴住居跡の背後に位置する付属施設的性格が強い。先行する２軒の竪穴住居跡（ＳＢ18ａ・18ｂ）はほぼ同規模の平面形方形状の住居で，柱穴と北東辺の住居壁を共用する。北西辺の住居壁・壁溝の北東側1/3(約１ｍ)もＳＢ18ａとＳＢ18ｂが共用するが，南西側2/3は先行するＳＢ18ａの住居壁・壁溝が後出するＳＢ18ｂの北西辺の住居壁・壁溝よりも最大0.9m程度南東側に寄っている。つまり，ＳＢ18ａの北西壁の向きはN153°Wで，後出するＳＢ18ｂのそれ（N142°W）に比べて11°南側に傾いていることになる。ＳＢ18ａの南西辺の住居壁は後出するＳＢ18ｂの南西壁の54cmほど内側（北東側）にごく僅かに痕跡が残る。これらから，最も先行するＳＢ18ａは南西−北東方向3.78m，北西−南東方向1.8～2.7mの規模の，平面形が横方向（南西−北東方向）に長い長方形の竪穴住居跡と考えられる。壁高は後出するＳＢ18ｂによって住居壁が削平されており，不明である。ＳＢ18ｂは，基本的には先行するＳＢ18ａと柱穴及び北東側の住居壁を共用しながら，南西・北西方向に0.54～１ｍ程度拡張し，住居の向き

第24図　ＳＢ17実測図（１：60）



第25図　ＳＢ18実測図（１：60）

をやや北東－南西側に変えた住居といえる。その現存規模は南西-北東方向4.32m，北西-南東方向2.94mで，平面形は横方向（南西-北東方向）に長い長方形である。壁高（最大）は北西隅で63cmである。最後出の竪穴住居跡ＳＢ18ｅは，先行するＳＢ18ａ・18ｂに比べると，やや不明確である。土層断面Ａ-Ａ′・Ｃ-Ｃ′で主に検出した住居跡で，平面的にはＳＢ18ｂの南西壁北西半から北西壁にかけてＳＢ18ｂの住居壁の上端において，貼床下の平坦面を幅10cm程度検出したにすぎない。３層（固い粘質のつよい黒褐色土でブロック状に黄褐色粘質土を含む）を中心に，２・18・19層を含む厚さ20cm程度の分厚い貼床をＳＢ18ｂの覆土の上面に施した床面は北西から南東側に下傾する不安定なものである。覆土の17・１層が住居跡状遺構ＳＢ18ｃの覆土16層や同じくＳＢ18ｄの覆土14層を断ち切って住居壁を形成している。ＳＢ18ｅの平面形は長方形状で，平面規模は南西-北東方向4.3m，北西-南東方向1.6m程度と考えられる。

これら３軒の竪穴住居跡の背後に存在する２軒の住居跡状遺構（ＳＢ18ｃ・18ｄ）のうち，先行するＳＢ18ｃは長さ（南西-北東方向）６ｍ，幅（北西-南東方向）1.2～1.3m程度の規模で，竪穴住居跡ＳＢ18ｂの北西壁の北西方1.2mにその北西壁がある。壁高（最大）は中央付近で35cmである。北西壁はやや南東側に湾曲しながら延びる。後出するＳＢ18ｄは竪穴住居跡ＳＢ18ｃの1.7m北西側に位置し，長さ（南西-北東方向）11m，幅（北西-南東方向）３ｍの平面規模で，住居壁が南東側に強く内湾する不整楕円形である。壁高（最大）は中央付近で40cmである。

床面・平坦面　竪穴住居跡３軒のうち，最も先行するＳＢ18ａの床面は斜面を削平して築かれた地山上にある。後出するＳＢ18ｂの床面造成時に多少の削平を受けた可能性があるが，壁溝の残存状況からほぼ原状を留めていると考える。このＳＢ18ａの床面上に全面的に厚さ３～６cmの貼床（淡黄褐色土・12層）を施したＳＢ18ｂの床面はほぼ水平である。ＳＢ18ｂの覆土上面に分厚く貼床を行ったＳＢ18ｅの床面は北西-南東方向に下傾し，南西-北東方向では中央が緩やかに凹む（高低差10cm程度）。住居跡状遺構ＳＢ18ｃの平坦面は南西側が高く北東方向に最大20cm程度の高低差で下傾する。また，同じくＳＢ18ｄの平坦面は中央北西側が最も高く，20cmの高低差で南東方向に，10数cmの高低差で南西から北東方向へ下傾する。

壁溝　壁溝は，竪穴住居跡ＳＢ18ａ・18ｂ，住居跡状遺構ＳＢ18ｄの北西辺南西端に存在する。ＳＢ18ａの壁溝は北西壁中央にごく短くみられるだけである。その規模は，長さ0.72m，幅（最大）16cm，深さ（最大）４cmである。ＳＢ18ｂでは北西壁・南西壁・北東壁の三方の住居壁沿いに壁溝がみられる。その規模は幅12～33cm，深さ（最大）10cm（北西壁中央）である。溝底面は西隅が最も高く，北西壁溝はほぼ水平だが，南西壁溝及び北東壁溝では南東端に向って10数cmの高低差で下傾する。また，住居跡状遺構ＳＢ18ｄの北西壁沿い南西端には，部分的に長さ２ｍ，幅６～30cm，深さ（最大）５cmの直線的な壁溝が存在する。

柱穴　竪穴住居跡ＳＢ18ｂの床面中央には南西-北東方向に２個の柱穴（Ｐ１・Ｐ２）が並び，その柱間距離は1.52mである。南東辺の傾斜変換線中央付近に焼土がみられ，これを炉跡と考えると本住居は４本柱構造ということになる。南東側斜面にあるピットの内，深さなどからＰ３・Ｐ４が南東側の柱穴である可能性があるが，４本の主柱の配置状況は台形に近い歪な方形状にな

る。これらがＳＢ18ｂの主柱穴とすると，その柱間距離はＰ２－Ｐ３が1.68m，Ｐ３－Ｐ４が2.04m，Ｐ４－Ｐ１が2.16mである。南西側のＰ１には径18cmの柱痕跡が残るが，柱穴の裏込め部分が貼床で被われている。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径38cm×短径36cm，深さ31cm，Ｐ２が径26cm，深さ41cm，Ｐ３が径20cm，深さ17cm，Ｐ４が長径35cm×短径31cm，深さ31cmで，径20～38cm（平均31cm），深さ17～41cm（平均30cm）である。柱穴底面の標高は240.38～240.56m（平均240.48m）と比較的均一である。なお，Ｐ１の柱痕跡上面には10cm大の亜角礫１個があり，柱材抜き取り後に入れ込まれた可能性がある。

住居跡状遺構ＳＢ18ｃの平坦面をはじめ，竪穴住居跡ＳＢ18ｂの周囲には径30～40cm程度のピットが20～30個みられるが，何れも浅く，また並びも不明確で柱穴とは考えられない。

炉跡　竪穴住居跡ＳＢ18ｂの南東辺中央には径30cmほどの不整円形の焼土の広がりがみられ，炉跡の可能性がある。

出土遺物（第26図45～47，図版47）　須恵器（杯蓋），土師器（甕），鉄器（鉄釘）各１点がある。いずれもＳＢ18ｂ覆土からの出土である。

45は須恵器・杯蓋で，復元口径10.0cm，器高3.2cmである。狭く平坦な頂部から外下方に内湾気味に延びてやや開き気味に垂下する口縁の端部を丸く納める。調整は，外面が頂部回転ヘラケズリ，体部から口縁を介して内面全体に回転ナデを施し，内面中央には一定方向のナデを行う。46は復元口径15.4cmの土師器・甕で，頸部で湾曲して外上方に短く延びた口縁の端部を丸く納める。調整は，口縁内外面横ナデ，内面の口縁下半が横方向のナデ，体部がヘラケズリ，外面頸部は縦ハケ（５本／cm）である。口縁端部から外面口縁～頸部に灰黒色のススが付着する。47は鉄釘片で，頭部と尖端を欠失する。現存規模は，長さ6.8cmの断面方形で中空である。

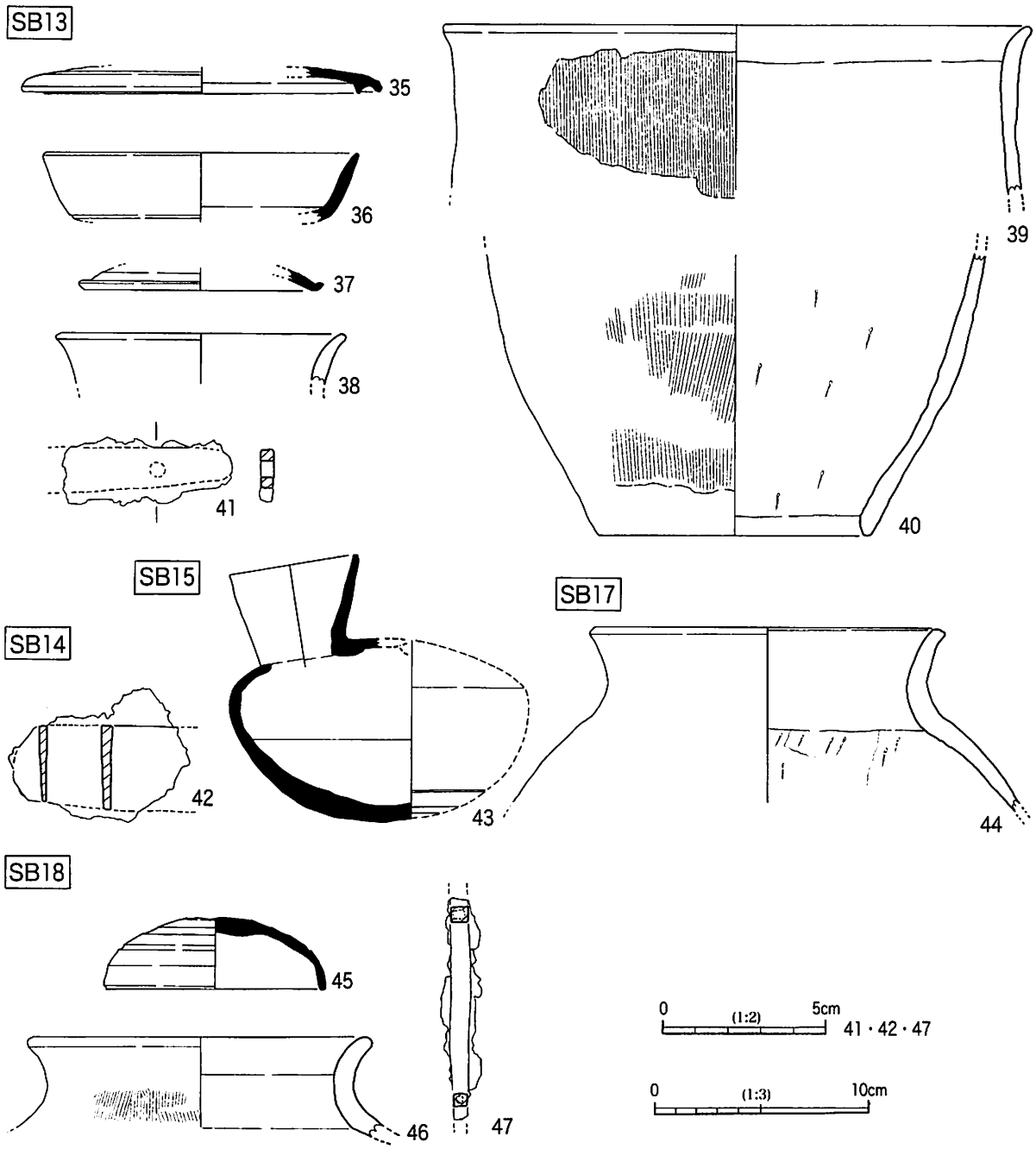
⑲ＳＢ19（第27図，図版18・19ａ）

立地　集落中心部の住居群の南端に位置し，ＳＢ11・ＳＢ12・ＳＢ18とともに集落の中心的な竪穴住居跡（＋住居跡状遺構）である（標高239.5m）。構造的にはＳＢ18と酷似しており，重複する３軒の竪穴住居跡（ＳＢ19ａ・19ｂ・19ｃ）とその背後に位置する付属施設的な住居跡状遺構２軒（ＳＢ19ｄ・19ｅ）から成る。調査区西辺に近く，北に住居跡状遺構ＳＢ13～15，北東４ｍには住居跡状遺構ＳＢ20が，南６～10mの斜面下方には住居跡状遺構ＳＢ21・22が存在する。

規模　竪穴住居跡３軒はいずれも平面方形状で，北方向（斜面上方）への拡張を主体的に行っている。先行する２軒の住居跡（ＳＢ19ａ・19ｂ）はほぼ同規模・同位置で，最後出のＳＢ19ｃは，これらの北辺住居壁を大きく北方向に拡張している。最も先行するＳＢ19ａは住居壁を後出住居による削平によってすべて失っており，北辺・西辺・東辺の壁溝と床面中央の南北に配する２本柱が残存する。その現存規模は東西４ｍ，南北2.8mで，壁高は住居壁が後出するＳＢ19ｂによって削平されており不明である。このＳＢ19ａの床面上に貼床を行い床面としたのがＳＢ19ｂである。ＳＢ19ａの住居壁北辺を最大34cm北方向に拡張し，西壁を最大50cm，東壁を最大20cmほど拡張させている。ＳＢ19ｂの現存規模は，東西方向4.6m，南北方向３ｍ程度で，壁高は後出する

ＳＢ19ｃによって住居壁を削平されており不明である。最後出のＳＢ19ｃは，ＳＢ19ｂの床面と西壁・東壁をそのまま使用し，北辺の住居壁を0.76～1.06m北方向に拡張した平面形方形状の竪穴住居跡で，その現存規模は東西方向4.6m，南北方向4.2m程度で，壁高（最大）は北西隅で31cmである。

竪穴住居跡の北側背後に存在する２軒の住居跡状遺構のうち，主体的なＳＢ19ｄは竪穴住居跡ＳＢ19ｃの北壁から北方向に0.46～１ｍほどのところに東西方向に長く延びる平坦面の北壁がある。その規模は，長さ（東西方向）7.8m，幅（南北方向）1.26～1.86mで，壁高（最大）は北西隅で29cmである。平面形は北壁の東西両端が曲線を描く不整楕円形である。このＳＢ19ｄの北



第26図　宮の本遺跡出土遺物実測図（３）（1：2，1：3）ＳＢ13・14・15・17・18

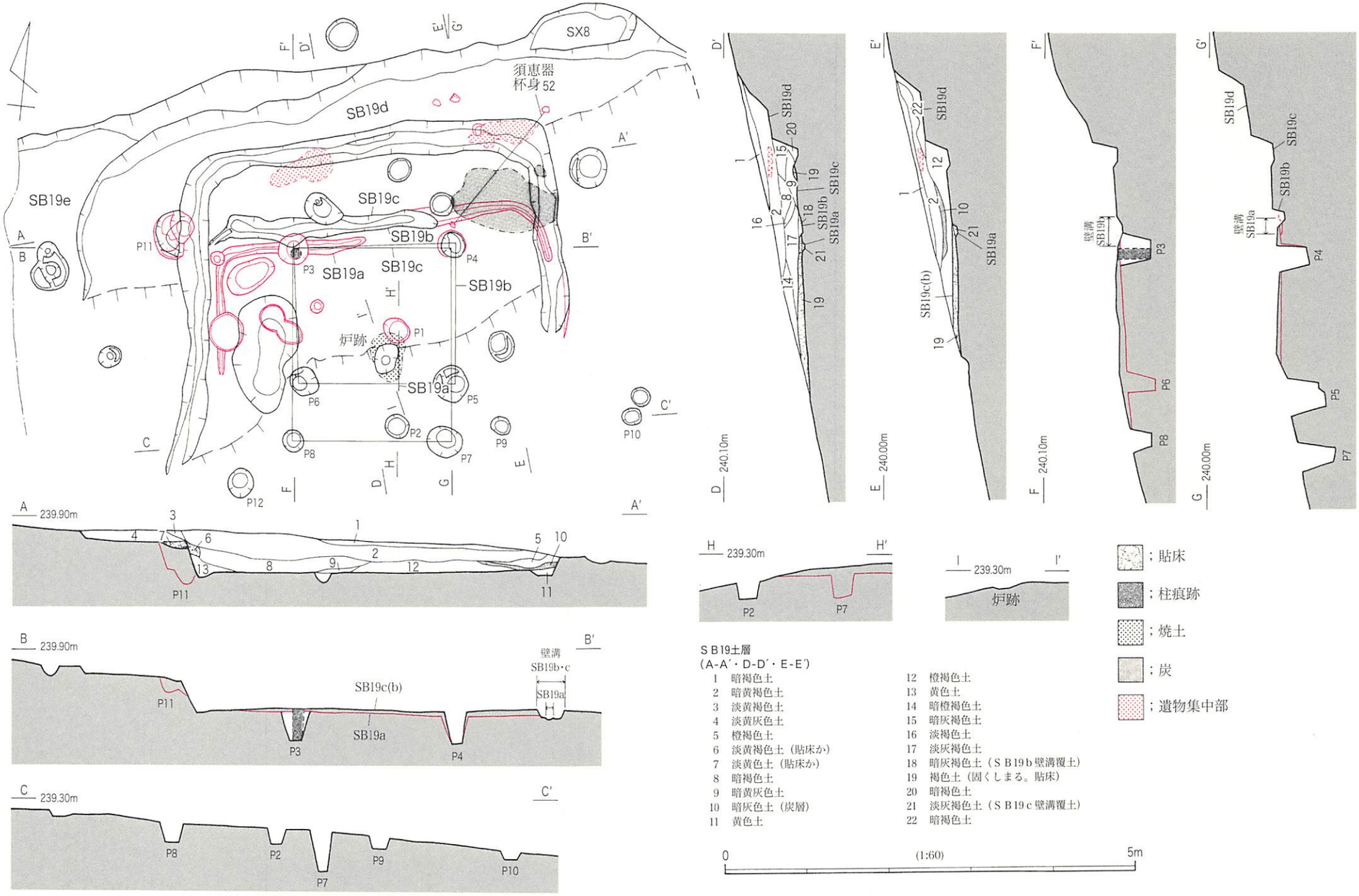
西側にＳＢ19ｅがある。ＳＢ19ｄの西半と重複し，東西方向に直線的に延びる北壁の前面に幅１m程度の平坦面を造り出している。西側が調査区外に延びるため，遺構の全容は不明であり，現存規模は長さ（東西方向）4.3m，幅（南北方向）１m，壁高（最大）13cmである。

床面・平坦面　竪穴住居跡３軒のうち，最も先行するＳＢ19ａの床面は北から南に緩やかに下る緩斜面を削平した地山面で，床面の北西隅が最も高く，東側及び南側へと数～10cm程度下傾する。このＳＢ19ａの床面全面に厚さ数～10cmの貼床（褐色土・19層）を行い床面としたのがＳＢ19ｂで，床面はほぼ水平である。最後出のＳＢ19ｃはこのＳＢ19ｂの貼床を活かし，拡張した北側の床面は削平した地山面をそのまま使用している。床面の東西方向は水平で，南北方向も若干の高低差はあるもののほぼ水平である。住居跡状遺構の平坦面は，ＳＢ19ｄは10数cmの高低差で西から東に緩やかに下傾する。ＳＢ19ｅの平坦面は東西方向はほぼ水平だが，南北方向は10cmの高低差で緩やかに北から南に傾斜する。

壁溝　竪穴住居跡３軒はいずれも北辺・西辺・東辺の三辺をコの字に壁溝が廻る。ＳＢ19ａの壁溝は北辺中央が途切れる。幅７～18cm，深さ（最大）３cmと浅い溝で，底面は北西隅が高く，数cmの高低差で東・南に下傾する。このＳＢ19ａのやや北側にあるＳＢ19ｂの壁溝は北辺西側2/3の壁溝が残存する。その規模は，幅８～26cm，深さ（最大）10cmである。溝底面は西端が高く，東端側に高低差数cmで緩やかに下傾する。最後出のＳＢ19ｃの壁溝は北辺を中心に西辺・東辺の住居壁沿いに途切れることなく続く。幅21～33cm，深さ（最大）は北西隅で７cmである。溝底面は北辺中央が最も高く，西辺南端には高低差13cm，東辺南端には高低差22cmで下傾する。なお，住居跡状遺構には壁溝は存在しない。

柱穴　ＳＢ19周辺には30個ほどのピットがある。これらのなかで，各竪穴住居跡の主柱は，最も先行するＳＢ19ａが南北に並ぶ２本柱（Ｐ１・Ｐ２），ＳＢ19ｂとＳＢ19ｃはいずれも方形に柱穴を配する４本柱で，北辺の２本の柱穴（Ｐ３・Ｐ４）を共用する。なお，住居南辺には東西方向に並ぶ柵列的な柱穴列がある（Ｐ８－Ｐ２－Ｐ９－Ｐ10）。

ＳＢ19ａの２本柱の柱間距離は1.2mで，各柱穴の規模は北側のＰ１が長径34cm×短径28cm，深さ30cm，Ｐ２は長径30cm×短径28cm，深さ23cmである。柱穴底面の標高は，238.76～238.79mとほぼ同じである。ＳＢ19ｂはＰ３～Ｐ６の４本柱で，北辺のＰ３・Ｐ４を後出するＳＢ19ｃと共用する。各柱穴の柱間距離は，東西方向北辺のＰ３－Ｐ４が2.0m，同じく南辺のＰ５－Ｐ６が1.9m，南北方向東辺のＰ４－Ｐ５が1.7m，西辺のＰ６－Ｐ１が1.6mで，東西方向の柱間距離は1.9m・2.0m，南北方向の柱間距離は1.6m・1.7mで，東西方向の柱間距離の方が南北方向のそれよりも20～40cm長い。つまり，ＳＢ19ｂの柱の配置は東西方向に長い長方形である。各柱穴の規模は，Ｐ３が長径38cm×短径36cm，深さ37cm，Ｐ４が径34cm，深さ40cm，Ｐ５が径42cm，深さ48cm，Ｐ６が長径34cm×短径32cm，深さ35cmで，径32～42cm（平均36cm），深さ35～48cm（平均40cm）である。柱穴底面の標高は，238.57～238.80m（平均238.72m）である。南東隅のＰ５がほかの柱穴に比べて規模が大きく，深い。最後出の竪穴住居跡ＳＢ19ｃの柱穴はＰ３・Ｐ４・Ｐ７・Ｐ８の４本柱で，北辺の２つの柱穴は先行するＳＢ19ｂの北辺の柱穴を基本的には共用する。Ｐ３・Ｐ４ともにＳ



第27図　ＳＢ1実測図（１：60）

Ｂ19ｂの柱穴の裏込め上面まで貼床を行うが，北東隅のＰ４については柱穴（掘方）を若干小さくしており，柱を建て直した可能性が考えられる。各柱穴の柱間距離は，東西方向南辺のＰ７－Ｐ８は1.9m，南北方向東辺のＰ３－Ｐ７，西辺のＰ８－Ｐ３はいずれも2.3mである。すなわち，ＳＢ19ｃの主柱の配置は，東西方向1.9～2.0m，南北方向2.3mと先行するＳＢ19ｂのそれを南に0.6～0.7m広げている。各柱穴の規模はＰ３が同じ，Ｐ４は長径32cm×短径28cm，深さ40cm，Ｐ７は長径43cm×短径36cm，深さ52cm，Ｐ８は長径28cm×短径24cm，深さ29cmで，径24～43cm（平均33cm），深さ29～52cm（平均40cm）である。柱穴底面の標高は238.42～238.80m（平均238.69m）である。ＳＢ19ｂと比べると，深さや柱穴底面の標高はあまり変わらないが，平面規模がやや小さくなっている。なお，Ｐ３では径12cmの柱痕跡を検出した。

住居南辺の柱穴列Ｐ８－Ｐ２－Ｐ９－Ｐ10を形成するＰ８はＳＢ19ｃの南西隅の柱穴，Ｐ２はＳＢ19ａ南側の主柱穴である。この柱穴列の柱間距離は，Ｐ８－Ｐ２が1.26m，Ｐ２－Ｐ９が1.28m，Ｐ９－Ｐ10が1.6mで，西端・中央のＰ８－Ｐ２・Ｐ２－Ｐ９が狭く，東端のＰ９－Ｐ10は広い。Ｐ８・Ｐ２以外の各柱穴の規模は，Ｐ９が長径28cm×短径20cm，深さ18cm，Ｐ10が長径24cm×短径20cm，深さ12cmで，Ｐ８・Ｐ２を含めると，柱穴の径20～38cm（平均26cm），深さ12～29cm（平均21cm）で，柱穴底面の標高は238.6～238.78m（平均238.71m）である。竪穴住居跡の主柱穴に比べると柱穴規模が小さく，浅い。柱穴底面の標高は竪穴住居跡ＳＢ19ａ・19ｂ・19ｃの各平均値とあまりかわらない。この柱穴列の性格や時期については明確でないが，その柱穴規模が小さいことと，住居の前面を遮るかたちで柱穴が並ぶことなどから，柵や住居の門・入口などに伴う柱穴列である可能性が考えられる。このほか，単独柱穴としてＰ11・Ｐ12がある。Ｐ11はＳＢ19ｃの西辺北半の住居壁によって壊された径58cm，深さ48cm，底面の標高239.08mの柱穴で，先行するＳＢ19ａ・19ｂに付属する可能性のあるＳＢ19ｄの平坦面に掘り込まれたピットと考えられるが明確ではない。住居南西隅のＰ12は長径36cm×短径31cm，深さ42cmで，柱穴底面の標高は238.64mである。

炉跡　住居南辺中央の傾斜変換線付近で炉跡を検出した。長径34cm×短径28cm，深さ（最大）５cmの規模の，平面形が南北に長い楕円形のごく浅い土坑で，その周縁に幅（最大）14cmの焼土が広がる。ただ，覆土や内部には焼土はみられない。貼床上面から掘り込まれており，焼土も貼床上にあることから，竪穴住居跡ＳＢ19ｃに伴う炉跡と考えられる。

土器溜　住居跡状遺構ＳＢ19ｄの平坦面南半から最後出の竪穴住居跡ＳＢ19ｃの北辺壁溝付近の上面にかけて大きく２か所の土器溜がみられる。ＳＢ19ｄの平坦面直上～10cm程度上方からＳＢ19ｃの北辺壁溝の30～40cm程度上方にかけて，緩やかに北から南に下傾する堆積をみせている。ＳＢ19ｃの廃絶後ほぼ覆土で埋もれた段階で，北側斜面上方から廃棄されたかあるいは他遺構などから転落あるいは流入したものと考えられ，ＳＢ19の住居群に伴う可能性は低いと思われる。西側の土器溜は東西80cm，南北40cmの大きさで土師器・甕66・68などから成り，東側の土器溜は東西80cm，南北30cmの大きさで，土師器・甕63・67，須恵器・椀56などが含まれる。

炭層　ＳＢ19ｃ北東隅にある東西方向1.3m，南北方向0.75m，厚さ10cmの平面形不整楕円形の炭の広がり（Ａ－Ａ′・Ｅ－Ｅ′の10層）で，東から西に緩やかに下傾する。Ａ－Ａ′の土層断面に明ら

かなように，その下端がＳＢ19ｂあるいはＳＢ19ｃの床面に部分的に接していることから，竪穴住居跡ＳＢ19ｃの廃絶後間もない頃に東側の住居外から流入したもので，ＳＢ19に伴う可能性は少ない。

出土遺物（第28・39図48～69，図版48）　須恵器（杯蓋・杯身・椀・高杯），土師器（椀・甕），鉄器（用途不明品）がある。これらの多くは２か所の土器溜りからまとまって出土したものである。竪穴住居跡など遺構に伴うと考えられる遺物はそれほど多くないが，最後出の竪穴住居跡ＳＢ19ｃに伴うものが主体である。須恵器・杯身52はＳＢ19ｃ床面直上とその近くのＳＢ19ｄ平坦面直上の２か所で出土した破片が接合したもので，須恵器・椀高台片55はＳＢ19ｃのＰ４とＰ３の中間付近の貼床直上，土師器・椀61はＳＢ19ｃ東辺壁溝南端近くの床面直上，須恵器・杯蓋片49はＳＢ19ｃ北辺壁溝中央付近の床面上10cm付近で出土した。須恵器・椀57，同・高杯58はいずれもＳＢ19ｃ北辺壁溝近くの床面直上で出土した。用途不明鉄器の69はＳＢ19ｃ北東隅の炭層の上面で出土した。また，土師器・甕64・65は土器溜の土器群とはやや離れたＳＢ19ｄの平坦面直上付近で出土しており，ＳＢ19ｄに伴う可能性がある。その他の土器類はいずれも住居覆土からの出土である（48・50・51・53・54・59・60・62）。

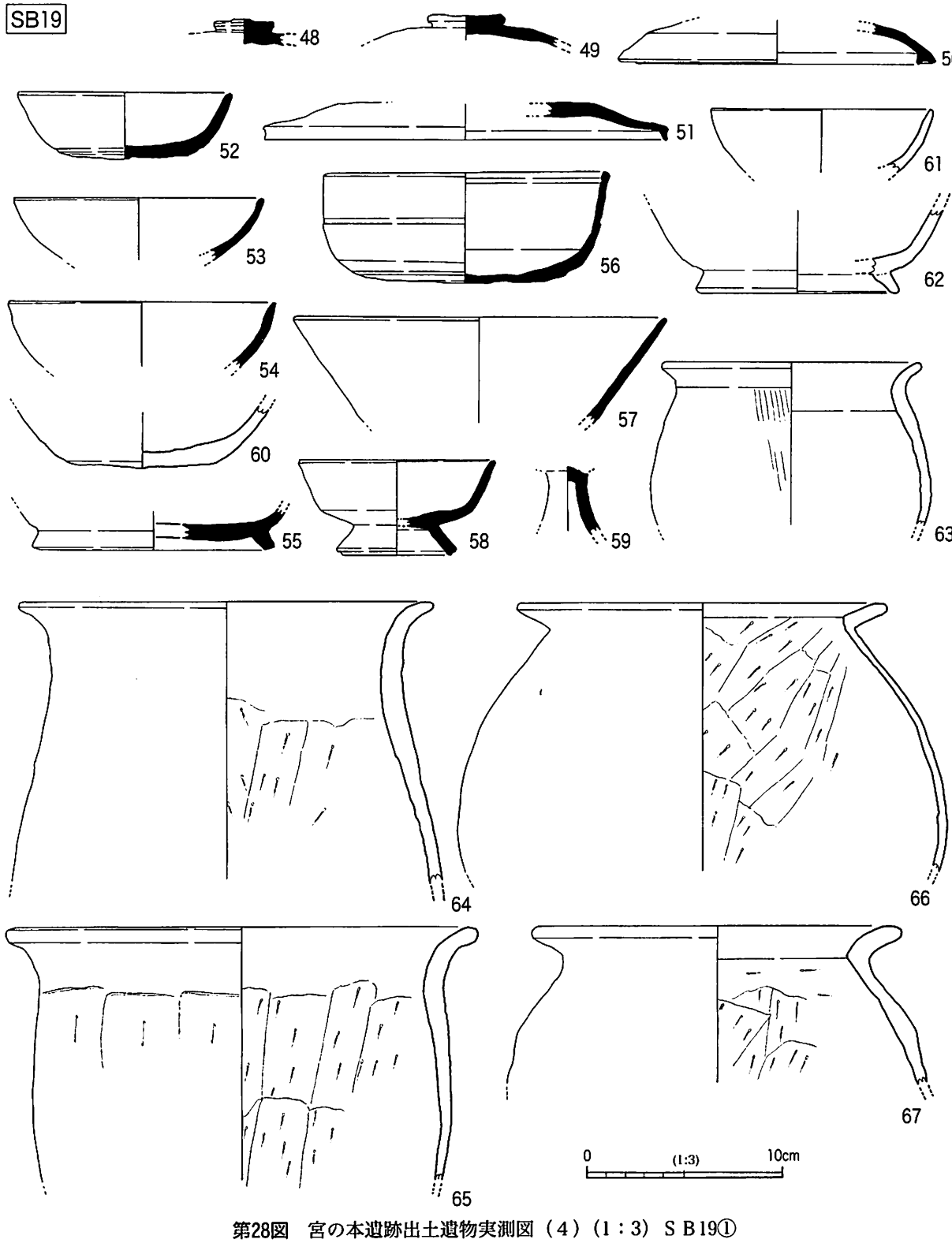
ａ．須恵器（48～59）　杯蓋（48～51）・杯身（52～54）・椀（55～57）・高杯（58・59）がある。杯蓋はいずれも扁平なつまみをもつもので，50は内下方に短く延びる断面三角形のかえりがつく。51はかえりはなく平坦な頂部から低く水平に近く延びて端部で屈曲し，短く垂下して尖り気味に納める口縁端部が付く。調整は，48は内外面ともに回転ナデ，49は頂部外面に回転ヘラケズリで，そのほかはつまみ部分を含めて不調整である。50は外面体部回転ヘラケズリ，ごく緩やかな稜を介して口縁外面から内面にかけて回転ナデ，51は外面頂部回転ヘラケズリ，ほかは回転ナデである。50の復元口径16.0cm，51の復元口径20.2cmである。

杯身52は口径10.4cm，器高3.4cmで平底の底部からやや内湾気味に外上方に延び，端部を丸く納める。調整は，底部回転ヘラ切り，緩やかな凹線を介して体部外面から内面全体にかけて回転ナデを施す。杯身53は復元口径12.4cmで，やや内湾気味に外上方に延びる口縁の端部を丸く納める。調整は内外面ともに回転ナデである。杯身54は内湾気味に外上方に延びて途中で緩やかに屈曲して垂直に立ち上がった口縁端部をやや尖り気味に納める。調整は内外面ともに回転ナデである。復元口径13.2cm。

55は外下方にハの字に短く延び端部が角張る高台が付く椀で，復元高台径11.4cmである。調整は不明確な外底面中央を除き回転ナデである。椀56は平底から湾曲して垂直に立ち上がった口縁の端部を丸く納める。内面口縁直下に１条，外面体部中央に１条の凹線が廻る。調整は内面全体が不調整で，外面は体部が回転ナデ，体部と底部の境の屈曲部にヘラケズリを施し，外底面は回転ヘラ切り不調整である。口径14.0cm，器高5.6cm。57は外上方の体部から口縁にかけて直線的に延び，口縁の端部を丸く納める椀と考えられる。色調が灰黒色の軟質のもので，瓦器の可能性もある。調整は，外面から口縁内面にかけて横方向のナデ，内面は縦方向のナデ調整と考えられる。復元口径18.6cm。

58は低脚の高杯で，平底の杯底部から屈曲して外上方に直線的に延びる口縁の端部を丸く納める。脚部は底部からハの字に外下方に延びた脚端部の端面及び内面下端が僅かに凹む。調整は，内底面中央が一定方向のナデ，外底面中央が不調整である以外は内外面ともに回転ナデである。復元口径9.7cm，器高4.8cm。59は高杯脚柱部片で，内面がシボリ，外面は回転ナデを施す。

b．土師器（60～68）　椀（60～62），甕（63～68）がある。60は分厚い平底の椀で，内湾気



第28図　宮の本遺跡出土遺物実測図（4）（1：3）ＳＢ19①

味に外上方に延びる。調整は，底部回転ヘラ切り，体部外面・内底面は調整不明，体部内面は回転ナデである。底径7.4cm。61は内湾気味に外上方に延びて口縁端部をやや尖り気味に納める椀で，口縁内面が回転ナデである以外は調整不明である。復元口径11.0cm。椀62は平底の底部と内湾気味に外上方に延びる体部の境から外下方に直線的に延びる高台端部を丸く納める。調整は内外面回転ナデである。復元高台径9.6cm。

甕６個体は，締りの弱い頸部から外湾しながら外上方に延びる口縁の端部を丸く納めるもの（63～65・68）と頸部で強くくの字に屈曲して外上方に直線的に延びる口縁の端部を丸く納めるもの（66・67）とがある。前者の63はやや小ぶりな甕で，復元口径12.6cmである。調整は，口縁内外面横ナデ，内面頸部指頭ナデ，体部横方向のヘラケズリ，外面体部はやや斜め気味の縦ハケを施す。体部外面には部分的にススが付着する。甕64は弱く内傾して垂直に立ち上がる口縁の端部を短く外湾させ，端部を丸く納める。調整は，外面は調整不明，内面は口縁が横ナデ，体部は縦方向のヘラケズリである。復元口径19.6cm。甕65はあまり最大径部が張らない体部からやや内傾気味に立ち上がった口縁の端部を短く外反させ，端部を丸く納める。調整は，口縁の端部から内面が丁寧な横ナデ，体部内面は縦方向の浅いヘラケズリ，外面の口縁が雑な横ナデ，体部は縦方向の板ナデを行う。外面には幅10cmほど黒褐～暗褐色のススが付着している。復元口径22.6cm。甕66は器壁が薄く，頸部が良く締まった器形で，体部下半によく張った最大径部がある。調整は，口縁内外面横ナデ，体部内面斜め方向のヘラケズリ，体部外面は比較的丁寧な板ナデである。体部外面に薄くススが付着する。復元口径17.2cm。甕67は頸部でくの字に屈曲し，外上方にやや外湾気味に延びた口縁端部を丸く納める。調整は，口縁部内外面横ナデ，体部内面が横方向・縦方向のヘラケズリ，体部外面は縦方向のナデとみられる。口縁～体部外面に灰黒色のススが付着する。復元口径17.8cm。68は復元口径28.6cm，器高22.9cmの丸みの強い甕である。頸部の締りは弱く，外湾気味に外上方に延びた口縁の端部をやや尖り気味に納める。調整は口縁部内外面が横ナデ，体部内面は上半が斜位～縦方向主体，下半が横方向主体のヘラケズリ，体部外面は縦方向・斜め方向主体のハケ目（６本／cm）である。外面全体に黒褐色のススが付着するが，特に口縁～頸部，体部最大径部の付着が顕著である。

ｃ．鉄器（69）　用途不明品で，下辺が関状に抉れる。平面的には刀子などの茎部片かとみることもできるが，厚さ7.5mmと分厚くほかの器種が考えられるものの，現時点では不明である。

⑳ＳＢ20（第29図，図版19ｃ）

立地　住居の北隅部分を僅かに残す平面形方形状の住居跡状遺構である（標高239.5m）。集落中心部の南東端に位置し，ＳＢ19の北東５ｍ，住居跡状遺構ＳＢ16の南３ｍに位置する。

規模　住居北隅の床面及び北西辺・北東辺の住居壁・壁溝がごく部分的に残る。現存規模は南西-北東方向3.8m，北西-南東方向2.3mで，壁高（最大）は北西壁中央で35cmである。

床面　南西-北東方向2.14m，北西-南東方向１ｍの範囲が残存する床面はほぼ水平である。

壁溝　幅16～42cm，深さ（最大）６cmで，溝底面は北隅が高く，南西方向あるいは南東方向に

高低差７～８㎝で下傾する。

柱穴　南斜面にピット１個があるが，柱穴か否か不明である。ピットの規模は，長径18㎝×短径14㎝，深さ13㎝で，底面の標高は239.09ｍである。

ＳＢ20からの出土遺物はない。

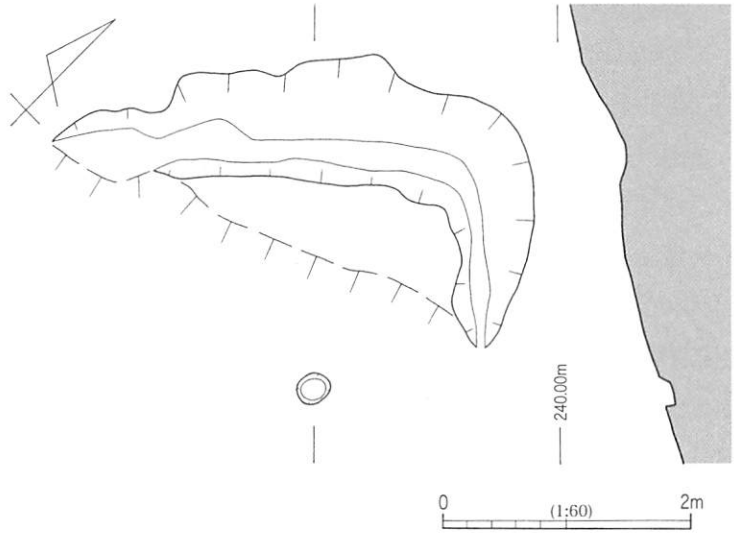
㉑ＳＢ21（第30図，図版20ａ）

立地　調査区西辺南端近くの，集落の最も斜面下端付近に位置する住居跡状遺構で，大半は西方調査区外に延びる（標高237.5ｍ）。平面形方形状の住居の北辺と東辺の住居壁・壁溝と平坦面，そして柱穴を含むピット数個から成る。竪穴住居跡ＳＢ19の南６ｍにあり，南及び南東側には近接して住居跡状遺構ＳＢ22やＳＸ９が存在する。

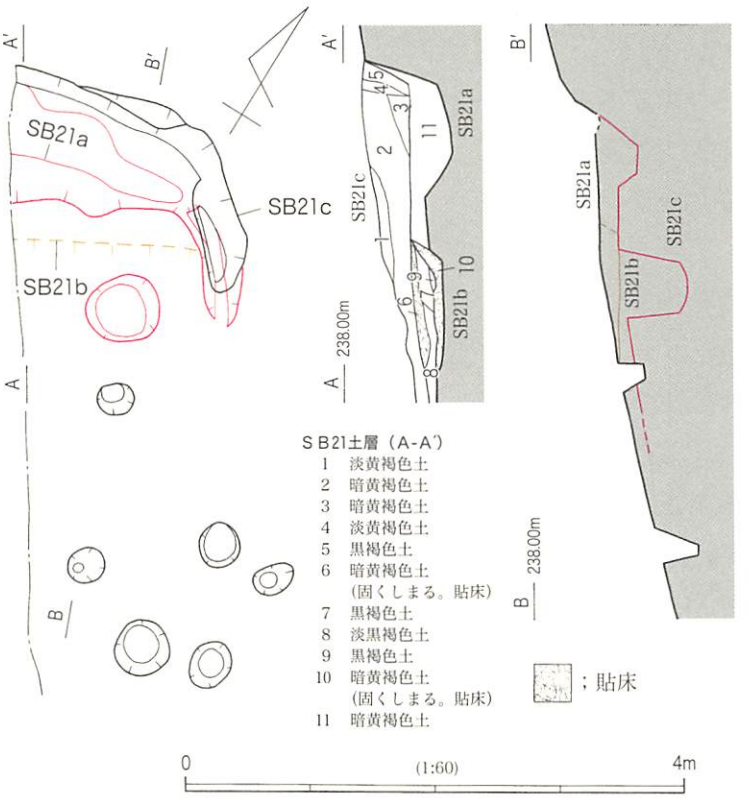
規模　現存規模は東西方向２ｍ，南北方向2.7ｍ程度で，３軒の住居が重複する。住居壁の東辺をほぼ共用し，北辺を南北に移動させている。最も先行するＳＢ21ａは北壁・東壁と住居壁沿いの壁溝，そして平坦面，柱穴からなる。現存規模は，東西方向1.94ｍ，南北方向２ｍ，壁高（最大）66㎝である。後出のＳＢ21ｂ・21ｃはいずれも調査区西辺の土層観察により検出したもので，平面的には見出すことはできなかった。ＳＢ21ｂはＳＢ21ａ北壁の南1.2ｍほどのところに住居北壁が存在し，先行するＳＢ21ａ平坦面の15㎝上方付近から掘り込まれた住居で，厚さ10㎝の貼床（暗黄褐色土・10層）を施している。その現存規模は東西方向1.4ｍ，南北方向1.4ｍで，壁高は15㎝である。このＳＢ21ｂ及びＳＢ21ａの上方12～24㎝に平坦面をもつＳＢ21ｃは平面的にはほぼＳＢ21ａ＋21ｂと重なる。つまり，北辺の住居壁はＳＢ21ａのそれとほぼ合致し，平坦面が高くなっただけともいえる。その規模は，東西方向２ｍ，南北方向2.4ｍ，壁高（最大）30㎝である。

平坦面　最後出のＳＢ21ｃの平坦面はＳＢ21ｂ覆土上に貼床（暗黄褐色土・６層）を施しているが，ＳＢ21ｂ覆土の上面には貼床はみられない。３軒の住居の平坦面はいずれもほぼ水平である。

壁溝　最も先行するＳＢ21ａの北壁と東壁に沿って壁溝が存在するが，北壁沿いの壁溝は幅（最大）84㎝，深さ（最大）22㎝と規模の大きなもので，壁溝以外の性格が考えられる。東辺の壁溝



第29図　ＳＢ20実測図（１：60）



第30図　ＳＢ21実測図（１：60）

は幅26cm，深さ６cmである。ＳＢ21ｃは東辺には幅20cm，深さ６cmの壁溝が存在するが，北壁には壁溝はみられない。ＳＢ21ｂには壁溝は存在しない。

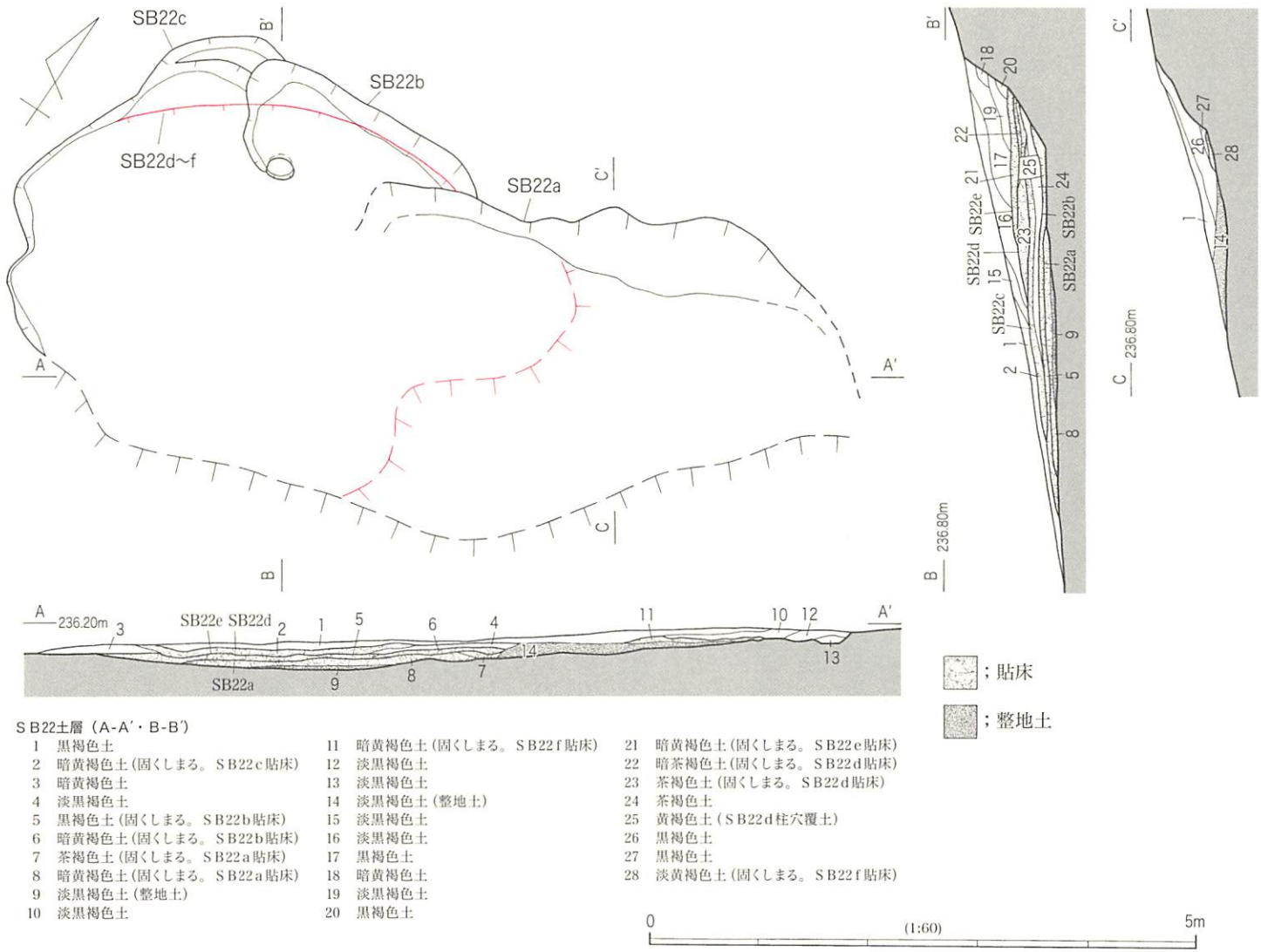
柱穴　３軒とも柱穴は明確でない。床面中央のＳＢ21ａに伴うとみられるピットは長径59cm×短径53cm，深さ54cmの規模で，底面の標高は236.77ｍである。このほか南斜面に径30～40cm，深さ20～30cmのピットが存在するが，ＳＢ21ａ～21ｃとの関連は不明である。

ＳＢ21に伴う遺物はない。

㉒ＳＢ22（第31図，図版20ａ）

立地　調査区最南端の最も低所側にある住居跡状遺構である（標高238m）。ＳＢ19の南10mにあり，調査区南辺際に位置する。西に近接してＳＸ９がある。

規模・床面（貼床）　東西方向８ｍ，南北方向４ｍの横（東西）方向に長い不整長方形の平面形である。北辺と西辺に住居壁をもち，広い平坦面があるが，壁溝・柱穴は明確でない。西半で５軒の住居（ＳＢ22ａ～22ｅ）が厚さ数cmの貼床を介してほぼ上下に重なり，最後出の住居ＳＢ22ｆは東半に中心を移して建て替えられた住居である。即ち，計６軒の平面形不整長方形ないし不整楕円形の住居跡状遺構がほぼ上下に重複する。これらの住居の個別の規模は不明確だが，西半の住居群はほぼ東西方向5.1m×南北方向3.78mの規模で，東半の最後出の住居であるＳＢ22ｆの規模は東西方向4.8m×南北方向３ｍほどと考えられる。最も先行するＳＢ22ａは厚さ３～５cmの整地土（淡黒褐色土・９層）の上に貼床（暗黄褐色土・８層，茶褐色土・７層）を施す（床面



ＳＢ22土層（A-A′・B-B′）

1　黒褐色土
2　暗黄褐色土（固くしまる。ＳＢ22ｃ貼床）
3　暗黄褐色土
4　淡黒褐色土
5　黒褐色土（固くしまる。ＳＢ22ｂ貼床）
6　暗黄褐色土（固くしまる。ＳＢ22ｂ貼床）
7　茶褐色土（固くしまる。ＳＢ22ａ貼床）
8　暗黄褐色土（固くしまる。ＳＢ22ａ貼床）
9　淡黒褐色土（整地土）
10　淡黒褐色土
11　暗黄褐色土（固くしまる。ＳＢ22ｆ貼床）
12　淡黒褐色土
13　淡黒褐色土
14　淡黒褐色土（整地土）
15　淡黒褐色土
16　淡黒褐色土
17　黒褐色土
18　暗黄褐色土
19　淡黒褐色土
20　黒褐色土
21　暗黄褐色土（固くしまる。ＳＢ22ｅ貼床）
22　暗茶褐色土（固くしまる。ＳＢ22ｄ貼床）
23　茶褐色土（固くしまる。ＳＢ22ｄ貼床）
24　茶褐色土
25　黄褐色土（ＳＢ22ｄ柱穴覆土）
26　黒褐色土
27　黒褐色土
28　淡黄褐色土（固くしまる。ＳＢ22ｆ貼床）

第31図　ＳＢ22実測図（１：60）

の標高235.81～235.89m)。ＳＢ22ｂはＳＢ22ａの床面上に貼床（黒褐色土・５層,暗黄褐色土・６層）を施す（床面の標高235.85～236.08m)。ＳＢ22ｃはＳＢ22ｂの床面上に貼床（暗黄褐色土・２層）を施す（床面の標高236.01～236.09m)。ＳＢ22ｄはＳＢ22ｃの床面上に貼床（暗茶褐色土・22層，茶褐色土・23層）を施す（床面の標高236.2m)。ＳＢ22ｅはＳＢ22ｄの床面上に貼床（暗黄褐色土・21層）を施す（床面の標高236.25m)。東半に移動する最後出のＳＢ22ｆは西半の住居群のうち，先行するＳＢ22ａ～22ｃの貼床の東側を限る整地土（淡黒褐色土・14層）の上に貼床（淡黄褐色土・28層，暗黄褐色土・11層）を施し，床面を形成している（床面の標高236.00m)。いずれの住居にも壁溝はみられない。

柱穴　明確なものはないが，ＳＢ22ｅの北壁際にある柱穴はＳＢ22ｅの貼床（21層）に覆われ，ＳＢ22ｄの貼床である22・23層を掘り込んでいることから，ＳＢ22ｅに伴う柱穴である可能性が高い。柱穴の規模は，長径36cm×短径26cm，深さ21cmである。

出土遺物（第39図70・71，図版48）　土師器・甕，鉄器・用途不明品各１点がある。いずれも覆土からの出土である。土師器・甕70は頸部から外湾気味に外上方に延びた口縁の端部を丸く納める。調整は，口縁内外面横ナデ，体部内面横方向のヘラケズリ，体部外面は調整不明である。復元口径17.6cm。71は長さ4.3cm，幅1.0cmの平面形長半円形の用途不明鉄器である。

（２）墓坑

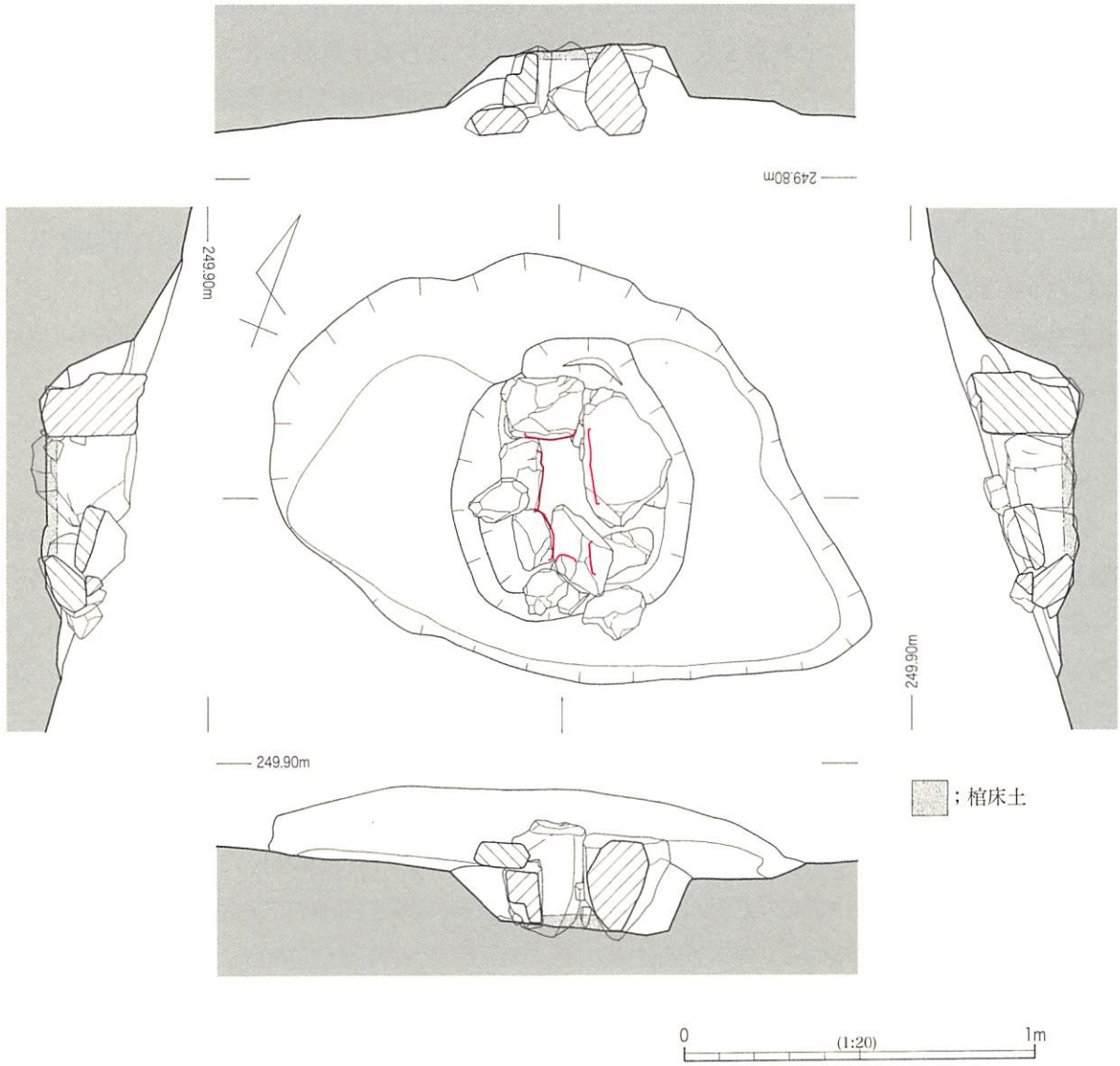
調査区南西半の竪穴住居跡など計22軒の住居から成る集落の居住域の東辺に沿うように，調査区中央に南北に計９基の墓坑（ＳＫ１～９）が列状に築かれている（標高240～249m)。墓坑群のすぐ東の調査区東半には横穴式石室を埋葬施設とする古墳４基が造られており，調査区中央から東半にかけては墳墓域とみることができる。墳墓域の西側に位置する９基の墓坑の内訳は，小型箱式石棺１基（ＳＫ１)，石蓋土坑墓３基（ＳＫ３・６・７)，木棺墓２基（ＳＫ５・８)，土坑墓３基（ＳＫ２・４・９）である。石蓋土坑墓・木棺墓と土坑墓ＳＫ４を含めた６基の墓坑は中軸線が斜面の等高線に平行になるように築かれているが，小型箱式石棺ＳＫ１と土坑墓ＳＫ２・９の３基は掘方・墓坑の中軸線が等高線に直交するように築かれている。また，石蓋土坑墓３基のうち，ＳＫ３・６は成人墓で，いずれも小口に板石（板材）を立てており，何らかの棺の存在が考えられる。

①ＳＫ１（小型箱式石棺）（第32図，図版20ｂ・20ｃ・21ａ）

墓坑のなかで最も斜面上方に立地する（標高249.60m)。掘方は二段掘りで，平面形不整形の上段掘方の規模は東西方向1.82m，南北方向1.14m，深さ（最大）22cmである。その中央に平面形不整隅丸長方形の下段掘方が掘り込まれ，そのなかに石棺が構築されている。下段掘方の規模は長さ（南北方向）0.79m，幅（東西方向）0.68m，深さ（最大）0.28mで，北小口は上段掘方と共有する。石棺長軸はN20°Wで北北西-南南東を指し，北東-南西方向に走る等高線に斜交～直交する。頭位は棺床の幅がやや広く，小口に大型の石材を用いる北北西側と考えられる。

箱式石棺の蓋石はすでに失われていた。石棺の内法規模は，長さ0.33m，幅（北北西小口）0.14m，同（南南東小口）0.11m，同（中央・最大）0.17m，深さ（小口石上端から棺床面まで・北北西小口）0.24m，同（同・南南東小口）0.14mである。また，南南東小口から東側壁南半にかけての側石・小口石には転倒・崩落による原位置の移動がみられる。

側石は西南西側壁・東北東側壁各２枚の石材を用いる。西南西側壁は長辺20cm，短辺19cm，厚さ11cmの方形の板石を北北西側に垂直に立て，南南東側には長辺21cm，短辺17cm，厚さ10cmの石材を縦長に置く。東北東側壁は北北西側に長辺40cm，短辺30cm，厚さ25cmの最大規模の石材を横長に置く。その南南東側には長辺22cm，短辺12cm，厚さ９cmの長方形の石材が石棺内側に倒れているが，原状は石材を縦長に立てていたと思われる。南南東小口にかけての周囲には10数～20cm大の長方形の角礫・板石数個に明らかな乱れがみられることから，この側石も一定の損壊を受けていると考えられる。小口石は，頭位側の北北西小口には長辺32cm，短辺22cm，厚さ18cmの分厚い長方形の角礫を縦長に立てる。南南東小口の石材は明確でないが，外傾する長辺16cm，短辺



第32図　ＳＫ１実測図（１：20）

10cm，厚さ9cmの長方形の石材を縦長に用いていたと考えられる。南南東小口周辺にやや小形の石材が数点みられることから，足位である南南東側の両側石と南南東小口は石材を石室状に２枚程度重ねた石棺と石室の折衷的な形態であった可能性がある。

石棺の平面形は長方形で，石材の組み方は，北北西小口が東北東側石に小口石の東北東側端を宛がい，小口石に西南西側石の北北西側端を宛がうｂ類，南南東小口は石材の乱れがあり明確ではないが小口石を両側石が挟み込むａ類であった可能性がある。(註) 掘方底面に厚さ４cmの黄褐色砂質土を入れて棺床としている。棺床面は平坦である。

ＳＫ１からは遺物は出土していない。

註　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(Ⅲ) 1998年，61頁・表２須倉城遺跡墓壙一覧表　による。

②ＳＫ２（土坑墓）（第33図，図版21ｂ）

小型箱式石棺ＳＫ１の南3.2mの斜面に立地する（標高248.7m）。南１mに近接して住居跡状遺構ＳＢ１が，東2.4mには土坑墓ＳＫ４が，東北東４mには石蓋土坑墓ＳＫ３が位置する。墓坑の長軸は北北西-南南東方向を指し（N21°W），東北東-西南西方向に走る等高線に直交する。頭位は底面が高い北北西側と考えられる。

墓坑の平面形は不整隅丸長方形で，その規模は長さ1.77m，幅（最大）0.81m，深さ（北北西小口・最大）0.32m，同（南南東小口）0.03mである。坑底面は北が高く，高低差14cmで南に下傾する。墓坑内から鉄釘が出土しており，木棺が納められていた可能性がある。

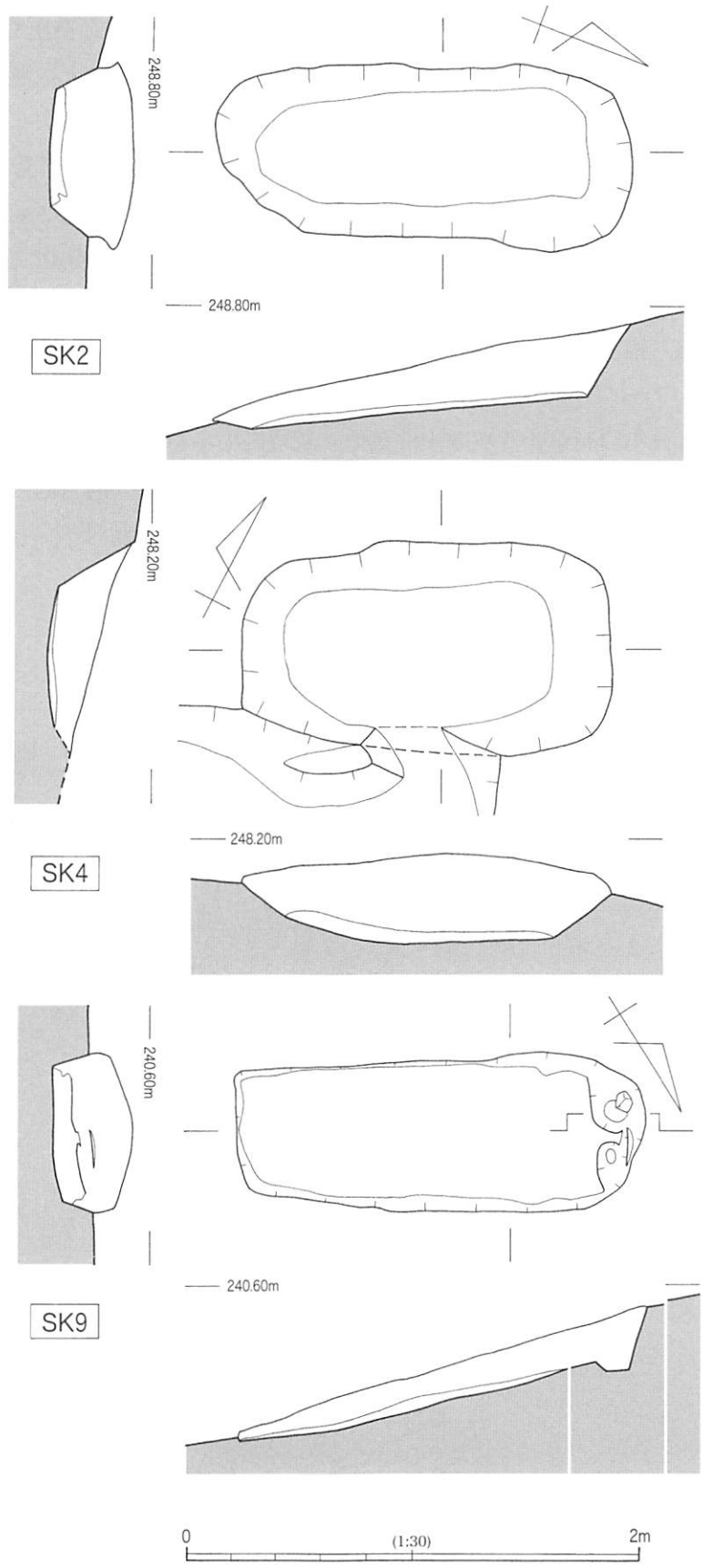
出土遺物（第39図72）　墓坑内から鉄釘１点が出土した。頭部・尖端を欠失し，多少曲がっているが，現存規模は長さ7.7cmで，断面形は方形である。

③ＳＫ３（石蓋土坑墓）（第34図，図版21ｃ・22ａ・22ｂ）

調査区北辺中央から南２mに位置する（標高249.1m）。墓坑の中軸線はほぼ等高線に沿い，長軸は北東-南西方向を指す（N46°E）。頭位は，坑底面が幅広くやや高い北東小口側と考えられる。

墓坑は南西小口側を40cm近く削平され，南西小口側の蓋石２枚程度と小口石を失っている。墓坑の平面形は隅丸長方形で，現存規模は長さ1.85m，幅（北東小口）0.86m，同（南西小口）0.37m，同（最大）0.88m，深さ（北東小口）0.36m，同（南西小口）0.05m，同（最大）0.39mである。

蓋石は，北東小口～中央に細長い長方形状の角礫や分厚い板石５枚が残るが，削平を受けた南西小口側にもう２枚程度の存在が考えられ，原状は計７枚ほどの蓋石が構架されていたと思われる。北東小口側から２・４・５枚目にやや大型の石材を用い，１・３枚目の石材は細長く小型のものを用いる。北東小口寄りの石材は長辺52cm，短辺20cm，厚さ20cmの三角柱状，北東小口から２枚目は長辺71cm，短辺30cm，厚さ18cmの長方形の板石，３枚目は長辺60cm，短辺19cm，厚さ15cmの長方形の板石，４枚目は最大規模の石材で長辺70cm，短辺33cm，厚さ23cmの不整長方形の角礫，南西小口寄りの１枚は長辺56cm，短辺31cm，厚さ19cmの長方形の板石を配する。なお，北東

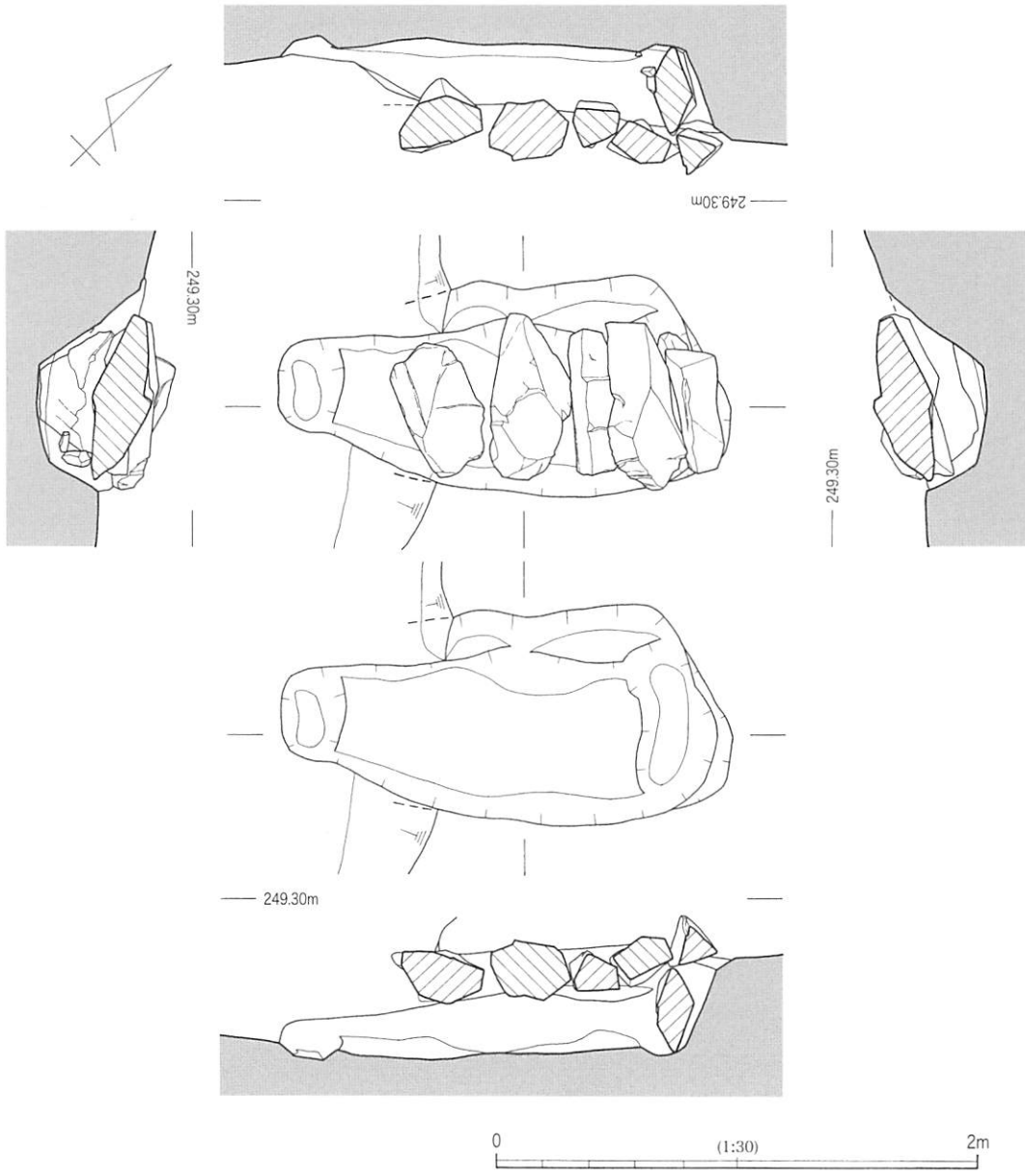


第33図　ＳＫ２・４・９実測図（１：30）

小口寄りの石材は小口石の直上にあり，他の蓋石に比べて10cm程度上方に突出していることから，蓋石というよりも墓標石的性格を考えるべきかもしれない。この石材を除く蓋石の下面は北東から南西方向に緩やかに下傾する（傾斜角度５°）。

墓坑底面は縦断面・横断面ともに中央が緩やかに凹む。その高低差は縦断面（北東-南西方向）６cm，横断面（北西-南東方向）10cmである。北東小口の蓋石下には長辺52cm，短辺36cm，厚さ16cmの板石を横長に立てている。墓坑底面の北東小口側にはその小口石を立てるための溝状の掘り込みがみられ，その規模は長さ63cm，幅18cm，深さ３～５cmである。南西小口側の墓坑底面にも同様の，長さ35cm，幅20cm，深さ４～８cmの溝状の掘り込みがあり，小口石が立てられていたと考えられる。

このようにＳＫ３は小口石を伴う石蓋土坑墓で，墓坑内の小口石で区画された埋葬空間は長さ（北東-南西方向）1.37m，幅（北西-南東方向・北東小口側）0.48m，同（同・南西小口側）0.31



第34図　ＳＫ３実測図（１：30）

mの大きさである。なお，墓坑の北西側壁は二段になっており，本来的には二段掘りの墓坑であったと考えられる。

ＳＫ３の出土遺物はない。

④ＳＫ４（土坑墓）（第33図，図版22ｃ）

ＳＢ１北東隅と重複する土坑墓で，北3.2mに石蓋土坑墓ＳＫ３，西2.4mに土坑墓ＳＫ２，東６mには第33号古墳が存在する。墓坑の中軸線はほぼ等高線に沿い，長軸は東北東-西南西方向を指す（N63°E）。頭位は，坑底面が広い東北東小口と考えられるが明確ではない。

墓坑の平面形は隅丸長方形で，その規模は長さ1.63m，幅（東北東小口）0.89m，同（西南西小口）0.87m，同（中央・最大）0.95m，深さ（東北東小口）0.26m，同（西南西小口）0.18m，同（中央・最大）0.32mである。坑底面は西南西小口側が高く，中央・東北東小口側に最大11cmの高低差で下傾する。

ＳＫ４からの出土遺物はない。

⑤ＳＫ５（木棺墓）（第35図，図版23ａ・23ｂ）

ＳＫ４の南東3.2mの斜面に立地する（標高247.0m）。北東5.2mに第33号古墳が，南3.2mには住居跡状遺構ＳＢ３がある。墓坑の中軸線は等高線に平行し，長軸は北東-南西方向を指す（N56°E）。頭位は坑底面が高い北東小口側とみられるが，明確ではない。

墓坑の平面形は不整隅丸長方形で，その規模は長さ1.54m，幅（北東小口）0.56m，同（南西小口）0.69m，同（中央）0.55m，深さ（北東小口）0.35m，同（南西小口）0.38m，同（中央）0.33mである。

この墓坑の両小口にはやや大型の石材１～２個を置き，墓坑内の両側壁沿いには小型の石材を多数並べている。南西小口上面近くに長辺50cm，短辺21cm，厚さ18cmの角礫を，北東小口上面の東隅には半ば墓坑外にずれた状態で長辺44cm，短辺22cm，厚さ17cmの角礫が置かれ，墓坑北東小口壁には外傾した長辺27cm，短辺25cm，厚さ７cmの板石が置かれていた。これらの石材の内，墓坑上面にあるものは木棺の蓋押さえないしは墓標石的性格が考えられる。一方，北東小口側の墓坑内に半ば倒れ込んだ状態の板石は小口石の可能性がある。また，墓坑内の両側壁際には10～20cm大，厚さ数～10cm程度の小型の板石・角礫が立て並べられていた。これらの上面は標高247.1m付近にほぼ揃っているが，その下端は５～10cmの差があり不揃いである。すなわち，その上面を一定の高さに揃えることに意味が見いだせることから，これらの板石・角礫は木棺側板の倒壊を防ぐための裏込石で，板石・角礫の上面を木棺側板の上端面に揃え，その上に木棺の蓋板を置いたものと考えられる。木棺の小口部分については，北東小口には小口石の存在が窺えるが，南西小口にはその痕跡がないことから，板材が用いられこれが腐朽したのではないかと考えられる。このように考えられる木棺の規模は，長さ１m，幅24～30cm，深さ27cm程度と推定される。

ＳＫ５からの出土遺物はない。

⑥ＳＫ６（石蓋土坑墓）（第35図，図版23ｃ・24ａ）

ＳＫ５の東８ｍに位置する（標高246.0ｍ）。後出する第33号古墳によって北東半部を大きく壊されており，北東側の小口石と大半の蓋石を失っている。横穴式石室の掘方西側壁外に僅かに西側2/3程度の墓坑と蓋石１枚及び南西小口石を残すにすぎない。墓坑の中軸線は等高線に沿い，長軸は北東-南西方向を指す（Ｎ50°Ｅ）。頭位は坑底面が高い南西小口側かと考えるが，北東小口側を失っている現状では明らかにしえない。

墓坑の現存規模は，長さ1.08ｍ，幅（南西小口）0.53ｍ，同（中央・最大）0.58ｍ，深さ（南西小口）0.27ｍ，同（中央・最大）0.42ｍである。坑底面は南西小口側が高く，北東方向に数cmの高低差で下傾する。

蓋石は南西小口寄りに１枚残存する。その大きさは長辺53cm，短辺27cm，厚さ（最大）20cmである。この蓋石の南西側にあるには長辺36cm，短辺18cm，厚さ（最大）10cmの棒状の石材があるが，これは蓋石というよりも南西小口石の上端に置かれた小口石上面の高さ調整あるいは墓標石的性格を考えるべきであろう。

南西小口石は長辺45cm，短辺30cm，厚さ（最大）18cmの板状の角礫を横長に立てている。墓坑底面には南西小口石を立てるための溝状の掘り込みがみられ，長さ40cm，幅12cm，深さ５cmの規模である。

ＳＫ６に伴う出土遺物はない。

⑦ＳＫ７（石蓋土坑墓）（第36図，図版24ｂ・24ｃ・25ａ・25ｂ）

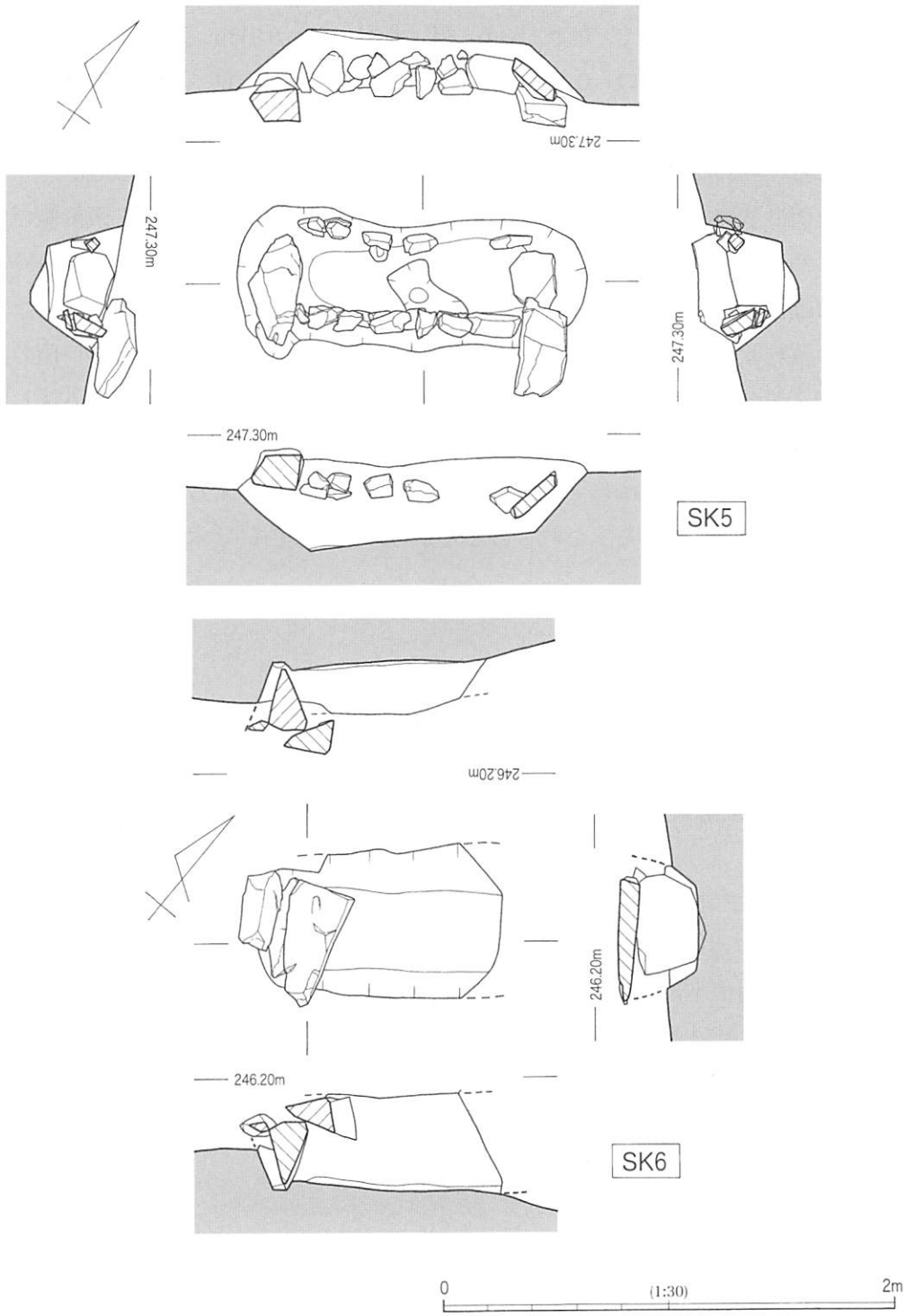
調査区中央に築かれた小型の石蓋土坑墓で，ＳＫ６の南6.4ｍに位置する（標高244.9ｍ）。北東10.8ｍに第11号古墳，南東1.6ｍに木棺墓ＳＫ８，南西9.2ｍには竪穴住居跡ＳＢ５が存在する。墓坑の中軸線は等高線に平行し，長軸は北東-南西方向を指す（Ｎ52°Ｅ）。頭位は北東小口と南西小口のいずれか明確ではない。なお，南東側に長さ2.53～2.57ｍ，幅（最大）0.45ｍ，深さ（最大）0.21ｍの北東-南西方向に延びる溝状の掘り込みがあり，この掘り込みによって墓坑南東側壁の上半を壊されている。

墓坑は平面形不整隅丸長方形で，長さ1.28ｍ，幅（現存・南西小口）0.35ｍ，同（現存・北東小口）0.42ｍ，同（現存・中央・最大）0.56ｍ，深さ（南西小口）0.59ｍ，同（北東小口）0.39ｍ，同（中央）0.5ｍである。坑底面の両小口には溝状の掘り込みがあり，小口板あるいは小口石が差し込まれていたとみられる。各掘り込みの規模は，南西小口の掘り込みが長さ27cm，幅12cm，深さ８cm，北東小口の掘り込みが長さ34cm，幅10cm，深さ11cmである。これらの溝状掘り込みに挟まれた埋葬空間の規模は，長さ0.55～0.57ｍ，幅（南西小口・北東小口）0.25ｍ，同（中央・最大）0.27ｍである。なお，南西小口の溝状掘り込みの背後には長さ15cmの空間があり，ここに厚さ10cmの黄褐色粘質土が入れ込まれているが，南西小口板（石）の裏込土と考えられる。

蓋石は大型の角礫２枚を用いており，南西小口側の蓋石が長辺40cm，短辺38cm，厚さ23cm，北東小口側の蓋石が長辺53cm，短辺40cm，厚さ27cmの大きさである。南西小口側の蓋石の下にやや

小型の長辺29cm，短辺20cm，厚さ17cmの角礫が存在するが，これは南西小口板（石）の裏込土の上面に置かれおり，裏込めの補強的機能を果たしたものと思われる。

ＳＫ７からの出土遺物はない。



第35図　ＳＫ５・６実測図（１：30）

⑧ＳＫ８（木棺墓）（第36図，図版25ｃ・26ａ）

ＳＫ７の南東1.6mに並列するように築かれた木棺墓である（標高244.2m）。南西8.8mに竪穴住居跡ＳＢ５，北東10.8mに第11号古墳，南東6.8mに竪穴住居跡ＳＢ18が存在する。墓坑の中軸線は等高線に平行し，長軸は北東-南西方向を指す（N45°E）。頭位は，墓坑の幅が広く，蓋石に大型の石材を用いる北東小口側と考えられる。

墓坑の平面形は不整隅丸長方形で，長さ2.68m，幅（北東小口）0.91m，同（南西小口）0.59m，同（最大）0.96m，深さ（北東小口）0.4m，同（南西小口）0.39m，同（中央・最大）0.46mの規模である。北西側壁の北東側には坑底面上方15cmほどのところに狭い平坦面があり，二段掘りの墓坑と考えられる。坑底面は側壁・小口壁際が高く中央が深い（高低差７～10cm）。

両小口の墓坑上面に２個ずつ角礫が置かれているが，その出土状況や位置から頭位側の北東小口の大型の角礫２個は木棺の蓋板を押さえるための石材と考えられる。北東側の角礫が長辺66cm，短辺35cm，厚さ27cm，南西側の角礫が長辺45cm，短辺35cm，厚さ24cmの大きさである。なお，前者の角礫の下面は墓坑北西側壁の狭い平坦面とほぼ同じ高さにある。一方，南西小口側の墓坑内部には小型の角礫２個がある。ひとつは一辺30cm，厚さ18cmの方形の角礫で，やや外傾しており小口石と考えられる。もうひとつは長辺30cm，短辺21cm，厚さ22cmの長方形の角礫で，これを横長に置いているが，坑底面から15cmほど上方にあり，石棺の側石と捉えるよりは木棺側板の裏込石とみる方がより妥当と考えられる。これらのことから，本墓坑内には木棺が納められていた可能性が高いが，詳細は不明である。

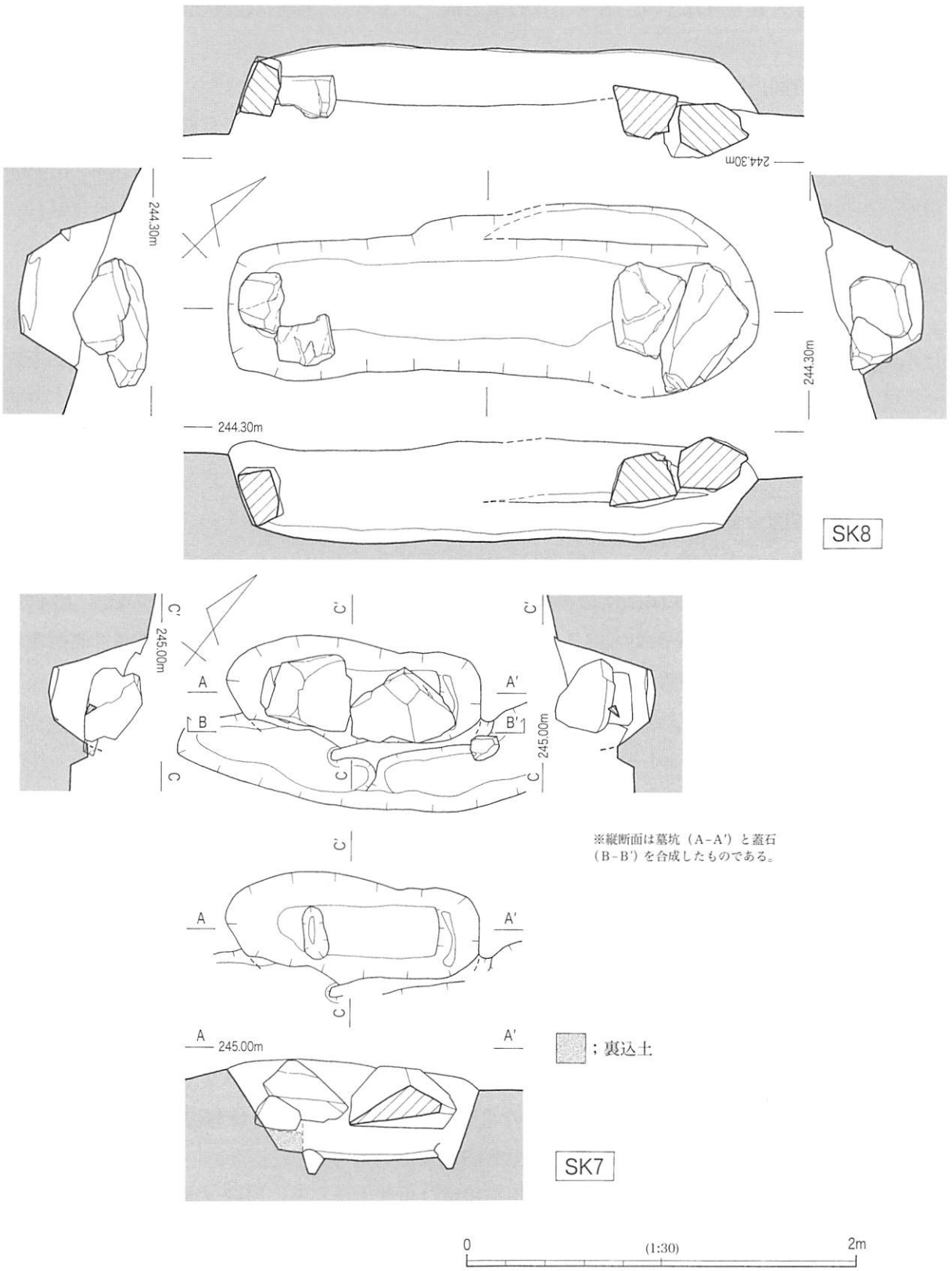
⑨ＳＫ９（土坑墓）（第33図，図版26ｂ・26ｃ）

調査区中央の竪穴住居跡ＳＢ18の南側に近接して築かれた土坑墓である（標高240.5m）。ＳＫ８の南東13mに位置し，南西5.6mには竪穴住居跡ＳＢ17が存在する。墓坑の中軸線は等高線に直交し，長軸は西北西-東南東方向を指す（N59°W）。頭位は，坑底面が高い西北西小口側と考えられる。

墓坑の平面形は不整長方形で，長さ1.78m，幅（西北西小口）0.66m，同（東南東小口）0.54m，同（最大）0.7m，深さ（西北西小口）0.24m，同（東南東小口）0.02～0.06mである。坑底面は西北西小口が高く，東南東小口方向に大きく下傾している（高低差35cm）。平面形からみれば墓坑だが，坑底面がつよく傾斜することからやや疑問が残る。なお，西北西小口の坑底面には深さ数cmの浅い掘り込みが２か所あり，墓坑の小口壁の数cm上方にはごく狭い平坦面がみられるが，これらが本墓坑の構造面のどのような点を反映しているのかは明確でない。

（３）性格不明の遺構

宮の本遺跡（集落跡）の西半の居住域及び墓域には性格不明の遺構９基が点在する（ＳＸ１～９）。ＳＸ１～４は斜面上半の調査区中央の墓域北西半付近に単独で存在し，ＳＸ５～９は調査区西辺寄り中央の居住域内に住居と重複して存在する。ＳＸ１～３は焼土・炭化物を多量に含む



第36図　ＳＫ７・８実測図（１：30）

焼土坑，ＳＸ４～６・８は土坑，ＳＸ７は石積遺構，ＳＸ９は不整形な段状遺構である。

①ＳＸ１（第37図，図版27ａ）

調査区北西辺中央付近に位置する焼土坑で（標高249.4m），南東0.8mに石蓋土坑墓ＳＫ３が存在する。平面形は南北方向に長軸をもつ楕円形で，南北0.78m，東西0.54m，深さ（最大）0.08mのごく浅い土坑である。坑底面は北から南に高低差13cmで下傾する。覆土には焼土を含む。

②ＳＸ２（第37図）

調査区北西辺中央に位置する土坑で（標高249.3m），ＳＸ１の南西5.6mに位置する。北1.6mに小型箱式石棺ＳＫ１が，南東２mには土坑墓ＳＫ２が存在する。平面形不整楕円形の浅い土坑で，その規模は北東-南西方向1.22m，北西-南東方向0.82m，深さ（最大）0.15mである。坑底面は北西側が高く，南東方向へ８cmの高低差で緩やかに下傾する。覆土には炭化物を多く含む。

③ＳＸ３（第37図，図版27ｂ）

調査区中央北半にある焼土坑で（標高247.2m），ＳＸ２の東10.8mに位置する。第33号古墳の周溝外１mに近接し，南西3.6mには木棺墓ＳＫ５が位置する。平面形不整円形の浅い土坑で，北東-南西方向1.1m，北西-南東方向１m，深さ（最大）0.1mの規模である。坑底面は北西側が高く，南東方向に12cmの高低差で下傾する。覆土に多量の炭化物粒と焼土を含む。

④ＳＸ４（第37図，図版27ｃ）

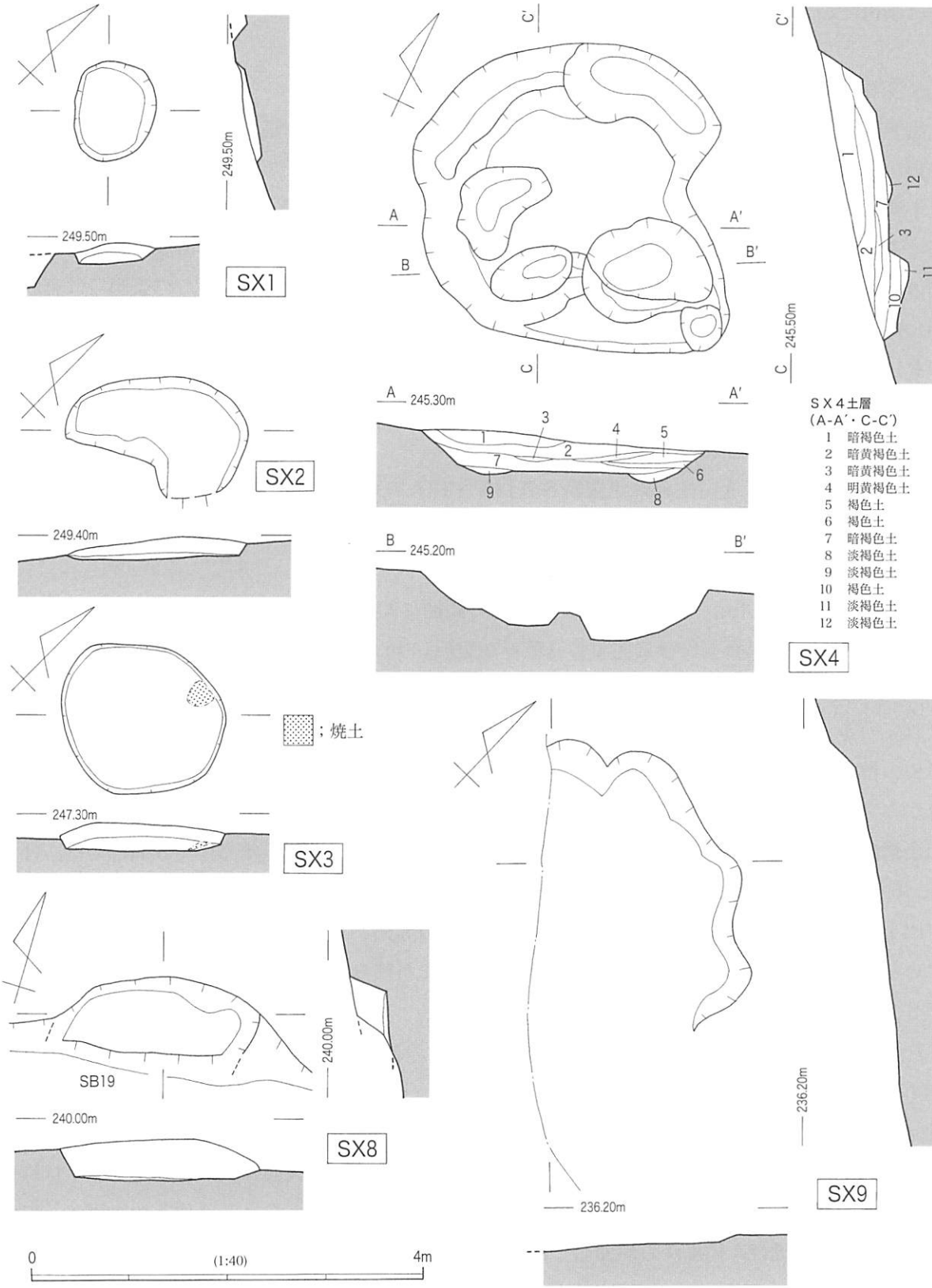
調査区中央にある大型の土坑状の掘り込みで(標高245.0m)，ＳＸ３の南10mに位置する。西2.4mに住居跡状遺構ＳＢ３，南４mに竪穴住居跡ＳＢ５，北東４mに石蓋土坑墓ＳＫ７や木棺墓ＳＫ８が存在する。平面形不整円形で，規模は南北方向2.06m，東西方向２m，深さ（最大）0.5mである。北西壁に幅の狭い平坦面があり，坑底面の壁際に計４か所の深さ数～20cmほどの掘り込みがみられる。２層の暗黄褐色土はほかの覆土と比べるとやや締りがあり，貼床的性格も考えられる。坑底面は北が高く，南に10cm程度の高低差で緩やかに下傾する。

⑤ＳＸ５（第13図，図版28ａ・28ｂ）

調査区西辺中央の竪穴住居跡ＳＢ８とその北東側で重複する土坑で（標高243.9m），北２mに住居跡状遺構ＳＢ７，北東2.8mには竪穴住居跡ＳＢ６が存在する。

平面形は東西方向に長い不整楕円形で，現存規模は東西方向1.4m，南北方向1.12m，深さ（最大）0.41mである。坑底面は二段になっており，西側から北側にかけて坑底面から数cmの高さに幅の狭い平坦面がある。

出土遺物（第39図73，図版49）　坑底面中央で出土した須恵器・杯である。ハの字に外下方に延びる短い高台の端部が角張り，体部は底部から外上方に開き気味に延びる。器表面は内外面とも



第37図　ＳＸ１～４・８・９実測図（１：40）

に灰黒色だが，胎土は灰白色の瓦質に近い。高台径5.4cm。

⑥ＳＸ６（第17図，図版28ｃ）

調査区西辺中央にある住居跡状遺構ＳＢ11の西端と重複する掘り込みである（標高242.0m）。その上面は竪穴住居跡ＳＢ11ａの貼床によってほぼ全面的に覆われており，ＳＢ11に先行することが明らかである。ほぼ東西方向に２つの掘り込みが連結した形態（ＳＸ６ａ・６ｂ）で，平面形は不整楕円形である。その規模は東西方向4.2m，南北方向1.32mである。西側のＳＸ６ａは東西方向1.86m，南北方向1.32m，深さ（最大）0.71mで，２mほどの間隙を挟んで東側には東西方向1.8m，南北方向1.2m，深さ0.58mの規模のＳＸ６ｂが存在する。ＳＸ６ａ・６ｂともに北辺はＳＢ11の床面に接し壁が存在するが，南辺はＳＢ12やＳＢ13と重複し，壁面を失っている。

⑦ＳＸ７（第38図，図版29ａ・29ｂ）

調査区西辺中央に近い住居跡状遺構ＳＢ13ａ・13ｂの西端の直上に造られた石積遺構である（標高241.0m）。石材が積まれている基底面はほぼＳＢ13ｂ北壁際の緩斜面最高所の標高に近く，ＳＢ13ｂとの関連性が窺われるが，明確ではない。

現状では，南北2.4m，東西1.8mの長方形状の範囲に20～50cm大の角礫を高さ30～50cm程度積んでいるが，平坦面上にある北半の石積みが東西1.8m，南北1.2mの長方形状に比較的整然と積まれているのに対して，南半の石積みは南に下傾する緩斜面に存在しており，石の並びもやや乱れている。このことから，南半の石積みは崩落している可能性が高く，本来的にはＳＸ７は北半の石積みを主体とするものであったと思われる。石積みの西辺中央に24cm×18cmの焼土の広がりがみられ，焼土の北0.54mでは鉄滓が出土した。下部遺構は検出することはできなかった。

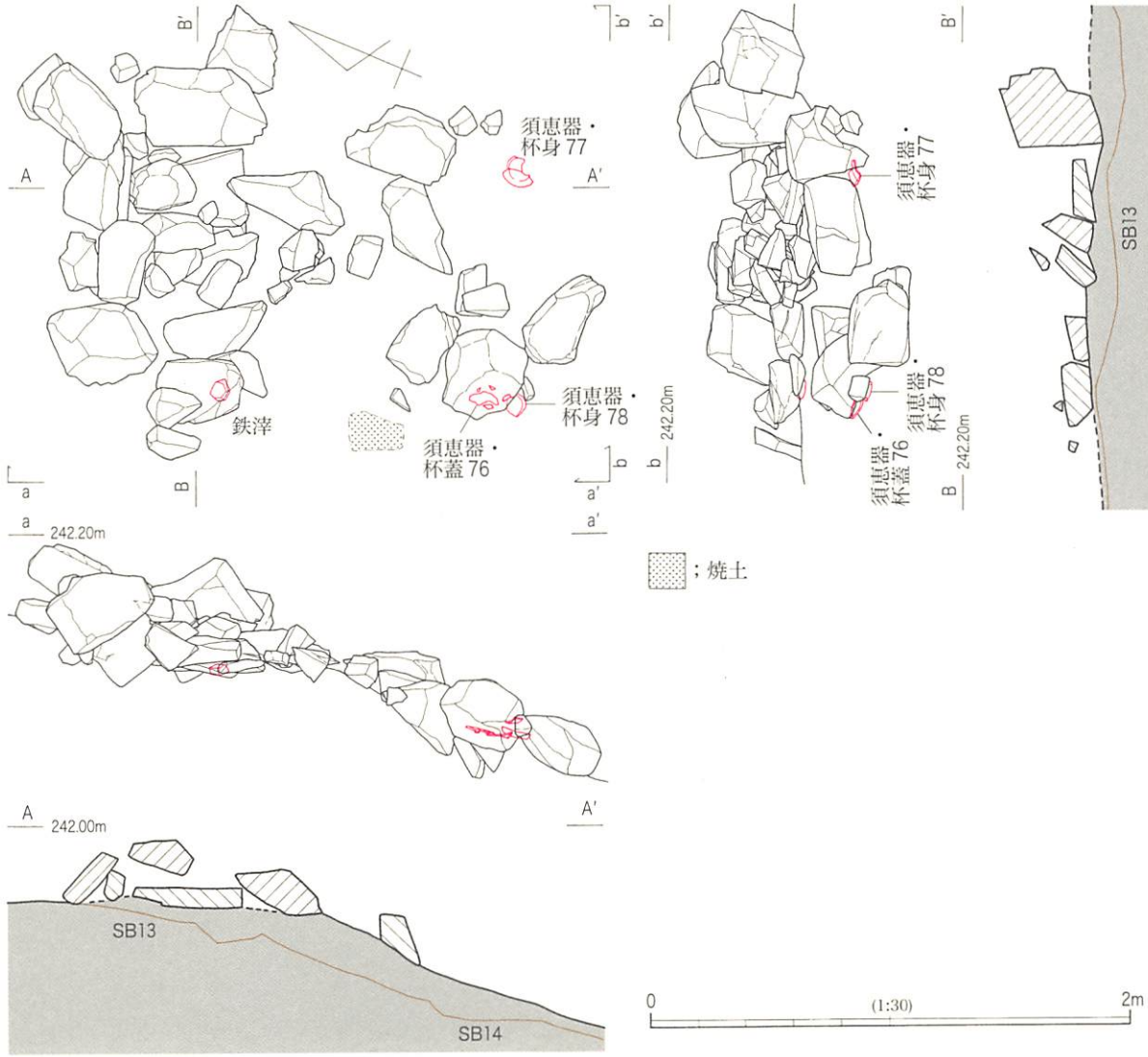
出土遺物（第39図74～79，図版49）　須恵器（杯蓋・杯身・椀・壺口縁部片）６点がある。杯蓋75，杯身77の２点は石積みの南西隅の角礫の下部付近，杯身76は石積み南辺東側の角礫の裾付近で出土した。また，杯蓋74と壺口縁部片79は石積みの周囲から出土した。いずれも原位置を留めているかどうかは明らかでない。椀78は遺構検出時に石積みの周辺で出土した。同一個体の破片がＳＸ６やＳＢ11・12の覆土からも出土している。

杯蓋74は径8.2cmの輪状つまみをもつもので，つまみは外上方に開き気味に延びて端部を丸く納める。平坦で広い頂部から外下方に直線的に延び，途中で屈曲して外下方に開き気味に下り，端部を丸く納める。調整は，外面頂部中央が回転ヘラ切り不調整，頂部内面が一定方向のナデ以外は内外面ともに回転ナデである。復元口径14.7cm，器高3.1cm。表面は灰黒色だが，胎土は灰白色で比較的精良なものの，焼成は良くない。杯蓋75は扁平なつまみをもち，頂部から屈曲して外下方に直線的に延びた体部から屈曲して短く垂下する口縁の端部を丸く納める。調整は，頂部上半に回転ヘラケズリを行う以外は内外面ともに回転ナデである。色調は暗灰白色で胎土に砂粒を比較的多く含む。口径14.8cm，器高3.1cm。杯身76は平底の底部から強く屈曲して開き気味に直立する口縁の端部を丸く納める。調整は，外底面が回転ヘラ切り不調整，その他は回転ナデである。

灰白色の色調で，胎土に砂粒を比較的多く含む。復元口径10.8cm，器高3.4cm。杯身77は平底の底部から緩やかに屈曲して外上方に直線的に延び，口縁の端部を丸く納める。調整は，外底面が回転ヘラ切り不調整，体部内外面は回転ナデ，内底面は不調整である。色調暗灰白色で，胎土に砂粒を比較的多く含む。復元口径12.2cm，器高3.4cm。椀78は丸みが強く，底が深い体部と特徴的な２段重ねの高台をもつもので，仏器である銅鋺の形態に酷似する。丸みのある平底から強く曲がり，垂直に立ち上がる体部～口縁の端部をやや尖り気味に納める。ハの字に延びた高台の端部は上下２段に外方に突出する。調整は内外面全体回転ナデで，体部外面には２条一単位の沈線を２単位施している。復元口径16.0cm，器高7.9cm。79は復元口径8.4cmの壺口縁部片とみられるもので，内外面に回転ナデを施す。

⑧ＳＸ８（第37図，図版29ｃ）

調査区西辺南半の南隅付近の斜面にある竪穴住居跡ＳＢ19ｄの北辺東端の住居壁と重複する土坑で，その先後関係は不明である。平面形は楕円形状で，東西方向1.36m，南北方向0.52m，深さ（最

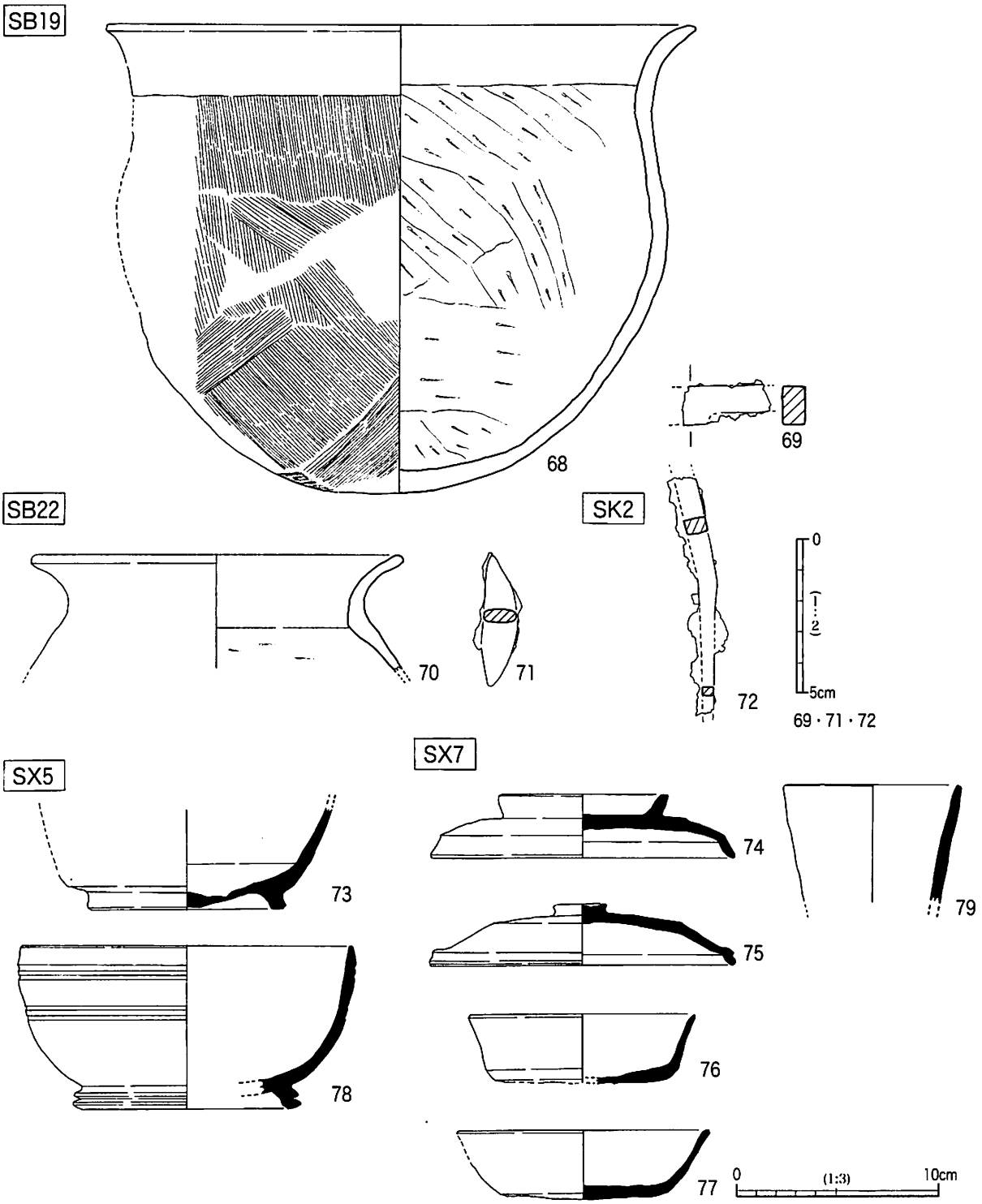


第38図　ＳＸ７実測図（１：30）

大）0.25mの現存規模である。坑底面は北から南に緩やかに傾斜する（高低差４cm）。

⑨ＳＸ９（第37図）

調査区西辺南端に位置する段状の掘り込みで，住居跡状遺構ＳＢ21の南東，同じくＳＢ22の南西側に近接して存在する（標高236.2m）。西半は調査区外に延び，全容は不明であるが，現存規模は東西方向２m，南北方向2.8m程度で，平面形は不整形である。北壁の高さ（最大）0.17mである。平坦面はなく緩斜面となっており，高低差30cm程度で北から南に傾斜している。



第39図　宮の本遺跡出土遺物実測図（5）（1：2，1：3）ＳＢ19②・22，ＳＫ２・８，ＳＸ５・７

2．宮の本第11号古墳（第３・４図，図版30）

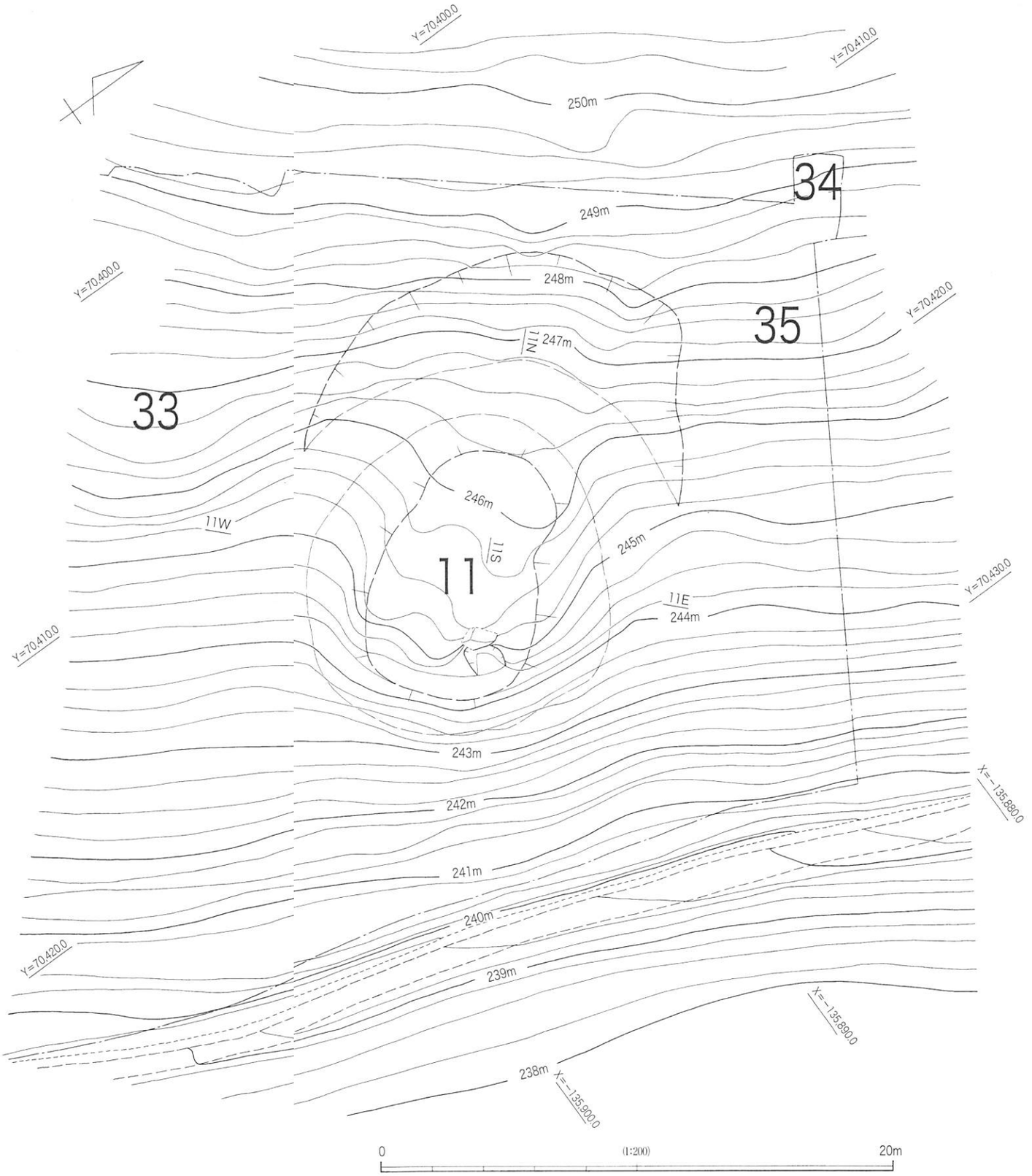
（１）立地と調査前の状況（第40図，図版31ａ・ｂ）

調査区東半のほぼ中央に位置する横穴式石室を埋葬施設とする円墳である。北北東から南南西方向へ延びる丘陵尾根端部の南東側斜面に立地する（標高242～246.5m）。調査区西半の竪穴住居跡・住居跡状遺構が集まる居住域から８～16m，調査区中央の石蓋土坑墓・箱式石棺・木棺墓などが南北に並ぶ墓域からは10m東側に位置する。西2.8mには横穴式石室の第33号古墳が，北6.8mに小型横穴式石室の第35号古墳が，同じく９mには小型横穴式石室の第34号古墳が立地する。第11号古墳を含めたこれら４基の古墳の横穴式石室はいずれも石室長軸が等高線に直交し，ほぼ南東方向に開口する。周辺の調査前の現状は山林である。調査前の第11号古墳は，北西-南東方向12.8m，北東-南西方向12m，高さ2.7mの規模をもつ平面形不整楕円形の墳丘の北西側背後に幅4.8～９mの不整円形の周溝が1/2周する円墳と考えられた。墳丘頂部は石室天井石直上まで削平されて平坦になっており，その南端近くで石室天井石の前端の大型の石材が1/2程度露出していた。これらのことから，本古墳の埋葬施設はほぼ南東側に開口する横穴式石室と予想された。

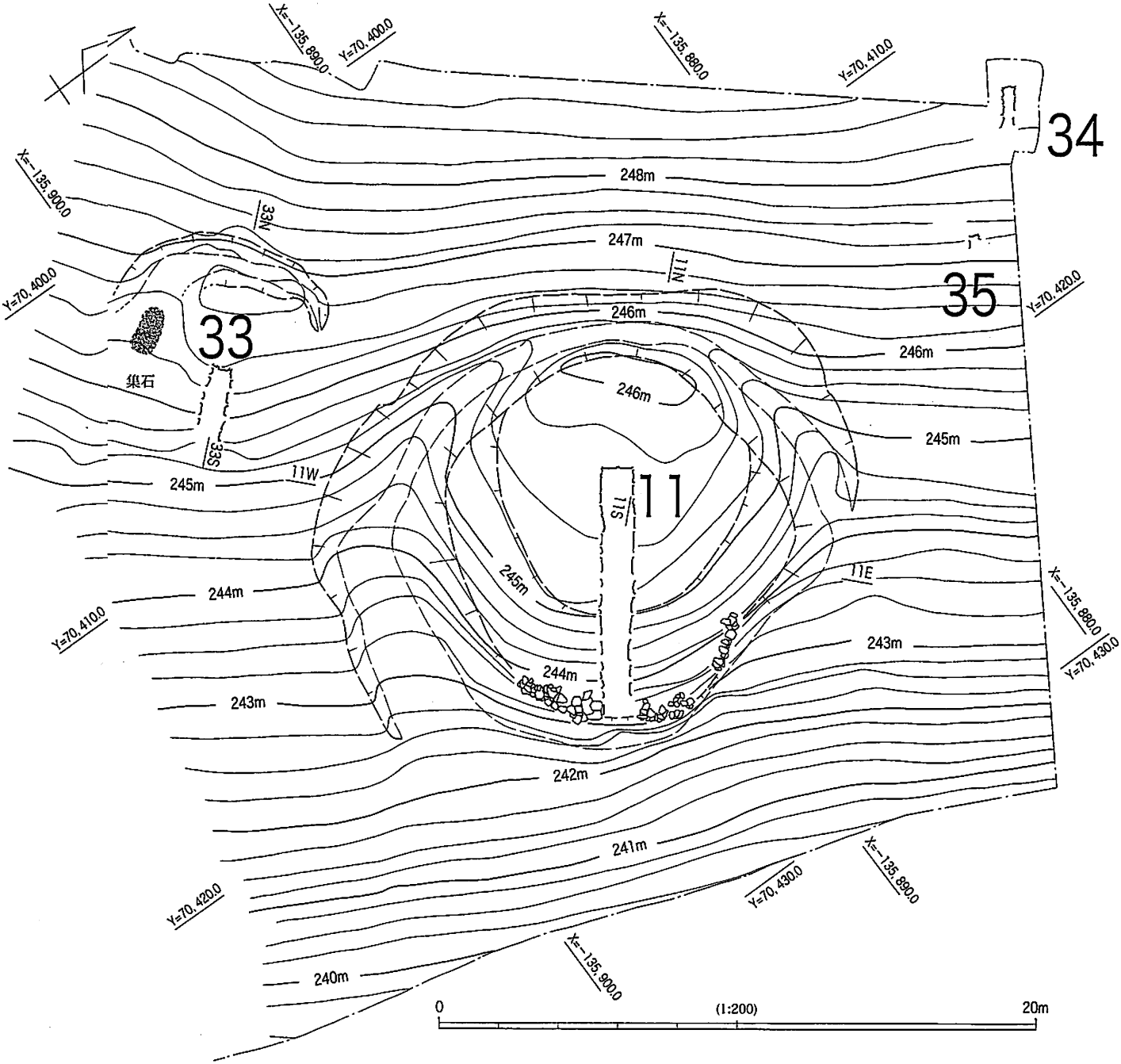
（２）墳丘・周溝（第41・42図，図版31ｃ～33ｂ）

第11号古墳の墳丘は，丘陵端部南東側の北西から南東方向へ下る斜面（傾斜角度18°）に築かれている。斜面を削平して南～西～北とほぼ半円形に廻る周溝とその前面（南東側）に墳丘を設けている。墳丘は北西-南東方向12.6m，北東-南西方向14.8mの大きさで，高さは北西側（石室背後）の周溝底面から0.84m，南東側（石室入口側）墳丘裾から3.5mを測る。周溝外縁までの古墳の規模は，北西-南東方向15.0m，北東-南西方向18.6mである。墳丘の平面形はやや方形状の不整円形である。周溝は幅2.2～４m，深さ0.54～0.84mと幅広で浅い。周溝底面は石室背後側が最も高く（標高245.58m），ここから東へ１m，南～東へ３mの高低差で下っている。

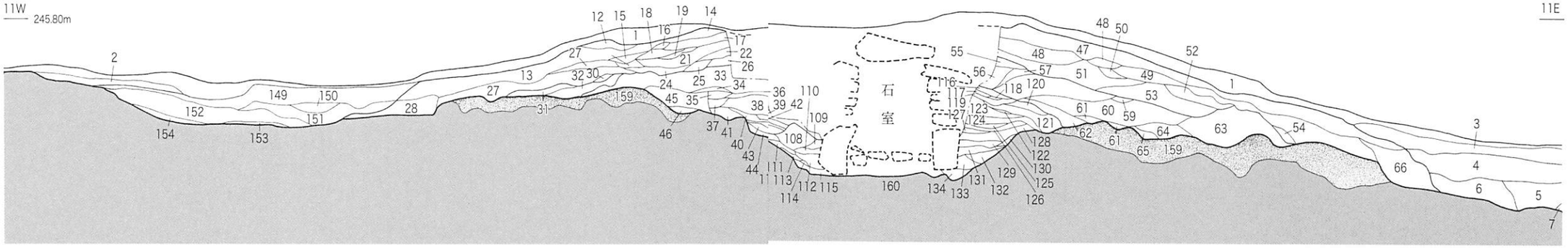
墳丘盛土の基盤面は北西-南東方向に傾斜し，南西-北東方向では南西側が高く，北東側へ0.66mの高低差で傾斜している。石室中軸線の北西-南東方向では不明確だが，南西-北東方向では南西側（高所側）で最大24cm，北東側（低所側）で最大48cmの厚さの旧表土（淡褐色土・159層）が安定してみられる。この旧表土層の上面は凹凸が顕著であり，整地された状況ではない。即ち，安定的な旧表土層の上面に整地・削平など何ら施すことなく，褐色土・黒褐色土・暗褐色土などの褐色土系の土を主体的に用いて盛土を行っている。盛土の厚さは最大1.32mである。墳丘盛土は，石室構築・裏込めを行ったのち，この石室を覆うように大きく２段階に分けて行われている。石室の裏込め（石室掘方埋土）は暗灰褐色土・暗褐色土・黒褐色土などを主に用いる（108～148層）。第一段階の盛土は石室天井石付近を最高所にして行われる盛土（厚さ40～90cm程度）で，黒褐色土を主体的に用いている（31～44・55～65・94～107層）。この第一段階の盛土の上に行われる第二段階の盛土は石室天井石を覆う最終的な盛土で，現状では天井石の上面で最大厚さ20cm程度残存するにすぎないが，本来的にはより厚いものであったと考えられる。この第二段階の盛土の厚さ（現存）は20～60cm程度で，褐色土・暗褐色土・灰褐色土・暗灰褐色土などを主体的に用いてい

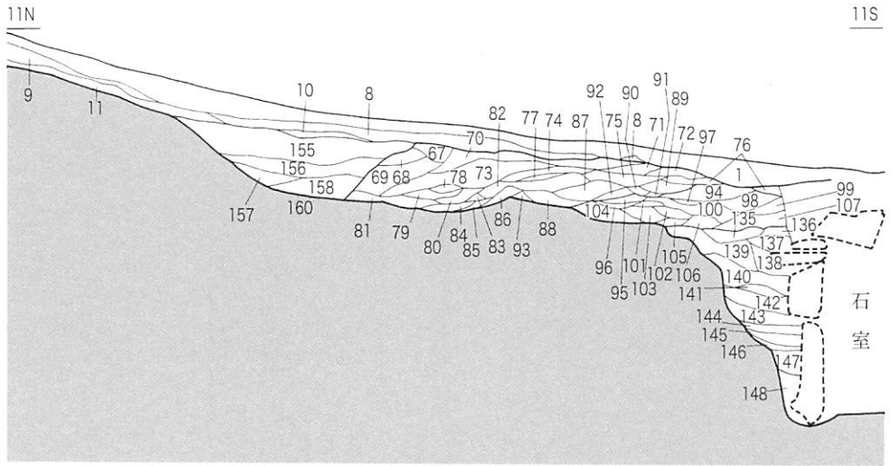


第40図　宮の本第11・33～35号古墳地形測量図（1：200）



第41図　宮の本第11・33～35号古墳墳丘測量図（1：200）





; 旧表土

第11号古墳土層
(11W-11E・11N-11S)
1　暗黄褐色土（表土）
2　淡褐色土
3　褐色土
4　暗褐色土
5　暗灰褐色土
6　黒褐色土
7　暗褐色土
8　淡褐色土
9　淡褐色土
10　淡灰褐色土
11　暗灰褐色土

墳丘盛土
①東西方向西半
12　褐色土
13　褐色土
14　褐色土
15　褐色土
16　灰褐色土
17　灰褐色土
18　灰褐色土
19　灰褐色土
20　灰褐色土
21　灰褐色土
22　灰褐色土
23　褐色土
24　暗灰褐色土
25　暗灰褐色土
26　暗灰褐色土
27　淡褐色土
28　淡灰褐色土
29　暗褐色土
30　暗褐色土
31　黒褐色土
32　黒褐色土
33　黒褐色土
34　黒褐色土
35　黒褐色土
36　黒褐色土
（黄色土を斑状に多く含む。）
37　黒褐色土
（黄～褐色土ブロックを多く含む。）
38　黒褐色土
39　黒褐色土
（黄色土ブロックを多く含む。）
40　黒褐色土
41　黒褐色土
42　黒褐色土
（黄～褐色土ブロックを多く含む。）
43　黒褐色土
44　黒褐色土
45　暗灰褐色土
46　暗灰褐色土
②東西方向東半
47　褐色土
48　暗褐色土
49　褐色土
50　褐色土
51　褐色土
52　褐色土
53　褐色土
54　褐色土
55　黒褐色土
56　黒褐色土
57　黒褐色土
58　黒褐色土
59　黒褐色土
（褐色土ブロックを多く含む。）
60　黒褐色土
61　黒褐色土
（黄色土ブロックを多く含む。）
62　黒褐色土
63　黒褐色土
64　黒褐色土
65　黒褐色土
66　暗褐色土
③南北方向北半
67　淡褐色土
68　淡褐色土
69　灰黄褐色土
70　暗褐色土
71　暗褐色土
72　黄褐色土
73　暗灰褐色土
74　暗褐色土
75　暗褐色土
76　黄褐色土
77　黄色土
78　黄褐色土
（淡黄色土ブロックを多く含む。）
79　暗灰褐色土
80　暗灰褐色土
81　暗灰褐色土
82　灰褐色土
83　灰褐色土
84　黒褐色土
85　黄色土
86　黄色土
87　暗橙褐色土
88　灰褐色土
89　暗褐色土
90　暗褐色土
91　暗褐色土
92　暗橙褐色土
93　灰褐色土
94　黒褐色土
（橙褐色土ブロックを多く含む。）
95　褐色土
96　黒褐色土
97　黒褐色土
98　黒褐色土
99　黒褐色土
100　黒褐色土
101　黒褐色土
（橙褐色土ブロックを多く含む。）
102　黒褐色土
103　黒褐色土
104　黒褐色土
105　黒褐色土
106　黒褐色土
107　黒褐色土

掘方埋土
①東西方向西半
108　暗灰褐色土
109　暗灰褐色土
110　暗灰褐色土
111　暗灰褐色土
112　暗灰褐色土
（黄色土ブロックを多く含む。）
113　黄色土
114　暗灰黄色土
115　暗灰褐色土
②東西方向東半
116　褐色土
（黄色土ブロックを多く含む。）
117　暗褐色土
（橙色土ブロックを多く含む。）
118　褐色土
（黄色土ブロックを多く含む。）
119　暗褐色土
（橙色土ブロックを多く含む。）
120　暗褐色土
121　暗褐色土
122　暗褐色土
123　暗褐色土
124　黄褐色土
125　暗褐色土
126　黒褐色土
127　暗褐色土
128　黄褐色土
129　暗褐色土
130　黄色土
131　暗褐色土
132　暗灰褐色土
133　暗黄褐色土
134　暗灰褐色土
③南北方向北半
135　黒褐色土
136　黒褐色土
137　黒褐色土
138　黒褐色土
139　黒褐色土
140　黒褐色土
141　黒褐色土
142　黒褐色土
143　黒褐色土
144　暗褐色土
（淡黄色土ブロックを多く含む。）
145　淡褐色土
146　淡黄色土
147　淡黄褐色土
（黒色土ブロックを多く含む。）
148　淡灰黄色土

周溝覆土
①東西方向西半
149　淡褐色土
150　淡灰褐色土
151　淡黒褐色土
152　暗灰褐色土
153　暗灰褐色土
154　黒褐色土
②南北方向北半
155　暗灰褐色土
（黒褐色土ブロックを多く含む。）
156　灰褐色土
157　淡灰褐色土
158　灰黄色土

旧表土
159　淡褐色土

地山
160　黄褐色土

0　(1:60)　10m

第42図　宮の本第11号古墳墳丘土層断面実測図（1：60）

る（12～30・47～54・67～93層）。斜面高所側の墳丘北西部では旧表土は薄く，周溝掘削などにより地山（黄褐色土）を一定度掘り込んでいるが，斜面低所側の墳丘南東部では旧表土層が厚く，墳丘裾における地山の露出はそれほど顕著ではない。これらのことから，本古墳の墳丘盛土に供された土は旧表土（淡褐色土）を供給源とする土が主体的で，旧表土層下の地山（黄褐色土）を供給源とする土はあまり用いられなかったと考えられる。このことは，地山を供給源とする黄褐色土系のブロックを含む土の盛土における使用頻度が全体的に少なく，盛土下層（第一段階の盛土）や石室裏込めの掘方埋土に一定度みられる程度であることからもいえよう。

（3）石室（第43～45図，図版31c・33c・34～41）

横穴式石室の長軸は北西-南東方向（N54°W）を指し，南東方向に開口する。石室は墳丘中央に設けられた平面形隅丸長方形の掘方のほぼ中央に構築されている。石室掘方の規模は，長さ7.8m，幅3.6～4.2m，深さ1～1.3mである。石室は天井石に石材1～2枚の欠失がみられることを除けば，ほぼ原状を保つ。石室の規模は，長さ（南西側壁）8.22m，同（北東側壁）7.62m，幅（奥壁）1.08m，同（敷石前端）1.08m，同（南西側壁立石部分）1.02m，同（閉塞石部分）0.7m，同（石室前端）0.9m，高さ（奥壁）1.38m，同（敷石前端）1.08m，同（棺台石部分）1.14～1.26m，同（南西側壁立石部分）0.96～1.32m，同（羨道北東側壁）0.24～0.9m，同（羨道南西側壁）0.42～0.96mである。石室の幅は0.9～1.08mとほぼ一定である。奥壁から5.5mの閉塞石近くまでは幅1.02～1.08mで，ここから閉塞石，さらには石室前端にかけてやや窄まり0.9mの幅となる。石室平面形はほぼ長方形である。石室の高さは，奥壁から5.16m付近までは天井石が存在するので，石室床面から天井石下面までの高さ，天井石がない羨道部分については床面から各側壁上端までの高さとする。ただ，石室床面が奥壁から2.28m付近までは敷石＋礫床で，棺床面から24～57cmの高さ（標高244.03m付近）にその上面が位置するので，敷石＋礫床上面から天井石下面までを石室の高さとみる。この敷石＋礫床上面から24cmの高低差で下がる棺台石部分，さらには閉塞石部分にかけては厚さ5～24cmの棺床土（暗灰褐色土）が施されており，3～7°の緩やかな傾斜で下傾する棺床土上面＝棺床面と天井石下面あるいは石室側壁上端までを石室の高さと考える。なお，この棺床面は閉塞石部分で更に21cm低くなる。石室の玄室と羨道の境界は分かりにくいが，南西側壁では奥壁から3.7～4.3m付近の石積みがそれより奥壁側の比較的整然とした石積みに比べて，やや小型の石材を乱雑に詰め込むような積み方で明らかに石積みの様子が異なる。そして，そのすぐ石室入口側の奥壁から4.3～4.7mの位置には大型の立石がある。また，北東側壁では奥壁から3.6～4.1m付近で石積みの仕方がより乱雑になるとともに，石材が小型になる。その奥壁から4.1～4.6mの箇所にはやや大型の石材を積み上げており，明らかな石積みの変化がみられる。この両側壁において石積みの状況が変化する奥壁から4.6～4.7m付近が玄室と羨道の境界であると考えられる。この部分がほぼ天井石の前端にあたることやこの付近で敷石＋礫床，棺台石の屍床区画が終わることからもこの考えは首肯できよう。なお，敷石＋礫床の前端は一段高くなっており，棺台石部分の屍床区画と区別している。この敷石＋礫床では耳環1対が，棺台

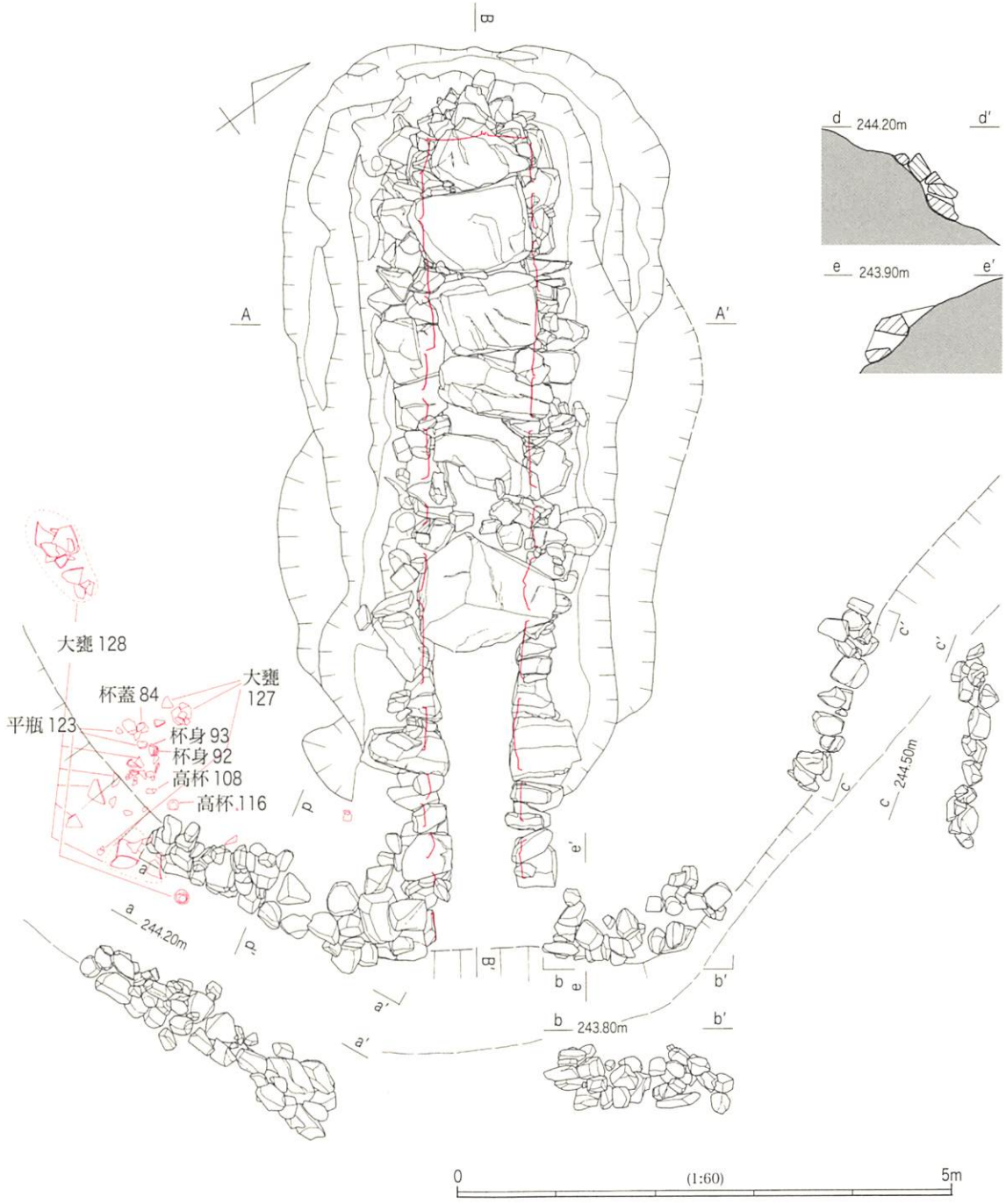
石部分では鉄釘が出土した。また，奥壁から5.58～6.48mの床面には閉塞石が存在する。石室前端から左右に墳丘南西裾・南東裾に沿って外護列石が延び，南西側の外護列石周辺の墳丘上や墳丘裾では須恵器・大甕をはじめとする多くの須恵器・土師器片が出土した。

①羨道　奥壁から4.6～4.7m付近から石室入口までを羨道とすると，その長さは南西側壁3.45m，北東側壁2.82mである。南西側壁は立石に接して３個の基底石が石室入口側にかけて存在する。立石に接して長辺102cm，短辺57cm，奥行65cmの大型の石材を横積みし，その南東側には長辺60cm，短辺54cm，奥行56cmの石材を縦長に広口積み，その南東側に長辺54cm，短辺34cm，奥行54cmの角礫を横積みしている。なお，立石の南東側に接する基底石ではその下面に10～30cm大の小型の角礫９個を，前端の基底石の下面には20～30cm大の小角礫４個をそれぞれ詰めて基底石の安定を図っている。これらの基底石の上に30～40cm四方，奥行30～74cmの石材を横長の小口積みしているが，その積み方はやや雑である。なお，最も入口側の基底石の南東側には30～40cm四方，奥行30～50cm程度の角礫を１～２段乱雑に横長の小口積みしているが，基底石に当たる大型の石材は存在せず，石材の下面は棺床面から20cm程度浮いている。或いは基底石上の石材か西側外護列石の石材が崩落した可能性がある。一方，北東側壁は基底石４個で，最も奥壁側の基底石上のみ２～３段の石積みがみられ，入口側の基底石上の石積みは失われている。奥壁側の基底石が長辺74cm，短辺60cm，奥行64cmの石材を横長の広口積み，その南東側は長辺84cm，短辺63cm，奥行75cmの石材を横長の広口積み，その南東側は長辺48cm，短辺42cm，奥行50cmの石材を横長の小口積み，そして石室前端には長辺54cm，短辺40cm，奥行42cmの石材を横長の小口積みする。そして，奥壁側の基底石上にのみ30～40cm大の小型の角礫を面が横長になるように比較的整然と２～３段積み上げている。

②玄室　奥壁から南西側壁の立石前端まで，北東側壁は石積みの目地が崩れてやや大型の石材を３段積む付近までを玄室と考える。玄室の長さは，南西側壁が4.8m，北東側壁が4.92mである。この玄室の平面形は幅が1.02～1.08mとほぼ一定の長方形である。

a．奥壁　下段に２枚の石材を縦長の広口積みに左右に並べて基底石とし，その上に大型の石材１枚を横長の広口積みに載せている。南西側の基底石は長辺92cm，短辺55cm，奥行54cm，同じく北東側の基底石は長辺94cm，短辺40cm，これらの基底石上に長辺65cm，短辺50cm，奥行32cmの規模の石材を置く。左右２個の基底石の間には長辺20cm，短辺10cm，厚さ10cmの小型の板石を縦向きに詰め，北東側の基底石の下面には長辺43cm，短辺23cm，厚さ16cmの長方形の板石を詰めて，基底石の安定と補強を図っている。

b．南西側壁　玄室前端の立石を含めて10個の石材を置いて基底石とし，これらの基底石の上面に４～５段ほど角礫を目地がある程度通るように比較的整然と積んでいる。その積み方は，多くの場合，角礫の長辺10～90cm（主体は20～60cm），短辺10～40cm（主体は10～30cm）の小口面を横長にして積む小口積みだが，大型の石材の場合は側面を横長にして積む横積みもみられる。10個の基底石は，奥壁からの１～６枚と10枚目（大型の立石）の計７個の基底石はいずれも石材を縦長に用いて広口積みに立てるが，奥壁から７枚目の小型の立石は石材の側面を縦長に用いて石



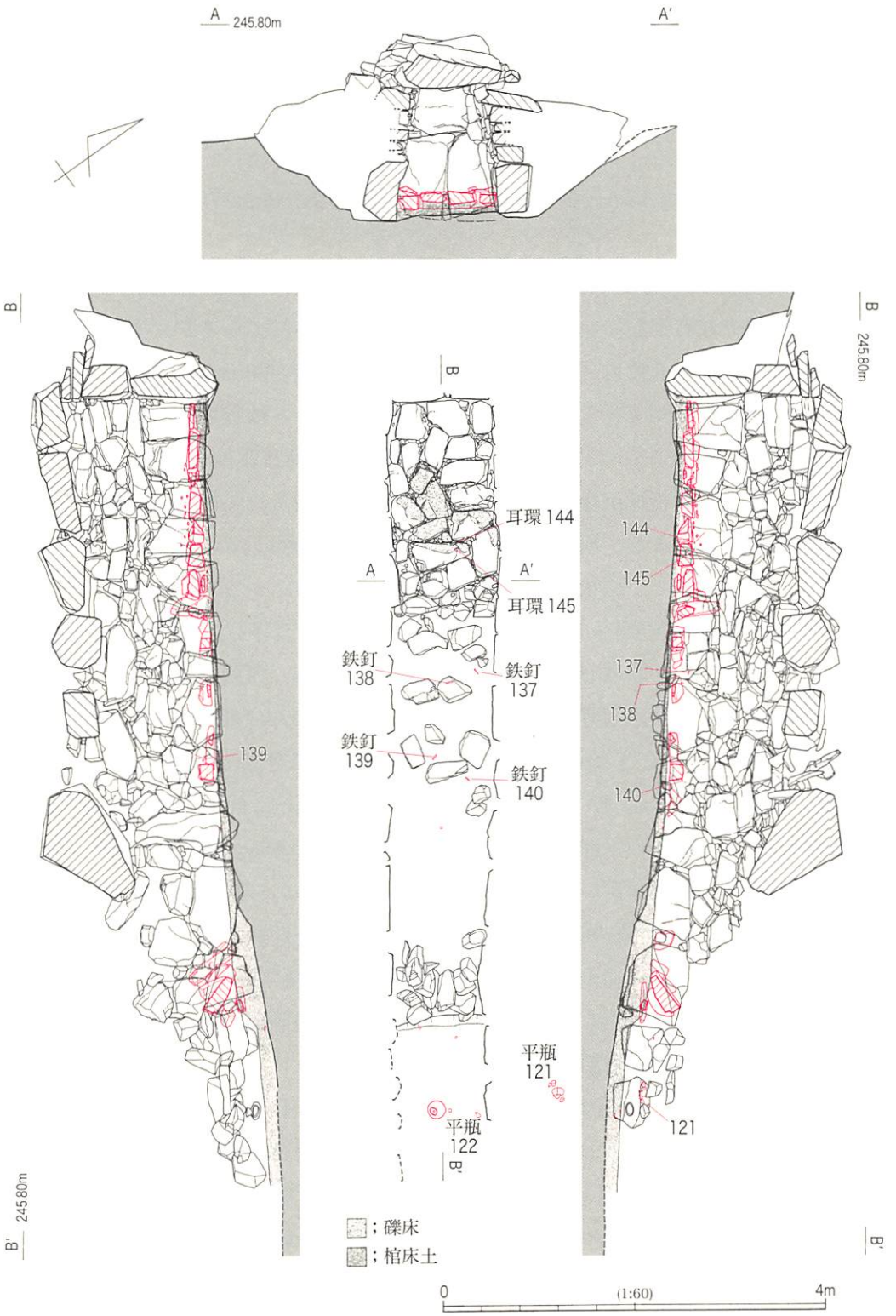
第43図　宮の本第11号古墳石室実測図（1）（1：60）

室内側に向け，８枚目は横長の広口積み，９枚目は横長の小口積みに石材を置いている。

最も奥壁寄りの基底石は長辺70cm，短辺45cm，奥行38cmの石材を縦長の広口積み（背後下面に20cm大の詰石１），奥壁から２枚目の基底石は長辺74cm，短辺46cm，奥行40cmの石材を縦長の広口積み，３枚目は長辺50cm，短辺40cm，奥行36cmの石材を縦長の広口積み，４枚目は長辺72cm，短辺40cm，奥行39cmの石材を縦長の広口積み（背後下面に20cm大の詰石１），５枚目は長辺76cm，短辺56cm，奥行45cmの石材を縦長の広口積み，６枚目は長辺48cm，短辺44cm，奥行35cmの石材を縦長の広口積みし（背後下面に10cm大の詰石２），７枚目は小型の立石で長辺50cm，短辺27cm，奥行35cmの石材の側面を縦長にして石室内に向けて立てる（背後下面に10cm大の詰石１）。奥壁から８枚目の基底石は，長辺72cm，短辺40cm，奥行35cmの石材を横長の広口積み（背後下面に20cm大１個，数～10cm大の詰石３個），９枚目は長辺42cm，短辺34cm，奥行52cmの石材を横長の小口積み（10枚目の基底石との間に20cm大の石材１を縦長に詰める），10枚目の基底石は玄室前端の立石で，長辺109cm，短辺50cm，奥行43cmの石材を縦長の広口積み（南東側に隣接する羨道後端の基底石との間に数～10cm大の詰石３）に立てる。奥壁から１・４・６～８枚目の基底石では石材の背後下面に10～20cm大の詰石１～２個を，また９・10枚目の基底石では隣接する基底石との間に１～３個の石材を詰めて基底石の安定を図っている。

ｃ．北東側壁　基底石上に20～30cm大を主体とする小型の角礫を４～５段程度積むが，南西側壁のようには横方向への目地は通らず乱雑な積み方である。最も奥壁寄りの基底石の上面が最も高位置にあるが，この上面（標高244.5～244.7m）に高さを揃え，目地が通るように基底石の直上にやや大きめの角礫の長辺30～50cm，短辺20～30cmの小口面を横長にして１段積み（奥壁から４～９枚目の基底石ではやや小型の石材をその下に挟む）しており，これらの上面に長辺10～40cm，短辺数～30cmのやや小型で不整形の角礫を横長主体に乱雑に積みあげている。基底石上の石積みは大半が角礫の小口面を横長にした小口積みだが，最も奥壁寄りの基底石上のやや整美で大型の角礫は石材の側面を横長に置く横積みの可能性がある。基底石の立て方は縦長の広口積みが基本だが（奥壁から１・４・５・９枚目），横長の広口積み（奥壁から３・６・７枚目）や縦長の小口積み（奥壁から２枚目），横長の小口積み（奥壁から８枚目）もみられ，南西側壁に比べると多様である。

最も奥壁寄りの基底石は長辺78cm，短辺48cm，奥行40cmの石材を縦長の広口積み（隣接する２枚目の基底石との間に10cm大の詰石２），奥壁から２枚目の基底石は長辺50cm，短辺40cm，奥行46cmの石材を縦長の小口積み（背後下面に30cm大・10cm大の詰石各１），奥壁から３枚目の基底石は長辺64cm，短辺60cm，奥行30cmの石材を横長の広口積み（背後下面に10cm大の詰石２），奥壁から４枚目の基底石は長辺56cm，短辺42cm，奥行25cmの石材を縦長の広口積み，奥壁から５枚目の基底石は長辺51cm，短辺42cm，奥行26cmの石材を縦長の広口積み，奥壁から６枚目の基底石は長辺48cm，短辺46cm，奥行22cmの石材を横長の広口積み，奥壁から７枚目の基底石は長辺78cm，短辺60cm，奥行43cmの石材を横長の広口積み（前側下面に10cm大の詰石８），奥壁から８枚目の基底石は長辺50cm，短辺40cm，奥行66cmの石材を横長の小口積み（前側下面に10cm大・20cm大の



第44図　宮の本第11号古墳石室実測図（2）（1：60）

詰石各１，隣接する立石との間に10cm大の詰石２），奥壁から９枚目の玄室前端の基底石は長辺70cm，短辺64cm，奥行27cmの石材を縦長の広口積みに立てている。奥壁から１・２枚目の基底石間及び２・３枚目の基底石の背後下面に10cm大を主体とする詰石２個を，奥壁から７・８枚目の基底石の前側下面には10cm大を中心とする詰石２～８個を，８・９枚目の基底石間には10cm大の詰石２個を詰めて，各基底石の安定を図っている。

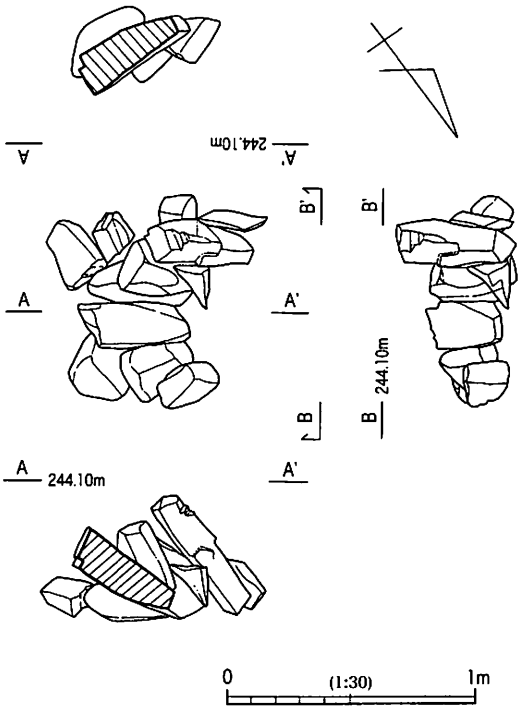
奥壁の壁面はほぼ垂直だが，両側壁の壁面はいずれも傾斜角度82°とやや内傾している。石室横断面A-A'部分での天井幅は84cmで，床面（敷石上面）の幅108cmの78％で，24cm内側に迫り出している。

③天井石　現状で奥壁から5.2mの，南西側壁の10枚目の基底石（立石），北東側壁では９枚目の基底石のあたりまで天井石が石室を覆う。６枚の石材が構架されているが，奥壁側から４枚目と５枚目の石材の間が24cm，５枚目と６枚目（前端）の石材の間が60cm程度隙間があり，この部分の石材の欠失や原位置移動が考えられることから，本来は７～８枚程度の石材が天井石として石室を覆っていたと考えられる。なお，石室北東側南半の外護列石背後の墳丘に長辺130cm，短辺60cm，厚さ30cmの長方形の石材が存在したが，盗掘時に抜き取られて墳丘に放置された天井石の石材である可能性が高い。また，現状の天井石前端の石材は前傾しており，ある程度原状を失っている可能性がある。そして，原状を保つとみられる奥壁から１～５枚目の石材から窺われる天井石の下面は傾斜角度６°で石室入口側に緩やかに下傾する。天井石の石材は，最も奥壁寄りの石材が長辺82cm，短辺74cm，厚さ38cmの平面形不整台形の板石，奥壁側から２枚目の石材は長辺122cm，短辺84cm，厚さ30cmの平面形長方形の板石，３枚目は長方形110cm，短辺76cm，厚さ50cmの平面形長方形の板石，４枚目は長方形120cm，短辺60cm，厚さ52cmの分厚い長方体状の石材，５枚目は長辺116cm，短辺50cm，厚さ34cmの平面形不整形の板石，前端の最大規模の石材は長辺140cm，短辺132cm，厚さ82cmの平面形不整台形の分厚い石材である。奥壁側に最も小型の石材を置き，前端に最も大きな石材を置いており，その間には長辺110～122cm，短辺50～84cmのほぼ同規模の板石を主体とする石材を横向きに構架している。奥壁から４枚目の石材のみ分厚い長方体状で，下面が14cm突出する。これらの天井石の上面は石材間を中心に凹凸がみられるものの，詰石は殆どみられない。これに対して，天井石側面と奥壁・両側壁上面の間隙にはそれを塞ぐために10cm大の小角礫を主体にした詰石が行われている。

④床面　石室掘方底面に暗灰褐色土を厚さ５～24cm入れて棺床土とし，その上面を棺床面としている。この棺床面上に奥壁から2.28m付近までは敷石＋礫床を，奥壁から2.28～4.38m付近には棺台石を置き，長さ4.38m，幅1.02～1.08mの長方形の屍床区画としている。これらは奥壁側の長さ2.28mの敷石＋礫床区画と入口側の長さ2.1mの棺台石区画の，相接するほぼ同規模の２つの区画に分けることができる。

ａ．敷石＋礫床区画　厚さ５～12cmの棺床土の上面に長辺10～60cm，短辺10～35cm，厚さ数～20cmの平面形長方形の板石・角礫20数個の上面をほぼ水平に揃えて置き，その上には２～数cm大の小円礫を敷いている。小円礫は敷石の隙間などに多く入れ込まれており，敷石上面にはそ

れほど密にはみられない。この敷石＋礫床の上面はほぼ水平で，標高244.0m付近に揃う。この敷石＋礫床区画前端の両側壁際には角礫を小立石状に立てており，その間には20cm大のやや小型の角礫２個を横に並べている。側壁際の小立石は，南西側壁のものが長辺43cm，短辺40cm，厚さ22cmの角礫の広口面を奥壁側・入口側に向けて立てている。その上端は敷石面より20cmほど高い。また，北東側壁の小立石は長辺50cm，短辺22cm，厚さ16cmの長方形の板状の角礫の広口面を奥壁側・入口側に向けて立てている。このように，敷石＋礫床の前端は一種の仕切り状を呈している。この仕切り状部分を除いた屍床部分の長さは2.1mである。敷石＋礫床区画上面の奥壁から1.48～1.55mの中央やや北東側壁寄りで耳環２点（144・145）が並んで出土した。



第45図　宮の本第11号古墳石室閉塞石実測図（１：30）

ｂ．棺台石区画　敷石＋礫床区画の上面から24cm下位の棺床面上に長辺22～45cm，短辺14～30cm，厚さ３～18cmの小型の角礫12個を並べた屍床区画で，棺台石上面は標高243.9m付近にほぼ揃い，敷石＋礫床区画上面（標高244.0m）より10cm程度低い。棺台石の角礫の周囲からは鉄釘４点（137～140）が出土した。

⑤閉塞石（第45図，図版40ｂ・ｃ）　石室内奥壁から5.64～6.48mのところに閉塞石の残欠がみられる。長さ0.9m，幅0.95m，高さ0.5mの規模で，長辺10～50cm，短辺15～25cm，厚さ数～15cmの角礫を13個置いているが，その検出状況から長方体のもの数本を縦長に立て並べていたものが半ば倒れかけた状況とみられる。

⑥石室掘方内及び石室前面の出土遺物　北東側壁基底石裏側の掘方埋土中から鉄器（刀子135）や須恵器（平瓶121）が出土した。また，石室前面の地山（黒褐色土）上に堆積した暗褐色土中からは須恵器（杯蓋82・83・86・88・89・90，杯身99～102，高杯106・113・114，坩蓋118，瓿120，壺124）がややまとまって出土している。

（４）外護列石（第43図，図版31ｃ）

石室前端から南西方向及び北東方向に墳丘裾に沿って延びる列石で，南西列石・北東列石①ともに石室の南西側壁及び北東側壁の各前端の石積みにほぼ直結して構築されている。各列石の現存規模は，南西列石が長さ3.3m，高さ0.39～0.84m，北東列石①が長さ２m，高さ0.42～0.66mで，北東列石①の北側1.32mには長さ1.98m，高さ0.24～0.66mの現存規模の北東列石②が存在する。北東列石①②は本来的には一体のものであった可能性が高い。各列石ともにやや崩れた石積みで整美な石垣状を呈するわけではないが，ほぼ墳丘裾の斜面に沿って角礫を１～４段程度

積み上げている。南西列石は石室南西側壁の前端から石室中軸線（N54°W）に直角（101°＝N155°W）に近く屈曲して南南西方向に0.84m延びたのち，51°屈曲してほぼ西方向に長さ2.64mほど延びる。10～50cm大の角礫を２～４段程度乱雑に積んでいる(列石壁面の傾斜角度60°)。一方，北東列石①は石室北東側壁の前端から石室中軸線にほぼ直角（103°＝N49°E）に屈曲して北東方向に0.78m延び，38°屈曲して北北東方向に1.2m延びる。10～40cm大の角礫を２～３段程度やや乱雑に積み上げている（列石壁面の傾斜角度69°)。なお，北東列石②は石室中軸線から20°東にふれた南東－北西方向（N34°W）に延びており，10～40cm大の角礫を１～３段程度乱雑に積む。これらの列石の周辺（主に前面及び墳丘上方）では須恵器を主体とする遺物が出土したが，これらは列石前面(墳丘裾)出土のものを中心に追葬時に掻き出されたものである可能性が高い。特に，北東列石①の前面と南西列石の前面及びその背後の墳丘上で須恵器を主体とする遺物が集中的に出土している。北東列石①の前面では須恵器（杯蓋・杯身・高杯)，南西列石周辺の墳丘裾及び墳丘上では多くの須恵器（杯蓋・杯身・高杯・坩蓋・平瓶・甕・大甕）の破片や鉄器（刀子）などが出土した。

（５）出土遺物（第46～50図，第６表，図版49～52)

第11号古墳では横穴式石室内・墳丘・周溝などから計66点の遺物が出土している。その内訳は，須恵器47点（杯蓋・杯身・高杯・平瓶・大甕ほか)，土師器５点（甕ほか)，石器１点（敲石)，鉄器９点（刀子・鉄釘ほか)，銅製品２点（耳環）などで，出土位置は石室内・掘方内８点，南西側外護列石周辺20点，北東側外護列石周辺６点，石室前面16点，周溝内・墳丘盛土ほか16点で，南西側外護列石周辺と石室前面からの出土が全体の1/2強と多い。石室内からは玄室床面から耳環と鉄釘が出土したが，土器類は須恵器・平瓶２点が石室入口と北東側壁背後の掘方内から出土したのみである。須恵器が７割以上を占め，土師器は甕・甑の口縁部片数点が周溝内や墳丘から出土しただけで，石室周辺からの出土はない。鉄器は刀子・鉄釘だけで内容が乏しい。

須恵器（80～128）　計49点で，器種の内訳は杯蓋11点，杯身13点，高杯14点，平瓶３点，坩蓋・甕・大甕各２点，甕・壺各１点である。出土位置としては，南西側外護列石周辺（列石前面の墳丘裾と列石背後の墳丘上）と石室前面（墳丘裾に至る斜面の地山上面に堆積する暗褐色土層中）から主に出土している。器種は杯蓋・杯身と高杯が多い。高杯は南西側外護列石周辺から６点と多く出土し，杯蓋は石室前面から６点出土した。杯身はいずれの箇所からも４～５点出土している。また，甕・大甕はすべて南西側外護列石周辺からの出土である。

ａ．杯蓋（80～90）　つまみをもたないもの（８点）ともつもの（３点）があり，両者は法量にやや幅がある。つまみをもたない80～87は口径9.2～11.0cm，器高2.5～5.0cmである。小型の83・85～87が口径9.2～10.0cm，器高2.5～3.2cmで，大型の80～82・84が口径10.6～11.0cm，器高3.7～5.0cmと比較的纏まる。形態的には大型のものを中心に，平坦な頂部から外下方に直線的に延びた体部が屈曲してほぼ垂直に下るものが主体であるが（80～82・84・87)，小型のものは比較的平坦な頂部から曲線を描いて外下方に開き気味に延びて口縁を丸く納めるものが多い

(83・85・86)。調整は，外面頂部が回転ヘラ切り不調整で，体部内外面回転ナデ，頂部内面に一定方向のナデを行うのが一般的である。外面頂部～体部上半の回転ヘラケズリは86・85でみられるが，主体的ではない。

高く丸みのあるつまみをもつ88～90は，口径9.6～10.2cm，かえり径7.9～8.6cm，器高2.4cmである。88は頂部が平坦だが，ほかの２点はごく緩やかに下傾する。88は体部から斜め下方にほぼ直線的に延びる口縁の内面に内下方に短く尖る小さなかえりが付く。かえりの端部は口縁端部の内側に収まる。89はやや丸みをもって外下方に延びた体部から短く折れた口縁の内側にほぼ垂直な短いかえりが付く。かえりの端部は口縁端部の位置にあり，突出しない。90は外下方に直線的に延びた体部からごく緩やかに下方に屈曲する口縁の内側に短く垂下する断面逆三角形のかえりが付く。その端部は口縁端部から突出する。調整は，いずれも外面頂部から体部上半にかけては不調整で，体部下半～内面にかけては回転ナデを施す。

b．杯身（91～103） 13点あり，たちあがり・受部をもつ器形（91～98）ともたない器形（99～103）がある。前者は口径9.8～11.0cm，器高2.6～4.2cm，後者は口径9.4～11.1cm，器高2.9～3.6cmで，やや大型の96を除けば，両者の口径・器高はそれほど差がなく，ほぼ同一である。たちあがり・受部がある器形は，平坦な底部から外上方に直線的に延びる体部に続く受部に内上方に短く延びる断面三角形の比較的短いたちあがりが付くものが主体だが，やや大型の95・96はオリコミ手法によりU字状の受部との境からほぼ垂直に延びるやや長いたちあがりが付く。91・92は底部は平坦でなく，外上方にやや内湾気味に延びる。94は低平な器形である。91・92・94・97は特にたちあがりが小さくて低く，端部は受部とほぼ同じ位置にある。調整は，外面底部は回転ヘラ切り不調整（94～96）か不調整（91～93），体部内外面は回転ナデ，内底面に一定方向のナデを行うもの（91・93）と不調整のもの（92・95・96）がある。

たちあがり・受部のない杯身は，平坦な底部から屈曲してやや開き気味に垂直に近く立ち上がり，端部を丸く納める。99はやや内湾気味に，100～102はやや外反気味に立ち上がる。103は底部から直線的に外上方に延びる。調整は，外面底部が回転ヘラ切り不調整，体部内外面回転ナデ，内底面に一定方向のナデを行うのが一般的だが，99の外底面は不調整，102の外底面は一定方向のヘラケズリを施す。

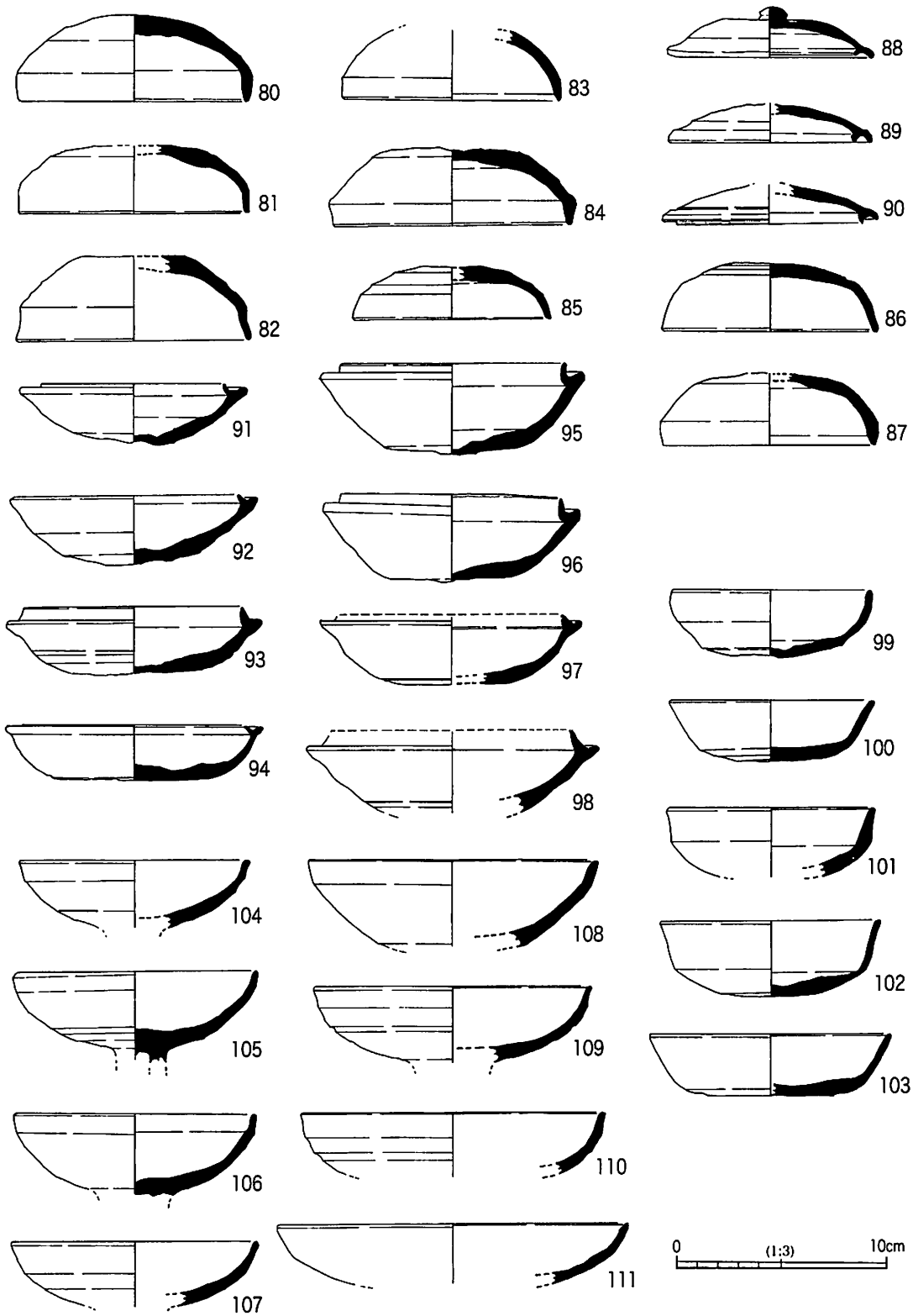
c．高杯（104～117） 計14点だが，全形が窺えるのは112～114の３点のみで，ほかは杯部片８点，脚部片３点である。小型品の112を除くと，口径10.6～16.3cm，脚端径8.1～10.8cm，器高9.5～10.4cmである。大型品の110・111・114以外は口径10.6～12.9cmの範囲に７点が納まり，このあたりが中心的な口径とみられる。杯部の形態は丸みの強いやや低平な椀状のものが主体で，体部と口縁の境でごく緩やかに屈曲するものが目立つ。杯部の調整は内外面回転ナデが基本だが，104・107の底部外面や105の外面の底部と体部の境には回転ヘラケズリがみられる。105・106・108・114の外面の底部あるいは体部は不調整である。109・110・113・114では外面の体部あるいは体部と口縁の境付近に凹線や段がみられる。脚部は112～117の６点に残存するが，ラッパ状に開く113・114は水平に延びる脚部の端部を屈曲させ短く垂下する端部をやや尖り気味に納め

る。115・116は低脚で，外湾気味に外下方に延びた脚の端面を外傾させている。脚部の調整は内外面回転ナデか基本だが，116は脚端部内外面のみ回転ナデでほかは不調整である。113・114では外面の脚柱部中央に１条の凹線を施す。112は口径8.3cm，器高4.55cmの小型の高杯で，杯部はほぼ平坦な底部からやや開き気味に直上し，口縁端部を尖り気味に納める。脚部は外湾気味に外下方に延び，端部を丸く納める。調整は，杯部の外面が底部は回転ヘラケズリ，体部内外面回転ナデで，内底面中央に一定方向のナデを行う。脚部は脚端部内外面のみ回転ナデを施し，他は不調整である。

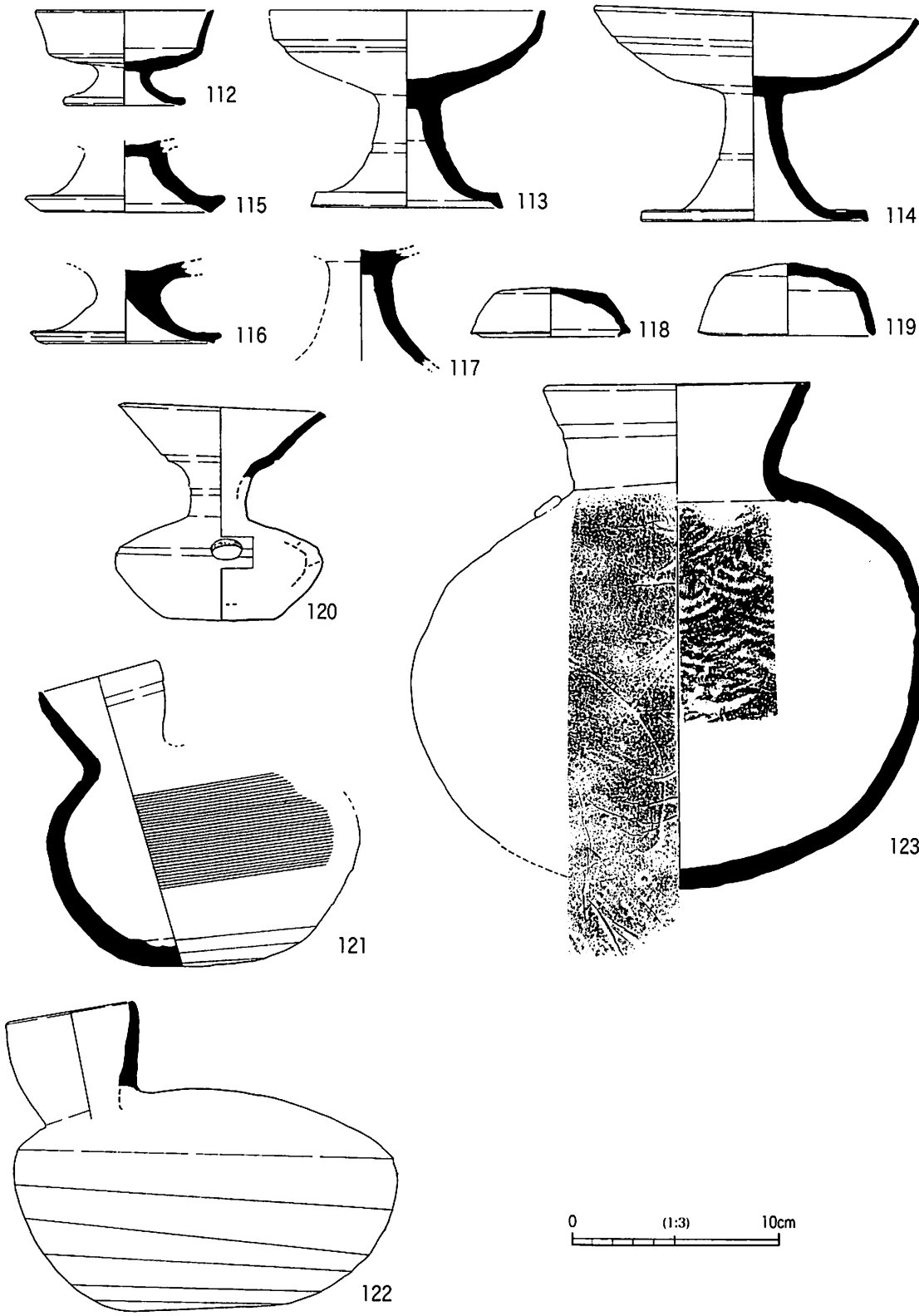
ｄ．坩蓋（118・119）　118は平坦な頂部から鋭い稜を残して屈曲し，外下方に直線的に延びた体部～口縁の端部に内傾する短いかえりが付く。かえりの端部は口縁端部から突出する。調整は，外面頂部が回転ヘラ切り，体部不調整で，内面全体に回転ナデを施す。口径7.5cm，かえり径6.6cm，器高2.4cm。119は口径8.0cm ×8.4cm，器高3.5cmで，丸みのある頂部から屈曲して外下方に直線的に延びる体部～口縁の端部を丸く納める。調整は外面頂部回転ヘラ切り不調整で，外面体部～内面は回転ナデである。

ｅ．瓊（120）　扁球状の体部に細長く直立する頸部が付き，小さな段と浅い凹線を介して直線的に外上方に延びるラッパ状の口縁が続き，その端部を平坦に納める。底部は平坦で，やや肩の張る体部最大径部に径1.5cmの円孔を穿つ。外部から穿孔され，体部の内部に抉り取られた円板が残されていた。調整は，外面の底部が回転ヘラ切り不調整で，最大径部までの体部下半は回転ヘラケズリ，体部上半から内面頸部付近まで回転ナデを施す。体部内面は調整不明である。外面の頸部と口縁部との境，頸部中央と体部最大径部の３か所に凹線を施す。外面体部～口縁から内面の口縁～頸部にかけて透明な自然釉が付着する。口径9.2cm，器高11.4cm。

ｆ．平瓶（121～123）　丸みのある扁球状の体部に外上方に開き気味に延びる口縁が付く通常の平瓶（121・122）とやや扁平気味ながら強く膨らむ体部に外上方に直線的に延びて端部を平坦に納める一見甕と見紛うような大型の平瓶（123）がある。前者の121は口径5.8cm，器高15cm，体部最大径14.7cmで，調整は外面の平坦な底部は回転ヘラ切り不調整，体部下半は底部側から回転ヘラケズリ，不調整で，最大径部付近がカキ目（８本／cm），外面肩部付近から口縁部，内面にかけて回転ナデを施す。内底面には不調整部分が残る。外面口縁部中央やや上方に浅い凹線１条を施す。122は口径5.5cm ×8.2cm，器高14.8cm，体部最大径18.1cmと121よりやや大型の平瓶で，口縁は大きく歪む。調整は，外面が浅く凹む底部は回転ヘラ切り不調整，最大径部付近までの体部下半が回転ヘラケズリ，比較的平坦な体部上半は不調整，口縁の内外面は回転ナデである。内面体部～底部は調整不明である。123は口径11.4cm，器高24.1cm，体部最大径24.45cmで，強く膨らむ体部は左右非対称である。肩部外面に径1.5cmの扁平な円形釦が，体部内面側には封鎖痕がみられる。口縁は外上方に直線的に延びる器壁が分厚いもので，平坦な口縁端面には凹線が施される。口縁部外面中央には浅い凹線を施す。調整は，口縁内外面が回転ナデ，内面の体部上半同心円タタキ，下半は横方向主体の雑なナデ，体部外面は肩部付近が縦方向の平行タタキ，最大径部付近が横方向のヘラケズリ，底部付近は雑な不定方向の強いナデあるいは浅いケズリを行う。



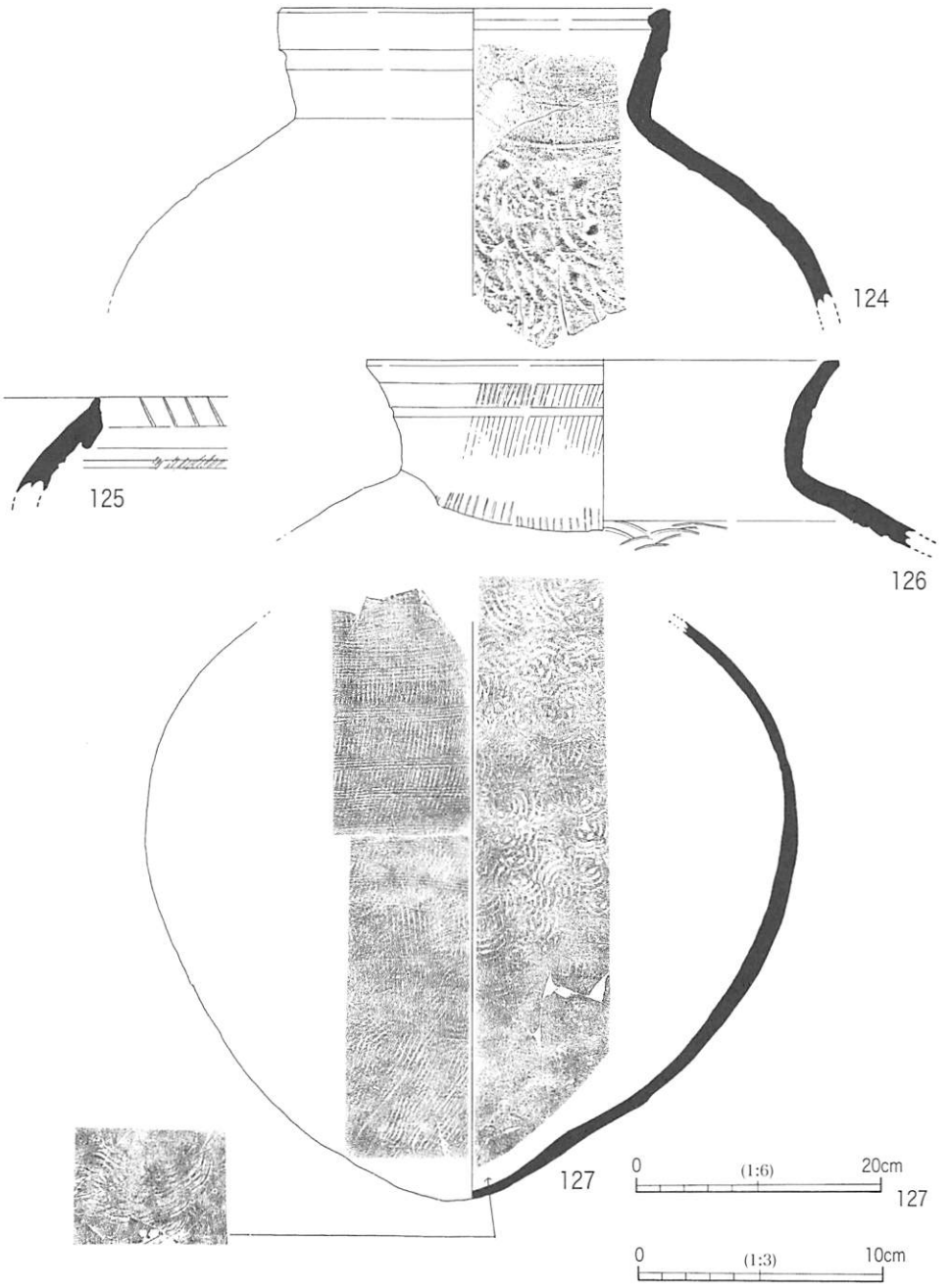
第46図　宮の本第11号古墳出土遺物実測図（1）（1：3）須恵器①



第47図　宮の本第11号古墳出土遺物実測図（2）（1：3）須恵器②

g．壺（124）　口径15.4cmのやや開き気味に直立する口縁の端面はやや内傾する。調整は，内面の口縁～体部上端が横ナデ，体部は同心円タタキののちに横ナデ，外面は口縁～肩部は調整不明で，体部上半は縦方向の平行タタキののち横方向のカキ目を施す。

h．甕（125・126）　125は口縁部小破片で，端部を下方に拡張する。口縁端面は垂直で，左斜めに傾く刻み目を，その下位には右斜めに傾く刻み目をいずれも連続的に行っている。内面の調整は横ナデである。126は頸部から外湾気味に立ち上がった口縁の端面を水平にしている。調整は，内面口縁～頸部から外面口縁端部にかけて横ナデ，体部内面同心円タタキ，外面は口縁が縦方向のハケ目，頸部は横ナデ，肩部は縦方向の平行タタキである。口縁外面中央には１条の浅い凹線



第48図　宮の本第11号古墳出土遺物実測図（３）（1：3，1：6）須恵器③

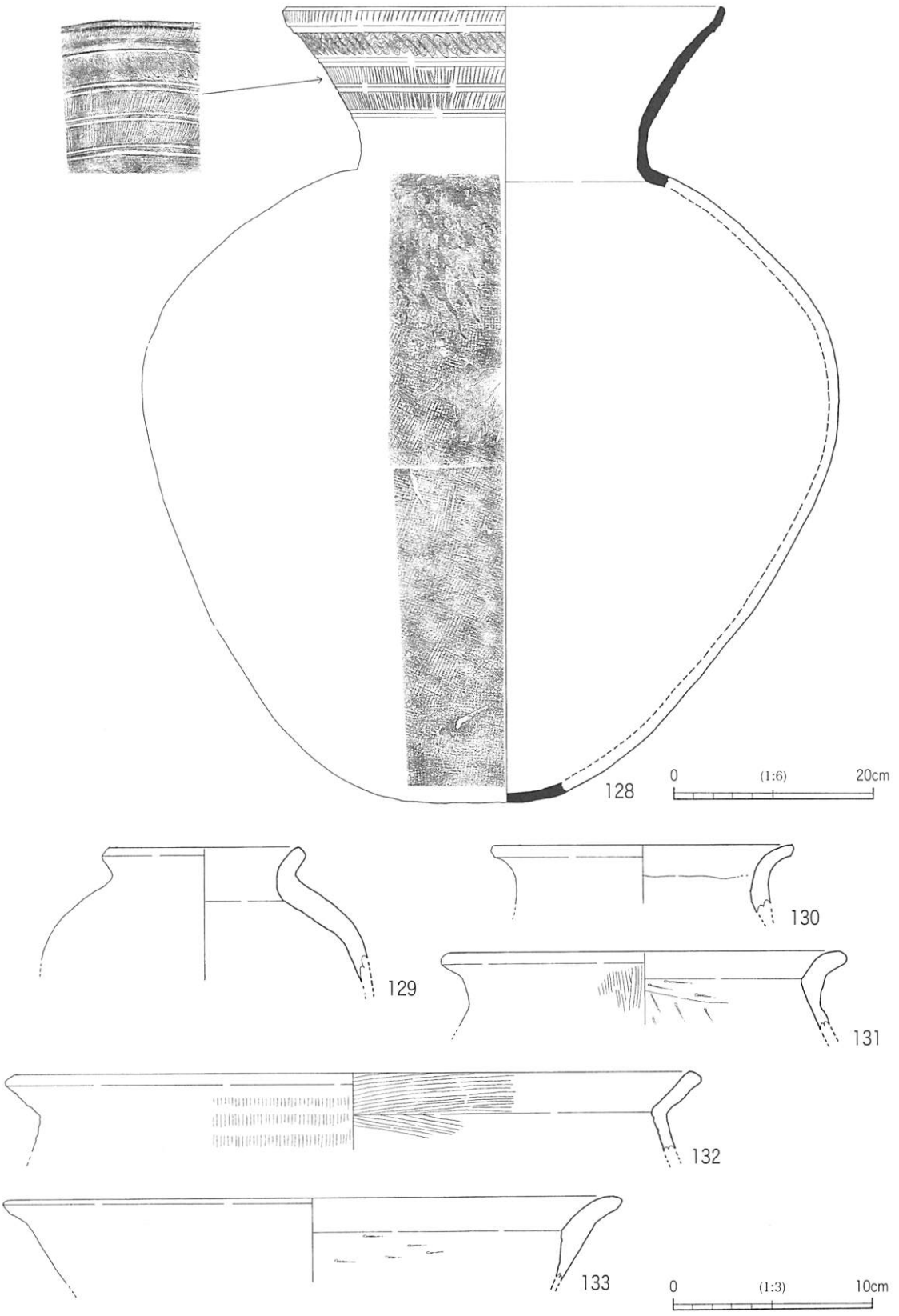
がみられる。口縁内面に暗緑色の，頸部外面には灰緑色の自然釉が付着する。口径18.8cm。

ｉ．大甕（127・128） 127は口頸部を失うが，体部最大径52.7cm，体部高さ46.7cm以上のやや尖り気味の底部をもつ大甕で，体部上半に最大径部のあるやや肩の張る器形である。内外面の色調は青みを帯びた黒褐色，胎土は灰黒色の比較的精良なものである。口縁～肩部にかけて欠失するが，その破断面の観察によると，意図的に内面側から少しずつ割られた可能性がある。調整は，内面同心円タタキ，外面は上位2/3が横方向カキ目（９～11本／cm）ののち縦方向平行タタキ，その後横方向のヘラナデあるいは縦方向の乱雑な板ナデ状の調整を加えている。下位1/3ではカキ目・横方向のヘラナデはみられず，基本的に格子目タタキののち斜め方向主体の雑なヘラナデを行っている。128は口径41.0cm ×43.5cm，体部最大径78.4cm，器高78.9cmの大甕で，平坦気味の底部から体部上半に最大径部がある肩の張る体部に続き，この体部から頸部にかけてややつよく窄まる。頸部から大きく外上方に開く口縁の端部を短く内側に曲げ，端面は平坦に納める。調整は，内面の口縁が横ナデ，体部は同心円タタキ，外面は体部上位1/3が格子目タタキののち横ハケ，下位2/3は格子目タタキである。外面の口縁部端部は帯状に肥厚し，その上半に横ナデののちやや右傾する櫛描列点文（７～８本単位）を３～７mm間隔で行い，下半は幅広く浅く凹む。この口縁端部の下方には横ナデ調整ののちに凹線２条で画された３つの区画のなかに櫛描波状文と列点文を連続的に施している。最上位の文様帯には左傾する波状文（９～12本単位）を0.8～１cm間隔で施し，中央と下位の文様帯にはやや右傾する列点文(12～13本単位)を２～５mm間隔で施す。

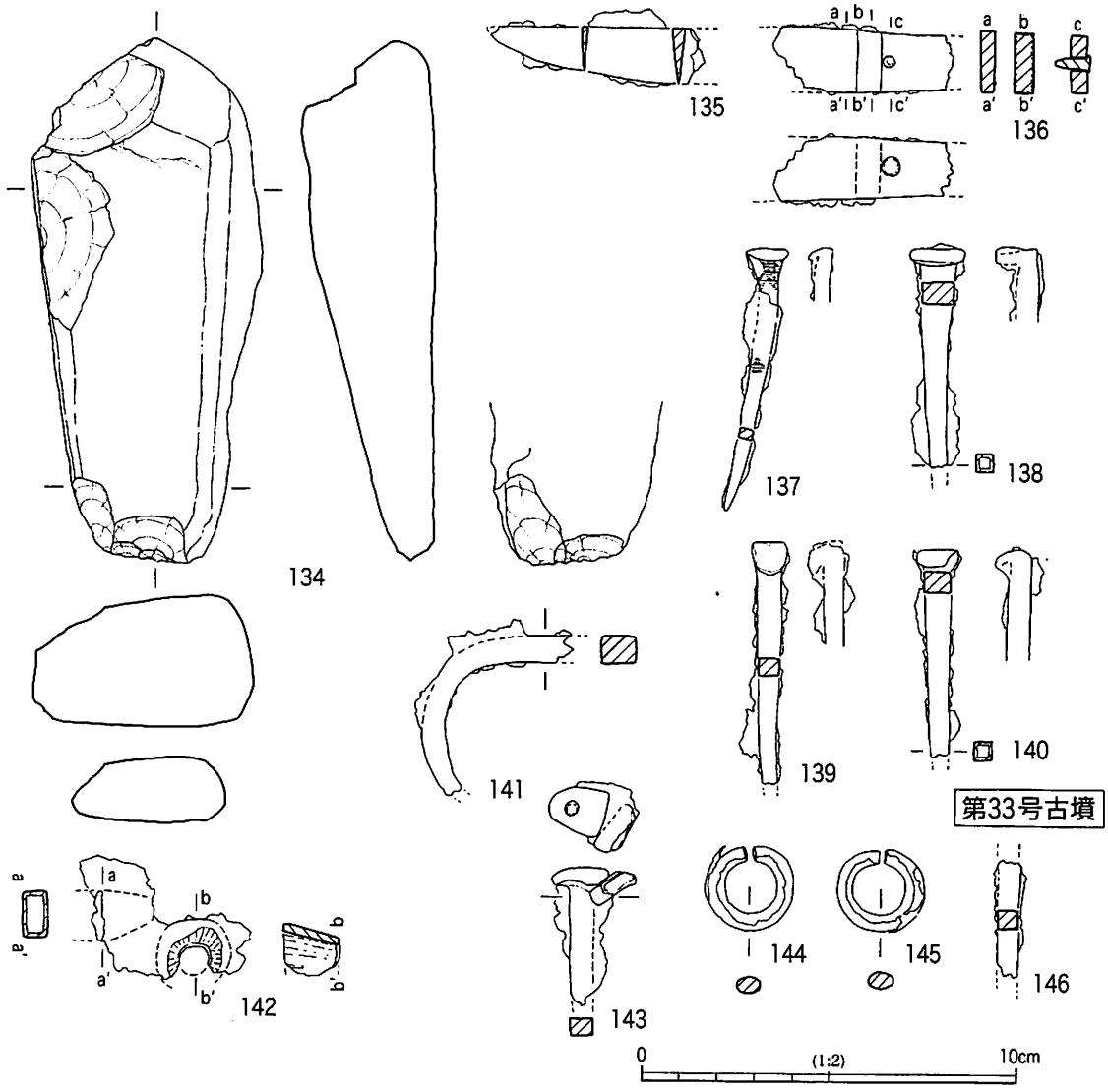
土師器（129～133） 壺１点・甕３点・甑１点の計５点である。いずれも口縁部の破片で，壺以外は周溝内からの出土である。壺129は頸部で屈曲して短く外上方に延びる口縁の端部を平坦に納める。調整は，外面と口縁内面が横ナデ，体部内面は縦方向のヘラケズリである。口縁端部と体部外面に部分的に淡黒色のススが付着する。口径9.4cm。130～132は甕で，130・131は頸部でくの字に曲がる口縁の端部を丸く納める。調整は，130が頸部内面に指頭押圧，口縁内外面横ナデである。口径14.6cm。131は口縁内外面横ナデ，体部内面横位・斜位ヘラケズリ，体部外面縦ハケ（６～７本／cm）である。口径19.2cm。132はくの字に屈曲して直線的に延びた口縁の端部を平坦に納める。調整は，口縁端面～口縁外面横ナデ，外面口縁下半～体部は縦ハケ（６本／cm）ののち横ナデ，内面の口縁部は横ハケ（６本／cm），体部は横ハケ（４本／cm）を施す。口径33.0cm。133は口径29.4cmの甑の口縁部片である。大きく外反する口縁の端部を丸く納める。調整は，体部内面が横方向のヘラケズリ，そのほかは横ナデである。

石器（134） 敲石で，下端に潰れ状の使用痕が残る。長さ14.1cm，幅6.1cmで，焼成を受けた石を加工・使用したとみられる。石材は暗黄白色の花崗岩質のものである。

鉄製品（135～143） 刀子２点・鉄釘４点・用途不明品３点の計９点である。135・136は刀子と考えられる。135は刃部片で，切先側が残る。現存長5.7cm，刃部幅1.5cm。136は刀子茎部片で，現存規模は長さ4.7cm，幅（最大）1.7cmである。幅0.75cmの帯状に変色する部分があり，それに隣接して目釘孔に目釘が刺さった状態で出土した。目釘は長さ0.95cmで，径4.5mmの円形の頭部をもつものである。137～140は鉄釘で，頭部は1.0～1.5cm ×0.65～1.15cmの横長の長方形ないし



第49図　宮の本第11号古墳出土遺物実測図（4）（1：3，1：6）須恵器④・土師器



第50図　宮の本第11・33号古墳出土遺物実測図（1：2）石器・鉄製品・銅製品

は方形で，折頭形である。完存する137の長さ7.2cmで，軸部の断面は方形で，138・139は中空である。137には横走する木質が部分的に残る。141～143は用途不明品で，142は刀子の茎部状のものと筒状のものが銹着し，143はボルト状のものに刀子茎状のものが銹着している。

銅製品（144・145）　いずれも銅芯鍍金の耳環で，144は外径1.7cm×1.8cm，145は外径1.6cm×1.75cmの大きさである。いずれも内側面を中心に金箔が残る。接面は1～2㎜離れている。

3．宮の本第33号古墳（第3・4図）

（1）立地と調査前の状況（第40図）

第33～35号古墳の3基は調査の進捗に伴ってみつかった古墳である。第33号古墳は調査区ほぼ中央にあり，第11号古墳の西3.4mの北西から南東方向に下傾する緩斜面に位置する（標高245～247m）。調査前には墳丘や石室の存在を示唆する何らの痕跡もみられなかった。

（２）墳丘・周溝（第41・51図，図版42ａ）

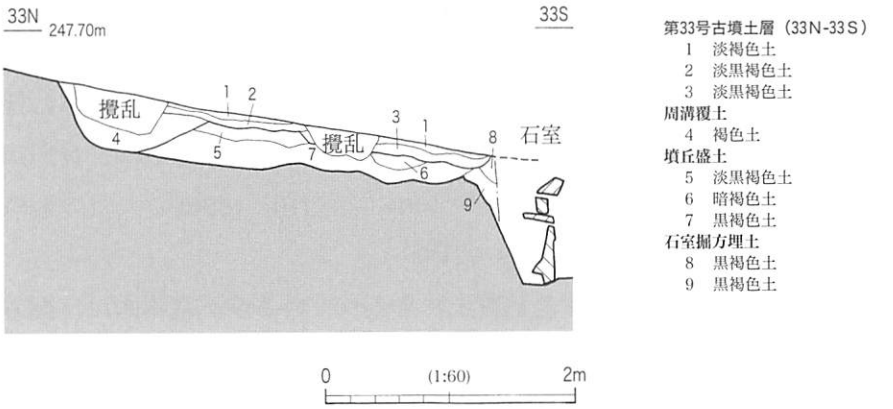
第33号古墳は横穴式石室を埋葬施設とする古墳で，石室背後に半円形の周溝が廻るが，墳丘は削平され殆ど残っていない。周溝から復元される墳丘は径７ｍの円形で，墳丘の高さ（現存）は周溝底面から0.8ｍである。周溝外縁までの古墳の規模は径8.6ｍである。周溝の幅は0.5～1.8ｍで，深さ（最大）は0.57ｍである。

墳丘西側に北西-南東方向３ｍ×北東－南西方向1.6ｍの範囲に10～20㎝大の角礫の広がり（集石）がみられるが，その性格については明確にしがたい。

（３）石室（第52図，図版42～43）

やや小型の横穴式石室で，石室の長軸は北西-南東方向（N45°W）を指し，南東方向へ開口する。石室は残存する周溝から復元される墳丘の南東側に偏って造られており，石室奥壁付近に墳丘の中心がある。石室は平面形不整隅丸長方形の掘方のほぼ中央に築かれている。石室掘方の規模は，長さ3.05ｍ，幅1.29～1.92ｍ，深さ（最大）0.72ｍである。石室は天井石を完全に失っているが，奥壁から1.11～1.17ｍ（石室全長の約1/2）付近までの両側壁（北東側壁・南西側壁）の石積みの上端がほぼ標高246.5ｍ付近に揃い，天井石下面の状況を留めているとみられる。このことから，少なくとも石室の奥壁側１ｍ余には天井石が構架されていたとみられる。石室の規模は，長さ（北東側壁）2.34ｍ，同（南西側壁）2.00ｍ，幅（奥壁）0.58ｍ，同（中央・最大）0.77ｍ，同（石室入口）0.69ｍ，高さ（棺床面～側壁上端面）0.84～0.92ｍである。石室平面形は石室中央付近（奥壁から１ｍ付近）の幅が奥壁や石室入口の幅に比べて８～19㎝ほど広いやや胴張り気味の長方形である。石室の玄室と羨道の区別は石積みの仕方などによっても明確にできない。また，奥壁から1.5～２ｍの石室入口には角礫の広がりがみられる（石室前面礫）。なお，掘方南西側壁中央付近で石蓋土坑墓ＳＫ６と重複しており，その北東小口を大きく壊している。

ａ．奥壁　基底石として長辺57㎝，短辺46㎝，奥行18㎝の石材１枚を横長の広口積みに立てた上に，10～30㎝大の角礫を寝かせて３段程度積み上げている。基底石直上の角礫は横長の小口積み，２・３段目は横積みとみられ，前者は長辺10～15㎝，短辺６～13㎝，奥行18～25㎝程度，後者は長辺20～30㎝，短辺10～20㎝，奥行20～30㎝程度の規模のやや大型の石材を用いている。



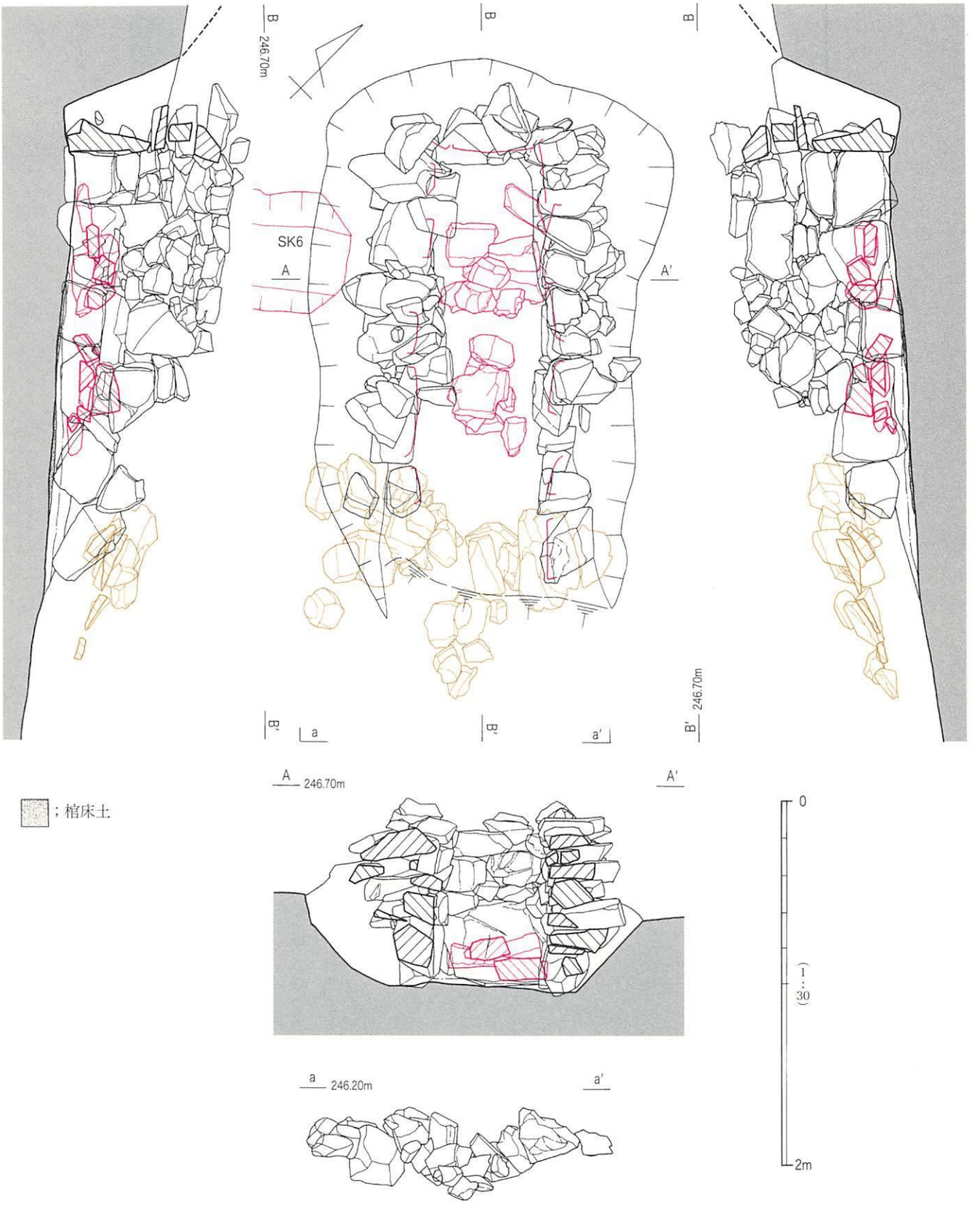
第51図　宮の本第33号古墳墳丘土層断面実測図（１：60）

最上端の石材がやや石室内面側に突出するが，壁面はほぼ垂直で持ち送りはみられない。

b．南西側壁　30～50cm大の基底石上に10～40cm大の角礫を４～５段程度積み上げている。奥壁から1.4mまで基底石上の石積みがみられる。基底石は現状で５個存在するが，北東側壁と比べると本来は６個の基底石からなっていたと思われる。基底石は基本的に横長の広口積みに立て，奥壁から１・２・４番目に大型の石材，３・５番目にやや小型の石材を配している。最も奥壁寄りの基底石は長辺55cm，短辺35cm，奥行25cmの石材を横長の広口積み，２枚目は長辺43cm，短辺40cm，奥行22cmの石材を横長の広口積み，３枚目は長辺30cm，短辺25cmの石材を横長の広口積み，４枚目は長辺55cm，短辺40cm，奥行23cmの石材を横長の広口積み，５枚目（前端）は30cm四方，奥行20cmの石材を広口積みに立てている。基底石上の石積みは長さ40～50cm，幅20～30cm，厚さ10～20cm程度のやや大型の角礫と長さ20～30cm，幅10～20cm，厚さ数～10cm程度の小型の角礫を主体的に用い，主に大型の石材は横積み，小型の石材は小口積みに積み上げている。奥壁から１～２枚目の基底石上の石積みは大型の石材を横積み・小口積みしており，水平によく目地が通っていて整美であるが，２～４枚目の基底石上の石積みはやや小型の石材を主に小口積みにより積み上げているためか全体に石積みが乱雑である。壁面における石材の面は長辺10～40cm，短辺10～20cmの大きさである。なお，奥壁から４～５枚目の基底石上の石積みは完全に失われている。壁面は傾斜角度84°とやや内傾しており，いくらか持ち送りがみられる。

c．北東側壁　30～40cm大の基底石上に20～40cm大の角礫を６段程度積みあげている。奥壁から1.53m付近までの１～３枚目の基底石上の石積みはほぼ完存するが，入口側の５～６枚目の基底石上には石積みは殆ど残っていない。基底石はほぼ同規模の大型の石材６個を広口積みに立てる。最も奥壁寄りの基底石は長辺33cm，短辺30cmの石材，奥壁から２枚目は長辺44cm，短辺37cmの石材，３枚目は長辺30cm，短辺24cmの石材，４枚目は長辺40cm，短辺20cmの石材，５枚目は長辺42cm，短辺33cmの石材，前端の６枚目は長辺37cm，短辺30cmの石材をいずれも横長の広口積みに立てている。ただし，石室入口側の基底石２個は原位置を動いている可能性がある。基底石上の石積みには長さ30～40cm，幅20～30cm，厚さ10～30cmの大型の角礫と，長さ20～30cm，幅10～20cm，厚さ数～10数cmのやや小型の角礫が主に使用されている。前者は広口積みや横積みに，後者は横長の小口積みに用いられたと考えられる。全体としては横長の小口積みが主体的で，横積みは奥壁から２・３枚目の基底石直上と奥壁から１・２枚目の基底石上４段目などにみられるにすぎない。５・６段目の横長の小口積みが主体的に用いられた部分は横方向に目地が通るが，横長の小口積みを主体にした基底石上１～４段目の石積みは大型の石材を広口積みに挟み込むなどしており，全体的に石積みが乱雑である。壁面における石材の面の大きさは，長辺10～30cm，短辺数～10数cmのものが主体で，一部に長辺30～40cm，短辺10～30cmの大型のものを含む。壁面は傾斜角度87°とほぼ垂直で，持ち送りはみられない。

d．床面　部分的にごく薄く棺床土（淡黄色粘質土）を入れているが，基本的には掘方底面をそのまま棺床としている。棺床上には10～30cm大，厚さ数～10数cmの角礫10数個が存在するが，その並びには規則性がなく，角礫の上面も一定の高さに揃わないことや角礫の底面が棺床から５



第52図　宮の本第33号古墳石室実測図（1：60）

～20cm程度上位にあることなどから，棺台石を含む可能性は残るものの，側壁・奥壁から転落した石材が主体的と考えられる。奥壁近くの床面付近で鉄釘１点（146）が出土した。

ｅ．石室前面礫　奥壁から1.65～３ｍの石室入口で10～50cm大の角礫30個ほどが南西－北東方向1.62m，北西－南東方向1,32mの範囲に集中してみられた。ほぼ床面の傾斜に沿って20cmほどの高さに揃う。このような出土状況から，石室入口付近の基底石上の石積みが崩落したものである可能性が高いが明確ではない。

（４）出土遺物（第50図146）

奥壁付近の床面から出土した鉄釘がある。頭部と尖端を欠失しており，現存規模は長さ3.1cmで，断面は方形である。

４．宮の本第34号古墳（第３・４図）

（１）立地と調査前の状況（第40図）

第34号古墳は調査区北隅にある小型横穴式石室を埋葬施設とする古墳で，周溝・墳丘を完全に失っている。調査前には何ら古墳の存在を示すものはなく，調査の進展に伴って調査区際で検出したので，調査区を拡張して調査を行った。第11号古墳の北９ｍに位置し，南東３ｍには小型横穴式石室を埋葬施設とする第35号古墳が存在する。北西から南東方向へ緩やかに下る緩斜面に構築されている（標高248.5m）。

（２）石室（第53図，図版44ｃ・45ａ）

敷石をもつ小型横穴式石室で，天井石はすべて失っている。石室の長軸は西北西－東南東方向（N60°W）を指し，東南東方向に開口する。石室は長さ1.85m，幅0.97m，深さ（奥壁・最大）0.51ｍの平面形不整隅丸長方形の掘方の中に築かれている。奥壁背後には比較的余裕があるが，両側壁は基底石との間に殆ど隙間はなく，掘方は石室の規模に合わせてほぼ隙間なく掘り込まれている。石室は基本的に石材を広口積みに立てた基底石の上に現状で最大３段程度石材を小口積み・横積みに積んで構築したものである。石室の規模は，現状で長さ（南南西側壁）1.31m，同（北北東側壁）1.25m，同幅（奥壁）0.39m，同（石室入口付近・最小）0.30m，同（石室入口）0.36m，高さ（奥壁）0.53m，同（石室入口）0.26～0.32mである。天井石は全く残っていないが，奥壁最上段及び北北東側壁奥壁側の最上段の高さが下傾しながらも比較的揃うことから，これらの直上に天井石が構架されていた可能性は高い。石室平面形は入口付近が若干窄まるが，ほぼ長方形である。第34号古墳に伴う遺物はない。

ａ．奥壁　左右にほぼ同じ大きさの石材２個を縦長の広口積みに立て，向って左側（南南西側）の基底石の上に小型の板石を２段横積みしている。左側の基底石は長辺59cm，短辺26cm，奥行26cmの石材を縦長の広口積み，右側（北北東側）の基底石は長辺65cm，短辺24cm，奥行18cmの石材を縦長の広口積みに立てる。基底石上の石積みの１段目は長辺26cm，短辺17cm，厚さ５cmの石材

を横積みし，２段目には長辺11cm，短辺７cm，厚さ２cmの小型の石材を左側に，長辺17cm，短辺11cm，厚さ５cmの石材を右側に並べ，いずれも横積みしている。後者の石材は原位置をある程度動いている可能性が高い。

ｂ．南南西側壁　現状で３枚の基底石を横長・縦長の広口積みに立て，これらの上に１段程度の石積みが残る。基底石上の石積みはいずれも石材を小口積みに置く。奥壁寄りの基底石は長辺48cm，短辺33cm，奥行16cmの石材を縦長の広口積みに立て，奥壁から２枚目は長辺57cm，短辺30cm，奥行17cmの石材を横長の広口積み，３枚目は38cm四方，奥行17cmの石材を広口積みに立てる。これらの基底石上には長辺22～40cm，短辺15～30cm，厚さ９～17cmの石材を１枚横長の小口積み主体に積むが，２段目以降の石積みは残っていない。

ｃ．北北東側壁　現状で３枚の基底石を横長・縦長の広口積み及び横積みに置き，これらの上に１～２段の石積みが残る。基底石はほぼ同程度の規模の大型の石材を用い，奥壁寄りの石材は長辺52cm，短辺33cm，奥行21cmの石材を縦長の広口積み，２枚目は長辺45cm，短辺32cm，奥行14cmの石材を横長の広口積み，そして前端の３枚目の石材は長辺42cm，短辺26cm，奥行34cmとやや大型の石材を横積みに置いている。これら基底石上の石積みは，奥壁から２枚目の大型の基底石上に長辺50cm，短辺26～31cm，厚さ12～13cmのほぼ同規模の石材２枚をいずれも横積みに２段重ねて奥壁寄りの縦長に立てた基底石の上面に高さを揃えている。そして，これらの石材の上に長辺15～30cm，短辺10～15cm，厚さ数cmの小型の板石を１段程度いずれも横長の小口積みにしている。前端の一段低い基底石上には長辺36～38cm，短辺14cm，厚さ10cmのほぼ同規模の角柱状の石材２個を縦長・横長の小口積みに積む。

ｄ．床面　掘方底面全体に20～30cm大，厚さ３～14cmの方形状の板石を敷き並べている。両側壁中央の基底石と敷石の間には１枚ずつ小型の板石（長辺20cm，短辺５～７cm，厚さ３～５cm）を横向きに立てて挟み込んでいるが，敷石と側壁基底石との隙間を埋めて敷石の固定・補強を図ったものと考えられる。敷石上面は奥壁側が高く，石室入口側に下傾する（傾斜角度５°）。

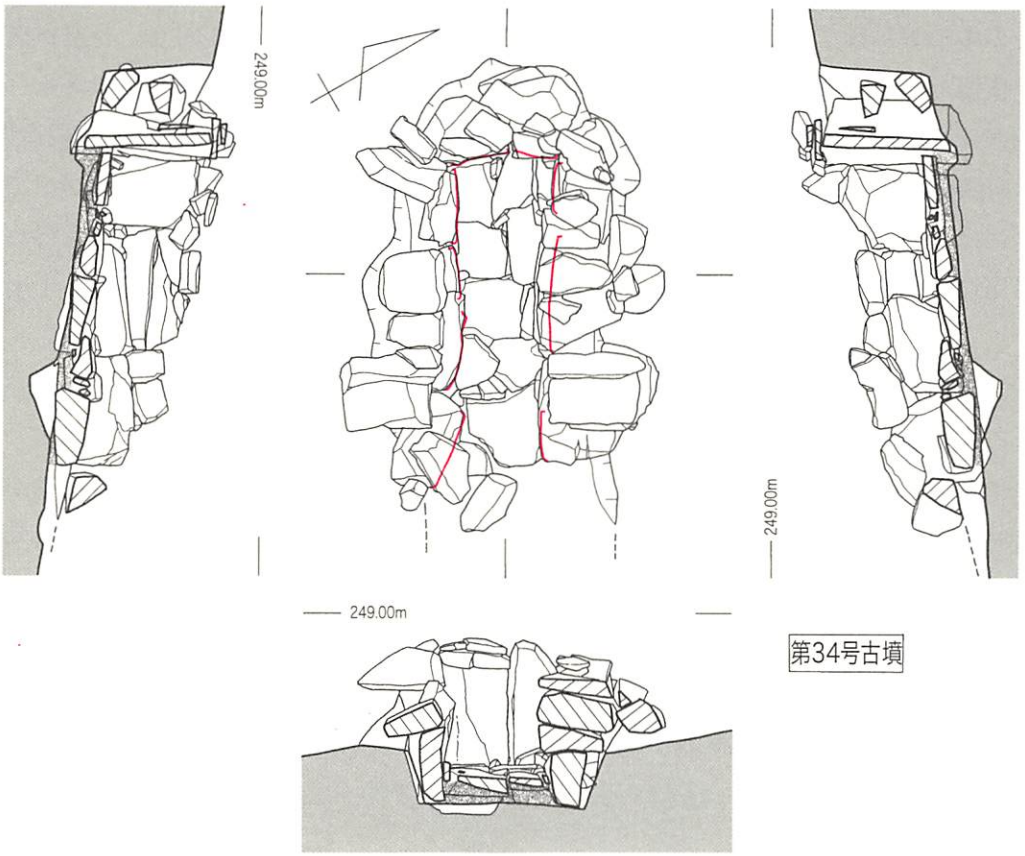
５．宮の本第35号古墳（第３・４図）

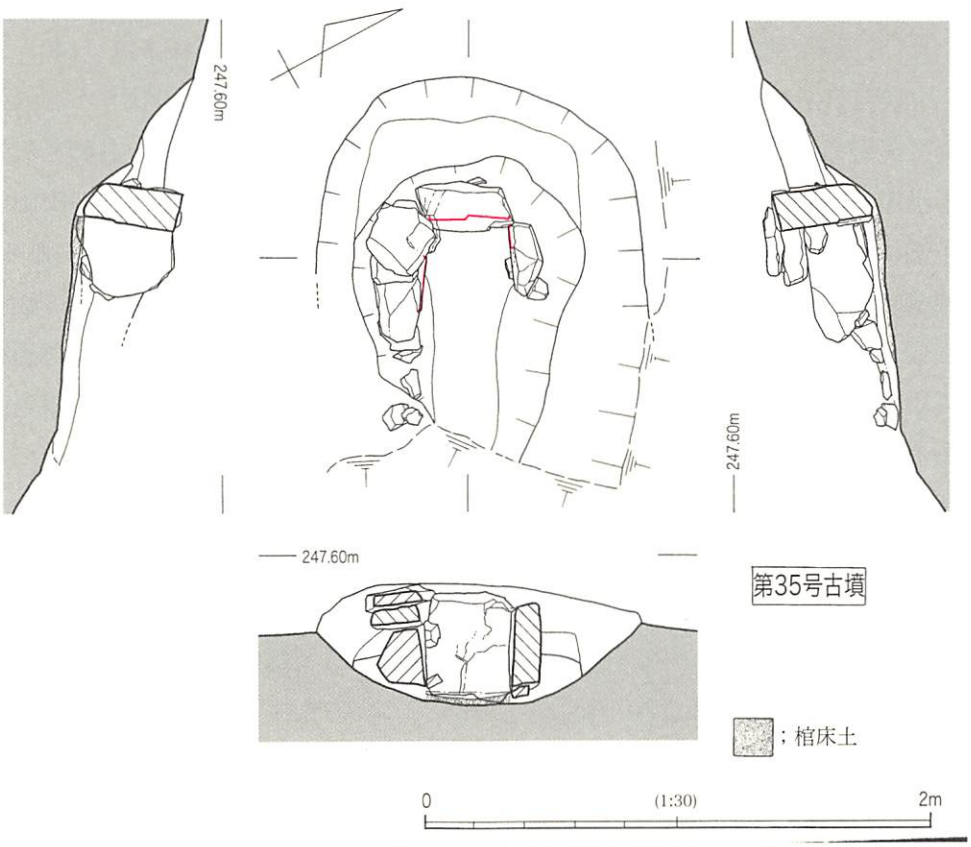
（１）立地と調査前の状況（第40図）

第35号古墳は第34号古墳の南側斜面下方にある小型横穴式石室を埋葬施設とする古墳で，周溝・墳丘は完全に失っている。調査前には何ら古墳の存在を窺わせるものはなく，調査の進展に伴って新たに検出したものである。第11号古墳の北6.8m，第34号古墳の南東３mの北から南に傾斜する緩斜面に構築されている（標高247.5m）。

（２）石室（第53図，図版45ｂ・ｃ）

奥壁及び奥壁側の両側壁を残すがいずれも基底石を中心としており，天井石をはじめ大半の石材が失われている。石室の長軸は西北西－東南東方向（N61°W）を指し，東南東方向に開口する。石室は，現存規模が長さ1.63m，幅（最大）1.29m，深さ（最大）0.48mの平面形不整隅丸長方





第53図　宮の本第34・35号古墳石室実測図（1：30）

形の掘方の中に築かれている。掘方は奥壁背後を中心に二段掘りになっており，石室が構築されている下段掘方の規模は現状で長さ1.2m，幅（最大）0.9m，深さ（最大）0.24mである。奥壁・北北東側壁は基底石のみだが，南南西側壁は基底石上に２段の石積みが残る。石室の現存規模は，長さ（南南西側壁）0.51m，同（北北東側壁）0.30m，幅（奥壁）0.33m，高さ0.36～0.44mである。掘方底面にはごく薄く棺床土（淡黄褐色土）を入れて棺床としているが，敷石などは行われていない。棺床は奥壁側が高く，入口側に向って緩やかに下傾している（傾斜角度８°）。出土遺物はない。

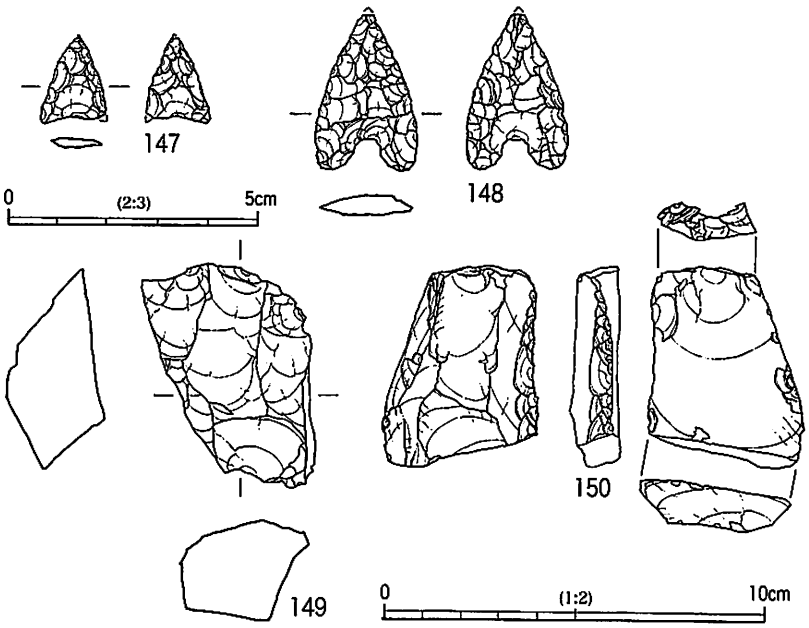
ａ．奥壁　基底石は１枚で，長辺42cm，短辺34cm，奥行16cmの石材を縦長の広口積みに立てている。基底石上の石積みは残っていない。

ｂ．南南西側壁　奥壁寄りの基底石１枚とその上に２段分の石積み，そして恐らく奥壁から２枚目の基底石直下の詰石とみられるもの６個が残る。基底石は長辺56cm，短辺24cm，奥行20cmの石材を横長の広口積みに立て，その直上に長辺27cm，短辺19cm，厚さ９cmの石材，２段目は長辺27cm，短辺25cm，厚さ５cmの石材をいずれも横積みしている。詰石は数～10cm大の小型の板石・角礫である。

ｃ．北北東側壁　奥壁寄りの基底石１枚のみが残存する。長辺37cm，短辺29cm，奥行12cmの石材を縦長の広口積みに立てている。基底石上の石積みは全く残っていない。

６．調査区内出土の石器（第54図，図版52）

遺構に伴わない石器４点で，石鏃２点（147・148），削器１点（150），石核１点（149）がある。147は最大長（現存）1.7cm，最大幅1.3cmの凹基無茎式の小型の石鏃で，基部の抉りが２mmと浅い。平面形状は長三角形で，脚部は尖る。Ａ面（向かって左側。Ｂ面は向って右側）右脚を欠失する。Ａ・Ｂ両面下半中央に基部側から大きな剥離が入れられている。石材は暗灰黒色の安山岩系である。Ａ面の尖端には先端側からの衝撃による小剥離がみられる。未成品の可能性がある。148は大型の凹基無茎式の石鏃で，最大長（現存）3.1cm，最大幅2.0cmである。基部の抉りは６mmと深い。Ｂ面の尖端にはＡ面先端からの衝撃による小剥離がみられる。Ａ・Ｂ両面中央に素材面を残す。Ｂ面下半中央には基部側からの加撃によるやや大きな剥離痕がみられる。石材は灰黒色の安山岩系のものである。149は最大長６cm，最大幅4.4cmの縦長剥片を主体的に作出した石核で，淡黄褐色の細粒凝灰岩を石材とする。自然面あるいは素材面を打面として３枚の縦長剥片を作出している。背面に自然面を大きく残し，両側面などには素材面を残す。150は最大長5.4cm，最大幅4.1cmの削器で，幅広の縦長剥片の側縁に腹面側からの連続的な加撃により刃部を作り出している。素材剥片の背面には素材面と縦長剥片を作出した作業面を留め，下端は背面側からの加撃により折損している。石材は安山岩である。



第54図　宮の本遺跡出土石器実測図（2：3，1：2）

第６表　宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳出土遺物一覧表

報告番号	器種①	器種②	遺構名	出土位置	法量（単位cm・g，＊；復元値，括弧；現存値）				備考
					口径・長さ	器高・幅	底径・厚さ	最大径・重さ	
1	須恵器	杯蓋	ＳＢ１		口径12.2	器高4.4			
2	須恵器	杯身か	ＳＢ１			器高（2.7）	底径＊10.6		
3	須恵器	壺	ＳＢ１			器高（5.9）		体部最大径＊6.0	
4	土師器	甑	ＳＢ１		口径＊23.4	器高（19.4）			
5	須恵器	杯身	ＳＢ２		口径9.8×10.2	器高3.7			
6	鉄器	鉄釘	ＳＢ２	炉跡	長さ（3.2）	幅0.4	厚さ0.4		頭部側欠失
7	須恵器	杯蓋	ＳＢ５		口径＊10.4	器高（1.6）	かえり径＊9.2		
8	須恵器	杯蓋	ＳＢ５		口径12.8×13.4	器高4.2			
9	須恵器	高杯（杯部）	ＳＢ５	北辺壁溝内	口径＊11.6	器高（2.9）			
10	須恵器	高杯（脚部）	ＳＢ５			器高（5.7）			軟質
11	須恵器	壺か	ＳＢ５		口径＊11.2	器高（4.5）			
12	土師器	甕	ＳＢ５	貼床下	口径＊18.8	器高（3.4）			
13	土師器	皿	ＳＢ５		口径＊10.8	器高2.1			放射状暗文
14	土師器	椀	ＳＢ５		口径＊16.1	器高（5.4）			放射状暗文
15	玉	小玉	ＳＢ９		最大径1.1	高さ0.5～0.8	孔径0.45	重さ1.11	琥珀製か
16	土師器	甕	ＳＢ10		口径＊17.0	器高（4.3）			
17	須恵器	杯身	ＳＢ11			器高（0.8）	高台径＊9.4		
18	須恵器	椀	ＳＢ11			器高（1.3）	高台径＊11.4		
19	須恵器	高杯（脚部）	ＳＢ11			器高（1.7）	高台径＊6.4		
20	須恵器	椀	ＳＢ11	ＳＢ11ｃ壁溝内	口径＊13.6	器高5.3			
21	土師器	椀	ＳＢ11		口径＊15.6	器高6.5			
22	土師器	甑	ＳＢ11		口径＊19.0	器高20.3	底径＊5.8		
23	鉄器	鉄鎌（直刃）	ＳＢ11	ＳＢ11ｃ床面	全長（13.0），刃部長（10.5），刃部幅（1.0～3.3）				着柄部左側
24	鉄器	鉄鏃（茎部）	ＳＢ11		長さ（3.1）	幅0.5	厚さ0.4		
25	鉄器	鉄鏃（茎部）	ＳＢ11		長さ（3.1）	幅0.4	厚さ0.4		
26	鉄器	用途不明製品	ＳＢ11		長さ（4.3）	幅0.7	厚さ0.6		頭部側欠失
27	須恵器	杯蓋	ＳＢ12		口径＊15.4	器高（3.0）			
28	須恵器	杯身	ＳＢ12			器高（1.4）	高台径＊7.3		
29	須恵器	杯身	ＳＢ12			器高（2.4）	高台径＊9.8		
30	須恵器	杯身	ＳＢ12			器高（1.7）	高台径＊11.4		
31	須恵器	鉢	ＳＢ12			器高（11.6）	底径＊10.6		

報告番号	器種①	器種②	遺構名	出土位置	法量（単位cm・g，＊；復元値，括弧；現存値）				備考
					口径・長さ	器高・幅	底径・厚さ	最大径・重さ	
32	土師器	甕	ＳＢ12		口径*22.0	器高（6.2）			
33	土師器	甕	ＳＢ12		口径*30.4	器高（16.9）		体部最大径*28.4	
34	土製品	平瓦	ＳＢ12	床面東端	長さ（16.7）	幅（10.2）	厚さ2.3		凹面布目・凸面縄目
35	須恵器	杯蓋	ＳＢ13		口径*18.4	器高（1.2）	かえり径*14.5		
36	須恵器	杯身	ＳＢ13		口径*14.4	器高（3.1）			
37	須恵器	高杯（脚端部）	ＳＢ13			器高（0.9）	脚端径*10.6		
38	土師器	甕	ＳＢ13		口径*12.8	器高（2.8）			
39	土師器	甑	ＳＢ13		口径*26.7	器高（7.5）			
40	土師器	甑	ＳＢ13			器高（12.9）	底径*12.0		
41	鉄器	刀子（茎部）	ＳＢ13		長さ（5.2）	幅1.0～1.4	厚さ0.4		中央に円孔あり
42	鉄器	鉄刀片	ＳＢ14		長さ（5.3）	幅（2.3～3.7）	厚さ（0.5）		
43	須恵器	平瓶	ＳＢ15	壁溝上層	口径5.2	器高12.2		体部最大径14.8	
44	土師器	甕	ＳＢ17		口径*15.9	器高（8.0）			
45	須恵器	杯蓋	ＳＢ18		口径*10.0	器高3.2			
46	土師器	甕	ＳＢ18		口径*15.4	器高（4.0）			
47	鉄器	鉄釘	ＳＢ18		長さ（6.8）	幅（0.4～0.6）	厚さ（0.4～0.5）		
48	須恵器	杯蓋	ＳＢ19						
49	須恵器	杯蓋	ＳＢ19	ＳＢ19ｃ床面					
50	須恵器	杯蓋	ＳＢ19		口径*16.0	器高（2.1）	かえり径*14.2		
51	須恵器	杯蓋	ＳＢ19		口径*20.2	器高（1.8）			
52	須恵器	杯身	ＳＢ19		口径10.4	器高3.4			
53	須恵器	杯身	ＳＢ19		口径*12.4	器高（3.1）			
54	須恵器	杯身	ＳＢ19		口径*13.2	器高（3.4）			
55	須恵器	椀	ＳＢ19	ＳＢ19ｃ床面		器高（1.4）	高台径*11.4		
56	須恵器	椀	ＳＢ19		口径14.0	器高5.6			
57	瓦器か	椀	ＳＢ19	ＳＢ19ｃ床面	口径*18.6	器高（5.3）			
58	須恵器	高杯	ＳＢ19	ＳＢ19ｃ床面	口径*9.7	器高4.75	脚端径*5.4		
59	須恵器	高杯	ＳＢ19			器高（2.8）			
60	土師器	椀か	ＳＢ19			器高（2.9）	底径7.4		
61	土師器	椀	ＳＢ19	ＳＢ19ｃ床面	口径*11.0	器高（3.2）			
62	土師器	椀	ＳＢ19			器高（4.2）	高台径9.6		

報告番号	器種①	器種②	遺構名	出土位置	法量（単位cm・g，＊；復元値，括弧；現存値）				備考
					口径・長さ	器高・幅	底径・厚さ	最大径・重さ	
63	土師器	甕	ＳＢ19		口径*12.6	器高（8.2）		体部最大径*14.0	
64	土師器	甕	ＳＢ19	ＳＢ19ｄ平坦面	口径*19.6	器高（13.8）			
65	土師器	甕	ＳＢ19	ＳＢ19ｄ平坦面	口径*22.6	器高（12.7）		体部最大径*21.0	
66	土師器	甕	ＳＢ19		口径17.2	器高（13.5）			
67	土師器	甕	ＳＢ19		口径*17.8	器高（7.9）			
68	土師器	甕	ＳＢ19		口径*28.6	器高22.9		体部最大径*26.8	
69	鉄器	用途不明製品	ＳＢ19	炭層上面	長さ（2.9）	幅（0.9～1.3）	厚さ（0.75）		
70	土師器	甕	ＳＢ22		口径*17.6	器高（5.6）			
71	鉄器	用途不明製品	ＳＢ22		長さ4.3	幅1.0	厚さ0.4		
72	鉄器	鉄釘	ＳＫ２		長さ（7.7）	幅0.4～0.6	厚さ0.35～0.5		頭部側欠失
73	須恵器	杯	ＳＸ５			器高（4.8）	高台径5.4		瓦質
74	須恵器	杯蓋	ＳＸ７		口径*14.7	器高3.1	つまみ径8.2		輪状つまみ
75	須恵器	杯蓋	ＳＸ７		口径14.8	器高3.1			
76	須恵器	杯身	ＳＸ７		口径*10.8	器高3.4			
77	須恵器	杯身	ＳＸ７		口径*12.2	器高3.4			
78	須恵器	椀	ＳＸ７		口径*16.0	器高7.9	高台径*9.8		銅鋺を模すか。
79	須恵器	壺か	ＳＸ７		口径*8.4	器高（5.8）			
80	須恵器	杯蓋	第11号古墳		口径*10.6	器高4.1			
81	須恵器	杯蓋	第11号古墳		口径*10.6	器高（3.3）			
82	須恵器	杯蓋	第11号古墳	石室前面	口径*10.8	器高（5.0）			
83	須恵器	杯蓋	第11号古墳	石室前面	口径*11.0	器高（3.3）			
84	須恵器	杯蓋	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径11.0	器高3.7			
85	須恵器	杯蓋	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径*9.2	器高2.5			
86	須恵器	杯蓋	第11号古墳	石室前面	口径*10.0	器高3.2			
87	須恵器	杯蓋	第11号古墳	北東側外護列石周辺	口径*10.0	器高（3.4）			
88	須恵器	杯蓋	第11号古墳	石室前面	口径9.6	器高2.4		かえり径7.9	
89	須恵器	杯蓋	第11号古墳	石室前面	口径*9.6	器高（1.8）		かえり径*8.0	
90	須恵器	杯蓋	第11号古墳	石室前面	口径*10.2	器高（1.8）		かえり径*8.6	
91	須恵器	杯身	第11号古墳	墳丘盛土下層	口径*8.4	器高2.8		受部径*10.6	
92	須恵器	杯身	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径9.8	器高3.3		受部径11.6	
93	須恵器	杯身	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径10.2	器高3.3		受部径12.0	

報告番号	器種①	器種②	遺構名	出土位置	法量（単位cm・g，＊；復元値，括弧；現存値）				備考
					口径・長さ	器高・幅	底径・厚さ	最大径・重さ	
94	須恵器	杯身	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径*10.5	器高2.65		受部径*12.0	
95	須恵器	杯身	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径9.0×10.3	器高4.3		受部径11.4×12.4	
96	須恵器	杯身	第11号古墳	北東側外護列石周辺	口径10.3	器高4.2		受部径12.0	
97	須恵器	杯身	第11号古墳	南西側外護列石周辺		器高（3.2）		受部径*12.2	
98	須恵器	杯身	第11号古墳	北東側外護列石周辺		器高（3.8）		受部径*13.7	
99	須恵器	杯身	第11号古墳	石室前面	口径*9.4	器高3.2			
100	須恵器	杯身	第11号古墳	石室前面	口径9.7	器高2.9			
101	須恵器	杯身	第11号古墳	石室前面	口径*9.6	器高（3.25）			
102	須恵器	杯身	第11号古墳	石室前面	口径*10.3	器高3.6			
103	須恵器	杯身	第11号古墳	北東側外護列石周辺	口径*11.1	器高2.9			
104	須恵器	高杯（杯部）	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径*10.6	器高（3.2）			
105	須恵器	高杯（杯部）	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径*11.05	器高（3.8）			
106	須恵器	高杯（杯部）	第11号古墳	石室前面	口径*11.2	器高（3.8）			
107	須恵器	高杯（杯部）	第11号古墳	北東側外護列石周辺	口径*11.5	器高（3.0）			
108	須恵器	高杯	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径*12.8	器高（4.1）			
109	須恵器	高杯（杯部）	第11号古墳	北東側外護列石周辺	口径*12.8	器高（3.6）			
110	須恵器	高杯（杯部）	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径*14.0	器高（2.9）			
111	須恵器	高杯	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径*16.3	器高（2.8）			
112	須恵器	高杯	第11号古墳		口径8.3	器高4.55	脚端径5.7		
113	須恵器	高杯	第11号古墳	石室前面	口径*12.9	器高9.5	脚端径9.0		
114	須恵器	高杯	第11号古墳	石室前面	口径*15.3	器高10.4		脚端径*10.8	
115	須恵器	高杯（脚部）	第11号古墳			器高（3.5）	脚端径8.1		
116	須恵器	高杯（脚部）	第11号古墳	南西側外護列石周辺		器高（3.2）	脚端径*8.4		
117	須恵器	高杯（脚部）	第11号古墳			器高（5.3）			
118	須恵器	坩蓋	第11号古墳	石室前面	口径7.5	器高2.4		かえり径6.6	
119	須恵器	坩蓋	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径8.0×8.4	器高3.5			
120	須恵器	甕	第11号古墳	石室前面	口径9.2	器高11.4		体部最大径9.8	
121	須恵器	平瓶	第11号古墳	掘方内（石室北東側壁背後）	口径5.8	器高15.0		体部最大径14.7	
122	須恵器	平瓶	第11号古墳	石室入口床面	口径5.5×8.2	器高14.8		体部最大径18.1	
123	須恵器	平瓶	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径11.4	器高24.1		体部最大径24.45	大型品
124	須恵器	壺	第11号古墳	石室前面	口径*15.4	器高（11.7）			

報告番号	器種①	器種②	遺構名	出土位置	法量（単位cm・g，＊；復元値，括弧；現存値）				備考
					口径・長さ	器高・幅	底径・厚さ	最大径・重さ	
125	須恵器	甕	第11号古墳	南西側外護列石周辺					
126	須恵器	甕	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径*18.8	器高（6.9）			
127	須恵器	大甕	第11号古墳	南西側外護列石周辺		器高（46.7）		体部最大径52.7	口頸部欠失
128	須恵器	大甕	第11号古墳	南西側外護列石周辺	口径41.0×43.5	器高78.9		体部最大径*78.4	
129	土師器	壺か	第11号古墳		口径*9.4	器高（5.5）			
130	土師器	甕	第11号古墳	周溝内	口径*14.6	器高（2.9）			
131	土師器	甕	第11号古墳	周溝内	口径*19.2	器高（4.7）			
132	土師器	甕	第11号古墳	周溝内	口径*33.0	器高（3.8）			
133	土師器	甑か	第11号古墳	周溝内	口径*29.4	器高（4.35）			
134	石器	敲石か	第11号古墳	周溝内	最大長14.1	最大幅6.1	最大厚3.6	重さ367.94	花崗岩系（暗黄白色）
135	鉄器	刀子	第11号古墳	掘方内（石室北東側壁背後）	長さ（5.7）	幅（1.5）	厚さ（0.2～0.4）		
136	鉄器	刀子（茎部）か	第11号古墳	南西側外護列石周辺	長さ（4.7）	幅（1.45～1.7）	厚さ（0.35～0.5）		
137	鉄器	鉄釘	第11号古墳	石室内（棺台石周辺）	長さ7.2	幅（最大）0.5	厚さ0.4		折頭形
138	鉄器	鉄釘	第11号古墳	石室内（棺台石周辺）	長さ（5.9）	幅（0.45～1.0）	厚さ（0.5～0.6）		折頭形，先端欠失
139	鉄器	鉄釘	第11号古墳	石室内（棺台石周辺）	長さ（6.5）	幅（0.4～0.6）	厚さ（0.4～0.6）		折頭形，先端欠失
140	鉄器	鉄釘	第11号古墳	石室内（棺台石周辺）	長さ（5.5）	幅（0.5～0.7）	厚さ（0.5～0.6）		折頭形，先端欠失
141	鉄器	用途不明製品	第11号古墳		長さ（5.2）	幅（0.9）	厚さ（0.7）		環状
142	鉄器	用途不明製品	第11号古墳		長さ（1.3）	幅（1.2）	厚さ（0.7）		刀子状
142	鉄器	用途不明製品	第11号古墳		長さ（1.5）	径*2.0	厚さ（0.4）		管状（錮か）
143	鉄器	用途不明製品	第11号古墳		長さ（0.5）	幅（1.4）	厚さ（0.4）		茎状
143	鉄器	用途不明製品	第11号古墳		長さ（3.7）	幅（0.6）	厚さ（0.5）		釘状
144	銅製品	耳環	第11号古墳	石室内（敷石＋礫床上面）	外径1.7×1.8	内径1.05	断面径0.4×0.5	重さ（3.73）	銅芯鍍金
145	銅製品	耳環	第11号古墳	石室内（敷石＋礫床上面）	外径1.6×1.8	内径1.05×1.1	断面径0.35×0.5	重さ（3.22）	銅芯鍍金
146	鉄器	鉄釘	第33号古墳	奥壁付近	長さ（3.1）	幅0.6	厚さ0.5		
147	石器	石鏃	調査区内		最大長（1.7）	最大幅1.3	最大厚0.2	重さ（0.48）	安山岩系
148	石器	石鏃	調査区内		最大長（3.1）	最大幅2.0	最大厚0.4	重さ（1.93）	安山岩系
149	石器	石核	調査区内		最大長6.0	最大幅4.4	最大厚2.7	重さ60.43	細粒凝灰岩（淡黄褐色）
150	石器	削器	調査区内		最大長5.4	最大幅4.1	最大厚1.3	重さ34.74	安山岩

V まとめ

宮の本遺跡及び宮の本第11・33～35号古墳は，平成19（2007）年度に発掘調査を実施した宮の本第20～26・31・32号古墳の南220mに位置する古墳時代後期～古代の集落跡と古墳である。調査区の南西側に竪穴住居跡・住居跡状遺構などから成る居住域，中央に石蓋土坑墓など単独墓坑が連なる墓域，そして調査区北東側には大小の横穴式石室墳４基が存在する。居住域＋墓域を「宮の本遺跡」，古墳群を「宮の本第11・33～35号古墳」として調査を行った。以下においては，集落・墓域と古墳群それぞれについて調査成果をまとめ，二，三の問題点について検討を加えたい。

①集落（居住域）について　今回の調査では集落の中心部から東半にかけて検出しており，更に西側調査区外に集落が広がると考えられる。

住居は竪穴住居跡と住居跡状遺構に分けられる。竪穴住居は平面形方形の２・４本柱構造のもので，計８軒（重複分を含め計15軒）を検出した。住居跡状遺構は斜面を削平した不整形な平坦面に柱穴列や掘立柱建物を伴うもので，計14軒（重複分を含め計32軒）がある。近接あるいは部分的に重複する竪穴住居１～２軒＋住居跡状遺構１～２軒を単位とする例が多く，斜面上方から竪穴住居跡ＳＢ２＋住居跡状遺構ＳＢ１，竪穴住居跡ＳＢ５・ＳＢ６＋住居跡状遺構ＳＢ７，竪穴住居跡ＳＢ９＋住居跡状遺構ＳＢ10，住居跡状遺構ＳＢ11＋ＳＢ12，住居跡状遺構ＳＢ13～15，竪穴住居跡ＳＢ17＋住居跡状遺構ＳＢ16などがある。また，竪穴住居跡と住居跡状遺構がほぼ同じ位置で複数重複する例はＳＢ８・18・19の３軒がある。前者における住居跡状遺構は居住空間としての住居以外の性格（作業場・倉庫その他）を考えることができ，後者の例ではいずれも住居跡状遺構が竪穴住居跡の背後（斜面上方側）に位置することから，竪穴住居の付属施設的性格を考えることができると思われる。ここでは先ず，竪穴住居跡・住居跡状遺構の二，三の属性について若干の検討を行うことにする（第２表）。

ａ．<u>住居・建物の規模</u>　竪穴住居はいずれも平面形方形状で，一辺3.3～5.4m（平均4.3m）の規模である。斜面上方側（概ね北～北西側）の住居壁はほぼ完存するが，両側辺（概ね東・西側あるいは南西・北東側）の住居壁の残存状況は部分的で，斜面下方側の住居壁・床面はほぼ完全に流出している。よって，ここでは住居壁が完存する北～北西側の床面の長さから求めた推定床面積(計測可能竪穴住居跡計10軒)によって住居の規模を比較する。推定床面積は7.29（ＳＢ17）～21.9㎡（ＳＢ５ｂ）の範囲に納まり（平均14.1㎡），15～20㎡の床面積のものが５軒／10軒と半数を数え，最も多い（ＳＢ５ａ・６ａ・６ｂ・19ａ・19ｂ・19ｃ）。一方，平坦面に建物を伴う住居跡状遺構３軒の平坦面に存在する建物の専有面積は4.66㎡（ＳＢ15），10.7㎡＋α（ＳＢ12），14.6㎡（ＳＢ３）であり，竪穴住居の床面積の平均値とそれほど大きな差はない。

ｂ．<u>竪穴住居の柱構造</u>　柱構造が判明する竪穴住居は11軒／15軒で，２本柱構造の住居が２軒（Ｓ

B17・ＳＢ19ａ），４本柱の住居が８軒（ＳＢ５ａ・５ｂ・６ａ・８ｂ・18ａ・18ｂ・19ｂ・19ｃ）である。ＳＢ９は２本柱か４本柱，ＳＢ２は前面に２間×１間の柱穴群を伴う。２本柱構造の住居はいずれも縦方向（斜面の等高線に直交する南北あるいは南西-北東方向）に柱穴が並ぶ。

ｃ．住居跡状遺構の柱構造　平坦面に柱穴群を伴う住居跡状遺構は７軒／32軒（22％）である。４軒（ＳＢ１ａ・１ｂ・11ｃ・16ａ）は柱穴列（２間・３間）で，建物跡はＳＢ３・12・15の３軒で検出している。ＳＢ３は前面の斜面に２間×１間の建物，ＳＢ15は平坦面が流出した斜面に２間×１間の建物，そしてＳＢ12は２間＋α四方の総柱建物を設けている。

ｄ．柱穴と柱の大きさ（第７表）　建物・柱穴列を構成する柱穴の大きさ（平均値）は，長径28～57cm，短径23～49cm，深さ17～57cmで，全平均は長径40cm，短径35cm，深さ36cmである。遺構毎の柱穴規模の平均値が最も大きいのは住居跡状遺構ＳＢ３（長径57cm）で，これにＳＢ12（長径55cm）・ＳＢ11ｃ（長径52cm）が続く。つまり，本集落で柱穴規模が最大であるのは住居跡状遺構の建物跡・柱穴列の柱穴ということになる。一方，竪穴住居で最も柱穴の規模が大きいのはＳＢ５ｂ（長径44cm×短径39cm，深さ51cm）である。住居跡状遺構の柱穴列の柱穴はＳＢ11を除けば長径33～44cmで，竪穴住居跡のそれに近い。また，柱構造の違いによる偏りはみられない。なお，土層観察により柱痕跡が窺える柱穴は14例で，径５～28cm（平均15cm）の大きさの柱が用いられたと考えられる。径15cm以上の柱痕跡が多く（11例／14例），８割弱を占める。その内訳は，

・径15cm＝ＳＢ15Ｐ２
・径18cm＝ＳＢ12Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３，ＳＢ15Ｐ３，ＳＢ18ｂＰ１
・径19cm＝ＳＢ17Ｐ１
・径20cm＝ＳＢ11ｃＰ１
・径23cm＝ＳＢ17Ｐ２
・径27cm＝ＳＢ12Ｐ６
・径28cm＝ＳＢ11ｃＰ４

である。これを住居毎にまとめると，径の大きい順から

・ＳＢ11ｃ（平均柱穴規模；長径52cm）＝Ｐ１（径20cm），Ｐ４（径28cm）
・ＳＢ12（平均柱穴規模；長径55cm）＝Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３（径18cm），Ｐ６（径27cm）
・ＳＢ17（平均柱穴規模；長径41cm）＝Ｐ１（径17cm），Ｐ２（径23cm）
・ＳＢ15（平均柱穴規模；長径39cm）＝Ｐ２（径15cm），Ｐ３（径18cm）
・ＳＢ18（平均柱穴規模；長径30cm）＝Ｐ１（径18cm）

この柱痕跡の検出例からみても，柱穴規模が最大規模である住居跡状遺構ＳＢ11の柱穴列やＳＢ12の総柱建物で特に太い柱が使用されていた可能性が高く，ＳＢ11やＳＢ12において通常の住居よりも大型の建物が建てられていた蓋然性は高い。因みに，その住居規模や頻繁な建て替えなどからＳＢ18とともに本集落でも中心的な竪穴住居と考えられるＳＢ19でもＰ３（ＳＢ19ｂ・ｃ）において柱痕跡を検出しているが，それから窺える柱の太さは径12cmと通常のもので，それほど

第７表　竪穴住居跡・住居跡状遺構の柱穴

遺構番号	種類	形態	検出柱穴数	柱間距離（m）		柱穴規模（長径×短径，深さ・cm）		柱痕跡	柱規模（径・cm）	備考
				個別	平均	個別	平均			
ＳＢ１ａ	住居跡状	柱穴列	3	1.62，1.62	1.62	26～40×24～33，38～56	34×30，47			
ＳＢ１ｂ	住居跡状	柱穴列	3	2.22，1.5	1.86	30～36×22～30，25～39	33×26，31			
ＳＢ２	住居	１間×２間	5	桁2.82（２間），1.48，1.36 梁1.26，1.26	梁1.26 桁1.42	23～50×22～50，６～33	35×31，17			
ＳＢ３	住居跡状	１間×２間	6	桁2.4，2.14，2.03，2.54 梁3.21，3.21	桁2.28 梁3.21	36～74×28～56，20～61	57×44，40			
ＳＢ５ａ	住居	４本柱	4	桁1.9，2.3，梁1.8，1.94	桁2.1 梁1.87	38～47×38～40，48～62	43×39，54			ほぼ共用
ＳＢ５ｂ	住居	４本柱	4			42～47×38～40，42～62	44×39，51			
ＳＢ６ａ	住居	４本柱	4	桁1.6，1.72，梁1.1，1	桁1.66 梁1.05	24～40×22～32，17～23	31×27，21			
ＳＢ８ｂ	住居	４本柱か	3	桁1.5，梁1.8		40～46×38～46，27～45	43×41，35	１（Ｐ６）	13×16	
ＳＢ９	住居	２or４本柱	２～３	桁1.16，梁0.72		24～52×23～38，22～30	42×30，26			
ＳＢ11ｃ	住居跡状	柱穴列	4	1.76，1.68，1.64	1.69	46～56×44～48，51～63	52×47，57	２（P1・P4）	20，28	
ＳＢ12	住居跡状	総柱 ２間四方＋	7	桁1.38，2.02，2.27，2.48 梁1.34，1.42，1.52，1.64	桁2.04 梁1.48	47～64×38～63，24～66	55×49，52	４(P1・P2・P5・P6)	18，18，18，27	
ＳＢ15	住居跡状	１間×２間か	5	桁1.44，1.5，2.46（２間） 梁1.54，1.9	桁1.35 梁1.72	32～54×30～38，13～50	39×34，33	３（P1～P3）	５，15，18	歪な方形
ＳＢ16	住居跡状	柱穴列	4	1.3，1.56，1.72	1.53	40～52×34～46，29～46	44×39，39			
ＳＢ17	住居	２本柱（縦）	2	1.26		38～43×34～37，23～35	41×36，29	２（P1・P2）	19，23	
ＳＢ18ｂ	住居	４本柱か	４か	桁1.52，2.04 梁1.68，2.16	桁1.78 梁1.92	20～38×20～36，17～41	30×28，30	１（Ｐ１）	18	歪な方形
ＳＢ19ａ	住居	２本柱（縦）	2	1.2		30～34×28，23～30	32×28，27			
ＳＢ19ｂ	住居	４本柱	4	桁1.9，2.0，梁1.6，1.7	桁1.95 梁1.65	径34～42，深さ35～48	径36， 深さ40	１（Ｐ３）	12	桁行北辺のＰ３・Ｐ４を共用
ＳＢ19ｃ	住居	４本柱	4	桁1.9，2.0，梁2.3，2.3	桁1.95 梁2.3	28～43×24～36，37～52	36×31，40			
ＳＢ19	住居	柱穴列	4	1.26，1.28，1.6	1.38	24～30×20～28，12～29	28×23，21			Ｐ２（ＳＢ19ａ）・Ｐ８（ＳＢ19ｃ）は共用

大きなものではない（柱穴規模平均；長径39cm・36cm）。

e．カマド跡　４軒の住居で造り付けのカマド跡を検出した（竪穴住居跡３軒＝ＳＢ２・５ａ・17，住居跡状遺構１軒＝ＳＢ14）。これらのカマド跡は斜面高所側の住居壁の東～北東寄りあるいは東～北東辺の住居壁の中央付近に設けられている。前者としてＳＢ５ａ・14，後者としてＳＢ２・17がある。ＳＢ５ａのカマド跡は袖部を後出する住居によって失っており明らかでないが，ＳＢ２・14のカマド跡は袖部の芯に石を用いていた可能性がある。

ｆ．炉跡　炉穴を伴うのはＳＢ２・５ａ・５ｂ・19ｂ・19ｃの竪穴住居跡５軒である。炉穴の規模は短径26～50cm×長径34～76cm，深さ５～39cmで，通常の浅いものとピット状の深いものとがある。後者のピット状のもの（ＳＢ２・５ａ）や炉穴の覆土から鉄滓・鉄釘が出土するもの（ＳＢ２・５ｂ）は通常の炉跡以外の性格，具体的には鍛冶炉の可能性が考えられる。

ｇ．住居の重複と貼床　貼床などによる住居の重複は10軒でみられる。竪穴住居のみ重複する例は２例（ＳＢ５・６）で，いずれも２軒ずつが重複する。住居跡状遺構どうしが重複する例は５例（ＳＢ11・13・16・21・22）あり，それぞれ２～６軒が重複している。竪穴住居跡＋住居跡状遺構が重複する例は３例（ＳＢ８・18・19）で，竪穴住居跡２～３軒＋住居跡状遺構１～２軒の重複である。これら住居の重複はＳＢ13を除いていずれも貼床に依っている。また，最も先行する住居の床には貼床を施さないのが一般的であるが，３軒（ＳＢ５ａ・16ａ・22ａ）では整地的な貼床を行っている。なお，ＳＢ22ａでは整地土の上に更に整地的な貼床を行う。また，重複のない単独の住居で整地的な貼床を施す例が２例ある（ＳＢ２・９）。

②集落の時期について　竪穴住居跡や住居跡状遺構からの遺物の出土量はそれほど多くはない。また，これらの遺構が比較的急傾斜の斜面に立地していることから，遺物の転落・移動が一定度存在した蓋然性が高く，出土した遺物が必ずしもその遺構の時期を示しているとは限らない。よってここでは，各遺構の床面直上出土の遺物を中心に遺構の時期を検討することとし，竪穴住居跡４軒（ＳＢ２・５・18・19），住居跡状遺構４軒（ＳＢ１・11・12・13）と石積遺構ＳＸ７の時期について，出土した須恵器を中心に考えてみたい。

ＳＢ２の北辺住居壁際の床面直上から出土した須恵器・杯身５は，口径9.8～10.2cm，器高3.7cmで，須恵器・杯G[1]身に分類される。飛鳥Ⅰ・末～飛鳥Ⅱ・前半[2]頃に編年され，７世紀中葉のものと考えられる。ＳＢ５の床面近くから出土したものとしては，７・８・９・13がある。須恵器・杯Ｈ蓋の７は口径10.4cmで，外面頂部の回転ヘラ切り不調整の縁辺に部分的に回転ヘラケズリを行う。同・杯Ｇ蓋の８は口径12.8cm×13.4cm，器高4.2cmで平坦な頂部から外下方に直線的に延びた体部に短く屈曲して垂下する口縁が付く器形で，外面頂部は回転ヘラ切りのみで回転ヘラケズリは全く施されていない。いずれも飛鳥Ⅰ期末の奈良県・甘橿丘東麓遺跡焼土層ＳＸ037[3]のものに類似し，７世紀中葉頃のものと考えられる。ＳＢ18覆土出土の45は口径10.0cmの須恵器・杯Ｈ蓋で，外面頂部に広く回転ヘラケズリを施している。飛鳥Ⅰ期後半の山田寺下層[4]出土のものに類似しており，７世紀中葉頃のものとみられる。ＳＢ19からは多くの土師器・須恵器が出土してい

るが，その多くは覆土上層からの出土で，斜面上方の他遺構から流入したものと考えられる。それらの中で，49・52・55・57・58・61は最後出の竪穴住居跡ＳＢ19ｃのほぼ床面直上からの出土で，ＳＢ19ｃに伴う可能性が高い。杯身52は口径10.4cm，器高3.4cmの須恵器・杯ＡⅣ身で底部は回転ヘラ切り不調整であり，飛鳥Ⅳ期[5]頃のものと考えられる。高台の付く杯Ｂ身の57は高台の高さが減ずる飛鳥Ⅳ期頃，低脚高杯58は滋賀県・山ノ神遺跡[6]灰原第１層出土須恵器（図版41-51）に類似し，飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。また，土師器・椀61も飛鳥Ⅳ期を中心とした時期のものとみられ，ＳＢ19ｃ床面直上出土の土器は飛鳥Ⅲ・Ⅳ期を中心とした概ね７世紀後葉頃のものと考えられる。

住居跡状遺構では，ＳＢ１・11～13の４軒で時期が窺える遺物が出土している。ＳＢ１では，先行するＳＢ１ａの北辺壁際の平坦面付近から須恵器・杯Ｈ蓋の１が出土した。口径12.2cmで，外面頂部は回転ヘラ切り不調整であり，飛鳥Ⅰ・末の７世紀中葉頃のものとみられる。ＳＢ11では，ＳＢ11ｃの壁溝内から20，同じく覆土下層から17・21・22が出土している。20は口径13.6cm，器高5.3cmの深い器形の須恵器・椀Ａで，平底の底部は回転ヘラ切り不調整である。21の土師器・椀は口径15.6cmのより大型で深い器形で，丸みの強い器形の手づくね状の粗い作りである。これらの椀は平城Ⅱ期[7]を中心とする８世紀前葉頃のものと考えられる。高台杯片17は直立する短い高台の特徴から平城Ⅰ期以降とみられる。これらの遺物からＳＢ11は８世紀前葉頃の遺構と考えられる。２間×２間以上の総柱建物を伴うＳＢ12の床面直上から出土した29を含む須恵器・高台片はいずれも底部の端部にハの字に踏ん張る似通った形態の高台が付くもので，平城Ⅱ期を中心とした時期のものとみられる。また，つまみをもつ杯Ｂ蓋の27は屈曲して短く垂下する口縁の形態の特徴から飛鳥Ⅴ(平城Ⅰ)期を中心とした時期で，これらからＳＢ12は８世紀前葉を中心とした時期の遺構と考えることができよう。ＳＢ13の覆土から出土した須恵器・杯Ｂ蓋の35は口縁端部からあまり突出しない短いかえりをもち，36は口径14.4cmの有高台の低平な杯Ｂ身である。これらはその形態などから飛鳥Ⅲ～Ⅳ期の７世紀後半を中心とした時期のものと考えられる。このＳＢ13の直上に築かれた石積遺構ＳＸ７では，石積みの周囲から須恵器６点（74～79）が出土しているが，これらのうち，74は輪状つまみをもつ杯Ｅあるいは杯Ｆ蓋で，つまみの径が8.2cmと大きく，丸みのある頂部からくの字に屈曲して開きながら口縁が延びる形状は，８・９世紀頃のものとされる京都・長刀坂古墓出土の銅鋺の蓋[8]に酷似している。75の須恵器・杯Ｂ蓋は口径14.8cmで，平坦なつまみは中央がやや盛り上がり，頂部～体部から屈曲して開き気味に短く垂下する口縁が付く。飛鳥Ⅴ（平城Ⅰ）期で，７世紀末～８世紀初頭頃のものと考えられる。76・77は口径10.8cm，器高3.4cmと口径12.2cm，器高3.4cmの大小２つの杯Ａ身で，平底の底部外面は回転ヘラ切り不調整である。これらの特徴から，76・77の２点は平城Ⅱ期の８世紀前葉頃のものとみられる。このように，ＳＸ７はその出土遺物からほぼ８世紀前半頃の遺構である可能性が高い。

以上のように，須恵器を主体とした土器類の検討から竪穴住居跡・住居跡状遺構の時期を考えると，本集落を形成する住居などは①７世紀中葉～後葉＝ＳＢ１・２・５・13・18・19と②８世紀前葉＝ＳＢ11・12，ＳＸ７の大きく２時期に分けることができる。時期が判明する竪穴住居跡・

住居跡状遺構は計８軒／22軒と全住居の半数にも満たないが，これらの住居のうちの大半が営まれた７世紀中葉～後葉を本集落の中心的な時期と捉えることができよう。

③集落の性格について　住居跡状遺構の平坦面に建てられた掘立柱建物の建物面積と竪穴住居の床面積には大きな差はなく，竪穴住居跡と住居跡状遺構がセットで存在する本集落の場合，両者の間には何らかの機能や性格の違いがあったのではないかと考えられる。即ち，竪穴住居は通常の居住空間として，住居跡状遺構には例えば作業場や倉庫など居住以外の機能を考えることができよう。この作業場などの可能性が考えられる住居跡状遺構を各住居が伴う本集落の性格としては，ここではＳＢ２・５の炉跡が鍛冶炉の可能性があることから，何らかの形で鉄製品の製造・加工に関わっていた可能性を示唆するにとどめる。

ところで，８世紀前葉を主体とした時期に営まれたと考えられるＳＢ11・ＳＢ12・ＳＸ７は，調査区西辺中央の一角に纏まって存在する。ＳＢ11・12は集落でも最大規模の主柱を用いた建物や柱列を伴う。特に，ＳＢ12の建物は総柱建物であり，倉庫・祭殿・高殿など住居以外の機能をもった建物に採用されたと考えられている[9]。また，このＳＢ11・ＳＢ12・ＳＸ７の区画からは瓦や金属製容器を模した須恵器など仏教的色彩の濃い遺物が出土している。すなわち，須恵器・椀78はＳＸ７のほかにＳＢ11・12やＳＸ６からも破片が出土している。この特徴的な高台をもつ椀は体部の形状が仏器である銅鋺に酷似する。同じくＳＸ７から出土した輪状つまみの杯蓋74は銅鋺の蓋に酷似したものがある。また，ＳＢ12の総柱建物の近くからは平瓦片34が出土している。これらのことから，ＳＢ12の総柱建物やＳＢ11の柱列が示唆する構築物をごく小規模な仏堂やその付属施設[10]とみることもできよう。そう考えると，周囲に同時期の通常の住居は存在しないことから，８世紀前葉頃の調査区付近は村落の中心から外れ，ごく小規模な仏堂を中心とした空間が形成されていたのではないかと想定される。遺跡の0.5～1.1ｋｍの至近距離に県北でも有数の古代寺院である寺町廃寺跡と上山手廃寺跡が存在する。宮の本遺跡のＳＢ12などが存在した８世紀前半という時期はこれらの古代寺院が創建された時期（７世紀後半～末）からそれほど間がなく，その位置関係とともに一定程度の関わりを考えることも可能であるが，現状ではその詳細を明らかにすることはできない。

④墓坑群について　墓坑９基の内訳は，石蓋土坑墓３基（ＳＫ３・６・７），土坑墓３基（ＳＫ２・４・９），木棺墓２基（ＳＫ５・８），小型箱式石棺１基（ＳＫ１）である。これらは調査区中央の標高249～240m付近に，等高線に斜交～直交する方向に列状に並んでいる。等高線は，斜面上方のＳＫ１～３付近でN70°Ｅ，ＳＫ４・５付近で東北東－西南西方向のN60°Ｅと東寄りに走向しているが，斜面中位～下方のＳＫ６～９が位置するあたりでは北東－南西方向のN40°Ｅとかなり北寄りに走る。墓坑群が並ぶあたりの斜面の傾斜角度は斜面上方の標高249～247m付近（ＳＫ１～４）では５°程度と緩やかだが，斜面中位～下方の標高247～240m付近（ＳＫ５～９）では13°とかなり急になる。等高線の走行方向や斜面の傾斜角度をみると，標高247mのＳＫ４・Ｓ

Ｂ１・２付近に変換点があるようである。また，墓坑毎に，斜面上方に位置するＳＫ１，ＳＫ２・３（ほぼ同じ標高），ＳＫ４はほぼ0.5m，ＳＫ４～８にかけてはほぼ１ｍ，そしてＳＫ８とＳＫ９は４ｍの高低差がある。標高248.5m付近に位置するＳＫ２・３を除けば，ほぼ標高249.0m（ＳＫ１），248.0m（ＳＫ４），247.0m（ＳＫ５），246.0m（ＳＫ６），245.0m（ＳＫ７），244.0m（ＳＫ８），240.0m（ＳＫ９）の位置に各墓坑は造られている。墓坑の長軸方位[11]（第55図）は，北東～東北東－南西～西南西のN45°E～N63°Eを指す６基（ＳＫ３～８）と北北西－南南東のN20°W～N21°Wを指す２基（ＳＫ１・２），西北西－東南東のN59°Wを指す１基（ＳＫ９）に分けることができる。ほぼ北東－南西方向を指向する多数派の前者は平成19年度調査の第24号古墳の中心埋葬（ＳＫ24-1～３）の長軸方位に近く，後者のＳＫ１・２は横穴式石室墳（第20・32号古墳）の長軸方位に近似する。また斜面下端に位置するＳＫ９の長軸方位は同じく横穴式石室墳の第11・34・35号古墳のそれに近い。北東－南西方向を指向する６基の墓坑（石蓋土坑墓３基，木棺墓２基，土坑墓１基）はいずれも等高線に平行に構築されているが，少数派の北西－南東方向を指向する３基の墓坑（小型箱式石棺１基，土坑墓２基）は等高線に直交して造られている。石蓋土坑墓・木棺墓はすべて等高線に平行に築かれるが，土坑墓は３基のうち２基は小型箱式石棺とともに等高線に直交して築かれているが，残る１基は等高線に沿って造られていることになる。

これらの墓坑についてはいずれも時期を窺える出土遺物がなく，その造墓の時期を確定できない。墓坑群は居住域と古墳群に挟まれた一定の範囲に他遺構や墓坑同士が一部を除いて殆ど重複することなく，ほぼ規則的に築かれている。このことはこれらの墓坑が集落や古墳群の形成時期（７世紀）に近接した比較的短期間に相次いで造墓されたことを示唆しているのではないだろうか。

⑤横穴式石室の構造について　第11・33～35号古墳はいずれも横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。石室が完存するのは第11号古墳のみで，第33号古墳は天井石すべてを，小型の第34・35号古墳は天井石すべてと側壁の一部を失い，石室の全容は不明である。ここでは，調査区の北方200m余りに存在する第20・31・32号古墳（平成19年度調査）を含めた計７基の横穴式石室墳を比較しながら，石室構造などの検討を行いたい（第８表）。

ａ．<u>石室の長軸と開口方向</u>（第55図）　石室の長軸方向は第32・20号古墳が北北西-南南東，第33・11号古墳が北西-南東，第34・35・31号古墳が西北西-東南東で，石室の開口方向は第32・20号古墳が南南東方向，第33・11号古墳が南東方向，第34・35・31号古墳が東南東方向となる。これを方位でみてみると，開口方向は

・第31号古墳＝N102°E

・第35号古墳＝N119°E

・第34号古墳＝N120°E

・第11号古墳＝N126°E

第８表　横穴式石室の規模と石材の積み方

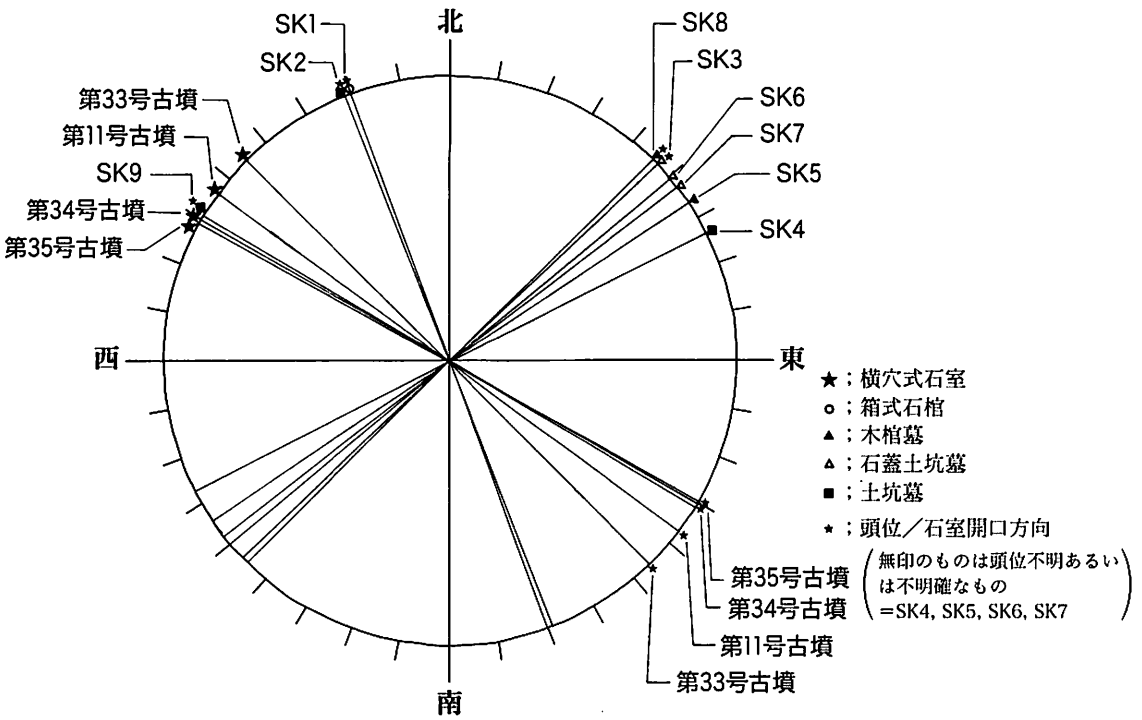
古墳番号		11		20		31		32		33		34		35	
石室長軸方位		N54°W		N24°W		N78°W		N21°W		N45°W		N60°W		N61°W	
石室開口方位		N126°E		N156°E		N102°E		N159°E		N135°E		N120°E		N119°E	
石室規模*①	長さ	8.22		6.58		4.3		2.45		2.34		(1.31)		(0.51)	
	幅	1.08		0.78		0.86		0.57		0.58		0.39		0.33	
	高さ	1.38		1.1		(1.08)		(0.35)		(0.92)		(0.53)		(0.44)	
奥壁*②		B３		A３		B		A		A４		B		A	
側壁*③		右側壁	左側壁	右側壁	左側壁	右側壁	左側壁	右側壁	左側壁	右側壁	左側壁	右側壁	左側壁	右側壁	左側壁
玄室	横・広口	1	3	5	4										
	縦・広口	7	4		3										
	方・広口			3											
	横・小口	1	1												
	縦・小口		1												
	横積み														
	縦・側面	1													
	計	10	9	8	7										
羨道	横・広口		2	1											
	縦・広口	1		1	3										
	方・広口				1										
	横・小口		2												
	縦・小口														
	横積み	2													
	縦・側面														
	計	3+	4	2	4										
石室全体	横・広口	1	5	6	4	4	5	2	2	4	6	1	1	1	
	縦・広口	8	4	1	6			1	5			1	1		1
	方・広口			3	1			1		1		1			
	横・小口	1	3					不明２		不明１					
	縦・小口		1												
	横積み	2				2							1		
	縦・側面	1					2								
	計	13+	13	10	11	6	7	4+2	7	5+1	6	3+	3+	1+	1+

*①石室規模；単位m。「長さ」＝最大値，「幅」＝奥壁での値，「高さ」＝奥壁での天井石～棺床面の値。ただし，第11・20・31・32・34号古墳は敷石上面からの値。天井石を失った石室は現存最大値。現存値は括弧付。

*②奥壁；奥壁の石材の積み方。ＡはＡ類で，石材１個を基底石とするもの，ＢはＢ類で，左右に大型の石材２個を広口積みするもの。Ａ３類は石材２個を上下に重ねて奥壁を形成するもの，Ａ４類は基底石１個の上に小型石材を２段以上積むもの，Ｂ３類は左右２個の石材から成る基底石の上に大型の石材を横長に積みものである。単にＡ，Ｂとあるのは基底石上の石材を失っているもの。

財団法人広島県教育事業団「まとめ」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（３）-池ノ奥古墳-』 2007年，23～24頁，に依る。

*③側壁；各側壁の石材の積み方。数字は該当する積み方の石材の枚数。第11・20号古墳以外は玄室と羨道の区別はせず，石室全体でみる。側壁の左右は奥壁側から見て，である。



第55図　埋葬施設の長軸方向と頭位

・第33号古墳＝N135°E

・第20号古墳＝N156°E

・第32号古墳＝N159°E

の様になり，今回調査の４基（第11・33～35号古墳）はN119°E～N135°Eと僅か16°の範囲に納まるが，平成19年度調査の３基は第31号古墳がN102°Eであるのに対して，第20号古墳がN156°E，第32号古墳がN159°Eと両者は54°～57°の開きがある。第11・33～35号古墳と第31号古墳は17°～33°，第20・32号古墳とは21°～40°の開きがみられることになる。

b．<u>石室の規模</u>　７基のなかで石室がほぼ完存するのは第11・20号古墳だけである。ほかの５基はいずれも天井石を完全に失い，側壁にも欠失がみられるものがある。石室長・石室幅・石室高はいずれも第11号古墳が，玄室長は第20号古墳がそれぞれ数値が最も大きい。しかし，玄室の広さ（玄室面積）は，第11号古墳の玄室が幅1.02～1.08mの平面形長方形で玄室面積5.17㎡，第20号古墳は幅0.78～1.22mの平面形逆台形で玄室面積5.14㎡とほぼ等しい。このほかの古墳の石室はいずれも第11・20号古墳に比べると小規模で，玄室と羨道の区別が明確でない。第31号古墳は長さ4.3m，幅0.86～1.02mの石室で，石室面積4.04㎡は第11・20号古墳の玄室面積に次ぐ広さである。このほかの古墳についてはいずれも石室幅が0.6m以下と上記３基の古墳の1/2程度であり，石室面積も大幅に小さくなると考えられる。第33号古墳の石室は長さ2.45m，幅0.58～0.77m，石室面積1.58㎡（現存）である。第32号古墳（石室幅0.57～0.65m）の石室面積（現存）は1.49㎡と第33号古墳にほぼ等しい。第34号古墳（石室幅0.39m）の石室面積（現存）0.51㎡，第35号古墳（石室幅0.33m）の石室面積（現存）は0.17㎡となる。このように，埋葬空間の広さ（第11・

20号古墳では玄室面積，そのほかの古墳では石室面積）を比べると，５㎡余りと最大規模の第11・20号古墳，これに近い４㎡余りの第31号古墳，次いで1.49～1.58㎡と第11・20号古墳の玄室面積の30％ほどの第32・33号古墳，そして0.17～0.51㎡と第11・20号古墳の玄室面積の１割以下の第34・35号古墳となる。すなわち，埋葬空間の広さを比べると，宮の本古墳群の横穴式石室墳計７基はほぼ３～４のランクに分けることができる。上からＡ～Ｃランクとすると，平成19年度調査区にはＡランクの第20号古墳，これに準ずるA′ランクの第31号古墳，そしてＢランクの第32号古墳が存在し，平成20年度調査区にはＡランクの第11号古墳，Ｂランクの第33号古墳，そして平成19年度調査区には存在しないＣランクの古墳２基（第34・35号古墳）が存在する。

ｃ．奥壁の石材の積み方　奥壁は大型の石材１～２個を横長あるいは縦長の広口積みにした基底石の上に小型の石材を１個以上積み上げたもので，Ａ３・Ａ４・Ｂ３類[12]がある。Ａ類は基底石１個，Ｂ類は基底石２個を左右に並べて立てるもので，Ａ３・Ｂ３類は基底石上に同程度の大きさの石材１個を広口積みするもの，Ａ４類は基底石１個の上に小型石材を２段以上積むものである。第20号古墳がＡ３類，第11号古墳がＢ３類，第33号古墳がＡ４類で，他の４基はいずれも基底石上の石積みが不明で，基底石は第32・35号古墳がＡ類，第31・34号古墳がＢ類である。基底石の立て方は，Ａ類の第20・32・33号古墳はいずれも横長の広口積み，第35号古墳は縦長の広口積みである。また，Ｂ類の第11・34号古墳は左右に大小２枚の大型の石材を並べて縦長の広口積みに立てるが，第31号古墳は大型の石材を横長の広口積みした左側に細長い石材を縦長に立てその側面を石室内側に向けている。このように宮の本古墳群の横穴式石室では，主として奥壁基底石Ａ類は石材を横長に，Ｂ類は２枚の石材を縦長の広口積み主体に立てている。

ｄ．側壁の石材の積み方　石室の両側壁では，横長・縦長の広口積みを主体にした基底石の上に，４～５段程度角礫の小口面が横長になるように積む横長の小口積みを主体に，石材を寝かせてその側面を石室内側に向ける横積みを一部加えて積み上げている。基底石は最大13枚（第11号古墳）の大型の石材を主に横長の広口積みに立てるが，縦長の広口積みも比較的よくみられる。広口積み以外では横長の小口積みや横積み，縦長の小口積み，石材の側面を縦長に立てる例も一部にみられるが，これらはいずれも奥壁Ｂ類の石室のみでみられる。主体は基底石を広口積みするもので，現存する計91個の側壁基底石（古墳７基）のうちの76個（84％）が広口積みである。その内の42個（46％）が横長，28個（31％）が縦長，６個が方形の石材を広口積みしている。つまり，側壁基底石の半数近くが横長の広口積みで，すべての石室にみられる。全体の３割を占める縦長の広口積みは奥壁Ａ類の第20号古墳（右側壁１・左側壁６），第32号古墳（右側壁１・左側壁５），奥壁Ｂ類の第11号古墳（右側壁８・左側壁４），第34号古墳（右側壁・左側壁各１），第35号古墳（左側壁１）でみられる。奥壁Ｂ類の第11号古墳では右側壁に多くみられるが，左側壁にも比較的みられる。一方，奥壁Ａ類の第20・32号古墳ではいずれも左側壁に５～６枚と縦長の広口積みを多用するが右側壁では僅か１枚しかみられず，偏りが顕著である。縦長の広口積みが基底石に多用される石室で側壁基底石全体における縦長の広口積みの比率をみてみると，第11号古墳右側壁で８枚／13枚（62％），第20号古墳左側壁で６枚／11枚（55％），第32号古墳左側壁で５枚／７枚

(71%) となる。ただ，第32号古墳左側壁では縦長の広口積みが５枚と主体的で，その他は横長の広口積み２枚のみと縦長の広口積みがかなり優勢であるが，第11号古墳右側壁では縦長の広口積み８枚に対して横積み２枚，横長の広口積み・横長の小口積み・縦長の側面各１枚と縦長の広口積み以外の基底石が計５枚あり，第20号古墳左側壁では縦長の広口積み６枚に対して横長の広口積み４枚，方形の広口積み１枚と縦長の広口積み以外の基底石が計５枚存在し，必ずしも縦長の広口積みの基底石が圧倒的優位にはない。一方，横長の広口積みは第11号古墳左側壁（５枚／13枚＝38%），第20号古墳右側壁（６枚／10枚＝60%），第31号古墳両側壁（右側壁；４枚／６枚＝67% ,左側壁；５枚／７枚＝71%),第33号古墳両側壁（右側壁；４枚／６枚＝67%,左側壁；６枚＝100%）と第32号古墳を除く古墳で優勢である。つまり，計７基の横穴式石室墳では，側壁基底石の石材の用い方においては基本的に横長の広口積みが主体的で，縦長の広口積みは第32号古墳左側壁では優位に立つが，第11号古墳右側壁・第20号古墳左側壁ではほかの積み方と拮抗しており，縦長の広口積みが圧倒的優位にあるわけではない。次に，縦長の広口積みが各側壁のどの位置に用いられているかをみてみよう。先ず，縦長の広口積みが多用されている例からみてみると，第11号古墳右側壁では奥壁側からの６枚と玄室前端の立石の計７枚と羨道に１枚用いる。同左側壁では奥壁から１・４・５枚目と玄室前端の立石に用いている。第20号古墳左側壁では奥壁から２・３・６（立石）枚目と羨道入口側の３枚の基底石が縦長の広口積みである。第32号古墳左側壁では奥壁から１・４～７（前端）枚目が縦長の広口積みである。一方，縦長の広口積みが少数派の石室の例をみてみると，第20号古墳右側壁では羨道に１枚，第32号古墳右側壁では奥壁から２枚目，第34号古墳両側壁の奥壁寄りの各１枚，第35号古墳左側壁も同じく奥壁寄りの１枚が縦長の広口積みである。このようにみてくると，縦長の広口積みは横穴式石室の側壁の基底石において横長の広口積みに次いで多く用いられるが，特に玄室の奥壁寄りや羨道と玄室の境の立石など石室の要所に用いられた積み方であるといえる。

e．敷石・礫床と棺台石（第９表） 宮の本古墳群の横穴式石室の特徴として，石室床面における敷石（＋礫床）の存在があげられる。第11・20・31・32・34号古墳の５基で検出し，第11・20・32号古墳の３基では敷石上に小円礫を施している。また，第11・20・31号古墳では敷石の前面に棺台石が存在する。

敷石には，玄室の奥壁側に設けるＩ類（第11･20･31号古墳）と玄室と羨道の区別がない小規模な石室の床面全体に敷石を施すII類(第32･34号古墳)とがある。敷石の規模は,長さ1.46～2.28m,幅は石室幅いっぱいで0.39～1.08mである。Ｉ類の敷石では第11号古墳のものが長さ2.28mと最も規模が大きく，第20号古墳は長さ1.8m，第31号古墳は長さ1.52mと石室規模に応じた規模である。II類の敷石はいずれも長さ・幅ともにほぼ石室いっぱいで，第32号古墳が長さ2.18m，第34号古墳が長さ1.46mとＩ類の敷石の長さとあまり変わらないが，幅は0.39～0.65mと狭くなる。これらの敷石の範囲が必ずしも遺骸を安置するための埋葬空間ではない。II類の敷石では明確でないが，Ｉ類の敷石ではその前端に何らかの区画を設けている。第11号古墳では敷石前端の両側壁際に長さ40～50cmの立石を置き，立石の間の中央には20cm大の小型の石材を２枚横に立て並

べて区画とし，第31号古墳では敷石の前端に角礫を１段横に並べて画している。また，第20号古墳ではこのような敷石前端の区画はみられないが，敷石の中央付近に大小の石材を横に立て並べて奥壁側に新たな埋葬空間を作り出している。このように敷石前端の区画や仕切石によって区切られた埋葬空間の広さは，第11号古墳が長さ2.1mと最も大きく，第31号古墳は長さ0.95m，第20号古墳は長さ0.7mである（幅はいずれも石室幅と同じ）。敷石に用いられた石材は10～60cm大，厚さ３～20cmの方形状の板石や板状の角礫で，これらを横方向（石室の幅の方向）に２～３個程度縦向きあるいは横向きにしたものを単位にして比較的整然と敷き並べており，その上面はほぼ平坦である。敷石のために用いられる石の数はＩ類の敷石では20個程度とほぼ一律であるが，Ⅱ類の敷石をもつ第32号古墳では大小50～60個ほど，第34号古墳では７個の角礫を用いている。なお，第32号古墳の敷石はやや特異である。石室中央を石室外に向ってまっすぐ延びる排水溝の上面に板石を横向き主体に並べて蓋石とし，その蓋石列の左右の側壁との隙間に小型の板石を１～２列縦向きに並べて隙間を埋め，敷石としている。その上面は中央を走る排水溝の蓋石列に向って両側壁際から緩やかに凹む。

礫床はいずれも第11・20・32号古墳の敷石上に施されている。第20号古墳では数cm大の小礫が敷石上にある程度密に敷かれていたが，第11・32号古墳ではいずれも疎らな検出状況であり，小礫は敷石の隙間を埋めるための一種の補強材的意味合いが強い。なお，礫床に用いられた小礫の大きさは第11・20号古墳では２～数cm大であるが，第32号古墳は１cm大と特に小さい。

棺台石は第11・20・31号古墳でみられ，いずれも奥壁側の敷石の前面に長軸を石室の中軸線に沿わせて石材を配しており，木棺は石室の中軸線に沿って縦長に置かれたとみられる。これらの棺台石の周辺からは，第11・20号古墳で木棺に使用されたとみられる鉄釘が出土している。棺台石の範囲は長さ1.14～1.74m，幅0.42～0.96mで，20～40cm大，厚さ10～20cm程度の角礫10個程度が各々用いられている。

⑥第11号古墳の時期について　石室前面や南西列石周辺の墳丘盛土・墳裾付近などから須恵器を主体とする土器が出土している。ここでは須恵器の杯蓋・杯身を中心に第11号古墳の築造・埋葬の時期について検討する。

杯は身が受部とたちあがりをもつ古墳時代以来の形態である杯Ｈの蓋・身と蓋がつまみとかえりをもつ杯Ｇの蓋・身が24点出土している。杯Ｇ蓋（第46図88～90）は３点で，かえりは口縁から突出していない。口径9.6～10.2cm（平均9.8cm），かえり径7.9～8.6cm（平均8.2cm），器高2.4cmである。杯Ｇ身（99～103）は５点で，口径9.4～11.1cm（平均10.0cm），器高2.9～3.6cm（平均3.2cm）である。調整は底部回転ヘラ切り不調整が主体で，102は外底面全体に一定方向のヘラケズリを，100･101の外面底部と体部の境には部分的なヘラケズリを行うが，ヘラケズリが施される割合はそれほど多くない。103の底部は平坦だが，ほかは平坦な部分は少なく丸みがつよい。これら杯Ｇはその法量や形態・調整の特徴が飛鳥編年Ｉ期末の奈良県・甘橿丘東麓遺跡焼土層ＳＸ037出土土器に似ており，７世紀中葉頃のものとみられる。杯Ｈ蓋８点（80～87）は口径9.2～11.0cm（平

第９表　横穴式石室の敷石・礫床・棺台石

古墳番号		11	20	31	32	34
敷石	全体規模	長さ2.28m，幅1.08m	長さ1.8m，幅0.78～0.96m	長さ1.5～1.52m，幅0.84～1.02m	長さ2.18m，幅0.42～0.65m	長さ1.46m，幅0.39m
	埋葬空間の規模	長さ2.1m，幅1.08m	同上。ただし，仕切石奥の埋葬空間は長さ0.66～0.7m，幅0.78～0.87m。	長さ0.84～0.95m，幅0.84～1.02m		
	前端区画	前端は横に揃う。右側壁際に43cm×40cm，厚さ20cm，左側壁際に50cm×22cm，厚さ16cmの立石を置き，間には10数～20cm大，厚さ10cmの小型の角礫を立て並べて，敷石の前端を限る。		前端は横に揃う。前端の敷石上にもう一段分の角礫数個を１m×0.6mの範囲に並べて敷石面より20cmほど高い障壁を形成して，敷石の前端を限る。		
	仕切石		右に44cm×70cm，厚さ14cmの大型の板石を横長の広口積みに置き，左側に18cm×40cm，厚さ18cmの棒状の亜角礫を立てる。			
	石材の大きさ	10～60cm×10～35cm，厚さ数～20cm	20～40cm大，厚さ４～10cm	20～40cm大，厚さ10～10数cm	排水溝蓋石は奥壁寄りに55cm×38cm，厚さ12cmと大型の板石を縦向きに置き，続いて20～30cm大，厚さ５～10cmの板石を横向きに並べる。石室外は不整形で扁平な石を用いる。この蓋石列の左右に10～20cm大，厚さ数cmの薄手の板石を縦向きに並べる。	20～30cm大，厚さ３～14cm
	石材の形状	板石・角礫	小ぶりで方形の板石	分厚い板石	板石・角礫	板石
	石材の数	20数個	20個程度	20個程度	蓋石15個（石室内），７個（石室外）　蓋石の両側に40～50個程度	７個
	敷石の状況	全体にあまり整然としていない。	比較的整然と並べる。	比較的整然と並べる。	横向きに並べられた排水溝の蓋石の左右により小型で薄手の石材を縦長に並べる。	比較的整然と並べる。
礫床	礫の大きさ・形状	２～数cm大の小円礫	数cm大の小礫		１cm大の極小礫	
	礫の疎密	疎	密		疎	
棺台石	規模	長さ1.74m，幅0.96m	長さ1.14m，幅0.42m	長さ1.5m，幅0.75m		
	石材の大きさ	22～45cm×14～30cm，厚さ３～18cm	20～40cm大，厚さ10～20cm	20～40cm大，厚さ10～20cm		
	石材の形状	角礫	角礫	板状の角礫		
	石材の数	13個	3個＋	６個		

均10.4cm)，器高2.5～4.1cm（平均3.4cm）で，比較的丸みのある頂部から斜めに下り屈曲して垂下するものが多い。調整は，86で頂部全体に回転ヘラケズリを行い，85では頂部縁辺に部分的にヘラケズリを行う以外は大半が頂部外面回転ヘラ切り不調整である。杯H身８点（91～98）はごく短いたちあがりのものが主体で，一部に長く垂直にたち上がるものがある（95･96)。たちあがり端部での口径8.4～11.2cm（平均10.0cm)，器高2.7～4.3cm（平均3.4cm）である。比較的小さい平底から斜め上方に体部が直線的に延びて受部に続く。これらの杯Hはその法量や形態・調整の特徴が飛鳥編年II期末の奈良県・水落遺跡貼石遺構堆積層出土土器[13]に似ており，７世紀第３四半期頃のものとみられる。杯Gは杯身103を除く７点が石室前面の堆積土（暗褐色土）からの出土で一括性が考えられる。杯Hは蓋82・83・86の３点が暗褐色土中から出土したが，大半（蓋84・87，身91～95）は南西側外護列石周辺の墳丘裾や墳丘上面からの出土である。ただ，杯H蓋のなかで口径・器高が最も小さく，扁平気味で丸みの強い器形の85は南西側の墳丘盛土下層から出土しており，時期的にやや遡る可能性がある。

高杯は杯部主体に計14点（第46・47図104～117）出土している。杯部は112以外は丸く浅い椀状を呈し，口縁近くにごく緩やかな稜をもつものが多い。脚部の状況が分かる例は少ないが，いずれも外湾するもので，低脚と通常の脚とがある。調整は回転ナデ主体で，ヘラケズリはみられない。これら浅い椀状の杯部をもつ高杯は飛鳥編年II期を中心にみることができ，概ね７世紀第３四半期頃のものと考えられる。ただ，小型で低脚の高杯112は平坦な底部から口縁がほぼ直立する杯部で，甘橿丘東麓遺跡焼土層ＳＸ037出土土器[14]のなかに酷似する例がみられる。この高杯112は南西側の周溝底面でほぼ完形の杯部が出土し，脚部片は石室入口の棺床土内からの出土である。杯部片の106と完形に近い113・114は石室前面の堆積土からの出土で，そのほかの高杯の多くは南西側外護列石周辺の墳丘裾・墳丘上面などから出土したが（104・105・108・110・111・116)，107・109は石室前面からの出土である。

石室前面の暗褐色土から出土した瓶120は大きく開く口縁にやや肩の張る扁球状の体部が付き，回転ヘラ切りによる平底である。平底である点を除けば，口縁～体部の全体的な形状は陶邑IV期新段階（≒飛鳥II期）相当とされる大阪府・ひつ池西窯跡[15]の上部上層灰原（ＨＴW-Ａ２）出土の14に比較的よく似ている。平底の瓶はあまり類例がなく，朝鮮半島南部の栄山江流域出土の瓶(有孔広口小壺）には底部円板作りによる平底のものが多くみられるようである[16]。

平瓶は３点出土している。121は北東側壁入口付近の基底石背後の掘方などから，122は石室入口の床面上からほぼ完形で出土した。121は丸みの強い器形で，122はやや肩が張る。123の瓶は大型で甕かと見紛う異形のもので，南西列石周辺から主に出土した。124の壺は石室前面からの出土で，その口縁はやや開き気味に直立し端部を若干内傾させ，外面には凹線１条を施す。滋賀県・山ノ神遺跡灰原１層（図版43-99)，同灰原２層（図版52－262)，同灰原７層（図版67-53･55）からの出土須恵器と類似しており，飛鳥III期の７世紀後葉頃の年代が与えられている。125～128の甕はいずれも南西列石周辺の墳丘上面や墳丘裾から主に出土した。

以上，須恵器を主体にその出土位置と類例・時期について述べた。須恵器の出土位置は石室前

面の暗褐色土中と，南西側外護列石周辺の墳丘上面及び墳丘裾の大きく２か所に集中箇所がみられる。すなわち，

①石室前面出土須恵器(太字は暗褐色土中出土の須恵器)＝杯Ｇ蓋**88～90**，杯Ｇ身**99～102**，杯Ｈ蓋**82・83・86**，杯Ｈ蓋87，杯Ｈ身96，高杯**106・113・114**，高杯107・109，坩蓋**118**，**甕120**，壺124

②南西側外護列石周辺の墳丘裾・墳丘上面出土須恵器＝杯Ｈ蓋84，杯Ｈ身91～93・95・97，高杯104・105・108・110・111・116，坩蓋119，平瓶123，甕125・126，大甕127・128

③その他の箇所で出土した須恵器＝杯Ｇ身103，杯Ｈ身94・98，高杯112・115・117，平瓶121・122

の様になる。これらの須恵器を時期がある程度判るもので考えると，南西列石周辺の須恵器群は飛鳥Ⅱ期末の杯Ｈや飛鳥Ⅱ期の高杯を主体にし，石室前面出土の須恵器群は飛鳥Ⅰ期末の杯Ｇの大半を主体に，飛鳥Ⅱ期末の杯ＨやⅡ期の高杯・甕，Ⅲ期の壺を含み，飛鳥Ⅰ期末を主体に飛鳥Ⅱ・Ⅲ期の須恵器を一定程度含んでいる。すなわち，第11号古墳の出土須恵器は飛鳥Ⅰ期末と飛鳥Ⅱ期末の大きく２時期に分かれる。このことから，飛鳥Ⅰ期末の７世紀中葉頃に宮の本第11号古墳の築造と最初の埋葬が行われ，その後飛鳥Ⅱ期末の７世紀第３四半期頃にかけて追葬が行われた可能性が高いと考えられる。

⑦集落と古墳群の関わりについて　最後に，集落の変遷と４基の横穴式石室墳のかかわりについて考えてみたい。集落は７世紀中葉から後葉の時期に主体的に営まれ，８世紀前半には村落の中心から外れた仏教的空間と化していたとみられる。一方，調査区の東半に位置する４基の横穴式石室墳は中心となる第11号古墳が７世紀中葉に築造・初葬され，７世紀第３四半期にかけて追葬が行われた。第11号古墳以外の古墳の築造・埋葬時期については出土遺物がなく明確でないが，いずれの古墳も第11号古墳の周囲を取り巻くように位置し，より小型の石室を第11号古墳と石室の中軸や開口方向がほぼ等しくなるように築造されていることから，第11号古墳の築造時期に近接して築造・埋葬された可能性が高い。このように考えると，集落の営み（変遷）と第11・33～35号古墳の築造・埋葬は近接した時期に行われたということができる。

最後に，平成19年度に調査を行った宮の本第20・31・32号古墳を含めて，宮の本遺跡の集落の変遷と宮の本古墳群（第11・20・31～35号古墳）の変遷について年代順に整理してまとめにかえたい（斜字は集落関連，ほかは古墳関係）。

・６世紀末～７世紀前葉（ＴＫ43～ＴＫ217型式古段階[17]）＝第20号古墳の築造・初葬
・７世紀前葉（ＴＫ209型式～ＴＫ217型式古段階）＝第32号古墳築造・埋葬
・７世紀中葉（飛鳥Ⅰ期末）＝第11号古墳の築造・初葬
・*７世紀中～後葉（飛鳥Ⅰ期末～飛鳥Ⅳ期）＝集落の営みの中心的時期*
・７世紀中葉～後半（飛鳥Ⅰ期末～Ⅳ期）＝第20号古墳追葬①≒第31号古墳の築造・埋葬
・７世紀第３四半期（飛鳥Ⅱ期末）＝第11号古墳の追葬

・７世紀第４四半期～８世紀初頭（飛鳥Ⅳ～Ⅴ期）＝第20号古墳の追葬②

・８世紀前葉（平城Ⅰ～Ⅱ期）＝集落のはずれの仏教的空間化

註

(1) 以下，編年に関わる須恵器・土師器の器形分類・名称については，奈良国立文化財研究所（現・独立行政法人　文化財研究所　奈良文化財研究所）のものに基本的には従う。

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　1976年。

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ　1978年。

(2) 以下，飛鳥編年については，以下の文献に依った。

西弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ　奈良国立文化財研究所　1978年，92～100頁。

西弘海「土器様式の成立とその背景」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社　1983年，447～471頁。

また，飛鳥Ⅰ・Ⅱ期の実年代については，主に以下の文献に依った。

白石太一郎「須恵器の暦年代」『年代のものさし』大阪府立近つ飛鳥博物館　2006年，66～73頁。

白石太一郎「前期難波宮整地層の土器の暦年代をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』16　2012年，3～24頁。

(3) 次山淳「甘樫丘東麓の調査第75－２次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25　奈良国立文化財研究所　1995年，95～101頁。

(4) 深澤芳樹「第Ⅵ章考察　４山田寺下層の土器について」『山田寺発掘調査報告　本文編』独立行政法人　文化財研究所　奈良文化財研究所　2002年，540～547頁。

(5) 以下，飛鳥Ⅲ～Ⅴ期の実年代については，主に次の文献に依った。

菱田哲郎「古墳時代の実年代②後期・終末期の実年代」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学１　古墳時代の枠組み』同成社　2011年，222～230頁。

(6) 大津市教育委員会『山ノ神遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　1991年

(7) 以下，奈良時代の平城編年と実年代については主に次の文献に依った。

小笠原好彦・西弘海「第Ⅴ章考察　２土器」『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　奈良国立文化財研究所　1976年，139～149頁。

(8) 毛利光俊彦『古代東アジアの金属製容器Ⅱ（朝鮮・日本編）』奈良文化財研究所　2005年，89頁・付図７。

(9) 宮本長二郎「掘立柱建物の規模と機能」『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版　1996年，172～173頁。

(10) ここではいわゆる８～10世紀頃の「村落寺院」の仏堂を中心とした空間を想定している。特に15～50㎡と最も小規模な集落の一般構成員が建立したと考えられる仏堂で，周辺からは仏鉢形土器や瓦などが出土する。

冨永樹之「東国の「村落内寺院」の諸問題」『在地社会と仏教』独立行政法人　文化財研究所　奈良文化財研究所　2006年，69～96頁。

(11) 墓坑群及び横穴式石室の長軸方向については，次の文献を参照した。

財団法人　広島県教育事業団「Ⅶ　考察」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）宮の本第20～26・31・32号古墳』2013年，279～281頁・第151図・第152図。

(12) 奥壁の基底石を主体とする石材の積み方の分類は次の文献に依った。

梅本健治「まとめ」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（３）池ノ奥古墳』財団法人　広島県教育事業団　2007年，23～24頁。

(13) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ―飛鳥水落遺跡の調査―』1995年

(14) 次山淳「甘樫丘東麓の調査第75-２次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25　奈良国立文化財研究所

1995年，99頁・fig.72の55・56。

(15) 大阪狭山市教育委員会『ひつ池西窯跡-陶邑窯跡群の調査-』 1993年

(16) 酒井清治「栄山江流域と列島の瓮について」『土器から見た古墳時代の日韓交流』 同成社 2013年，287～291頁。

橋本達也「須恵器でも，瓮でもなくて―鹿大構内遺跡出土の陶質土器有孔広口小壺―」『News Letter』№32 鹿児島大学総合研究博物館 2013年，8～10頁。

(17) 陶邑編年と実年代及び陶邑編年と飛鳥編年の対比については主に以下の文献に依った。

佐藤隆「7・8世紀陶邑編年の再構築と都城出土資料の様相」『2005年度（財）大阪府文化財センター近つ飛鳥博物館共同研究発表会 須恵器生産の成立と展開』（財）大阪府文化財センター 2006年

宮崎泰史「陶邑の変遷」『年代のものさし―陶邑の須恵器―』 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006年，60～65頁，特に64・65頁の図2・3陶邑窯跡群 須恵器編年対照表（1）（2）。

a　宮の本遺跡，
宮の本第11・
33～35号古墳遠景
（空中写真，南から）

b　同上
（空中写真，南西から）

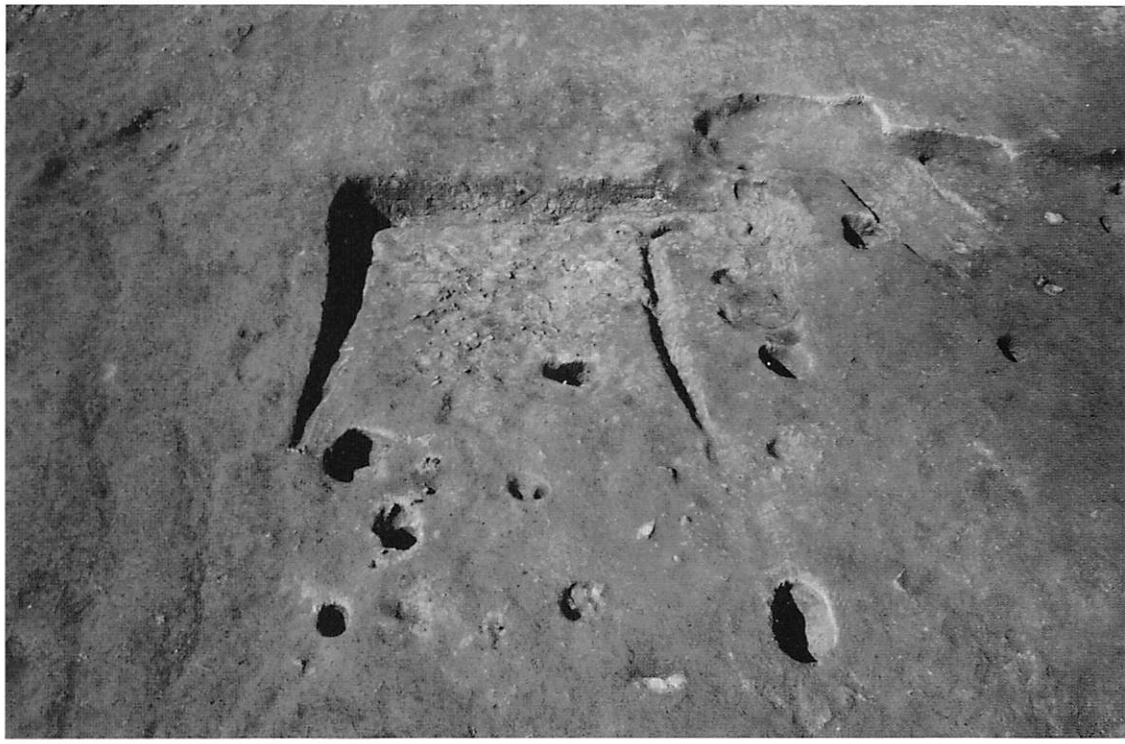
c　同上
（空中写真，南から）

a　ＳＢ１（南東から）

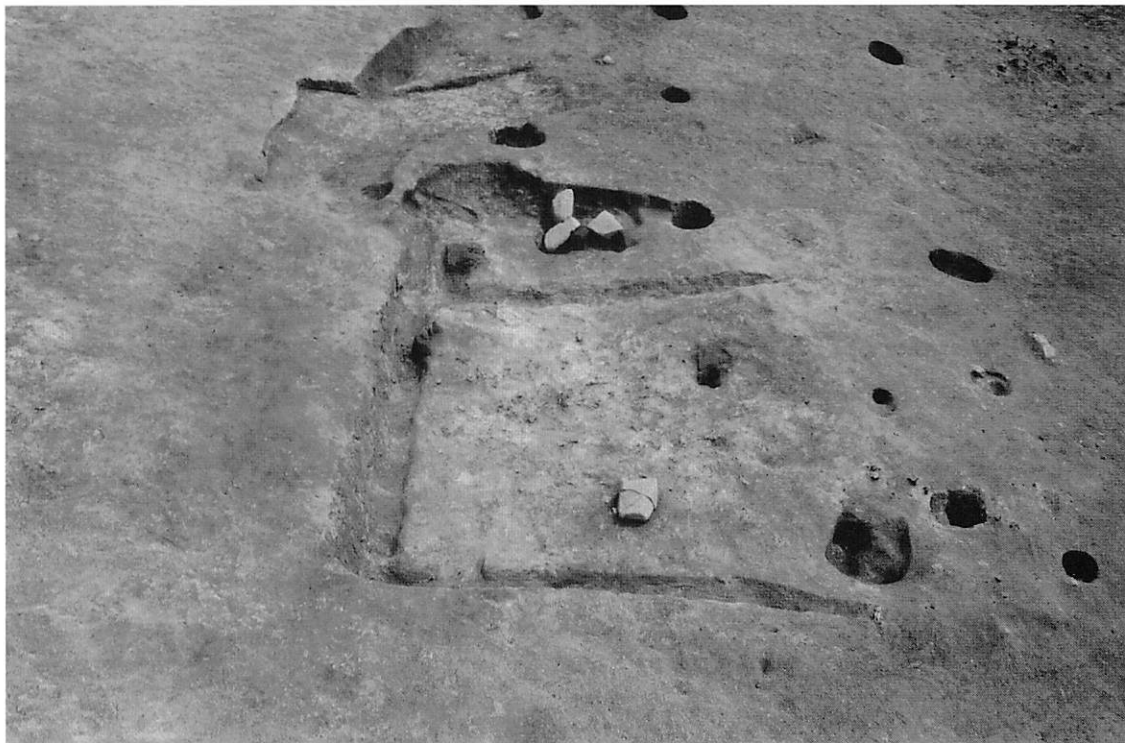
b　同上（東から）

c　ＳＢ１・ＳＢ２（西から）

a　ＳＢ２（南から）



b　同上（南から）



c　同上（西から）

a　ＳＢ２土層
（南北方向東壁，
東から）

b　ＳＢ３（南から）

c　ＳＢ４（東から）

a　ＳＢ５（南から）

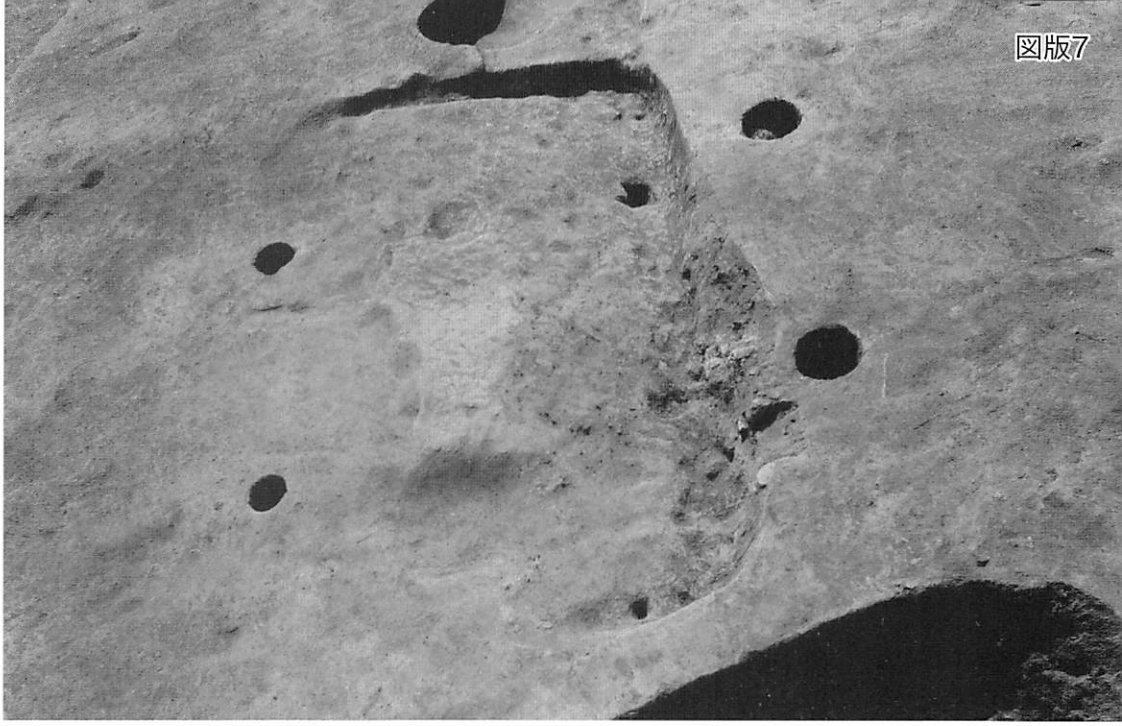
b　同上（東から）

c　ＳＢ５土層
（南北方向東壁，
東から）

a　ＳＢ５カマド跡
（南東から）

b　同上土層（東から）

c　ＳＢ６（南から）

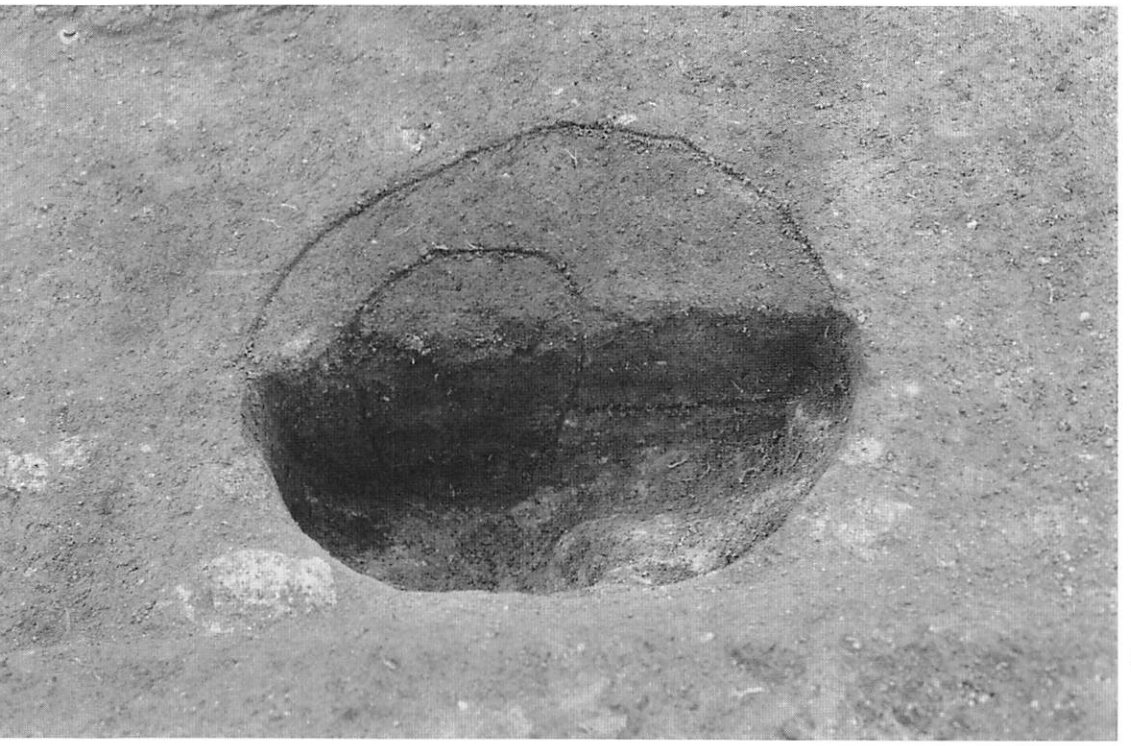


a　ＳＢ６（東から）

b　ＳＢ７（南から）

c　ＳＢ８（南から）

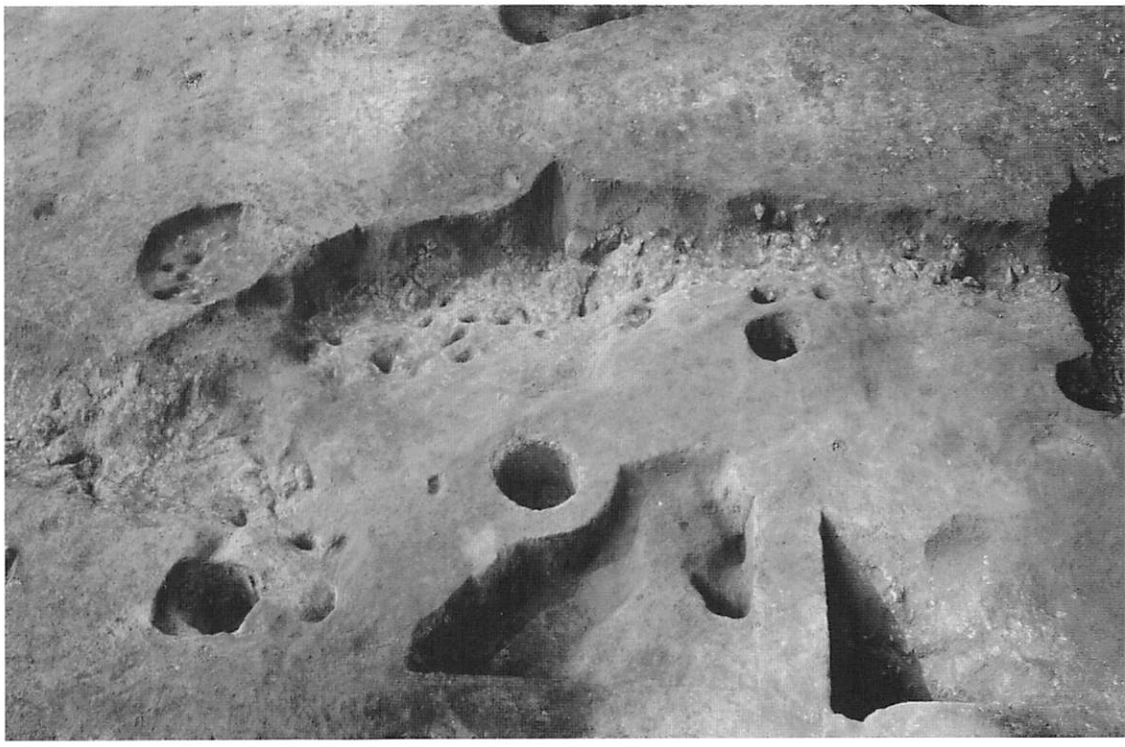
a　ＳＢ８（東から）



b　ＳＢ８柱穴土層
（Ｐ６，東から）

c　ＳＢ９（南から）

a　ＳＢ９（東から）



b　ＳＢ10（南から）

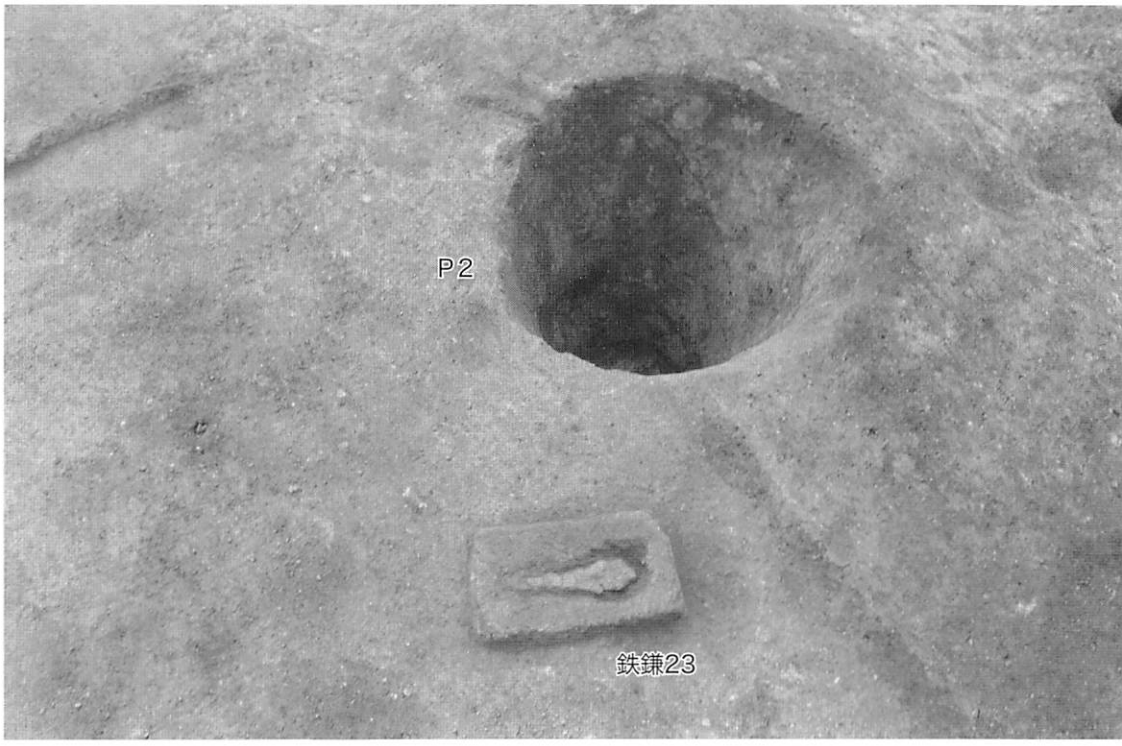
c　同上（東から）

a　ＳＢ11（南から）

b　同上（東から）

c　ＳＢ11柱穴土層
（Ｐ１，東から）

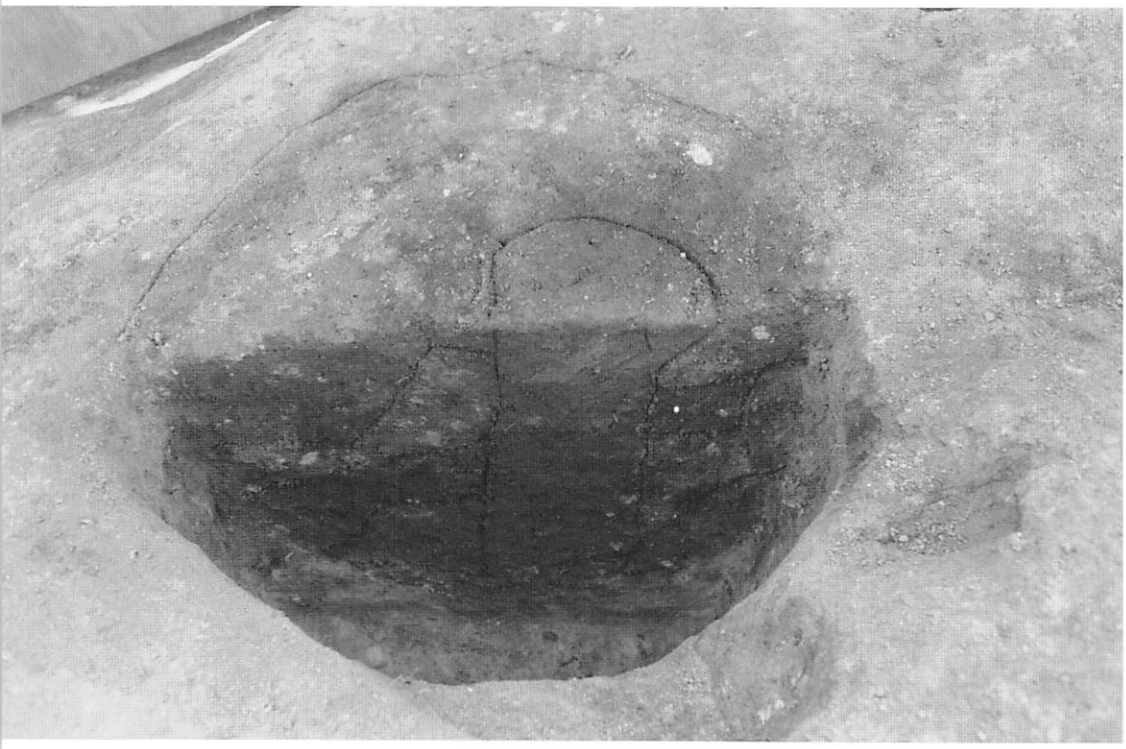
a　ＳＢ11柱穴土層
（Ｐ４，東から）



b　ＳＢ11鉄鎌23
出土状況（東から）

c　ＳＢ12（南から）

a　ＳＢ12（東から）



b　ＳＢ12柱穴土層
（Ｐ１，東から）

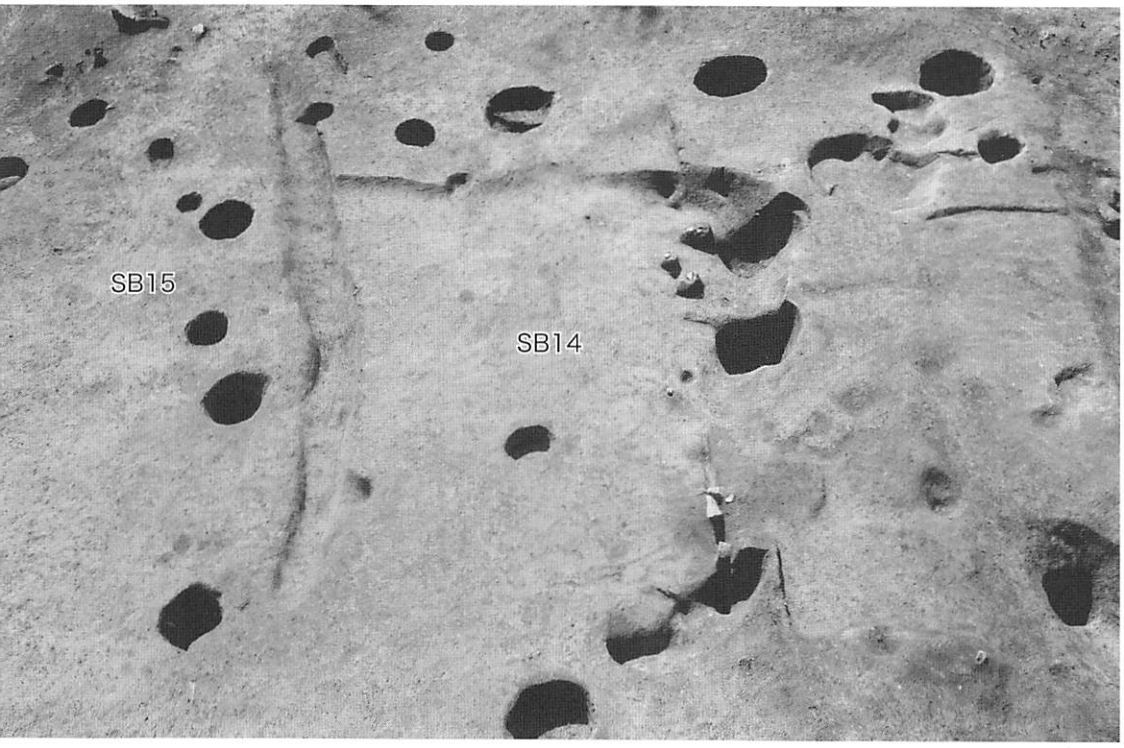
c　同上（Ｐ２，東から）

a　ＳＢ12平瓦34
出土状況（東から）

b　ＳＢ13（南から）

c　同上（東から）

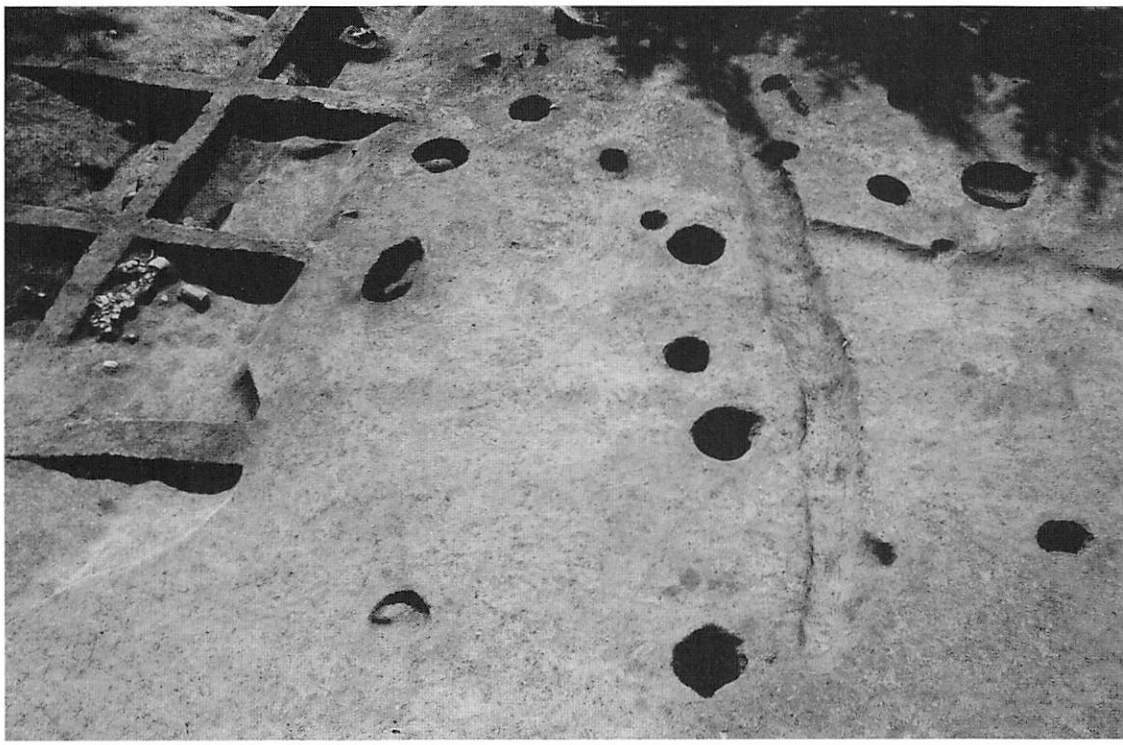
a　ＳＢ14・ＳＢ15
（南から）



b　同上（東から）

c　ＳＢ14カマド跡
（南から）

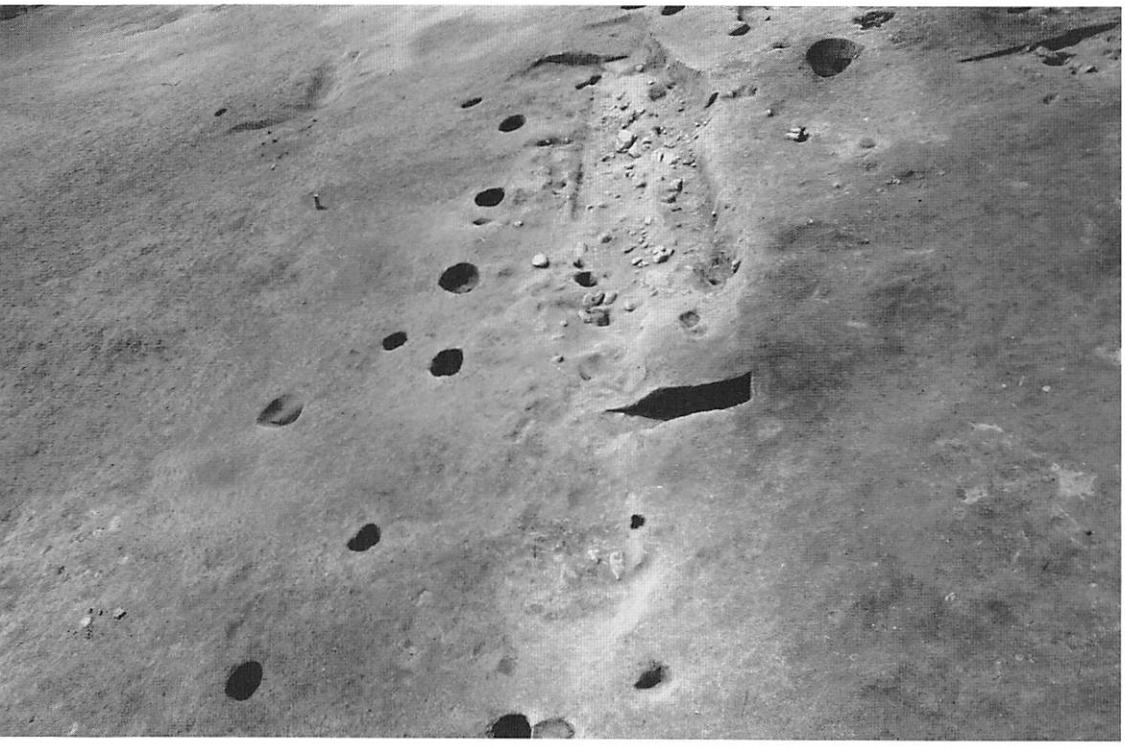
a　ＳＢ14カマド跡
（西から）



b　ＳＢ15（東から）

c　集落跡中心部
（ＳＢ５～ＳＢ16付近，
南東から）

a　ＳＢ16（南から）

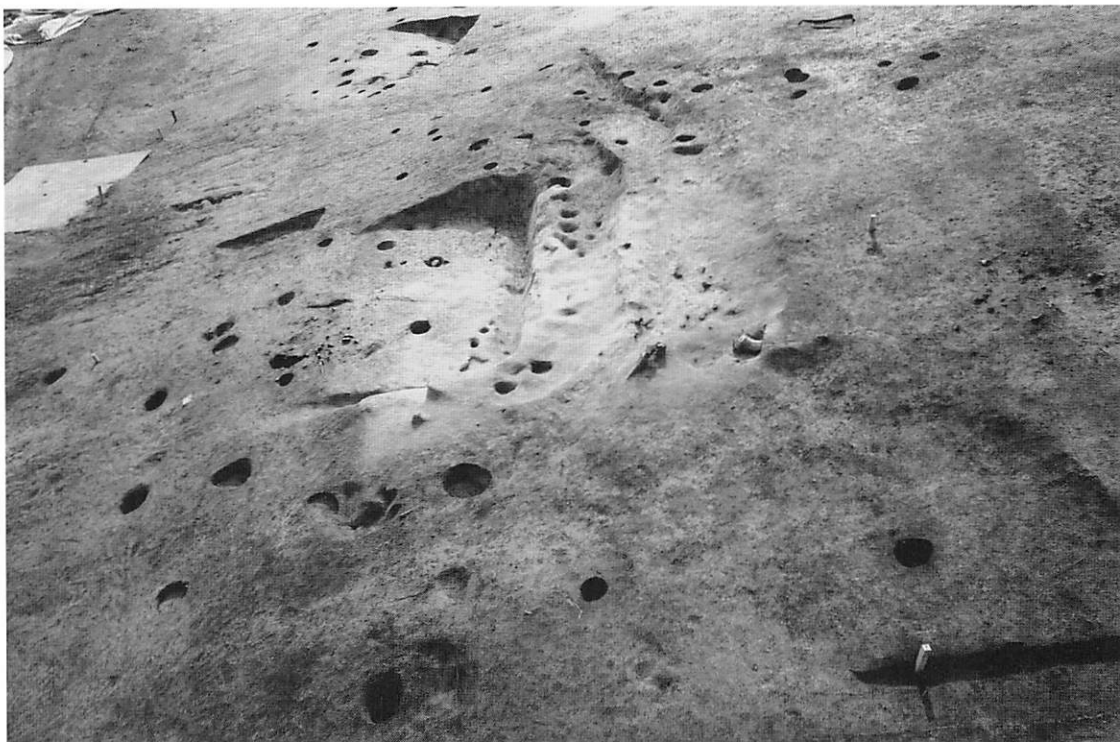


b　同上（東から）

c　ＳＢ17（南から）

a　ＳＢ17（東から）

b　ＳＢ18（南から）



c　同上（東から）

a　ＳＢ19（南から）

b　同上（東から）

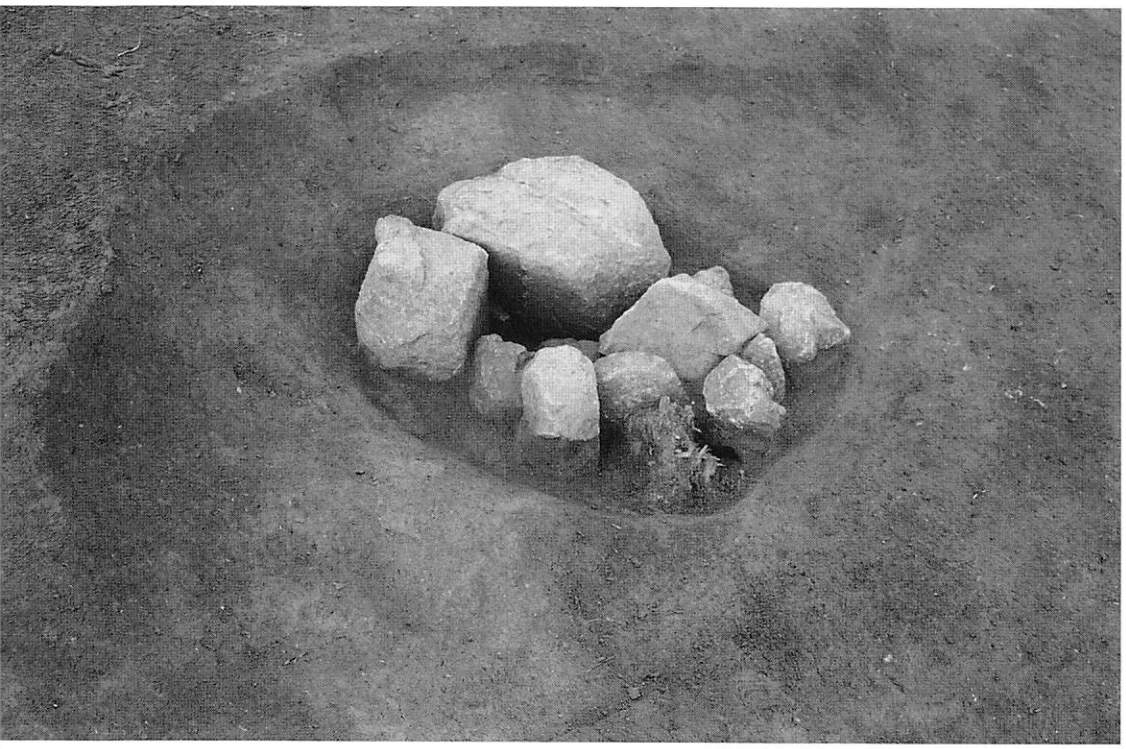
c　同上遺物出土状況
（南から）

a　ＳＢ19遺物出土状況
（東から）

b　ＳＢ20（西から）

c　ＳＢ21（東から）

a　ＳＢ22（南から）



b　ＳＫ1
（棺内，南西から）

c　同上（棺内，南東から）

a　ＳＫ１作業風景
（南東から）

b　ＳＫ2（東から）

c　ＳＫ３（蓋石，南から）

a　ＳＫ３（蓋石, 西から）

b　同上（墓坑，南から）

c　ＳＫ４（南から）

a　ＳＫ５（棺内，北から）

b　同上（棺内，西から）

c　ＳＫ６検出状況
（南から）

a　ＳＫ６検出状況
（東から）

b　ＳＫ７（蓋石，南から）

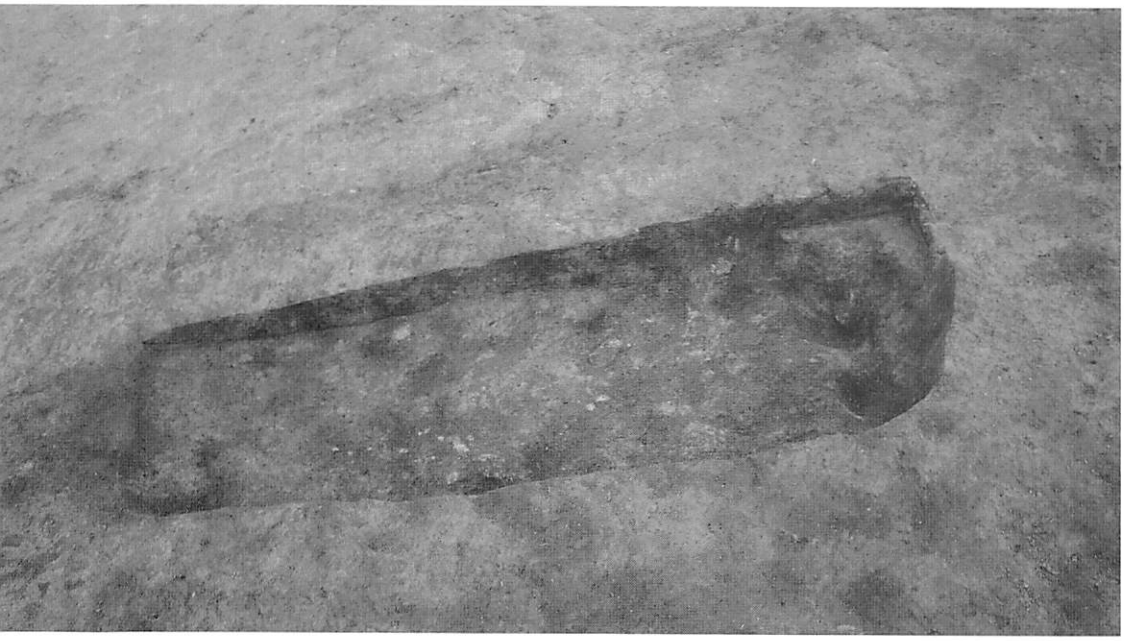
c　同上（蓋石，西から）

a　ＳＫ７（墓坑，南から）

b　同上（墓坑，東から）

c　ＳＫ８（南から）

a　ＳＫ８（西から）



b　ＳＫ９（東から）

c　同上（南から）

a　ＳＸ１（東から）

b　ＳＸ３（南から）

c　ＳＸ４（南から）

a　ＳＸ５（南から）

b　ＳＸ５・杯74
出土状況（南から）

c　ＳＸ６（東から）

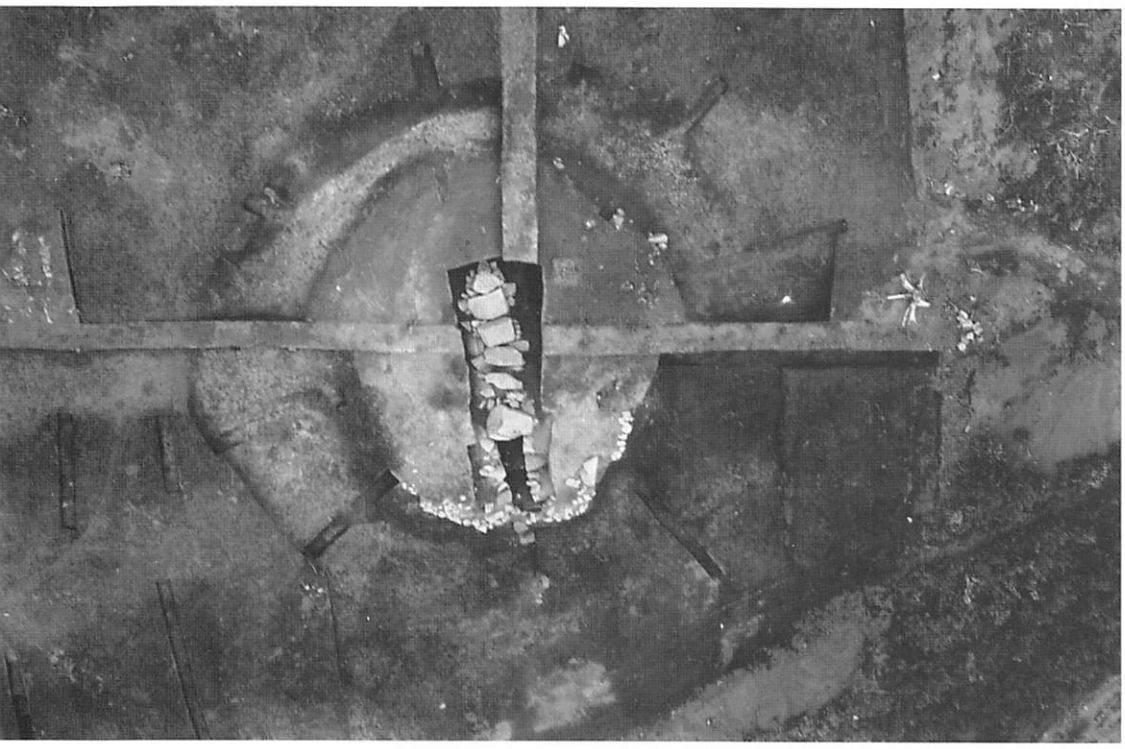
a　ＳＸ７（南から）

b　ＳＸ７・杯身77
出土状況（東から）

c　ＳＸ８（南から）

宮の本第11号古墳

a　遠景
（空中写真，南から）



b　全景
（空中写真，南から）

c　全景
（空中写真，西から）

a　近景
（調査前，北東から）

b　近景（調査前，東から）

c　墳丘全景（南から）

a　墳丘土層
（東西方向西半南壁，
南から）

b　同上
（東西方向東半南壁，
南から）

c　同上
（東西方向西半南壁・
石室裏込め，南から）

a　墳丘土層
（東西方向東半南壁・
石室裏込め，南から）

b　同上
（南北方向北半西壁・
石室裏込め，西から）

c　石室全景
（天井石，南から）

宮の本第11号古墳

a　石室床面
（敷石・棺台石，
南から）

b　同上
（敷石・棺台石，
南から）

c　石室床面・
耳環144・145
出土状況（東から）

a　石室東側壁①
（奥壁側，西から）

b　同上②（中央, 西から）

c　同上③
（入口側，西から）

宮の本第11号古墳

a　石室西側壁①
（奥壁側，東から）

b　同上②（中央，東から）

c　石室床面・東側壁①
（敷石，奥壁側，
西から）

a　石室床面・東側壁②
（敷石・棺台石，
中央奥壁側，西から）

b　同上③
（棺台石，中央入口側，
西から）

c　同上④
（入口側，西から）

a　石室床面・西側壁①
（敷石，奥壁側，
東から）

b　同上②
（敷石・棺台石，
中央奥壁側，東から）

c　同上③
（棺台石，中央，
東から）

a　石室床面・西側壁④
（中央入口側，東から）

b　同上⑤
（入口側，東から）

c　石室入口・平瓶122
出土状況（東から）

a　石室入口・平瓶122
出土状況（南から）

b　石室閉塞石
（北から）

c　同上（東から）

a　石室基底石（南から）

b　墳丘作業風景
（南から）

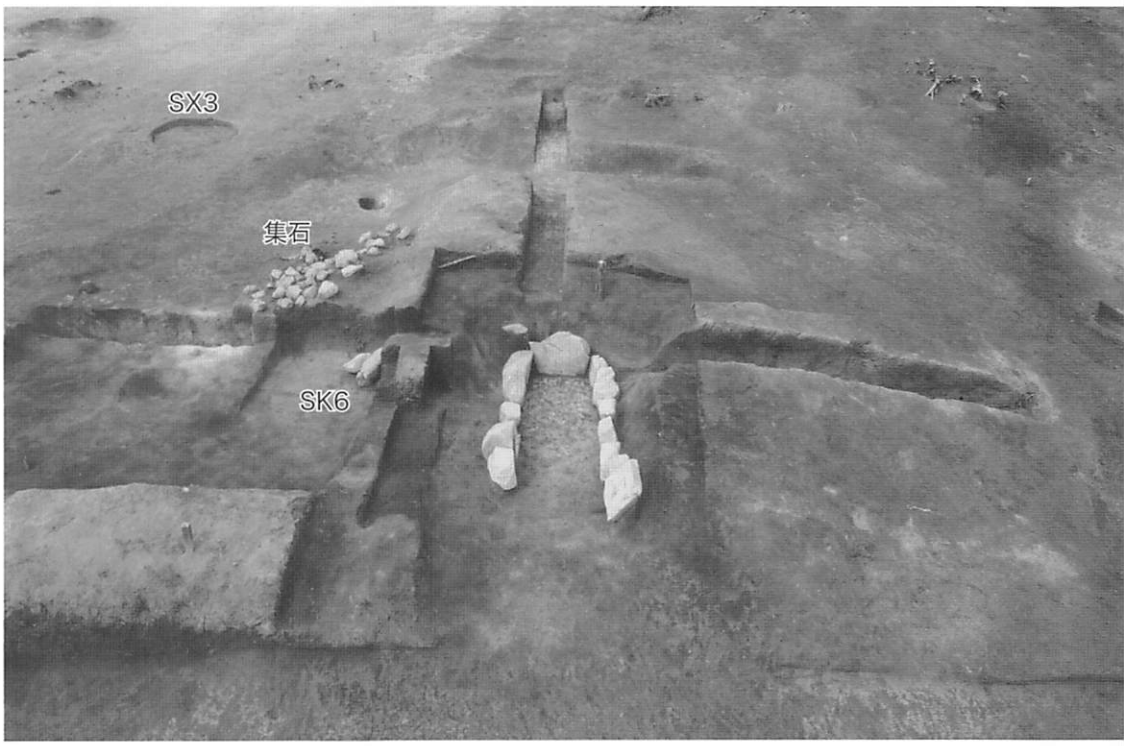
c　石室作業風景
（北から）

a　全景（南から）

b　石室全景（南から）

c　石室東側壁（西から）

a　石室西側壁（東から）



b　石室基底石・集石・
ＳＫ６（南から）

c　同上（西から）

宮の本第33号古墳

a　集石（西から）

b　石室・集石
（南西から）

宮の本第34号古墳

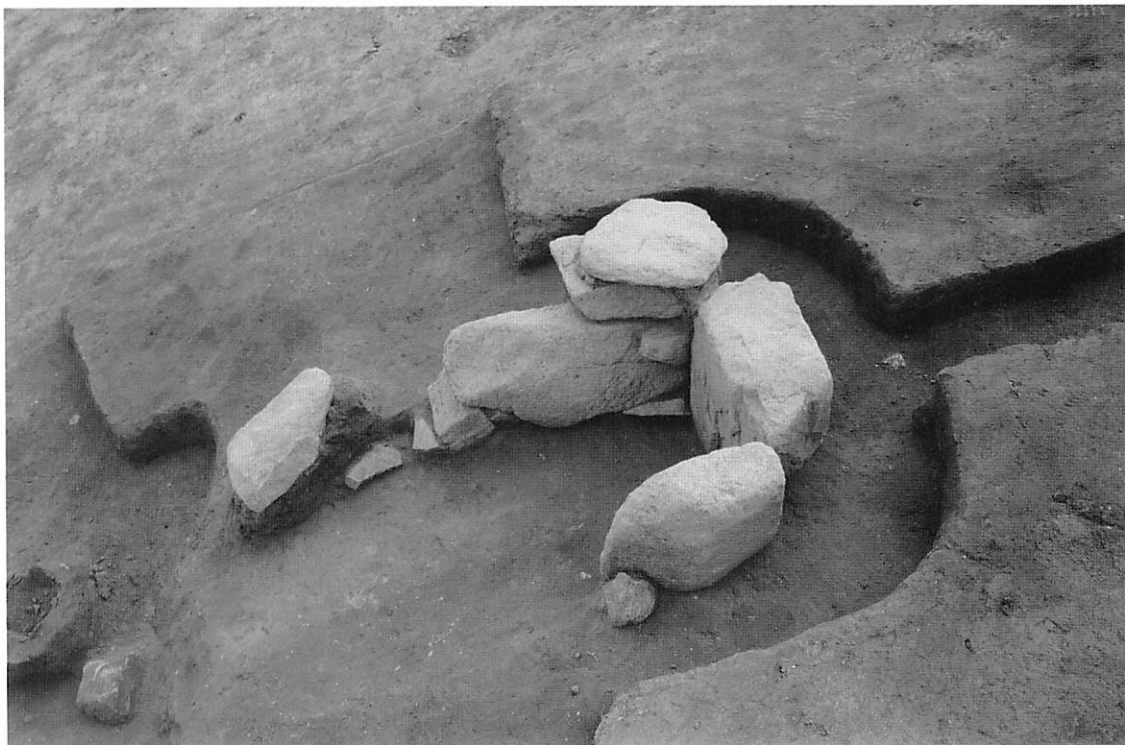
c　石室全景（南から）

宮の本第34号古墳

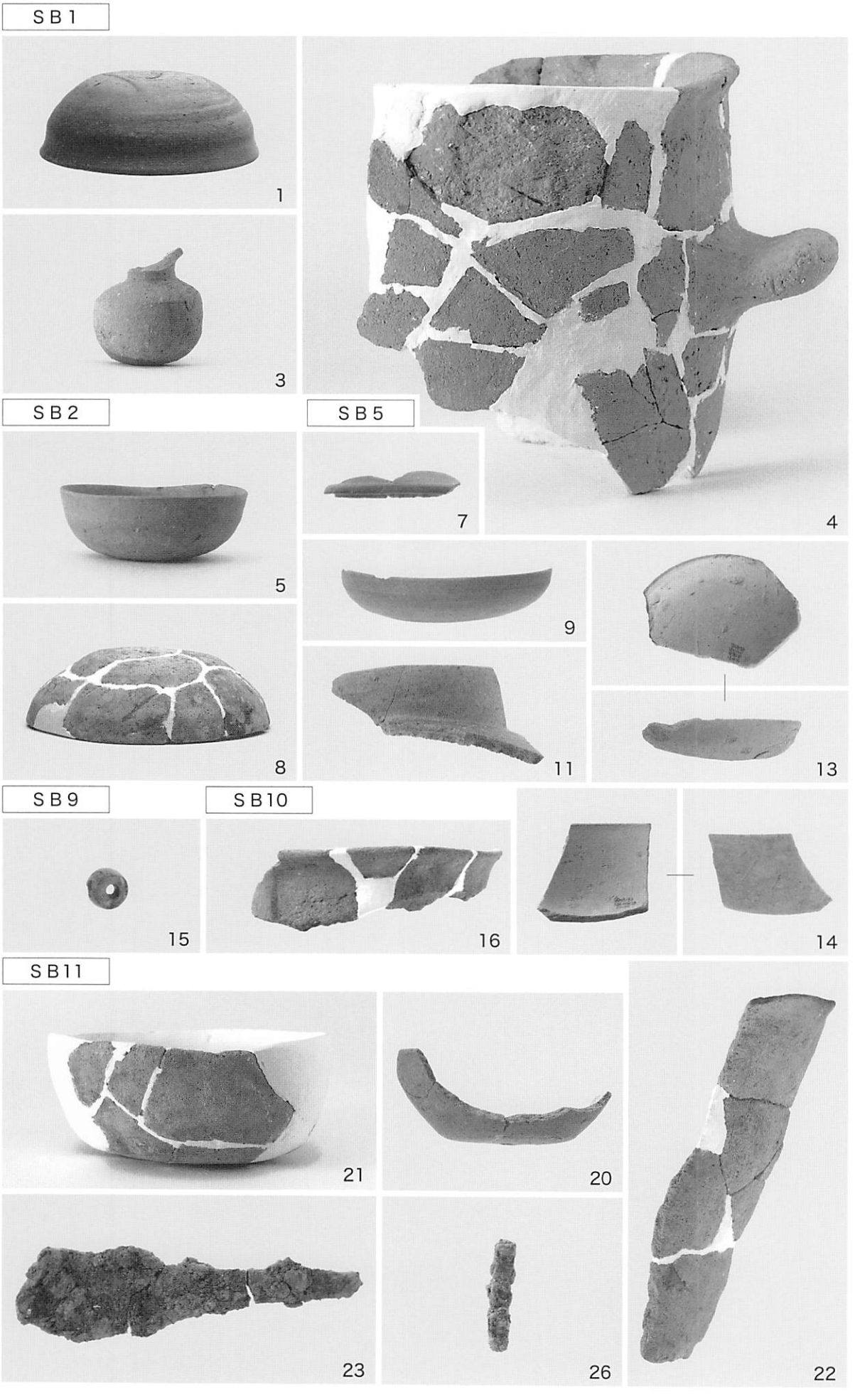
a　石室床面敷石・
　　東側壁（西から）

宮の本第35号古墳

b　石室全景（南から）

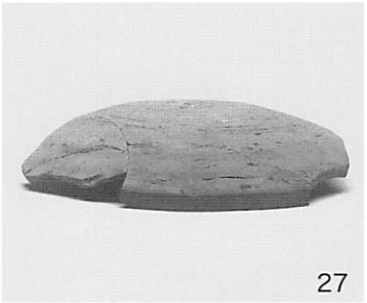


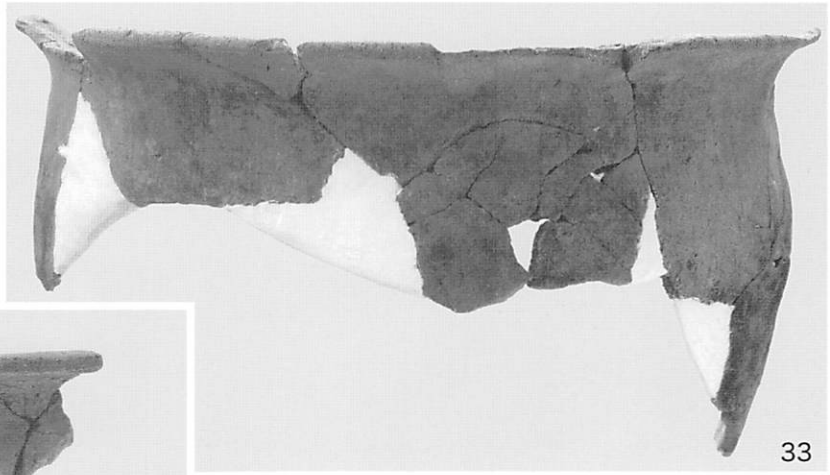
c　同上（東から）

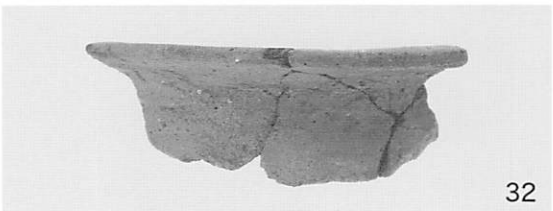


出土遺物（1）宮の本遺跡① —土器・玉類・鉄器—

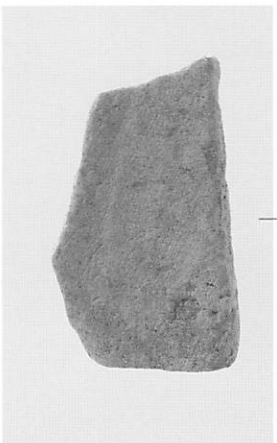
SB12

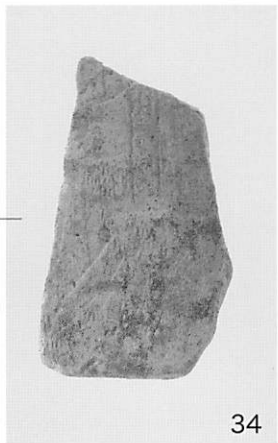

27

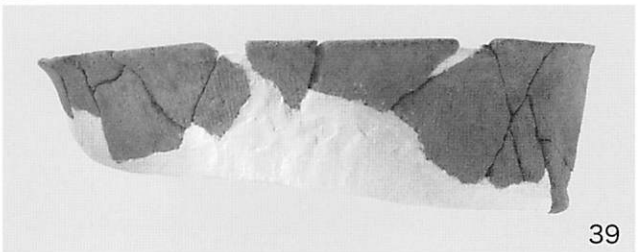

33

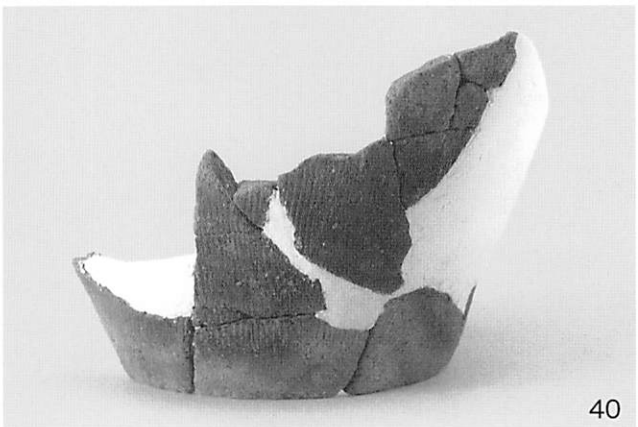

32

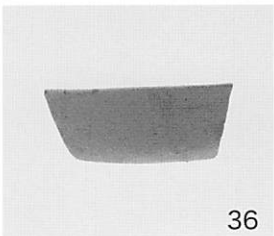
SB13

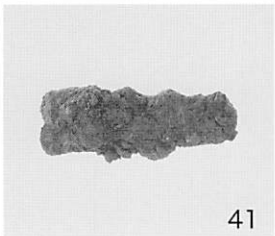



34

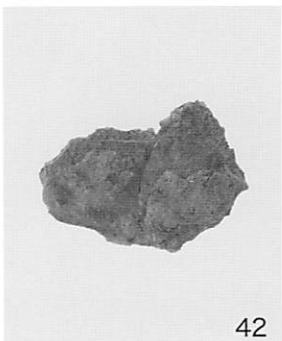

39


40

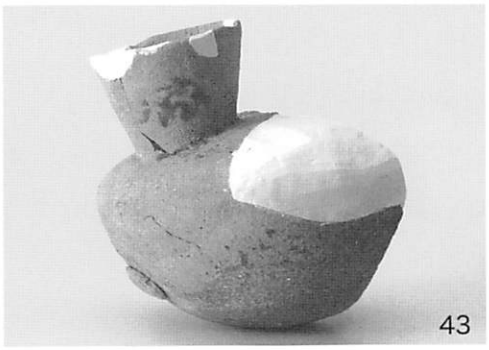

36


41

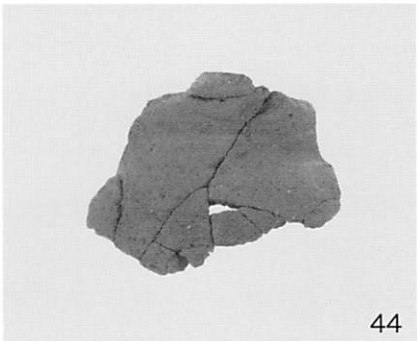
SB14


42

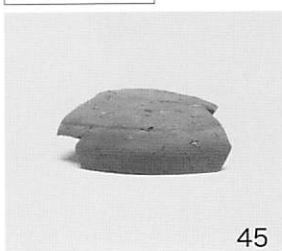
SB15

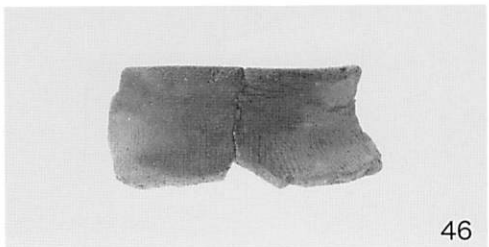

43

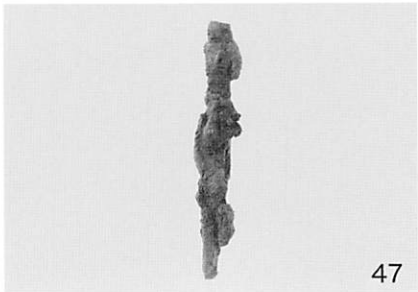
SB17


44

SB18

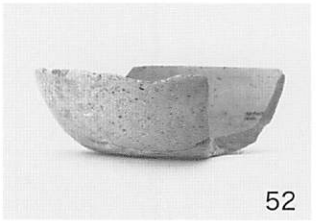

45

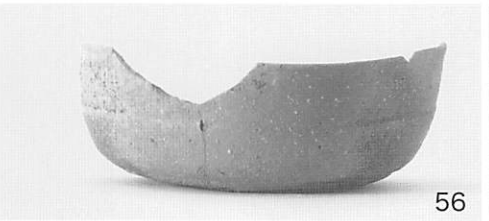

46


47

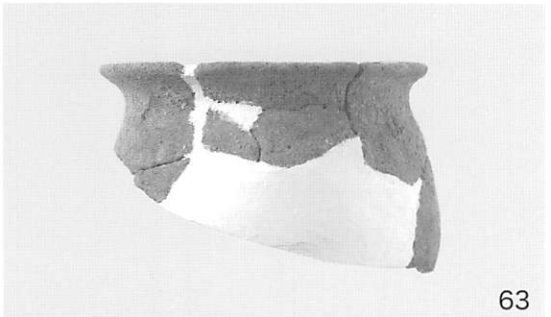
出土遺物（2）宮の本遺跡②—土器・瓦・鉄器—

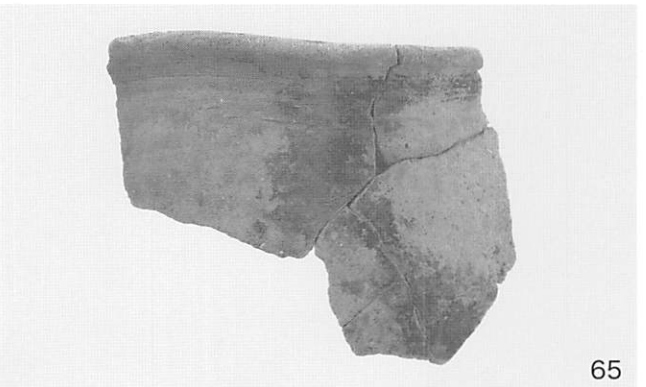
SB19

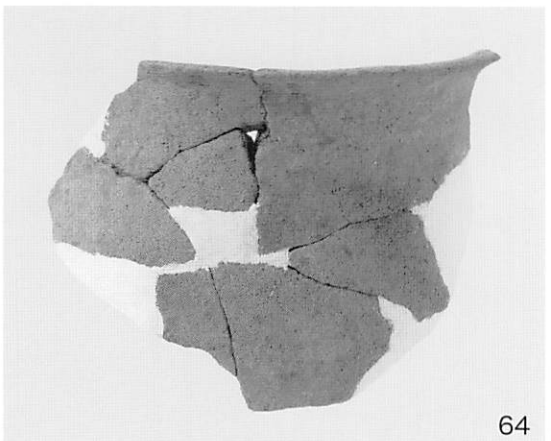

52

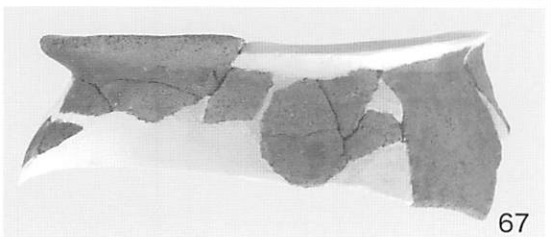

56

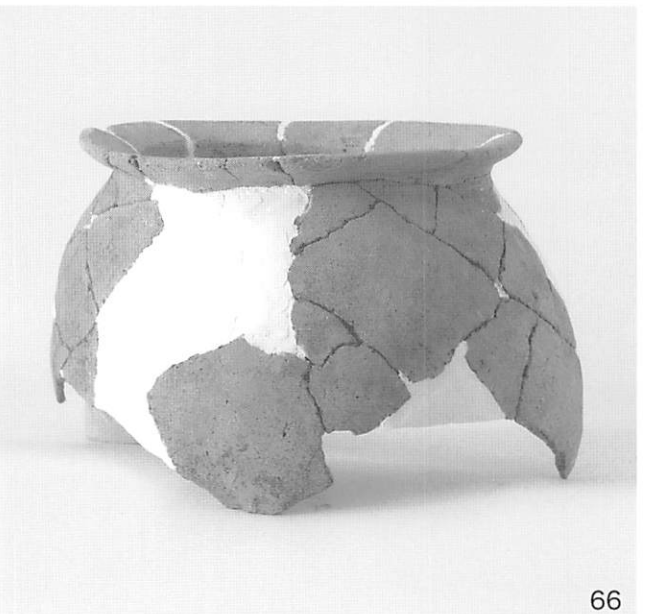
58


63

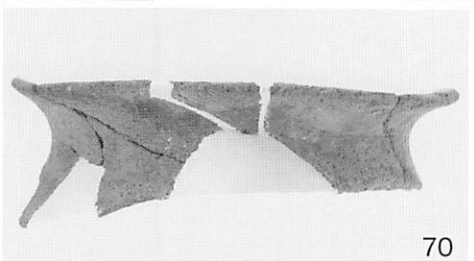

65

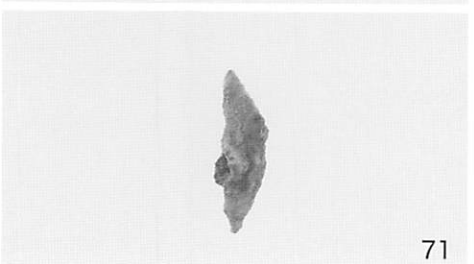

64

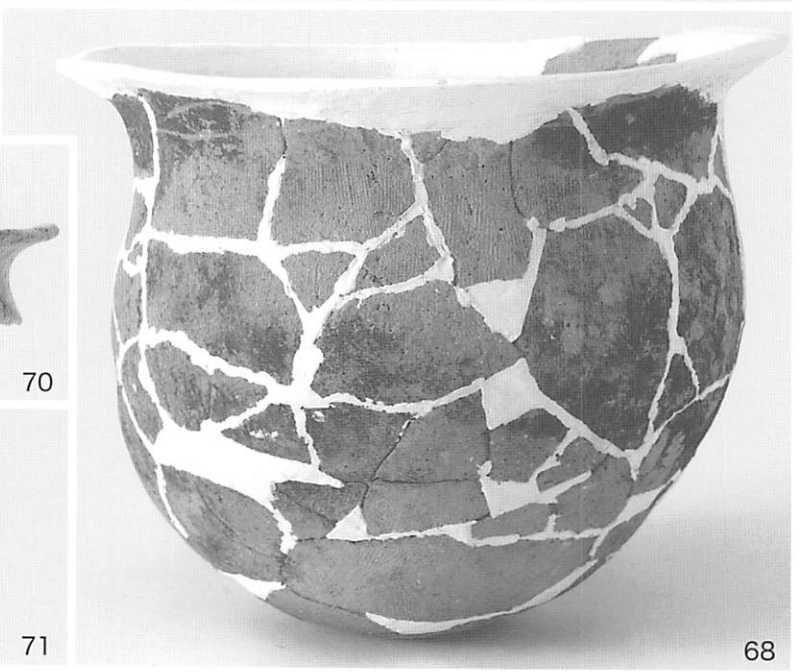

67


66

SB22

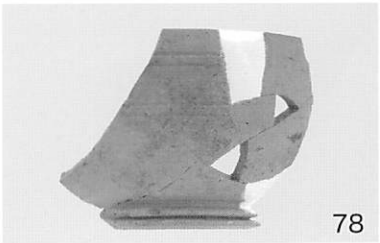

70

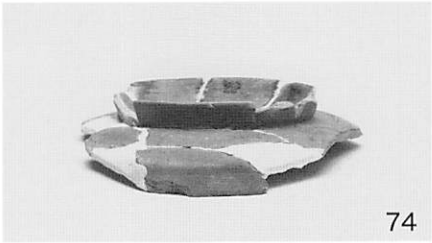

71

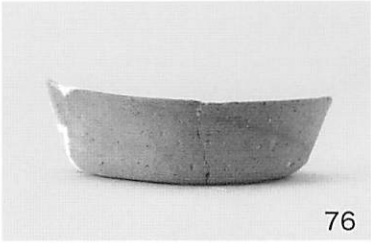

68

出土遺物（3）宮の本遺跡③ —土器・鉄器—

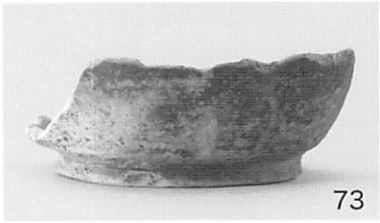
SX7

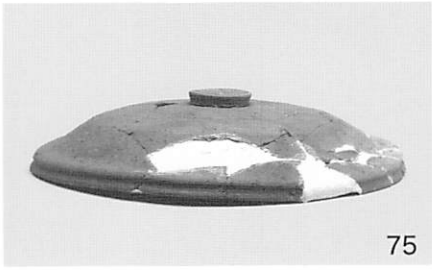

78

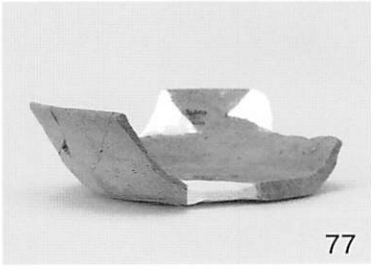

74


76

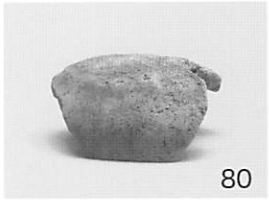
SX5

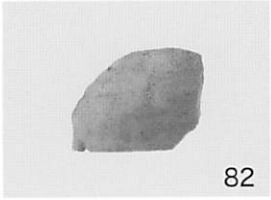

73

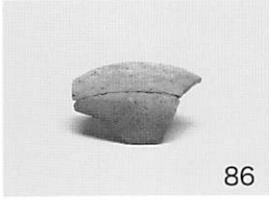

75


77

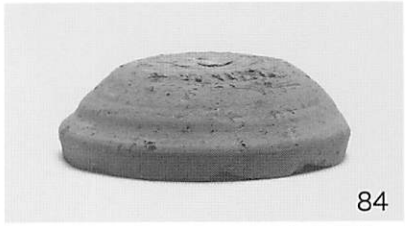
第11号古墳

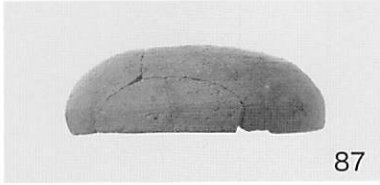

80

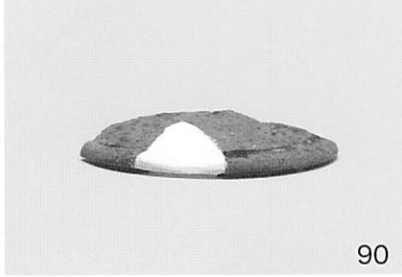

82

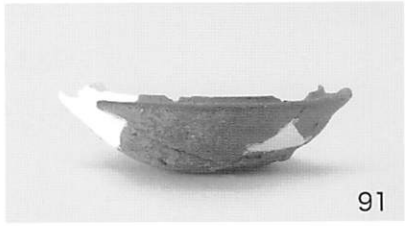

86

88

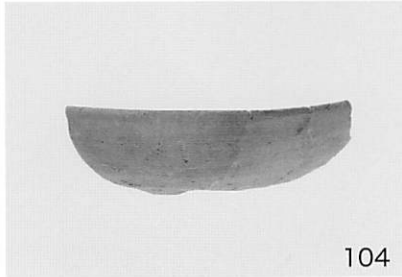

84


87

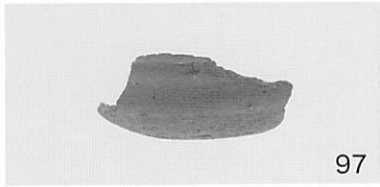

90

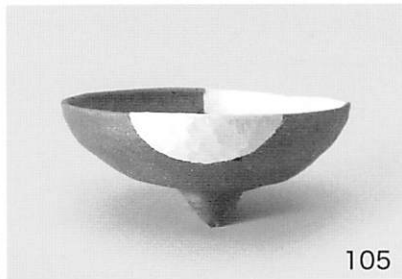

91

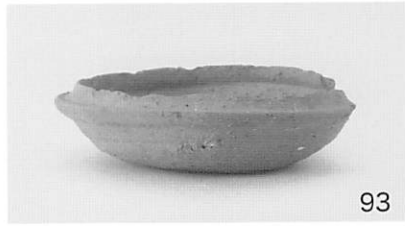
96

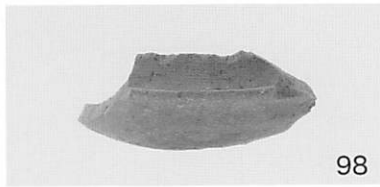

104

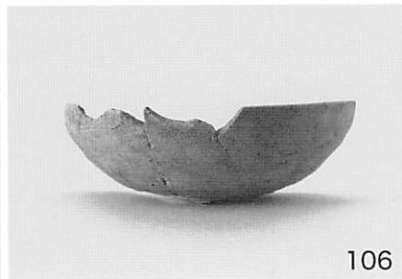
92


97

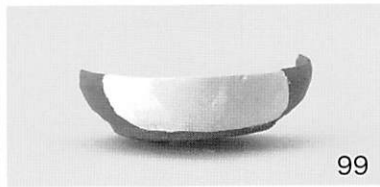

105


93


98

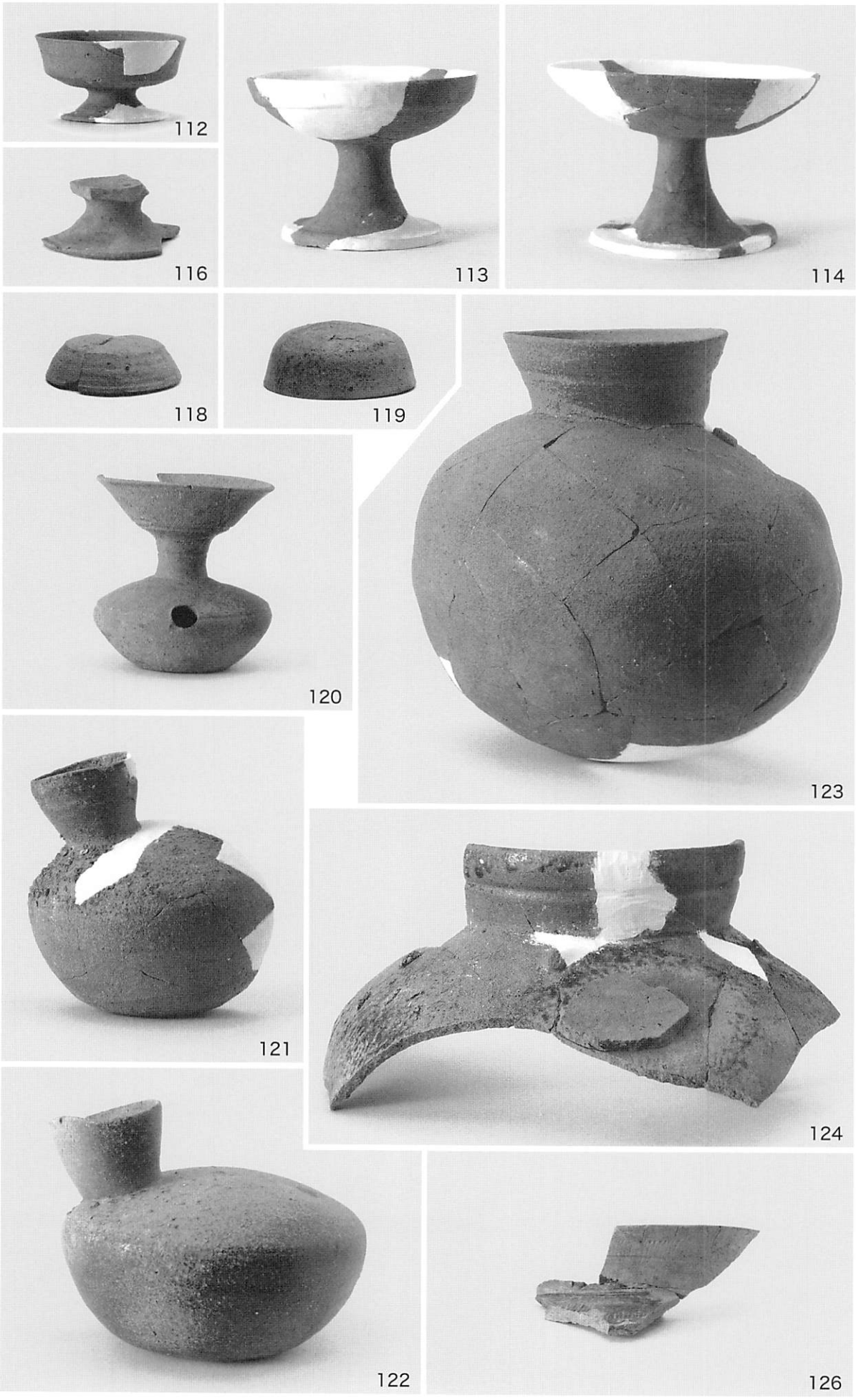

106

95

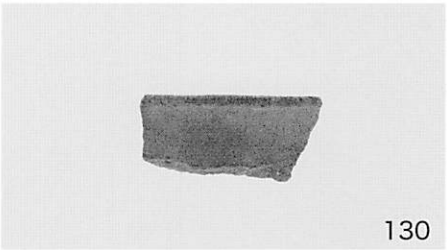

99

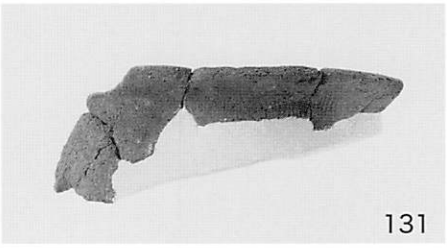
100

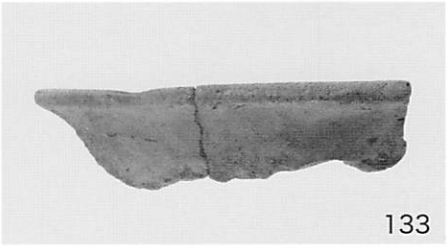
出土遺物（4）宮の本遺跡④，宮の本第11号古墳①―土器―



出土遺物（5）宮の本第11号古墳②—土器—

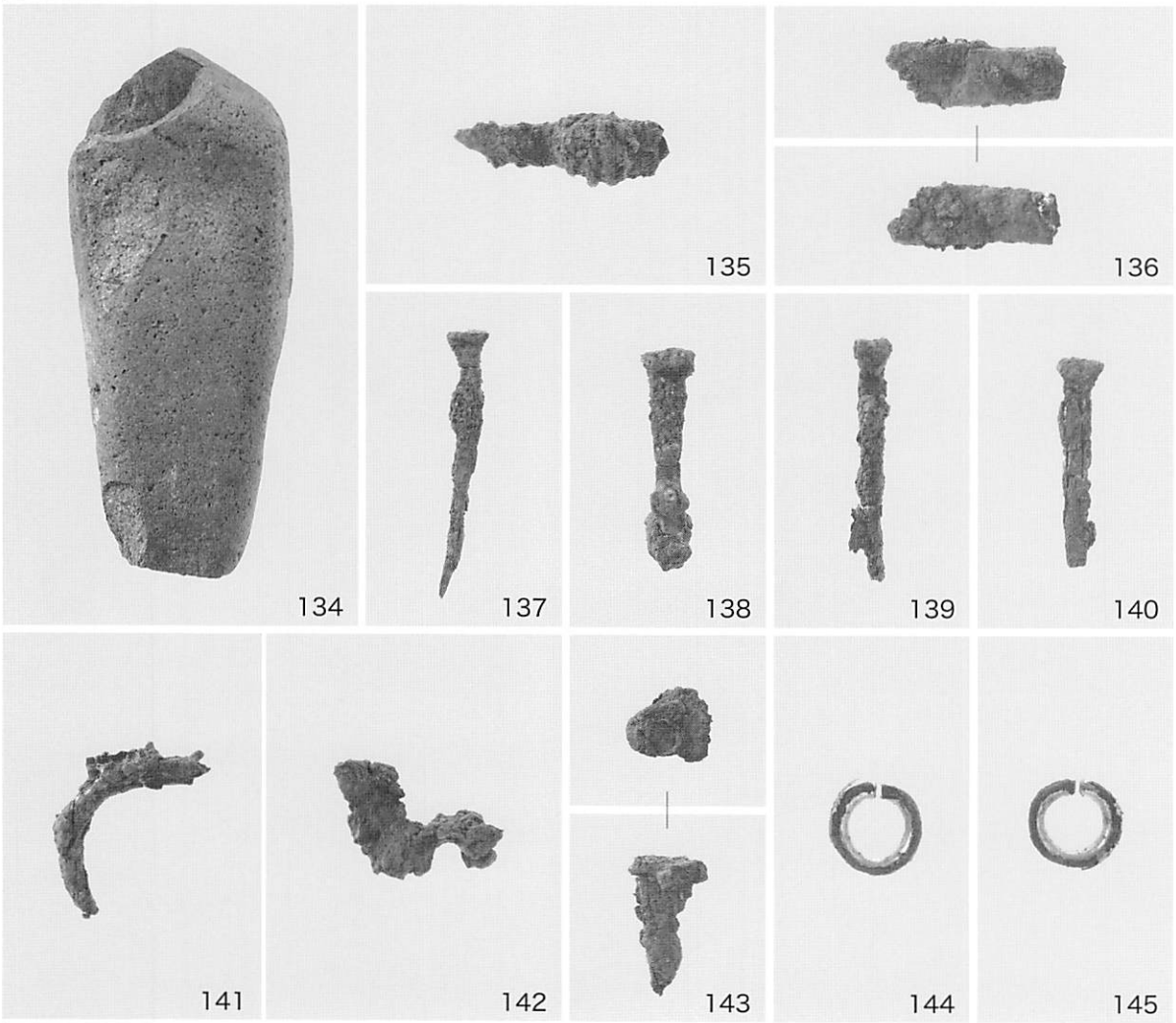




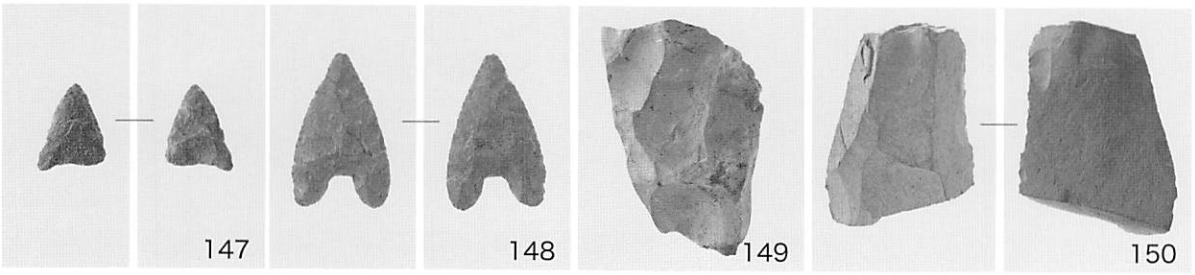


出土遺物（6）宮の本第11号古墳③ —土器—

第11号古墳



調査区内



出土遺物（7）宮の本第11号古墳④，調査区 —鉄器・石器—

報告書抄録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	32
副書名	宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳
シリーズ名	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第60集
編著者名	梅本健治
編集機関	公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８番49号　TEL082-295-5751
発行年月日	西暦2014年３月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳	広島県三次市向江田町字宮本2375・2376・2379	34209	2089・2100	34°46′21″	132°56′09″	20080421～20081031	2,770	記録保存調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮の本遺跡	集落跡	古代	竪穴住居跡・住居跡状遺構22軒，墓坑９基，性格不明の遺構９基	須恵器（杯蓋・杯身・高杯・椀・平瓶ほか），土師器（椀・甕・甑ほか），鉄器（直刃鎌・鉄釘ほか）	総柱建物の存在・平瓦の出土など宗教的空間の存在。古墳に近接し，一定範囲に墓坑が集中する。
宮の本第11号古墳	古墳	古墳時代～古代	古墳（横穴式石室）	須恵器（杯蓋・杯身・高杯・平瓶・甕・大甕ほか），土師器（甕ほか），鉄器（刀子・鉄釘ほか），耳環２	敷石＋礫床，外護列石
宮の本第33号古墳	古墳	古墳時代	古墳（小型横穴式石室）	鉄釘	墳丘なし，周溝あり。葺石状の集石あり。
宮の本第34号古墳	古墳	古墳時代	古墳（小型横穴式石室）		敷石。墳丘・周溝なし。
宮の本第35号古墳	古墳	古墳時代	古墳（小型横穴式石室）		墳丘・周溝なし。

要約	集落は竪穴住居と住居跡状遺構がセットで存在し，住居跡状遺構は鍛冶など鉄関連の作業場的性格が考えられる。集落の中心は７世紀代で，８世紀には総柱建物の周囲から銅鋺を模した須恵器・椀や蓋，瓦などが出土しており，小規模な仏教的空間と化した可能性がある。間に石蓋土坑墓を主体とする墓坑群を挟んで４基の横穴式石室墳が集落とほぼ同時期に近接して築かれており，古代における集落と古墳群の関わりや集落の性格などを考えるうえで貴重な調査例である。

公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第60集

中国横断自動車道尾道松江線建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（32）

宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳

発行日　平成26（2014）年３月14日

編　集　公益財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号
TEL（082）295-5751　FAX（082）291-3951

発　行　公益財団法人　広島県教育事業団

印刷所　株式会社　ニシキプリント